

瞬間最大風速

ROUTE

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

瞬間最大風速な人をモデルにした主人公が青道のメンバーと共に甲子園に行く為に投げる話。

・ 斉藤です。投げる人です。

・ 瞬間最大風速と瞬間最大風速の融合体です。なので皆さんが考えているモデルの人より二倍怪我しやすいです。

・ 御幸世代の一人です。よろしく願います。

7 / 8 (土)、完結しました。

目次

瞬間最大風速

127球目	1
夏の終わり	18
始動	28
推薦枠と合宿と	39
満塁男	52
(勝ち星が)メルト	65
サヨナラ暴投エース、LINEをする	75
中継ぎ、ベストピッチをする	85
大江戸シニア被害者の会	98
中継ぎ、炎属性に認定される	109

御幸、寝坊する	120
沢村、生贄になる	131
東条、学ぶ	143
完勝	152
奇跡への一手	171
三振宣告	187
青い旋風のように	199
東都の怪物	214
ダイヤのエース	226
エースをねらえ!	239
新星たち	251
天賦の才	261
壁を越えて	273

怪物君をやっつけろ！	427
師弟の絆	416
天才の力場	404
選抜	392
春を終えて	382
制覇	371
魔球	360
智巳の45球	346
大会前夜	337
新人たちの焦燥	324
余暇	313
決着	295
継投策	284

復活	444
信頼のカタチ	456
鷹をうちおとせ！	468
勝てる男	483
No more ISOBÉ	492
精密機械	505
才気の壁	516
ダークホース	528
エースは俺だ！	540
本領発揮	551
日本記録の壁	561
恐ろしい十六歳	574
防御率0.00 神話崩れず	586

邂逅

《青道》決戦の前に

《稲実》決戦の前に

円陣

天敵投手

一球に生きる

結城の意地

不敗神話は終わらない

甲子園編

夏のはじまり

覚醒

甲子園にて

心攻

阿吽

史上最強打線

新星

魔王の所以

終わりののはじまり

怪物覚醒

最強と呼ばれた男

苗の世代

598

611

624

637

649

660

674

685

701

714

727

737

751

763

776

786

796

809

820

838

瞬間最大風速

127球目

スコアボードに、ゼロが並ぶ。

青道高校と、稲城実業。西東京の雄が激突した、この試合。

投手力の稲城と、打撃の青道。この二者がぶつかったからには、荒れた試合になる。その予想を覆し、試合は至って静かに進んでいた。

青道のベンチの、雰囲気は暗い。如何に投手力の稲城と言っても、ここまで単打の散発のみに抑え込まれている。

しかも、その投手は一年生なのだ。

——ストライクツ、バッターアウト!

キレのあるスライダーと、フォーク。ノビのあるストリート。

決め球のスライダーに、バットは空を切っていた。

「つそおー!」

怪物・東清国。

推定140メートル弾を放った恵体豪打のスラッガーが、地をスパイクで蹴って口惜

しがる。

長打が出ない。バットを振り切れず、詰まらされる。言葉にすれば簡単だが、捉えることは難しかった。

「智、行くぞ」

「わかつている」

3つの赤いランプが点り、消える。

攻守交代。白い髪の毛のエースが立っていたマウンドに、また登る。

打席にはチームメイトではなく、切つて取るべき敵が立つ。

そんなことを考えていた一年生エースに、御幸一也は声をかけた。

ベンチから出て、マウンドに上がる。

ホームベースから来た女房役に、エースは質問を投げた。

「今は何球目になる」

「102球。まだまだ球自体は走ってる。気を抜かずにキッチリ仕留めてくぞ」

「おう」

ボールを受け取り、見つめる。

顔を上げると、稲城の七番。これまでの対戦成績は、ゴロを一つと三振を二つ。

四球も出すし、ヒットも打たれる。だが、ピンチになると圧倒的な投球で要所を締め

る。そんなピッチングで、青道のエースは稲城打線を抑えていた。

——ストレート、外角、低め。

示されたサインに頷き、腕を天に伸ばして振りかぶって、投げる。

142キロ、外角。僅かに浮いたストレート。

細かい制球が効かなくなっていることを自覚しながら、エースは自分の球の行く末を見詰めた。

脚を前に出し、振りかぶった腕が上がる。

黄色のランプが、後ろに点った。

——真ん中低め、カーブ。

彼の持ち玉で一番鈍い球が、要求された通りに向かって、バットに当たる。

完全に打たせた球は、セカンドの小湊のグラブの中。

ファーストに送って、ワンナウト。

次は、八番。

カーブから入り、スライダーを外す。トドメのストレートが内角ギリギリに突き刺さり、見逃し三振。

続く九番は、成宮鳴。白髪のエースが、今度は打席に立っている。

ストレートが外角に決まり、ワンボール。スライダーが内角を抉り、ワンストライク。

またストレートで、空振り。

ここで要求された球を見て、はじめてエースは首を横に振った。

意思疎通が終わり、4球目。投じられたのは、真ん中低めの130キロ中盤の球。

成宮鳴は、貰ったとばかりにバットを振り抜く。

高校球児にありがちなことは、エースで四番がまかり通ることだろう。それは投手と言うポジションにはチームで最も運動神経の良い、言い換えれば野球がうまい人間がやらされるからだと言えるが、彼もその例に外れなかった。

公式戦でも、もうホームランは打っている。

(エース成宮一人舞台、投げて完封、打ってサヨナラつてね)

自信に満ちたスイングは、思いつ切り空振った。

熱気に満ちるグラウンドに、一際大きな吼え声が響く。

ストレートと球速にあまり変わりのない、フォーク。スプリットより大きく落ち、バッターが認識できないほどノビがあり、遅く落ちる。

高速フォーク。そう世間で言われている隠れた魔球が、敵エースの確信を押し折っていた。

『エース対決は空振り三振！』

青道高校、この回も無失点で切り抜けました！』

実況にそう評されたその光景を見て、マウンドに立つエースは吼える。

味方を鼓舞し、己を燃やし、敵を押し折る。

咆哮とともに、八回の裏は終わった。

「一球か……」

そろそろヤバイな、と御幸は思う。

スタミナはあるが、フォークを決め球にする都合上握力が懸念される。すっぽ抜けがきて一発が出ればその瞬間に敗けが決まるだけに、あまり球数は投げさせたくなかった。

だが、そうはうまくいかない。今回こそ最小の九球で凌げたが、多い時は二十球投げている。

今まで使って抑えていただけに、無駄玉をあまり使えないのはリードする側として一苦勞だった。

「ナイスピッチン！」

「エースですから」

口々に褒めるチームメイトにそう頷いて努めて冷静に答え、エースの斉藤はチームメイトと共にベンチに帰った。

次は、五番。

打席に立つは、結城哲也。青道高校の未来を担う、二年生のまとめ役。未来のキャプテンと目されている男が、打席に立つ。

ヒッティンググマーチは、ルパン三世のテーマ。勇壮でテンポの良い音が鳴り響き、五番の重責を軽くする。

この九回表、五番からの好打順。本来の役割とは違い、切り込み隊長として確実に出塁しなければならぬと感じながらも、結城哲也は冷静だった。

——胸元に、スライダー。

見逃し、ワンボール。

対する成宮は、苛ついていた。

甘めの球だったと思ったら、ボールになる決め球だった。既にチームとして何度もしてやられた。パターンに、嵌ってしまったのである。

シニア時代にも、何回もやられた。あのバッテリーの配球の要は、極端に落ちるのが遅く、ストリートと見紛うばかりの球速とノビを伴ったフォークとストリート。

低い、フォークだと思えばストリート。

高い、ストリートだと思えばフォーク。

何故高めに投げて落ちるのかだとか、そういうことが馬鹿らしくなるほどに、あのフォークはストンと落ちた。

(国際大会の時もそうだったじゃねーか)

韓国、キューバをキリキリ舞いにし、二完封、二完投、四死球七、被安打六、十四奪三振。

すっぽ抜けのストレートがボールゾーンに行つたと思えば落ちてストライク、その光景を見てフォークの落差に警戒し、真ん中をフォークと見ればストレート。

極めてワンパターンだが、組み合わせで打たせない。その巧みさを知っているながら、見事にいい気になって空振りした自分に腹が立つ。

(またあいつ、腹を立ててやがる)

カリカリした成宮に、捕手の原田雅功は内心で溜め息をついた。

マウンドに上がる前にきちんと声をかけてきたが、まるで耳に入っていないのだから。

プライドが高く、我が儘。典型的なエースの性格をしており、バッティングにも自信があるだけに、こうなる。

しかし、要求した通りに球が投げ込まれていた。微細なコントロールが効いていないものの、それは100球を投げ込んでいる以上仕方のない事。そこには目を瞑らざるを得ない。

振りがぶって、5球目。

スライダーがギリギリに投げ込まれ、バットが当たる。

『おーっと、これはいったのかあ!?!』

バツ、と、成宮が後ろに振り返った。

高く高く打球が伸び、ポールを巻いてファールゾーンに入る。

あわやホームランという当たりに球場が湧き、熱が増す。

一点取ったほうが勝つと、最早誰もがわかつていた。それだけに、この結城の一発は場を湧かせた。

エースをまるで攻略できていないのは、両チームとも同じ。こうなれば事故であろうがなんであろうが、一発に期待する方が値が高い。

その思いを観客が抱いていることを如実に示したのが、この大きなファールだった。

『右に切れました、ファールです』

実況の語気も、心無しか熱い。この場でこのファールに動じていないのは、青道のエースのみ。

彼は水を飲んで腰掛け、珍しく背を凭れかけさせていた。

肉体的な疲労もある。精神的な疲労もある。何よりこちらが先攻めなだけに、ここで点が入らなければ一点取られた時点で負けということが、辛いだろう。

結果として、結城哲也は右中間を鋭く破る二塁打を放った。しかし、後続が続かない。

「斉藤、まだ行けるか」

「援護が来るまで、抑えますよ」

エースですから、と言外に匂わせ、斉藤は監督の問いに頷いた。

青道の監督——片岡鉄心も、その言葉に思うところがある。

エースとはチームを勝たせることができる存在だと言うことは、嘗て同じエースナンバーを背負った者として共感できる。

しかし、まだ一年生。正捕手の怪我を見逃してしまい、結局故障させてしまった身としては、慎重にならざるを得ない。

「御幸」

わざわざ少し離れてから呼ばれて、ネクストバッターズサークルから正捕手は離れた。ツアアウト二塁を背負った敵エースが君臨するマウンドを見ているエースを見て、強面の監督の側に寄る。

「はい」

「これ以上は無理だと思ったなら、サインを出せ。河内に代える」

河内は、三年生。東世代のエース格だ。

無論、エースになっていないわけだから現エースの斉藤にはかなり劣る。投球内容に

ムラがあるところは同じだが、ノーコンで決め球がない。所謂ノーコン速球派と言うべき存在で、調子が悪ければかなり自滅する。

そしてその欠点は、この場面においては致命的だった。一個でも四球を出せば、サヨナラに繋がってしまうのだから。

「わかりました」

そう御幸が承知したと同時に、グラウンドの熱が最高潮に達した。

八番は、キャッチャー御幸。チャンスに強く、長打力がある一年生である。

(ここで決めて、三人で切るつてのが、理想だな)

ヘルメットを右手で抑え、バットを左手で持つて打席に向かう。

延長戦に入れば、敗けるだろう。投手の層の厚さは、青道と稲実では歴然だ。

集中力を研ぎ澄ませて、打席に立つ。

鳴っている応援曲は、ヒッティングマーチの狙い撃ち。セカンドに居る結城を見て、立ちはだかるエースを見る。

成宮鳴。稲実のエース。リトル、シニア、そして今と、自分と智のバッテリーと幾度となく火花を散らした、ライバル。

内角に斬り込んできたスライダーを見逃し、ワンストライク。

深呼吸をして、相対す。

(打たなくちやな)

基本的に、斉藤智巳と言う男には勝ち運がある。だが、ここぞと言う時に重篤な無援護に悩まされる。そしてその時は、決まって調子のいい時なのである。

つまり、今だった。完全に、そのジンクスが発動している。

ストレートが浮いて、ワンポールワンストライク。成宮も疲れてきている。打てない相手ではないし、なくなってきた。

「ツ―」

手を出しそうになり、無理矢理止めた。

完全な釣り球に反応しそうになったあたり、相当焦っている。

そのことを、成宮鳴の女房役、原田雅功は勘付いた。

(チャンスに強い。が、焦っているのは打てるものも打てなくなるぞ)

声には出さないが、構えた後ろ姿に視線をやった。

わざと、ポールゾーンに投げさせる。

次に、ストライクゾーンギリギリに入れる。

ツーボールツーストライク。打者が追い込まれた形になる。

低めに集めて、敢えてストライクゾーンからポールゾーンに入るスライダーを要求。

冷静に配球を読めば踏みとどまれたその球を、御幸は振った。

ここでの敵の配球に、まんまと引っ掛かった。

『ストライク、バッターアウトオ！青道、ここでチャンスをモノにできません！』

悔しさを滲ませながらプロテクターを付け、ほんの少し前まで自分がバットを持って立っていたホームベースへと向かう。

「もうにできなかつた。ごめんな」

「敵も同じだ。気にするなよ」

マウンドに向かう途中に軽く言葉を交わす。

九回裏も、味方がチャンスを作つてからの三凡に、文句一つ言わなかつたエースが行く。

（あんまり、投げさせない。でもって打たせたら意味がない）

難しいと、御幸は思う。

だが、やらなければならない。

ここに来て彼は、表の攻撃というのは投手力が欠如しているチームには不利だと感じた。

リトル時代から今まで、ついで抱かなかつた感覚である。

『九回裏、稲城実業高校の攻撃——一番センター、カルロス君』

バッターの名前がコールされ、一番からの好打順で攻撃が始まった。

一番は、カルロス。ブラジル人とのハーフで、俊足巧打を絵に描いたような男。シニアで幾度となく戦い、打たれたり打ち取ったりしてきた。

俊足巧打ただけではなく、守備も一流。稲実の打者の中では墨に出すと最も厄介な存在だと言っている。

ここは、確実に打ち取りたかった。

1 球目。ストレートが高めに外れ、ボール。

2 級目。また高めに外れ、ボール。

確実に、疲れが見えはじめている。稲実は控えに井口が居るが、青道は居ない。それに、一点でも与えれば負けが決まる。

その緊張と疲れとが、このコントロールの乱れを招いた。

3 球目も低めにスライダーが決まり、ボール。

4 球目、横に外れてフォアボール。

これまでの安定感とは打って変わって、斉藤はストレートのフォアボールを与えてしまふ。

まさか、と言っている。二番は小技もできる巧打者の白河。

(送りバントか、ヒッティングか)

送りバントは手堅い。しかし、アウトを一個渡す事になる。

ヒッティングは博打になるが、うまくいけば一、二塁。カルロスの脚を考えればノーアウトで一、三塁にすることができると。

一点取ればいい。敵はそう考えている筈だった。

(バントだ)

バントシフトを敷き、確実に一塁でアウトを一個拾う。

欲をかけば、フィルダースチョイスからのノーアウト一、二塁が用意されることが想像された。

果たして結果は、バント。予想通りカルロスが二塁に進み、白河が一塁でアウト。

続くバッターはここまで四の三、絶好調の三番岡島。

これを、バッテリーは敬遠する。

四番は、四のゼロ。ここまで、完全に抑えていた。

『ワンナウト、一、二塁。ここで稲実のバッターは奥村君。一発のあるバッターです』
実況と同じことを、御幸一也も知っていた。

一発がある。巧く当たれば飛ぶ。なら、当てさせなければいい。

——低め、ストレート

要求した通りのコースに、138キロのストレートが伸びる。

奥村は、それを見逃した。彼は、七回に斉藤の球を見て、ストレートで良いようにや

られた。

あの速さが、まだ目に焼き付いている。それだけに、この球速の落ちたボールに面食らった。

手元での伸びはあるが、明らかに球速が遅い。

二球目の球も、ストレート。バットの上つ面に当たり、後ろに飛んだ。

(まだ低いのか)

相当手元で伸びている。だが、二球目の球と前回の打席とで、だいたい見切った。

一球、遅いカーブが外れる。

次に、浅くフォークが外れ、またカーブが外れた。

(変化球が、イマイチになってきているのか)

カーブでこれならば、決め球として使ってきたフォークはどうだろう。

もう、使い難くなっているのではないか。フォークは握力ありきの球だけに、後半になると変化と球速が落ちてくる。

(鳴を三振にした球も、今のもそれほど落ちてはいなかった)

そしてそんな球を、このキャッチャーはこの場面で要求するか。相変わらず手元で伸びているストレートで来るのではないか。だから、緩急をつけさせるためにカーブを要求したのではないか。

そこまで考えて、奥村はマウンドを見た。

自分たちの一年生エースとは違うタイプのエースが、そこにはいる。

『さあ、6球目——』

投げられたのは、内角よりの真ん中のストレート。球速は、一球目と二球目よりも速く思えた。

だが、それくらいならば調整できる。

そう思って、奥村はバットを振り抜く。

マウンドで、エースが吼えた。

144キロ、フオーク。この日最速のフオークボールは、低めに構えたキャッチャーミットに収まっていた。

これで、ツアアウト。ランナーは一、二塁。

次のバッターは、五番キャッチャー、原田雅功。これまでの成績は四の一。怖いバッターが、続いている。

そのことは、わかっていた。だが、四番を思惑通り三振にしたことで、浮かれていたのかもしれないと、後々見返してみると、そう思う。

——高め、ストレート

そう要求した球はミットに吸い込まれるように唸りを上げて進んでいった。

この日最速の球。誰が見てもそれとわかる渾身のストレートは、マウンド左方向に弾き返された。

二塁手の小湊が疾走し、好捕。

姿勢を整える暇もなく二塁に送球したその球は、僅かに正確さを欠いた。守備固めで入った遊撃手の倉持が目一杯身体を伸ばして捕球し、そして。

二塁塁審の手が、左右に開いた。

セーフ。

「バックホームー」

御幸が叫ぶ。

三塁を回り、カルロスがホームに突っ込んだ。

赤いランプは、二個点つたまま消えず、動かない。代わりに、スコアボードに一つの数字が点つた。

『1』。

稲実の選手たちが喜びを爆発させるそのすぐ側。

マウンドに、エースが片腕をついて崩れ落ちていた。

サヨナラ負け。

怪物・東清国率いる、青道高校の夏が終わった。

夏の終わり

暑い、暑い夏。

これからはじまる筈だった、季節が終わった。

夏を終わらせた敗戦投手は、ゆっくりと二段ベットの下の段で身を起こす。

締め切ったカーテンを少し開けると、鮮烈なまでに明るい日差しが眼をさした。

「起きたか」

上の段から、声が聴こえる。

御幸一也。敗戦投手の女房役。所謂腐れ縁での付き合いで、小中高と同じ学校、同じ

クラス、同じチーム。

これまで敗戦投手が積み重ねてきた連勝の立役者であり、一年生ながら古豪・青道の

正捕手になった実力者。

「心配をかけた」

サヨナラ負け。

それがわかった瞬間、青道のエースナンバーを背負った一年生・斉藤智巳は崩れ落ち

た。

後ろで苦戦を経て甲子園行きを決めた稲城実業の選手たちが喜ぶさまを見ることも、チームメイトが泣いている姿すら見ずに、青道のエースはマウンドに膝をつき、利き手の拳を地面に置いて支えとし。

立ち上がることも、泣くことも出来ず、ただ何か切れた感覚と共に敗けという感覚を心に受け入れようとしていた。

目の前が暗くなる。力が根こそぎ消え失せたような身体をやつとのこととで支える。敗れたということを、繰り返し感じる。

それしかできなかつたエースに、監督と正捕手は肩を貸そうとした。

悲しむ暇もなく心配させてしまったことに彼はここで気づき、何とか自分の脚で立ち上がった。

そして、自分の脚でベンチに、自陣に泣きながら帰った。

泣いている先輩たちが必死に悲しみを押し殺しながら自分を労う言葉を耳にしながら、座っていた。

「そりゃ、な」

明らかに、ここ十日間の彼は暗かつたのである。

投手としてではなく、御幸一也が知っている斉藤智巳と言う人間を構成する柱が叩き折られたかのような消沈ぶりで、御幸は本気で投手として自殺でもするのではないかと

警戒していた。

幸いにも、御幸と彼は人数の関係上同室であるから、監視するには困らなかった訳だが。

「敗けたんだな」

十日練習を休んで自分の敗けた姿を延々と見続けた男は改めて、苦渋を噛み締めるように歴然たる事実を口に出した。

「……そうだ。俺達は敗けた」

御幸もそれに応え、全く誤魔化すことなく事実だけを述べる。

青道は、敗けた。不動の四番も、怪物・東清国を中軸とした強力打線の構成者も、二番手ピッチャーも、居なくなつた。もう、全く同じメンバーで彼らと野球をすることはない。

東清国が甲子園で暴れることも、ない。

「……俺はチームの中で一番勝てる投手であろうとしたし、勝ち続けたからエースをやつてきた」

ポツリと、エースは言葉を漏らした。

一見すると自慢にしか見えないが、事実としてこの男とバッテリーを組み続けてきた御幸としては頷かざるを得なかつた。

時々、凄まじく重要な試合で重篤な無援護病に悩まされるが、七回五失点で五回連続で完投勝利できる投手を、彼は知らない。

失点するだけ、打線が取り返す。こう言う味方からの援護を受けられる星の下に生まれてきたのだと、本気で考えたこともある彼の勝率はなんとリトル・シニア・国際大会等の公式戦では10割。

その代わり、練習試合ではちよくちよく敗けていた。

だが、公式戦では無敗なのだ。

と言うか、だった。

「当然チーム自体は負けたことがある。後続が打たれて敗けたこともあったし、俺が出ない試合もあった」

前者はままあつたし、後者はほぼ間違いない敗けたもんな。

そう言いかけて、御幸は黙った。どうやら事実とはいえ、そのようなことを言っているような雰囲気ではない。

何やら、彼の心境に変化があった。それは、今の言葉からもわかる。

どちらかと言えば、この男は勝敗をそれほど気にしなかった。連勝記録を伸ばすというより、自分の力を磨くことに執念を傾けているようなところが、あつた。

だから敬遠のサインにも首を振ったりするし、割りと独り善がりなところがある、典

型的なエースな性格をしている。

勝ち負けと書いて勝負と読むわけだが、智巳にとって勝負とは自分の実力を発揮するものでしか無かった。と言うより、実力と実力とのぶつかり合いの末に、結果として勝ち星が転がり込むと言う認識だった。

少なくとも今までは。

「敗けるつてのは、エースからしたら許されない。実力とかそう言うこと以前に、勝たなきゃならない。それに」

「それに？」

「敗けるより、勝った方が遥かに気分が良い」

「——まあ、そりやそうだな」

獯猛な鷹の如き凄みが溢れる笑みを見せた彼を見て一先ず安心した御幸を他所に、エースは思う。

——自分の所為でだけでなく、チームが敗けて泣く姿を、自分は二度と見たくはない。

今までどこか、自分の後続が打たれても他人事だった。『あ、まずい』くらいは少し頭を過つたが、それも割りとうどうでもよかった。『ああ、敗けてしまった』と思つたし、悲しみも湧いたが、どこか自分の所為では無いという考えがあつたことは否定できない。

チームメイトに頼られ、投げる。そうすれば殆ど、自分の義務を果たせた。普通に先発エースとして駄目な失点をすることもあったが、それでも敗けはしなかった。

それだけでは駄目だと、打たれて敗けて初めてわかった。

エースは、チームを勝たせるからエース。後続が打たれて敗けたら、その黒星は打たれた後続の所為ではなく、エースの所為。

エースは、どのみち星を背負う。背負わなければエースでは無いと、斉藤智巳はこの時思った。

「で、今日は練習に出るだろ？」

また複雑な顔を始めたエースに、女房役が声をかける。

さっさと意識を切り替えさせるのも、キャッチャーの務め。この辺りの察しの良さ、流石は御幸と言うべきだった。

「そうだな。己の無力さをもう一度確認してから、監督に謝りに行く。練習に出ていいかは、その時に決めてもらおうつもりだ。勝手にサボってしまったわけだから、それなりなこともあるだろうし」

「そっか。ならまあ、一足先に行ってるわ」

どこに行くかと言えば、素振りだろう。青道の打撃陣は、暇さえあればバットを振っている。

御幸一也もそのクチであり、それは決勝の勝ち越しのチャンスで凡退してからより激しくなっていた。

「ああ」

日が差し込む机の上で、パソコンが立ち上がる。

画面の中を矢印が動き、そのまま迷いも躊躇いもなくショートカットをクリック。

動き出した風景の中で、自分が立っていた。

『先発の斉藤君、これまで素晴らしい投球を見せていましたが九回裏ツーアウトでピンチを迎えています』

実況の声が、状況を告げる。

素晴らしいと言っているのは言い過ぎだと思うが、我ながら八回までは良かったと思う。無失点というのは、いい出来だった。

だが、結果として敗けたから何も褒められない。ただの敗戦投手である。

『この回を乗り越えて延長に入るか、このチャンスをもノにして甲子園行きを決めるか！』

そう言って、ストレートが投げられた。

高い球。それを、原田雅功のバットが弾き返す。

脇を抜け、二塁手の小湊亮介が横っ飛びに捕る。

代走として出てそのままショートに入った倉持に向けた送球が逸れ、二塁はセーフ。ホームにカルロスが帰り、サヨナラ。

間に合わなかったバックホームをしようと踏ん張る倉持が愕然とした様に辺りを見回している。

天を仰ぐ御幸。

崩れ落ちた自分。

そして、東清国等、三年生が泣いていた。

動画を止め、着替える。

行くべきところに、行かねばならない。

すれ違う他の部活の部員たちに軽く頭を下げながら、彼は目的の部屋の扉に立つ。

「失礼します」

ノックをして、入る。

そこにはサングラスをした強面の男性が座り、眼鏡をした知的な女性が立っていた。

野球部の監督と、スカウト。前者はここ半年で大分人となりを知ることができ、後者はかなり前、リトル時代からの顔馴染み。

その二人に頭を下げ、先ずはとばかりに謝った。

「私情で練習を休んでしまい、申し訳ありませんでした」

「頭を上げろ」

真一文字に結ばれた口から強面にふさわしい声が出て、斉藤智巳は頭を上げた。

「身体に問題がないなら、今日から練習に復帰しろ」

「……良いのですか？」

「ただ休んでいたわけではないことは、こちらもわかっている」

青道高校の監督・片岡鉄心は、かつてドラフトの目玉とすら言われた青道高校のエースだった。甲子園決勝まで勝ち進んだ彼のスタイルは、目の前に居る今のエースとよく似ている。

三振を一つ奪う度に吼えるその姿は、OBから見ても似ていると言われるほどに似通っていた。

だから、わかることもある。自分の所為で敗けたということを、強く受け止めたエースは、それを乗り越えるまでに時間がかかる。

そのことは、他の部員たちもわかっていた。

誰も何も、言わなかった。ただただ、その復帰を待っていた。

練習への復帰をあっさりと言われた嬉しさもあるが、どこか釈然としない部分もある。

そんな複雑な気持ちを抱えて、彼は久しぶりにグラウンドに顔を出した。

すぐさまこちらを見つ、ニヤニヤと笑いながら手を上げた相棒に反応を憚然としたまま受け、切り替えて周囲を見回す。

そして、グラウンドに集まった全員に聴こえるような大声で、彼は言った。

「自分の不甲斐なさを見つめ直し、戻ってきました！これから休んでいた分を取り返し、それを凌駕する勢いで練習に励みますので、よろしくお願いします！」

深々と頭を下げ、上げる。

二年生と一年生しかいないグラウンドを少し寂しいような気持ちで見渡した。

「よく帰ってきた、エース」

バットを置いて、結城哲也は皆を代表してそう言った。

嘗ての五番としての立場ではなく、今の代のキャプテンとして。

夏が終わり、秋が始まる。

新チームの始動と言う一番重要なことを任せられた主将は、どこかぎこちなくそこに居た。

「新チームになっても、よろしく頼む」

始動

「まだ『二元』ですけど、こちらこそよろしくお願いします」

新キャプテンに挨拶し、智巳はニヤニヤしながらこちらを手招いている御幸のもとに向かった。

丹波は、同じ二年生の宮内と。

川上は、同じ一年生の小野と。

それぞれ組んで肩を作り、ピッチング練習を既に開始している。

投手層が薄い青道とは言え、競争相手は居ないわけではない。

目下自分がエースなのは、先代正捕手が怪我で離脱した為に正捕手になった御幸一也と組んだ場合最も勝てるから、つまりは相性がいいからだ、と、認識していた。

先代正捕手が怪我で離脱しなければ、おそらくエースは三年の河内先輩か、二年の丹波先輩。

後者は、何となく御幸と馬が合わない。

連打を許したり、追い込まれると固まってしまいう心臓の弱さが、強気で圧しまくる御幸のリードとは合わないのかもしれない。

その点自分は、基本的にピンチになるとガンガン攻めていく癖がある。元々なのか組んでいたから癖になったのかはわからない。

「久しぶりに見た気がするな、その格好も」

「そりゃ誰かさんが練習に来なかったからな」

「……………まあ、そうか」

御幸から投げられたボールを取るグラブの動きが、心なしか鈍い。

「おいおいおい、凹むなよ」

「俺は今まで練習をサボらなかつたのが一種の自慢だったんだよ。お前と違ってな」

この御幸、真面目ではあるが結構シニアの朝練をサボっていた。どうにも新しい配球や名試合があるとそれにのめり込んでしまいうらしく、よく寝坊するのである。

対して智巳は、基本的に真面目だった。私生活であつたり、チームメイトの前では茶目っ気を出すが、マウンドや練習中ではその印象が消し飛ぶ程に荒々しく、熱い。

そして、よく吼える。

「……………新キャプテン、哲さんか」

一球目を投げ終え、グラブを構える。

感覚的には、120キロの序盤と中盤を彷徨っている速さ。

肩を作るために、軽く流して投げていた。

「俺は適任だと思っけど？」

「それは俺も思う。けど、あんま慣れてなさそうだったから、打撃の方は大丈夫かなと思ってさ」

返されてきたボールを受け取り、投げ返す。

同じく、120キロの序盤から中盤。

智巳が心配しているのは、打撃面。

御幸が心配しているのは、統率面。

その違いに苦笑し、御幸は笑いながらミットに収まった球を投げ返した。

「キャプテンとしての器と統率に関しては、全く心配してないのな、お前」

「まあ、な」

あの人は、頼れる。無意識にそう思わせる何かがある。

その象徴が、九回表のツーベースだろう。あの一撃は、確かに自分の若干疲れ気味だった心を躍動させた。

打たれて敗けたものの、あの一撃は嬉しかった。もう一度打順を回すという形で応えられなかったのが、無念でしかない。

「俺としては、キャプテンと四番は——或いはキャプテンとエースは別でもいいと思っただよ」

「役割分担ってことか」

「ああ。まあ何というか、そこまで抱え込まなくても、って感じはする」

「ふーん、それもまあ……ありなんだろうけど」

ひよいつと、投げ返す。

今年の代の打撃のキーマンは、間違いなく結城哲也。成宮鳴から唯一長打を放った男。

投げる方のキーマンは、間違いなくコイツだと言うことは半年前から知っている。投手層が薄い、エースが居ないと騒がれるだけあって、確かにそれっぽい人が見当たらなかった。

これから覚醒するかもしれないが、それでも長年エースをやってきたこの男からその座を奪い取るのは難しいと、御幸は思う。

「でも、心配すんのも失礼かもな」

「何で？」

「あの人なら、乗り越えられる。そう思っただけでキャプテンとして推されたんだろうから」

130キロ、ストリート。

浮き上がるようなノビが空気を切り裂いてミットに入り、快音を鳴らす。

少しずつだが、肩が温まってきたらしかった。

「……お前、今は元エースだっけか」

「今はな。いずれまた先輩たちに信頼されるようになって、返り咲く。べつにエースになりたくないから、エースの座を降りたんじゃない。無様晒したから、先輩たちの信頼を裏切ったから降りたんだ」

そう話す顔には、やはり苦渋がある。

悔しさと、負けん気の強さ。プライドの高さと、罪悪感が見え隠れしていた。

「お前を責めるやつなんざ居ねーよ。あの試合、一点も取れなかった俺達にも——と言うより、俺達に責任があるから」

「守備の人御幸に言われても、何とも思えん。だいたい、勝たなきゃエースとは呼べないんだよ。高校野球なら特に、な」

打率2割、本塁打3、打点17。失策0、捕逸0、盗塁阻止率8割超。

ぐうの音も出ないほどの打点乞食っぷりを発揮したチャンスにしか打てない守備の人御幸は、半笑いと言った感じで苦笑した。

「確かに何も言えねーわな」

「それは俺もだから、俺もあまり言えたもんじゃない。市大三高には勝てたが、満足したのはあれだけだ」

四試合に先発して四完投、防御率0、75、被安打20、奪三振52個、自責点3、失

点3。援護点27。3勝1敗。投球回は35と3分の2。

初見殺しのフオークに敵がバットを回すことが多く、敵の打線が弱かったこともあって完璧な投球で振じ伏せられたものの、負けては意味が無い。

「市大三高に投げ勝つ前辺りから、エースとして認められてたけどな、お前」

市大三高は、タレントこそエースの真中くらいしか居ないものの、毎年堅実ながら油断のならない打線を作り上げてくる。

その打線を9回17奪三振、2四球、被安打1の125球完封勝利で黙らせたのは、あの東清国ですら唸った。

心情的には三年で苦楽を共にしてきた河内をエースにと言う気持ちはあったろうが、市大三高と共にそれを捻じ伏せたと言っている。

僅かに日にちをおいた連戦になった次の試合で敗けたけれども。

（パワプロ的に言えば回復2だからな、この男）

スタミナでカバーしているが、市大三高の時と稲城実業の時、どちらが強い智己だったかと聴かれれば、御幸は前者を選ばざるを得ない。

（まあ、俺は安定度2だけれども、それも同じことだしな）

神ピッチングか、炎上して完投勝利。シニアの時はどちらかだった。

7回5失点完投勝利を収めた男とは思えない程にこの夏は安定していたが、この先ど

うなるかわからない。

救いは、悪いなら悪いなりに何とか纏められることと、打線が湿っている時は神ピツチングする確率が異様に高いと言うこと。

炎上するのは二桁の援護をもらったりした時が多い。

(防御率6越えても何だかんだで無敗の男だったことが、その証か)

まあ今回は防御率0点台で負けた訳だが、打たれ強いというか、慣れていているというか。『ああ、今日はマズイ日だ』と腹括って投げているメンタルが凄いのか。

何だかんだで勝つのが凄いのか、ちよつとよくわからない。

その後なんだかんだで上がりまくった通算を1点代に戻したのも凄まじい帳尻であつたし。

「まあ、お前は意味わかんないからそのまま頑張ればいいんじゃないやねえの?」

「お前のチャンスの強さが、俺には意味がわからん。そして、得点圏にランナー置かなくや自動アウトになりにかかねないムラっけもな」

くだらない雑談から一呼吸付いて、セツトポジションから本来のゆつたりとしたオーバースローのモーションに戻る。

腕を天に伸ばし、頭の後ろで組むように構え、脚を上げる。

全身が止まる中で脚だけが動く。

ワンテンポ取るように足の裏を微妙に動かし、腿を少し上げて踏み込んで、投げた。143から5キロくらいは、出ていたと思われる。

ゆったりとしたオーバースローから、豪速球。投球動作中に脚の動きの長さを調節してバッターの間を外したりと、割りと頭を使うこの男に似合うフォーム

「いい球」

「まあな」

片手で帽子の位置を直しながら受け取り、構える。

「次、カーブ」

構えた状態からモーションに入り、投げられたのは鈍いカーブ。

曲がり幅が少なく、縦気味に落ちると言う、カーブらしからぬカーブ。

「スライダー」

斜めに滑り落ちながら、ミットに収まる。一般的なスライダー。

「ふう……次、フォークな」

「一々身構えるなよ」

「ワイルドピッチさせまくったからな。軽い流し投げでも、実戦のつもりで受ける」

あつそ、と智巳は思った。

まあ確かにワイルドピッチは多かったが、8：2くらいで自分が悪い。あの頃はコン

トロールも悪かった。

別に御幸だけが捕れなかったわけではあるまいに、と思うが口には出さない。

エースが一人であるように、投手に対するキャッチャーも一人きり。

妥協はしないし、絶対に逸らしたくないだろうというのは、元キャッチャーとして非常にわかる。

「さあ、ハッ」

構えたのを見て取って、188センチの長身が動いた。

ゆつたりと腕が上がり、脚が上がる。タイミングを取って、踏み込まれる。

両膝を前に出し、一瞬速く、ミットを出す。

落差はフォーク特化のピッチャーより深く、ストレートとほぼ等速で、ノビも変わらないからスプリットより速く感じるし、多分速い。

魔球、と言っている。

ミットが鳴った。

「捕れるだろ、やっぱり」

「捕逸したくねえのよ、俺は。お前も元捕手だからわかるだろ」

「誰かさんにレギュラー奪われたけどな」

「おま……こんな球投げられる奴が捕手ってのはもったいねえよ」

レギュラー奪えてよかったと思うね、と得意顔でいけしやあしやあ話す御幸に軽くムカつきながら、智巳はグラブを片手で構えた。

「フォークを教えてやろう。そしたら変わるか」

「俺はそれをリードする方が楽しいんだよね」

ストライク返球が、寸分変わらずミットに収まる。

こんなにコントロールがいいなら、お前が投げろよ。時々本気でそう思わないでもない智巳は、まだ話が続くと見て構えない。

「それに、フォークって才能だし。というか、何でスプリットの握りより遥かに深いフォークの握りでそんなにストレートと対して変わらない球速出せるんだよ」

「……慣れ？」

「握力鍛えた後に一晩練習して習得した時から速かつたくせによく言うよな、お前は。

あ、もう一球よろしくな。インローで」

ワンバン寸前の球を、投手が気持ちよく投げ終えられるようにと、ミットを鳴らして捕る。

捕手をやりたいなどと思う前に、見事だと思ってしまう程に献身的な捕り方だった。

「監督来たから、これまでな。あ、ボールは問題なくキレてたぜ」

「投げた本人が一番わかる」

「でも、智。お前、案外他人から言われないと割りと言じられない質だろ？」
事実なだけに何も言えず、智巳はさっさと監督の元へと駆け出した。

推薦枠と合宿と

今日も地獄の一日が終わった。

そう心の中で呟いて、新二年生たちはバツタリと倒れる。

夏。旧チームが終わり、新チームが始動。

となれば、付いて回るのが練習だった。

敗者はただ未熟を認め、己を鍛えて次の機会を待つ。

何よりも、勝つ為に。

そんな思いの元に身体をいじめ、築かれた死屍累々の山を見て、平然と個人のトレーニングとしてインナーマッスルを鍛えていた斉藤智巳は声をかけた。

「御幸、投げるから受けてくれ」

「……今、俺死んでんだけど」

割りと平然としているが、智巳も疲れていることに変わりはない。

しかし、使ったのは基本的に足腰だけ。投手は特別にインナーマッスルを鍛える練習を課せられたが、それは自分の肩の特性である『可動範囲が並外れている』『肩をしならせるようにして投げられる』『変化球が異様に変化する』と言う代わりに『ただし宿命的

に脆い』と言う諸刃の剣であることを知った御幸がうるさく勧めてきたのでかなり前からはじめている。

要は、非常に地味だがかなり繊細で辛いこの作業に慣れていた。

一方、川上は死んでいた。周りに心配されない程度に健康な肩だったのだろう。いいことである。

「なら、小野か宮内先輩に受けてもらおうとするかな」

「よし、生き還った。やろうぜ」

(……………いっ)

御幸(故)から、御幸(捕)へ華麗なポジションコンバートを果たした相棒の鮮やかな転身ぶりに何も言えない智巳は、脚がガクガクな御幸を一瞥して溜め息をついた。

この男、最早根性だけで動いている状態である。

「細いから、体力が無いんだ」

「背は伸ばそうとしても伸びるもんじゃないから」

死屍累々の山の中から、ぽつりぽつりと人に還っていく者も居る。

夏の最後の戦いにスタメンで出たのは、御幸と智巳。代走からの守備固めで倉持。

最上級生になったらしいずれかのポジションをとれる。

そう漠然と思っていた新二年生達の意識を覚ましたのは、やはりあの夏の大会だっ

た。

エースは一年、正捕手は一年。

強豪野球部だから、スタメンをとるのは二・三年から。二年のうちにベンチに入れればいい。

そう考えていた彼らは、自分たちの甘さに気づいた。

——今実力で敗けているのだから、あの二人以上に練習をやらなくてどうする。

ゆらゆらと、ゾンビのようになりながらある者は走り出し、ある者はバットを持つ。

何度も繰り返し返すことになるが、夏の大会は終わった。

だが、早期に大会が終わることがチーム的にマイナスかと言われると、そうではない。

早々に先輩たちが引退するということは、新チームとして活動する期間が最大で一ヶ月ほど伸びる。

負けたのは残念だが、次に繋ぐための時間が得られたと考える方法もある。

これから主力を担う二年生、一年生。彼らの自覚が早く生まれたということは悪くはなかった。

目指すは春の甲子園——ではなく、来年の夏の甲子園。

先ずはセンバツへ目標を定めて頑張ろう、ということだったのだが。

ここで既に、とある事件が起こっていた。

ところ移して監督室。

「……丹波は、肩を痛めていると思われませう」

わざとではなく、天然物の小さな声で、嘗ての正捕手は監督に告げた。

その場に居るのは、キャプテンの結城哲也と、副キャプテンの伊座敷純、嘗ての正捕手の滝川・クリス・優。新三年生でエース候補の丹波光一郎。

そして、スタッフでは監督の片岡鉄心。部長の太田一義と副部長の高島礼。

元エースの智巳が、地獄の夏合宿終わりだと言うのに、元気にインナーマッスルの増量に勤しんでいた頃。基本的にスタミナに不安がない男なだけに、彼は一年生の誰よりもいきいきとしていた。

そう、今は季節的な意味での夏の終わり。甲子園から球児たちの姿が消え、次の戦いに向けて動き出すためのモラトリアム。

地獄の合宿地獄が終わり、地獄の練習試合地獄の前。

高校野球というより、野球につきものの怪我。

正捕手の故障から始まった連鎖は、エース候補をも蝕もうとしていた。

「丹波、具合はどうだ」

「投げ込むと少し痛む程度です。それほど気にはならなかったのですが」

僅かな時間で自分を鍛えようとして投げ込んでいた時の、フォームの僅かな違和感が

ら、クリスが気づいた。

「どうやら、少しではあるが痛みから庇うようなフォームに、なってしまったらしい。」

「……」先ず、クリス」

「はい」

「報告してくれて嬉しく思う。その観察眼、これからもチームの為に役立てて欲しい」
プレイヤーとしてではなく、マネージャーとして。」

これは、肩甲下筋断裂および上腕回内筋断裂と言う復帰に時間のかかる怪我をしてしまったクリスが、自分からチームの為に役に立とうとして申し出たことだった。

「そして、丹波」

「……はい」

「気づくのが遅れ、すまなかった」

深々と、片岡鉄心は頭を下げた。

故障と言うのは、見つけ難く、傍から見るとわかりにくい。百人からの大所帯を管理する監督として考えると、更に見つけにくいというのが理屈である。

だが、それでも見つけなければならなかった。クリスの故障の後だけに、尚更。

「いえ……」

丹波光一郎は、悔しかった。この大事な時に、スタート地点で転んでしまったことが、一年生にエースナンバーを奪われたことは、もちろん悔しい。だから、更にここから努力して結果を出し、背番号1をあの後輩から奪い取りたかった。

それが、戦う前に離脱してしまう。それも、怪我で。

あの後輩は背番号1を返上したが、いずれ必ず取り返すと眼が何よりも雄弁に語っている。

その自信が羨ましかった。だから、敢えて誰のものでも無いエースナンバーを奪うと考えていた。

「必ず、戻ってきます」

そして、エースナンバーを奪ってみせます。

そこまで、口に出さなかった。

復帰への意思を示して、丹波光一郎はエースナンバーを巡るレースを離脱した。

そして、青道高校から戦力として数えられる投手の駒が消えた。これは、非常に大きい。

青道高校の伝統として、野手↓投手↓野手↓投手、と言うようにスカウトする選手の主軸を代えるという傾向がある。

東清国世代は打者世代、結城世代は投手世代、御幸世代は打者世代。次はおそらく投手世代。

殆どの即戦力投手が小さく纏まり、素材型が打者転向を果たした結城世代は、戦力として数えられる投手が投手世代扱いなのにエースになれそうなのが丹波くらいしか居なかった。

打者世代のはずの御幸世代はそこから中から、強豪校から引つ張りだこで半ばスカウトを諦めていたシニア最強右腕を御幸当人が引つ張つてきたことと、この世代における河内枠であった川上憲史が思いの外戦力になりそうなことで、投手世代の扱いを受けている。

因みに、智巳は御幸に引きずり込まなければ巨摩大藤巻に行くつもりであった。北海道だが、その厳しい環境にこそ、何かを学べると思ったからである。

本来は、スピードスターとして注目していた倉持洋一、飛距離抜群のプルヒッター前園健太、得点圏に強い御幸一也と、打者の世代になるはずだった。

現在の投手陣は二年は斎藤、桑田、楨原の三人に、一年は斉藤（智）、川上、川島。

苗字を羅列するとどこかの三本柱のようで強そうだが実力に欠ける二年の三人と、元エースと高校における公式戦出場経験無しのサイドスローに、同じく公式戦出場経験無しのオーバースロー。

まともに公式戦で投げたのは、斉藤（智）だけと言う驚きの層の薄さである。

「監督、センバツはどうしましょうか？」

選手たちがその場を去り、高島礼も丹波が病院に向かうにあたっての付き添いとしてその場を離れて少して、太田部長が強面を僅かに曇らせている片岡監督に声をかけた。

基本的に目先のことしか考えられない彼としては、丹波の故障に対する不安が迫りくる公式戦に対しての不安に直結する。

どうやって勝ち抜くかと言うより、どうやったら勝てるのか、ということを使うまでに、小さな彼は追い詰められていた。

「……既に、合宿終わりに練習試合を組んでいる。その試合で投手陣を一通り試し、最も調子のいい者をエースとする」

これまでの既定路線を崩さずに、片岡監督は言い切った。

最も調子のいい者をエースにする。最も勝てそうな者をエースにする。

絶対的エースは生まれたが、今は結果なしにその座に君臨することを良しとしないだろう。

その元エースから『ここ一番に敗けるエースはエースではないので、エースナンバーの見直しを』と言われていたが、もうそれどころではなくなつた。

絶対的エースになる可能性があった二人の内一人が消えたのだ。消去法的に選ぶとしても、もう選択肢はない。あとは初めての敗戦の後の実戦がどうなるか。これに尽きる。

こうなると、改めて自校の投手陣の薄さを実感せざるを得ない。

「推薦枠はまだ余っています、もう一人分使いますか？」

高校野球には、野球推薦と言うものがある。学費の免除や遠征費の免除など、様々な特権を与えて選手を取ると言う、ある程度の裁量が効くドラフトのような制度で、基本的に目玉選手を引つ張ってくる時はこれを使う。

青道はこれを枠いっぱいに使わないめずらしい強豪校である。最近結果が出ていないから使えないのではないかと、と言う見方もあるが、どちらが先かはわからない。

現に、今年の推薦枠は全額免除の二人だけしか居なかった。

無論、誰がそうなのかは言うまでもないが、今年にしても枠は余っている。具体的に言えば二つ程。

今年の枠は松方シニアが一年前にベスト4になった時のエースである東条と同じく松方シニアのサードの金丸だけで、他は空きになっていた。

「急遽だが、できるか？」

「何とかしましょう」

せかせかと、太田部長は部屋を飛び出す。

一方、グラウンド。

色々起こった大変なことを知らずに、智巳は御幸を相手に豪速球を投げ込んでいた。

脚がガクガクながら、キツチリとキャッチングできている御幸は流石というべきだろう。万全の状態でもキャッチングできない者も居るのだから、この男はやはり、何だかんだ（打点乞食だの守備の人だの）言われているが、リードも守備力もパンチ力もある優秀な捕手。

ただし、ムラがある。このバッテリーに総じて言えることでもあったのだが、やはり文句をつけるとすればそれだった。

「そう言えば、先輩たちが居ねえな」

「死んでいたお前は気づかなかつたのだろうが、結構前から何処かへ行つたぞ」

室内練習場は、珍しく空いている。使っている人間も、見渡す限り一年生が多い。

これは、珍しいことだ。大袈裟に言えば、暇な時は基本的にバットを振っているようなところが、この野球部にはある。

「何かあつたのかね？」

「さあな」

フォークボールを要求され、投げ込む。

明日から練習試合だけに、フォークボールの冴えは少しでも確認しておきたかった。

「……うん、充分決め球として使えるよ。そもそもお前、ストレート一本でも基本的に行けなくもないわけだし」

「そうかな」

丹波程大きくはないが、その分鋭く縦に割れるカーブ。

遅く、ゆっくりと曲がるカーブ。

斜めに落ちるスライダー。

落差はわずかだが、緩急をつけられるチェンジアップ。

被打率0.09の必殺球、高速フォーク。

糸を引くような、と言う形容が似合う、手元でのノビと前に球質の重さを持ったストレート。

「練習試合ではストレートをコントロールで散らばして、スローカーブとチェンジアップで抑えていこう。フォークと縦カーブは封印。スライダーは空振り取るのに使ってもいいかもな」

「何故だ？」

「そりゃ、来年戦うわけだから」

——見せるのはもったいない。

御幸はそう言っている。

一度見られて攻略されるような球なら狂った被打率を持たない。そんなことはわかっている。

だが、映像で見ると実際に相対した時の雰囲気が違うことを、そしてその違いが対策するにあたっての大きな差になることを、この男は知っていた。

それに、フォークボールは負担が掛かる。あれだけ素晴らしい球を見せられては使いたくなるが、ここは我慢だと、常々御幸は自分に言い聞かせていた。

肩が脆い。肘も脆い。関節自体よろしくない。

だが、それを活かして素晴らしいフォークが投げられる。それを発見したのは自分で、投げさせてみたのも自分で。

だから、ケアの方もしつかりとしようして口うるさくインナーマッスルをつけることを勧め、無駄には使わせまいとリードを考える。

(まあ、他の球も普通に使えるから意外と苦しくは無いんだけど)

リードしてて楽しいが、同時に怖いと言うのが心情だった。投手の肩は消耗品と言うが、可能な限り消耗を抑えたい。

「今日はこれまでな。アイシングちゃんとやれよ」
「わかった」

語気でわかるのか、本気で頼めば案外素直にこちらの言うことを聞く。

よかったよかったと胸を撫で下ろし、プロテクターをゆっくりと外した。

こんなこともあろうかと、二人で事前に直球中心のリードは既に練つてある。ゲームがどう動けばどうするかと言う構築も、ある程度選択肢として作つてある。

風呂入つて飯食つて寝ようと決意し、さつさとアイシング用の器具を取りに寮に走つて戻つた智巳を、御幸はのろのろと歩いて追つた。

満塁男

縦に割れるカーブ、遅いカーブ、ストレート。

三種で敵の打線を抑えようという配球は、見事に功を奏した。

縦カーブで強打者を詰まらせ、遅いカーブでタイミングを外し、ストレートで打ち取る。

口に出せばそれだけでしかない球だが、組み合わせで如何様にも打者を翻弄できるのが野球であり、キャッチャーだった。

——キャッチャーは面白い。

そのことは、元キャッチャーである智巳も知っている。

今はピッチャーと言うポジションを担うことに誇りを持っているが、御幸にポジションを奪われて甚だ本意ながらピッチャーをやりはじめた身として若干の未練があることも確か。

リード通りに投げながら、智巳は味方の熱い援護に感謝していた。

青道高校VS愛知西邦高校。現在八回で、10対3。

新三年生エースを打ち崩し、打線をそれなりに抑え、青道高校は圧倒的優位に立つて

いた。

「まあ、練習試合だからな」

ニヤリと笑った御幸の顔を少し呆れたように見ながら、智巳は少しため息をついた。「わかつてるから、気にしない。安心しろ」

敵打者、新三年生佐野修造。現在二回対戦し、タイムリーが二回。

つまり、上級生とは言え良いようにしてやられている。

——と言う、形になるのだが。

「典型的なハイボールヒッターってことまでは、わかった。後は散らばしてどこが得意か見ていくから」

「ホームラン打たれるけど気にするな、だろう。わかっている」

出血を少なくする為に二、三番は前とは違って仕留めた。

だが、そういう問題ではないのがエースのプライドというもので、斉藤智巳にはそれがある。

「だけどもあ、一応。一応な」

「いらん。さっさと帰れ」

ワインドアップポジションから、第一球目。

佐野のバットが、びくりと動いた。

高目僅かに外れ、内角の球はボール。

(やっぱ、内角の反応鈍いな)

まあ一番鈍いのはアウトローだけど、と事前に得て、更に実感することで修めた知識を反芻し、今度は真ん中低めを要求。

一球も見せていないものの、フォークの幻影がちらついたのか、佐野はバットを振らなかつた。

(やっぱり、刻み込まれるものがあるんだろうな)

佐野とは初対面ではない。ホームランを打たれたり、三振にしたりした仲である。

この試合で見せてきていないからといっても、無い訳ではない。その脅威がバットを振らせなかつた。

縦カーブでファールを打たせ、次の球。

(じゃあ、本命)

外角、高め。

2ストライク、1ボール。

(腹立てんなよ)

打たれんなよ、とかでは無く、臍を曲げられないようにと祈るような気持ちでミットを構える。

リード通りに、ストレートが投げ込まれた。

——のは、良かったのだが。

(うわ)

重たい球である。恐らく、球威に全てをおいて投げ込まれたであろうその一球は、前に飛ばないかのような球威を持っていた。

だが、佐野修造も怪物と呼ばれた男。この狙い目で、好きなコースに来た球をフルスイングで迎え撃つ。

金属バットが、ボールを捉える。

タイムリングは合つてある。バットも振り切つた。

だが、打球は伸び切らなかつた。

打者の力を示すかのように高々と上がったボールは、ある一点に到達するとゆつくりと落ち始める。

信じられないと言うような面持ちの佐野が呆然とボールを見つめるが、落ちていくボールに伸びは戻らない。

絶好球を打った佐野の打球はセンターの伊座敷のグラブの中に収まつた。

「お前さ」

「要求通りに投げたろう」

平然とした顔をしてマウンドを降りる智巳に、御幸は若干呆れ気味に声をかける。

一試合にそう何球も投げられないだろうが、高校野球界でも屈指のスラッガーが金属バットを持つていると言うのに、詰まらせる球の重さは素晴らしい。

時々要求してみようと、思うほどに。

「いや、別に責めてはねえんだけど」

木だつたら折れててもおかしくない程の球だつた。あれ程の球、打たせるには惜しい。そうも感じる球だつた。

欲を言えば、捕球してみたかつたのである。

「お前、やっぱエースだな」

今更何クソ当たり前のこと言つてんだ、と言わんばかりの顔に苦笑し、御幸は一番からの好打順ではじまる自軍の攻撃に目を向けた。

リリーフと先発の駒が足りないが、打線はつながっている。

それが夏の敗戦を乗り越えて新チームへと目を向けたOBが下した評価。

それは概ね正しい。このチームに居るのは燃える先発三人、怪我しがちなエース候補一人、怪我しやすいエースが一人。あとは業火絢爛なりリーフ陣。

「斉藤、この回で降板だ。代打には前園を出す」

「わかりました」

七回、セーブして三失点。調子が良くも悪くもないにして、マシな方。

だが、試合はしっかりと作れていた。

第一戦目、先発は楨原。四回と三分の一、四死球7、奪三振2、自責点6。8対5で敗戦。

第二戦目、先発は斎藤。五回、四死球4、奪三振3、自責点7。11対9で勝利。

第三戦目、先発は斉藤智。七回、四死球1、奪三振15、自責点3。

一戦目より二戦目の方が、二戦目より三戦目の方が敵チームは強い。

「春大会、エースは任せただぞ」

となれば、こうなるのはわかりきっていた。

「まだ相応しいとは思えませんが、わかりました」

そう僅かに不満げに答えた智巳に、新三年生たちの頼もし気な視線が刺さった。

彼等からすれば、そのピッチングやマウンドでの振る舞いは充分にエースに相応しいと思える。

無論、故障で離脱した丹波のことを思うと『二年生エース』という言葉を聴くと、共に過ごしてきた仲間への僅かな感傷があった。

しかし、勝てるピッチャーがエースになるべきことは明白だし、どちらが勝てるのか、と言われれば迷いはない。

そうこうしている間にも試合は進み、代打前園が三振、一番倉持がヒットからの盗塁、二番小湊が四球、出塁、三番伊座敷で進塁。現在打席には四番でキャプテンの結城。ネクストバッターズサークルには、五番の増子。

端っこのベンチには降板したエースと、六番の正捕手、次の回から登板する予定で、投球練習から帰ってきた川上の新二年生が、横並びに座っている。

夏大会ベンチが二人、スタメンが二人。中々の豊作と言われた年だが、上記四人とそれ以外とのコミュニケーションがあまりうまくいっていないのが、この世代の特徴だった。

世代の核となるべきは御幸か智巳だ、と言うのはOBやスタッフからもよく言われているが、この二人はもっぱら投手陣としか関わらない。

前者は正捕手として、後者はエースとして。仕方ないことではあるが、どうにも友好範囲が狭いのだ。

「ノリ、次のピッチャーお前だろ？」

「う、うん」

緊張しているという事は、一目でわかる。

御幸としては——と言うより、正捕手としてはこれは放っておけない。緊張はするにこしたことはないが、しすぎると毒。固くなって本来のピッチングができないという

のが、一番お互いに悔いが残る。

(なんとかしろよ)

(同じピッチャーとしてなんかないの、お前?)

(あることにはある。効き目は定かでないけども)

と言うやり取りがなんとなく空気で行われ、役割が決まった。

切り込み隊長御幸、本命智巳の流れである。

「やっぱり、緊張するの?」

「まあ、斉藤の後だしね」

どうしても、ノックアウトされて降板されてないだけに比較はされる。

一年生として入学したての時。新入生対控え選手組の練習試合があった。

新入生の先発は斉藤智、捕手は御幸。四番も御幸。

控え選手組の先発は丹波。捕手は宮内。四番は増子。

試合は七回まで動かなかった。

無駄に調整があたり、絶好調と化した智巳と割りとは慎重に組み立てた御幸が七回裏まで無失点十八奪三振、被安打ゼロに抑え、丹波もランナーは出すが得点圏には送らせない粘りのピッチング。

しかし、八回表。疲れが見え始めた丹波から四球をもぎ取り、一番倉持がやっと出塁。

そのまま盗塁を決めると、ピンチに弱く、打たれ弱い丹波の脆さが露呈。あれよあれよの満塁で四番の御幸に周り、グラウンドスラムで一気に4点リード。その後も連打を浴び、7対0にまで差が広がる。

ここで智巳が降板、御幸・倉持を含めて活躍したスタメンが代わったわけだが、後続のリリーフ陣が二回で仲良く8失点。勝ち星が消えてサヨナラ負け。その時の敗戦投手がノリこと、川上憲史。

青道OBは思った。ああ、また打たれ弱くてピンチに弱いのか、と。

もはやこの弱点は、青道の伝統と言つていい。そりゃ、強いほうが珍しいのはわかるが、ここまで一気に崩れると辛い、と。

それから練習試合に出たことはあるが、公式戦には出たことがない。打たれ始めるとちよつと止まりそうにないのが、リリーフ陣全員が抱える弱点だった。

まだ見たこともない新一年生にこの改善を任せるわけにもいかない。

「緊張はすればするほどいいぞ、ノリ。まあ、それだけで終わったらダメだが」

「え？」

後の方はともかく、前の方の言葉が意外だったのか、川上は思わずマウンドから目を逸らして斉藤の方に向いた。

「俺は登板する前には喋る余裕すらなくなるからな。俺よりは緊張の度合いはマシだ」

登板が近づくことに緊張して、黙り込む。

だから、ありとあらゆるピンチを想定して、マウンドを見て対策を練る。

不測の事態に強い人間は、なかなか居ない。だから、全てを予測しておいて『来なかつたらラッキー』と言うような心構えにしておく。

これが、智巳の考えた克服方法だった。

「ノリの場合、ピンチに弱いと言うよりはピンチになると投球ペースが早くなる」

因みに智巳は敵からすれば苛つく程に遅くなったり、普通に戻ったりとリズム感がない。

サインを早め早めに受け取り、打者が嫌がるだろうな、と思うタイミングで投げている。

「投球ペースが早くなるのは打者に考える隙を与えないが、打者にもリズムと言うものがある。それを外してやるというのも、手だぞ」

「それは、どうやって?」

「一概には言えない。遅い球か、速い球か、曲がるのか、落ちるのか。敵は右か左か、今までの成績はどうなのか。対戦したとき、どの球を打ったのか。それらによって、勘と経験で弾き出して、投げる。要は、博打みたいな要素がある」

そうこう自分の投球理論を滔々と述べ、それを真面目な川上が聴いている途中、御幸

が立った。

既に、プロテクターとレガースは外してある。

「じゃあまあ、一発打ってくるわ」

「ああ、頑張れ」

「ホームランでいいぞ」

どちらが川上で、どちらが智巳かは言うまでもない。

ネクストバッターズサークルへ行く時には、ワンアウト満塁。

無言でひらひらと手を振って、御幸は飄々とした様子でバットを振り、少し経ってから片膝をついた。

自分のこれまでの通算成績、得点圏打率4割。二塁のみの場合は3割、二三塁、一三塁は4割。満塁時は8割。

所謂、満塁男。

打席に立つ時には、ツーアウト満塁。それが一番望ましい。

(まあ、増子さんが全部返してくれたらそれはそれでいいんだけど)

そうすれば、4点入る。

今のところ、川上は宮内と組んだ方が防御率が良いから、守備交代もあるかもしれない。

(なら、ここに楽しんでおきたい)

敵の投手は技巧派。カーブ、スライダー、シンカーの三球種。

落ちる球が得意な御幸にとって、狙い目のフォークがないのは少し痛い。沈む感じのシンカーでもいいが、浅いフォークの狙い撃ちが一番得意だけに、少し苦しい。

(ストレートのでは……決めに来ねえだろうな)

お世辞にも、いい球ではない。空振りを取れるストリートではない。

五回から登板して、ワンカウント目はカーブが五個、他は殆どストリート。

(カーブは強打者に使ってたから、スライダー……)

三人ランナー背負った時にシンカーを投げる勇気があるか、無いか。

ストリートで入るなら、普通。

シンカーなら、勝負師。

スライダーは、どうなんだろうか。この投手をリードするなら、自分はカーブか、ストリート。

満塁でフォークを要求したことも多々あるが、それは相方がアレだからであって一般論ではない。

(決め球はシンカーっぽいんだよな)

なら一球目シンカーはないかと思うが、どうも臭う。

開き直って、投手の強みを最大限に活かして攻めてくるのではないか。

この投手の強みである制球力の高さで、シンカー。後逸しないという自信があるなら、有りといえは有り。自分なら、内角ギリギリはずれるシンカーにする。

だが、このバッテリーにそこまでの攻めつけはない。

(外の低め、逃げ気味シンカーだと見た)

バッターボックスに入り、一礼する。

構えて、一球目。

「おっ」

外角は外角だが、ボールゾーンに球一つ分出ている。

それを御幸は、軽々とスタンドまで運んだ。

悪球打ちにも程がある、そんなバッティング。

背中に突き刺さる、捕手の『まさか』の視線が痛い。

(まあ、捕手に『まさか』は良くないけど、その気持ちはわかる)

犠牲フライになるかなと思っただのに、思いの外伸びた。

仲間の手荒い祝福を受け、御幸はベンチへと帰還する。

この試合は、このまま波乱もなく終わった。

14対8。青道高校の勝利である。

(勝ち星が) メルト

『試合終了ー！劇的な幕切れです！』

燃えてもいい。点取られてもいい。勝てれば三失点しようが、五失点しようが、十失点しようが、勝てばいい。

先発の勝ち星が消えても、結果的に勝てばそれでいい。

つまりこの男は、公式戦の勝ち星が消えてもチームが勝てばそれでよかった。

「好投する先発、爆発する打線、燃える中継ぎと抑え。これが青道高校よ」

どこぞの魔王のような口調で、智巳はスコアボードを見ながら呟いた。

無論、内心震え声である。

001110004。結果、結城哲也のサヨナラスリーランホームランによって、7対9でサヨナラ勝ち。

どこで誰が降りたのかは、もう試合を見るまでもなくスコアボードを見ればわかる。

よかったね。おめでとう。

でも、ものすごく胃に悪い。

「勝ち星ドンマイ」

「勝てば別にいい。でもこう、胃に悪いからかなり辛い」

そりやそうだろうな、と御幸も思う。

何故追いついたんだと思えば甘い球が来るのか。

何故初級から逆球なのか。

何故厳しいところに要求していないのに、外れに外れて四球祭りなのか。

キャッチャーにはどうしようもないところで、投壊していた。

そして、それを逃さない敵・仙泉の打線。敵の新エースの真木も手強く、初回到三しか取れなかった。

「セツトアツパーどころか、まともな中継ぎが居ないからな」

青道高校OBの、(アカン)と言う悲鳴すら聞こえてくる清々しい炎上っぷり。

八回で先発が降り、九回で中継ぎで様子を見られた同学年川島がワンアウトも取れずに4失点の大炎上。その後川上憲史が四人で締め、逆転サヨナラ。

記憶に残る、胃に悪い試合だった。

「やっぱお前、夏では完投してよ」

「稲実と市大三校は任せろ」

言い方は悪いが、フオークボーラーは回を喰えば喰うほど劣化する。投げる時に酷使される握力の問題である。

だが、万全の中継ぎより疲労した先発の方が使える。もうこれは仕方がない。結果もそうだし、抑えたのも運と断言してもいいレベルなのだ。

川上憲史はマシになりつつあるが、彼は抑えであつて中継ぎではない。そして欲を言えど先発が丹波光一郎の他にもう一枚ほしい。

バッテリー二人が黄昏れていると、後ろから結城が声をかけた。

本日のヒーローであること間違い無しの、サヨナラ本塁打を放った勝利の立役者である。

「ナイスピッチングだったな」

「はい……まあ、色々ありましたけど勝つて本当に良かったです」

色々には、最終回の逆転グランドスラムに至るまでの諸々が含まれる。

本当にあの時は、敗れたかと思つた。

「……次の試合の先発、どうするのかは聴きましたか？」

「わからないが、斉藤はないだろう。基本的に監督は連投はさせないからな」

若干疲弊した御幸の問いに、主将が答える。

今は秋季大会。次の相手は特筆すべきこともない弱小校。

その次が市大三校とただけあつて、エースの温存は確定的と言えた。

『丹波が帰ってきたことだし、復帰一戦目にするかもしれない』

そう言い残して、本日のヒーローは素振りをしてグラウンドに帰っていった。

黄昏れている二人は、別にサボっているわけではない。

試合が終われば、やることは一つ。肩をアイシングしながらの反省会である。

「で、今回。失点は押し出しの四球が一つと、八番打者と六番打者へタイムリーを許した
ことなわけだが」

「後者二つは甘かった。が、前者は正直、外れてもいいと思っていた」

ペろつと、こういうことを言う。

ヒット、ヒット、ゴロ、三振、ヒット、四球、ゴロでチェンジ。

九番ピッチャーにヒット打たれんなよ、と言いたいが、それは自分のリードもあつて
その結果なので言わない。

一・二・三・四・五番はヒットを一本も許していないのに、六、七、八、九に打たれ
まくった。今回の試合はそれに尽きる。

だが、それはいい。いつも全力投球はできないから、ギアを変えていることも知つて
いる。不調なことも知っている。

所謂、黙認。上位打線に打たれまくるよりはマシ、と言わざるを得ない。

「四番は長打もあつた。あの時点では4点リードしていたから、甘い球でカウント取ろ
うとして本塁打・長打喰らうよりは厳しく投げて四球でもいいかな、と考えてたな。五

番はそこまで気を使う打者ではなかったし」

「でも、審判への印象悪いんだよ。現にアレからきわどい球はボールにされるようになったし」

「うん」

勝つ為に投げている。

智巳にはその意識が強くなる。だから敬遠や勝負気味の四球も平気でするわけだが、それは押し出しがかかっている時も同じこと。

不利なカウントになったりしてもいいから、長打を浴びないように投げる。満塁で長打を浴びれば、2点、ないしは3点入るだろう。

それよりはマシだから、いいや。その理屈である。

「それよりも先ず、何で満塁になったかだけでも」

リード通りに投げていた。コントロールは甘かったが、まともにいけばあんなことにはならなかったはず。

智巳にはそんな意識がある。

「そりゃ、いつもの不調だったからだろ。明らかに球に力と細やかさが無かったし」

「……どうにも、秋はな。努力はしているが」

（まあ、無援護病になるか不調固定かで比べればいくらか前者の方が対策のしようがあ

るからいいけど、調子戻してくれよ。マジで)

智巳は春から夏にかけて無敵モードに突入し、秋から冬にかけて燃え尽きて無援護病、不調固定の二種の病のいずれかを発症する。

要は、春から夏にかけてのスーパー化によって溜まった疲労がどうにもならなくなる、と言っていていい……のだろうか。

それと無援護病発症は別な気もする。

「まあ、不調でもいい。リードによつては八回三失点くらいにまとめられるから、気にするんな」

リードと言えば、相変わらず調子を僅かに上げつつある川上憲史と復帰した丹波光一郎はピンチになると思わぬ指示を下す強気の御幸のリードを苦手としているようである。

これまで抜群の相性を誇る智巳とのバッテリーを主としてきただけに、少し掴みかねているところはあった。

他にエースと呼べる投手の球をブルペンで受けたのは国際大会で、その時も基本的に捕手は担当制を敷いていた。

結果として、ベストナインとベストバッテリー賞を得たが、他にバッテリーを組んだのは成宮くらい。

御幸が捕手として劣っているわけではない。ただ、どうしようもならないタイプの違い。

御幸は今のところ、規定水準の実力を持った投手をリードで一流にすることはできる。一流を怪物にすることもできる。

だが、規定以下の投手に関してはどうしようもない。規定以下の投手を水準まで引き上げることは、残念ながらできなかった。

逃げれば外れて四球、開き直れば甘く入って一発。どうすればいいんだ、と言った状況に匙を投げないあたり根性があるが、だからと言ってどうにかなるものでもない。

「宮内さんのような低め低めの慎重なリードは、どうなんだ」

俺は合わなかったが、と付け加えることなく、智巳は言った。

彼は、真つ向勝負して叩き潰せるだけの力があるだけに慎重な配球——ツーストライクから一個外すとか——は、好まない。

平気でノーアウトからランナーを出す、三球勝負をガンガン挑む。三振も取る。

「性に合わないんだよな、やっぱ。やろうと思えばやれなくもないんだけど、一発病と四球癖に対しては凌げたとしてもその場凌ぎでしかないから……」

監督、新入生は投手でお願いします。

できれば投手で、即戦力とはいかずともリード通りにある程度球を散らせるマシンな投

手を。

高確率で真ん中にすっぽ抜けるのは、本当にどうしようもないのです。切なる願いである。

「次の先発、丹波さんだと思うけど、どうするんだ」

「うーん……丹波さん、これまでには比べると格段にリードしやすいから基本的な配球は変えずに逃げ気味に感じてかな。落ちる球があればもつとやりやすいんだけど」

それでも、やりやすいことに変わりはしない。丹波光一郎は、制球力もスタミナも球速も特筆すべきこともないが、大きく縦に割れるカーブを持っている。

それに、特筆すべきこともないと言うことが御幸にはとても嬉しかった。

フラットが一番。ブレーンが一番。いろいろ加えて穴だらけなのより、物凄くやりやすい。

「一也、ここに居たのか」

「ん?」

振り向けば、ノリ。今回の試合の地味な殊勲者にして、唯一の無失点ピッチングの実行者。

低めに集めることがうまい抜群のコントロールとスライダーを投げる、青道高校のクローザー（消去法）である。

エース（消去法）、セットアップ（不在）、中継ぎ（崩壊）、クローザー（消去法）なところに暗黒を感じなくもないが、それはそれとしておく。

「ちよつと受けて欲しい球があるんだけど、いいか？」

「新球種か？」

「うん。結構前からシンカーを投げる練習してて、中々物にならなかつただけど」

ものになつたらしい。

これは、非常に嬉しい。落ちる球を軸にした配球は使いやすいというのは、御幸の持論でもある。

横変化しかなかった川上は、今までさして特筆すべきこともないストレートと同じく特筆すべきこともないスライダーをそのコントロールで外したり入れたりしながら抑えてきたわけだから、下方向の必殺球が来れば大幅な強化が狙えるということはかなり前から言われていた。

「じゃ、智。検討はまた後でな」

「ああ」

御幸が去つて行つた辺りで、アイシングを終えた智巳ははたと気づいた。

一応、自分も金属バットから空振りが奪える横の変化球をネットスローで投げってみて、若干物になりつつある。

(まあ、伝えるのは後でいいかな)

どうせあいつなら捕れるだろ、と言うような軽い気持ちを抱きつつ、軽く投げる。

いつもより、変に曲がる。曲がり方も違おうし、何より速い。

「高速スライダー……って言うのかね」

高速フォークに次ぐ、ストレート誤認変化球になれば、やりやすい。ストライクゾーンの真ん中から外に外すこともできそうだし、中々使えそうだと言うのが、感想だった。

サヨナラ暴投エース、LINEをする

——市大三校、秋季大会決勝進出。苛烈な打撃戦制す

秋季大会、市大三校が決勝に進出した。青道高校は市大三校に負けてベスト4で終わることとなった。

最終的なスコアは、13対14。

青道高校の先発は消去法エースの斉藤智（新二年）、市大三校の先発はエースの真中（新三年）。

初回、いきなり試合は動いた。

先頭バッター倉持洋一（新二年）がフルカウントから選んで四球で出塁。二盗を決めて二番の小湊亮介（新三年）が十球粘って歩く。

三番伊佐敷純（新三年）がセンター前へポトリと落ちるヒットを放つと、倉持が俊足をとばしてホームに生還。

ノーアウト、一二塁。ここで打席に立つのは、四番の結城。

敬遠しても五番は恐怖の満塁男こと、御幸一也（新二年）であることを考えたバッテリー、ここで結城との勝負を選択。見事にスリーランを被弾して4対0。

五番御幸（新二年）が息をするかのように凡退し、六番増子（新三年）がソロホームランで追加点。5対0。

七番の門田（新三年）がヒットで出塁し、八番白州（新二年）がまさかのセーフティバントで、初回からいきなり投手の斉藤智に回る。

ここで、エースの斉藤がまさかの高校第三号となるホームラン。熱い自援護で8対0。

その後倉持が三振、小湊出塁からの伊佐敷ファーストゴロでチェンジ。

片方のエースが大乱調ではじまったが、斉藤智は良くも悪くもいつもの斉藤智をしていた。

息をするかのように先頭バッターにスライダーを捉えられてツーベースを打たれ、その後鬼神とくわして三者連続三振で締め、立ち上がりを終える。

再び試合が動いたのは、四回表。

今日3ー3（本塁打、二塁打、二塁打）と当たりに当たっている結城がこの試合二本目の本塁打を打ち、9対0にまで点差を広げる。

あと一点取れば、と言う雰囲気が出たのか、御幸が出塁した後の増子がゲッツー、門田が三振で四回表が終了。

その四回裏、斉藤智が掴まる。

四球、四球から単打、単打で1点取られてノーアウト満塁。迎えるは市大三校の四番大前隆広（新三年）。

何処かで——と言うよりも一回の表で見た光景を演出し、ここで斉藤智がギアを上げる。

本日二度目の三者連続三振で切り抜け、この回を一失点に抑えた。

このまま五回まで投げ、六回に単打から二塁打でランナーを返され、七回にも一失点した斉藤智は七回を投げて降板。次の試合は稲実とになることから、温存したと思われる。

この時点で9対3。裏の攻撃で一点取れば勝ち、と言うところで三者凡退し、八回の表のマウンドに上がったのは斎藤（新三年）。

制球が定まらず、押し出しを二回したあと満塁弾を被弾。変わった槇原（新三年）も三失点（自責点ゼロ）し、9対12。降板して十分経たずに斉藤智の勝ち星が消える。

その後一番からの好打順からの攻撃ではじまった青道は倉持ヒット、小湊三振、伊佐敷ヒット、結城ヒットでつなぎ、御幸の満塁ホームランで逆転に成功。13対12。槇原に勝ち星がつく。

このままいけばいいものの、後続の川上がスリーアウトで二失点で取るという拙いリリーフで、市大三校が逆転。

九回裏、五者凡退でゲームセット。青道高校ベスト4で散る。

片岡監督は、『次の試合を意識しすぎた自分の采配ミス』、キャプテンの結城哲也（本日四打点）は、『援護しきれませんでした』、エースの斉藤智（七回三失点、三打点）は『この試合はどうでしたか』と聴かれ、『試合を作れなかった。エースとしては不十分なピッチング』、『リリーフが打たれたようですが』との問いに『敗けたということはエースが悪いので。今一リズムを作れなかったし、一人で三失点したのはいただけないと、反省をあらわにした。』

強力な打線に、脆い投手陣が長い間の伝統だった青道高校。御幸―斉藤智のバッテリーは盤石だが、中継ぎ抑えに不安が残る。

ここをどう改善するかで、夏の甲子園も見えてくるだろう。（峰富二夫）

「はい、かなり経ちましたが、まるで成長が見られないので反省会をはじめます」

月刊野球王国で取り上げられた記事を大きくコピーした一面をバンバンと叩き、御幸一也は青道投手陣に声をかけた。

「成長が見られないってのは言い過ぎ――」

「マウンドでは、と言うかバッテリーを組む以上口を慎む必要は全くないので、よろしくお願います」

智巳（自主参加）の言葉を切り捨て、御幸は笑いながら投手陣を見た。

目が笑っていないことは言うまでもない。

「齋藤さん」

「……おう」

「言いたいことは色々ありますが、四球が多過ぎます。あれだけコントロールが乱れるとリードのしようがないので、投げ込んで制球力を付けてください。四球から置きにいった球を痛打されると言うパターン、いつまで繰り返すつもりですか。次、楨原さん」

「……うむ」

「自分が出したランナーの時の集中力、もつと持続させてください。野球は防御率を競う競技ではないということ、わかってますよね」

今の言葉、若干耳が痛い。

完投するために所々で手を抜いて、ピンチに全力を出す。だから結構失点するし、ランナーも出してしまふ。

延々と続く御幸主催の反省会——と言うより弱点万国博覧会を見て、齋藤智巳は胡座をかいて目が笑っていない自分の女房役を見た。

ここに呼ばれたのは齋藤、楨原、川島。ここに呼ばれてないのは、丹波と川上くらいか。まあ、丹波は最近七回を五失点にまとめるなどと好調だから呼ばれていないのかもしれない。

川上の一回二失点は中継ぎエース、クローザーと呼べるピッチングで、正直今は、それだけでできればそれでいい。

(どうなんだろうな、これも)

弱点はわかりきっている。それをそうやすやすと直せないから皆が強くはなれていないわけで、御幸の言っていることは机上の論理的要素が混ざっていると云わざるを得ない。

無論、この二人の中継ぎもその欠点はわかっているし、監督・クリス・御幸で直そうとしているが、それでも直らないわけである。

その指導の仕方を見直し、監督らや御幸は手を変え品を変えやっているわけなのだが。

(もうこれは、こういうもんだと諦める方がいいんじゃないか)

一回投げると大量失点する中継ぎだと、割り切るしかない。後は自分がリズムよくゼ口を抑えて、打つ方でも頑張つて結果的に打線が15点くらいとれば、多分ギリギリ勝てるだろう。

そう考えた智巳は、案外と冷たかった。見切った、と言つてもいい。

まだ諦めていない御幸と違い、智巳は諦めている。

どちらが、優しいのだろうか。それは受け取る人間によるから判断はつかない。

ただ、どちらも馬鹿にしてるわけでも、責めたいわけでもないのである。

「御幸、俺に言うことは？」

「インナーマッスル」

「あ、はい」

目が笑っていない。

いつもは適当に話を流したり打点乞食扱いしたりナチュラル畜生扱いしたりしているが、それは気心しれた仲特有のアレで、基本的に仲はいい。

その智巳ですら、若干引くほど今の御幸はガチのマジだった。

こんな御幸を見るのは、初めて会った時と、クリスマスさんを馬鹿にされた時と、今で、計三回目。

新三年生二人と同期一人の助けってくれオーラに背中を刺されながら、智巳はすたこら逃げ出した。

「……でもまあ、真剣になつてくれる人が居るのは嬉しいことだろう」

たぶん。

だから助けなくても別にいい。

たぶん。

マウンドで逃げない斉藤智巳、女房役相手に逃げる。

逃げた先は室内練習場。もっぱら、暇な時はここでインナーマッスを鍛えて、智巳は脆い肩の耐久力を筋肉で上げていた。

そんな時に、携帯が鳴った。

LINEの音。誰かからの連絡であることは間違いない。

(成宮からかよ)

『今いいか』とある。よくないが、まあ練習中ではないし、いいのだろうか。

少し考えて、智巳は既読をつけて返信した。

『なんだ』

無愛想にも程があるが、一応親友兼ライバル。これくらいが程良かろうと、彼は判断していた。

御幸との違いは、ナチュラルに雑に扱っているか、雑さを意識してるかしているかだろう。どちらが御幸でどちらが成宮かは言うまでもない。

『お前、自分の所為でサヨナラ負けした時、どうやって立ち直った?』

五分待っても何も来ないし、既読はつかない。

インナーマッスを鍛えるかなと立ち上がりかけた時、また鳴ってこの文面が現れた。

このライバル、凶太い。

文面を見て、智巳は思った。

サヨナラ負けさせたライバルにこんなこと聴けるなんて、中々できるもんじゃないよ。

脳内で誰かがそう言った。

だが、はてと思う。

この成宮鳴とかいう男、こんなLINEを送ってくるだろうか。

実例として、『バッテリー揃ってで稲実に来なよ。二番手エースにはなれるんじゃない？』と誘われたことがある。

『なるほど、お前は三番手か』と返して破談になったが、これでわかるだろう自信の程。その自信家が、ライバルに弱音を吐く。

(スクイズを読みながら外し過ぎたサヨナラ暴投エース成宮鳴さんと化したこと、悔やんでるのか)

因みに、サヨナラではない。決勝点になっただけである。

要は、語感の良さの問題。

まあそれはともかく、最近成宮は調子が悪い。今反省会をしている記事の元になった試合の後に行われた試合で、成宮は敗けた。

要は、西東京の強豪の内の一つはいつものパターンで負け、もう一つはまさかの敗北

を喫したのだ。

(だから調子が上がらないのかもな)

『敗けた瞬間をリピートし続けて、もう二度とするまいと目を逸らさなくなるまで見続ける。メンタルが強いんだから、その繰り返しで乗り越えられると思うぞ』

取り敢えず真面目に返し、しばらく待つ。

成宮鳴、返信が遅い。

『ありがとよ、マゾ』

『気にすんなよ、ドチビ』

『今度背のこと言ったら殺すぞ』

『お前が死ぬんだぞ』

返ってきた言葉に相応しい言葉を返すという美しい友情のやり取りを終え、智巳は立った。

もうすぐ、春の選抜がはじまる。

中継ぎ、ベストピッチをする

春期大会では、比較的リリーフ陣が燃えなかった。一回に平均二失点しかしないというベストピッチ（by御幸）と、先発の斉藤智と丹波が平均7くらいのイニングを稼いでくれること。

そして打線の好調で、比較的順調に勝ち進んでいた。

ここに来て斉藤智巳、秋頃の不調（平均三失点）から脱却。七回を一失点で収めることも珍しくなくなり、かなり安定して——つまり、OB会の胃に優しい感じに——勝てるようになる。

七回投げられても、三失点する先発はいらない。そんな感じで爆破炎上を繰り返していたリリーフ陣もこれにはニッコリ。

そもそも、打線が好調で敵が弱ければ7、8点は取れるわけで、彼が先発の時は基本的にコールド（実質完投ないし完封）で進んでいた。

七回平均五失点の粘投も虚しくで勝ち星を消されている丹波にどこか既視感を覚えながら、今日も智巳は代打として丹波に代わって打席に立って、ツーベース。結構走塁で無茶をするため、即座に代走を送られて交代。

結果、ベスト32。関東大会への道のりへの第一歩目を順調に踏み出せていた。

さて、春季大会がもうはじまっている。その先に関東大会も待っている。

関東大会には、一年生も出場できる。滅多にないが、よつぽど有望株ならば出場できるのだ。

そして、それは即ち。

「新入生の時間だあああー！」

「うるさい！」

御幸のワクワク期間の終了、現実と向き合う時間の開始を示していた。

現リリーフ陣のベストピッチ（一回平均二失点）では、夏は勝てない。

誰しもが認めるこの事実、解消には三つの道がある。

斉藤智巳が全試合完投すること。

現リリーフ陣を立て直すこと。

そして、新入生で補強すること。

一番目は、これは無理。

二番目は、これまでやって無理だった。

三番目。これに御幸は賭けていた。多分、監督も賭けている。何だかんだ言つて、元投手。このままではヤバイというのは骨身に染みているはずである。

顔は怖いが、口には出さない優しい監督。それが片岡鉄心だった。

「誰が来るんだろうーな、楽しみだなー」

グラウンドでは無いし、夜なんだから静かにしろよ。

智巳は言いかけて、黙った。根は優しい男なのである。

結構雑に扱っているが、相棒の苦労を押し量れないというわけではない。

「と言うか、わざわざ土手でバット振ってる人間に話し振らんでもいいだろう」

他のチームメイト、倉持とか前園とかノリとかに振れよ。

暗にそう論じたのも虚しく、御幸はまるで話すのをやめる気はなかった。

「いやでも智さん、新入生っすよ」

ワクワクのあまりどこか三下っぼい口調になった御幸を見て、少し智巳は悲しくなつた。

そこまで追い詰められてたのか、という意味で。

「そうだな。楽しみだ」

「今回は投手の年のはずだから、かなり有望株が期待できる……関東大会では無理でも、夏の甲子園までにはリリーフとして戦力にできれば」

まだブツブツ言っている。

投手に恵まれない男・御幸。かなり哀れ。

捕手は畜生であることが多いし、その例に違わずこの男も畜生なのだが、最近はその度合いが増しつつある。ハードルを下げたのかもしれないが、皮肉に聴こえなくもないセリフが多くなった気がする。

ベストピッチでしょう、とか。

(まあ、改善されなかったわけだしな)

それに、7失点とか5失点とかに比べると、確かにベストピッチなのだ。予想の範疇を遥かに超えた神ピッチングとも言っている。

自分がランナーを一塁に置かないで試合を終える。

丹波さんが七回で崩れない。

御幸がチャンスで打たない。

哲さんが凡退マシーンと化す。

これくらいありえないことであると、智巳は思っていた。畜生は伝染するらしい。「でさ、お前は何でバット振ってんの?」

丹波さんとかノリとかは、投げ込みとかシャドーピッチングしてるけど。

そう言いたげな御幸の問いに、智巳は少し考えて白状した。

「練習以外で、投げ込みはしない。打撃とインナー中心に切り替えていく」

この言葉に、ワクワク状態の御幸が一気に冷めた。

何だかんだ言つて、真面目。そして何より、このガラスのエースの面倒を見続けてきただけあつて、その切り替えは早かつた。

「お前、肩なんか起きてんじやないだらうな」

「起きてない。起きてたら、春大会は休んでる」

理屈としてはそうだ。だが、エースとしての責任感を人一倍感じて、果たそうとするこの男。どの大会であろうが公式試合を軽く見るのは考えにくい。

そんな疑念の眼差しにため息をついて、智巳は更に理由を吐いた。

「ただ投げ込むんじゃなくて、密度を増す。百球投げて、ピッチング練習は終わり。夏の大会での連投に備えて故障を防ぐ方向に切り替えて、それでもつて貢献できる部分で負担の少ないところを伸ばす。シャドーピッチングをやつてないのは、そんなところだ」
「……まあ連投はさせねえけど、それなら納得だわ」

最近、その打棒を監督が買ったのか智巳は代打として使われつつある。

スタメンは基本的に固定できているが、強いと言うならレフトが穴。おまけに代打の切り札と言える人員も居ない。

どうせベンチ入りするエースが代打の切り札になれるなら、それはかなり戦術の幅を広げること繋がるだろう。

「中学の時は三番だったからな。九番ピッチャーも悪くないが、どうせならもつと貢献

したい」

御幸が8本、斉藤智5本。どちらが多く打席に入っているかは言うまでもない。

「うちは単打と二塁打で繋いでいくだろ。投手も9人目の野手になれば、もつと強くなるはずだ」

「……俺も振ろうつと」

「打点乞食でしかないもんな、今のところ」

その後無言で二時間ほどバットを振り込み、二人は風呂に入って、配球について組み立てなおしたりと忙しい。

同室だけあって、同じように行動すればルームメイトに気を使わずにいくらでも練習できる。

それだけに、二人共練習以外に何も考えることがなかった。

しかし、これももうすぐ終わる。

三年より二年の方が人数が多いと言う関係上、二人部屋であったわけだが、新入生が入ってくればこうはいかなくなるのだ。

「新入生、どんなもんな」

「投手の年だから、どこかのシニアからいいのどつてきてくれるんじゃないか」

「じゃあ、お前と投げ合ったやつ居るかもな」

「うーん」

正直なところ、この男はライバルと言えるのが同じ地区の成宮だけで、他はあまり記憶になかった。

一から三まで、全国大会に出場できている。

それは三番斉藤四番御幸で点を取り、大事な試合は完封で勝つと言うことを繰り返してきたからなのだが、あまり苦戦はしなかった。

「クリスさんと成宮くらいだろ、苦戦したのは」

「北の本郷は？」

あいつ、お前が敗けた時に観戦に来てたけど。

そう言いかけて、止めた。傷を抉るのは別に、好調な今でなくともいい。

「あー、居たな。あいつは強かった」

「えげつないほどお前が調子良かったから勝ってたけど、実際ヤバかったら」

その日の斉藤、投げて一安打ピッチング。打ってサヨナラホームランアンド2安打。

一方御幸、3タコ、内2併殺。戦犯不可避な四番として見られていたし、そもそもこの相棒が神ピッチングしたときは必ず配球を覚えている。

確か、7回表ツーアウトに、本郷に打たれた。92球目、カーブ。インローだった。

ギリギリで、ノーノーが消えたのだ。

「ミスター完封同士の戦いだっただもんな」

そして、リトル・シニアの公式戦無敗男と言う稀有な記録をもつ二人同士の戦いでもあった。

当時騒がれたのも、憶えている。

「ああ、試合終わったあとに決め球はスプリットかって訊かれたな、そう言えば」

「なんて返したんだ？」

「フオークだぞ、と。それだけで名前言つて、握手して帰つてったけども」

「ふーん」

そう言えば、何か試合が終わったあとに智巳が捕まっていた記憶もある。

悔しさが滲みながらも、どこか尊敬するかのような、闘争心にあふれた眼をしていた。

「でもまあ、ここには来ないだろうな」

完敗しながらも、悔しきで立ち止まることなく敵の決め球を知る。

ライバル、ないしは壁。或いは先達。そう見ていることは間違いない。

会うならば、甲子園で。そして、今度こそ勝つて、乗り越える。

そう考えていることは想像に難くない。

「そうだな。来てくれたら、非常に嬉しいんだけど……あいつ、俺のこと嫌いっぽいだろ」

「え？」

「いや、俺めちやくちや睨まれたからな。タメ口きかれたし、繰り返しになるけど、決め球の話しの後に『お前の名前、憶えたぞ』って言われただけで、握手して逃げられたし」
握手してんじやん、それは認めたってことだろ、とは言わない。

名前を向こうから、あの鼻つ柱が如何にも高そうな奴が、プライドの塊が、向こうから憶えたってことを言ってきたんだろ。それは『俺の名を次は憶えろ』ってことだろ。とも言わない。

そして、本郷正宗が割りと傲岸不遜で、己以外をエースとして認めないような自信家で、それに伴った実力を持っていることも、言わない。

試合中にチラッと確認したら奴が観戦に来てたことに気づいたのも、よくよくあの場面を見返してみると目の前のエースが敗けた時に『信じられない』と言うような顔をしていることも、言わない。

智さん、鈍いつすね、とも言わない。

だって、その方が面白そうだから。

だって、その方がエース対決が燃えそうだから。

どちらも、強過ぎるほどに強い。日本のエースになれる逸材だと、鼻根目なしに思う。だから、面白い。だから、見たいのだ。誰にも介入されない頂上決戦を、己のリード

で見たい。

それも、甲子園で。

そして、勝つ。これが最高で、これ以上はない。

まあ、それは個人としての思いで正捕手としての欲望ではない。勝つ為に必要なら、容赦なくバラす。

叶うならプロに行きたいし、そこでもまたバッテリーを組みたい。

しかし、世はドラフト全盛期。逆指名制度もない。

この、本郷正宗対斉藤智巳。前者は間違いなく、後者は怪我さえしなければ大エース。この対決を、見たいと思わないわけがない。リードしてみたいと思わないわけがない。今しかできないかもしれないのだ。

「おお、そうだな。なら、誰が来るかな」

「それが思い浮かばないから思案してるんだろ」

「うん。まあぶつちやけ、来そうな奴は知ってるんだよ。一人だけだけど」

智巳の目が、雄弁に語りかけてくる。

『また騙しやがったな』と。いや騙してはいないのだ。なにせ、知っているとも言っていないのだから。

現に、知っているのは一人だけであるし。

「沢村……何だったかな。すつげえ面白い球投げる奴が居てさ。東さんを三振に取ったんだよ」

「俺、そんなこと見たこともないし聞いたこともないんだけど」

「ああ、東さんはお前呼ばなかったからね、あん時」

『援護できずに敗けたのに、自分しか責めてない奴に会わず顔なんてないわ』とか、言っていた。

そして、智巳は監督と丹波の見舞いに行っていた。そこを狙って東清国は来たのだから、仕方ないとも言える。

「……やっぱり、夏を終わらせたへボピッチャーには会いたくもないのだろうか」

へボピッチャーと、言われたことがある。まだエースでなかった頃で、ベスト8に行く頃には東清国もすっかりその力を認めていたが、それはそれ。言われたことは変わらない。

「いや、誰一人として責めてないと思うよ。マジで」

東世代も、哲さん世代も、あの一点を、あの敗北を責めはしなかった。

そのことが、未だに『消去法エース』でしかないと言う智巳の思い込みに繋がっている。

「まあ、二度同じ轍は踏まない。絶対に敗けないから、見とけ。特に稲実」

「ああ。俺達もキツチリ援護するよ」

「ランナーなしの時の打率が二割切ってるやつに言われてもな。哲さんに言われたら説得力あるんだけども」

ランナーなしの御幸は的場直樹。

得点圏の時の御幸は古田敦也、と言うのはよく言われている話。

因みに、いずれもリードが巧いということは認められている。

「いやまあ、そこらへんはおいおい直していくよ」

「期待しないで待ってる」

と言うか、宮内さんすら三球に一回は逸らす高速フォークを捕逸ゼロにし、リードが自分の気性と噛み合い、得点圏に強いだけで非常に有り難いのだ、とは言わない。

御幸はこんなものではないと、智巳は信頼している。限界は、御幸が決めたところ。まだ決めてないのだから実質無限だろう。

割りりと、雑な扱いな割には信頼が深い。

「がんばれよ」

「任せろ」

「まあ、哲さんの方が頼りになるけど」

「……まあ、だろぅけどさ」

でもその壁、かなり厚くて高いのでは。
そう思わないでもない御幸だった。

大江戸シニア被害者の会

——青道高校。

言わずとした野球の名門……と言うか、成宮曰く古豪。

投手陣の炎上と単打単打の集中砲火で猛攻を見せる打撃陣と言う、どこかで見たような特色を持つチーム。

どこかで見た。名前は控えるが、主にかなり前の横浜で。

まあそんな1999年横浜ベイスターズの話は置いておいて、この野球の名門にレギュラーの座とプロへの道を求めてその門を叩く者が居た。

「(い)か……」

「うん」

金丸信二、東条秀明。松方シニアで同じ釜の飯を食い、大正義大江戸シニアの猛攻を受けた被害者の内の二人。

因みに、大正義大江戸シニアは御幸―斉藤智のバッテリーで三年連続全国制覇、特に最後の一年は練習試合含めても負け無しという、頭のおかしいことをやっていた。

今は黄金期に比べれば暗黒だが、それはそれ。満塁で敬遠されること五回の御幸に、

ノーノーをやること六回という斉藤智を擁したあの大正義っぷりは、当時のシニア所属生の中ではトラウマだった。

「ここに、あの人達がいるんだよな……」

金丸信二と東条秀明は、あの底意地の悪い捕手のリードと打てる気がしない威圧感を持つエースと戦い、二回とも敗けている。

あの頃の大江戸シニアは、おかしなことやつとる、と言うのがしつくりきた。

当時の関東最強捕手・滝川クリス優を雍する丸亀シニアですら、実力の劣った投手を一流に引き上げるクリスのリードと超一流を怪物に底上げする御幸のリードが火花を散らし、3対0で無四球無安打完封——完全試合をされて敗けたのだ。

まあ、酷な話だが、化け物と擬似一流が戦ったらどうなるか、という話でしかなかつたわけだが。

丸亀シニアの最盛期を二回にわたって粉碎してのけた地区大会決勝は、その当時衝撃だったらしいと、この二人は、先輩たちから聴いた。

もちろん東京地区にある松方シニアも打者斉藤智と満塁男の御幸に完璧に叩きのめされ、最強世代と呼ばれた一つ上の世代までもが全国に行けなかったのである。

最強世代と呼ばれただけあって、全国に行けた打撃陣だった。なのに、零封された。

更には国際試合でその当時、連勝記録を更新中だったキューバ相手に二人で18奪三

振を含めて27個のアウトを一本のヒットすら許さずに零封——つまりはノーノーをしたこともあいまって、『野球の要はエースと正捕手』と言うことが声高に叫ばれ始め、育成方法が変わったりもした。

それほど、無敵だったのだ。連投はしてこないが、だからこそ出てきたら、敵シニアを鼻屑にしている観客がOBが帰るレベルで強かった。

「あの人達と同室になるかもしれないわけだよな」

「ま、まあ、そうだね」

若干げんがりしている金丸と、少しビビっている東条。

金丸には圧倒的な威圧感と意地の悪いリードで三振させまくられた苦い記憶があり、東条には投球に込められる闘志と如何なるピッチングをしても綺麗に整えられたマウンドを譲られたことよって、エースとしての差を見せつけられた過去がある。

それまでは、マウンドに立たされているという気持ちがあった。

だが、あの一戦からマウンドへ執着するように、東条はなった。

その結果得た準優勝と言う成果を見せる前にあの二人は引退してしまっただが、だからこそ、見せられなかったからこそこへ来たのだ、という思いもある。

「でも、早く話してみたくもあるかな。心を整えてからがいいけど」

「東条……」

エースとしての立場に、東条は執着しているように見えなかった。

だが、あの敗けから執着するようになって、やや戸惑った覚えがある。

「そうだな。二年になるまでに胸張って会えるようになるうぜー！」

「ああー！」

二年からレギュラーの座を、と決意して二人は寮に向かったのだが。

「お、俺は丸亀シニアのクリスさんとか」

あの人今何してんだろ、と金丸が漏らした。

確か、去年の春以来公式戦の出場は無かった。

エースの斉藤智との相性が抜群な御幸に正捕手としての座を取られたのではないか、とも思われたが、それにしたってあの打撃センス。他の捕手——名前は覚えていない——を使うくらいなら、マシではないかと思う。

「えー……と」

「なんだ、まだ見つかんねえのか？」

「うん。まだ貼られてないのかな」

わかりやすいように、青道高校の寮は人数が合わない限りは三年・二年・一年で一部屋。

入学が決まり、入寮日になると名札が三年、二年の左、つまり一番左に貼られるのだ

が、手違いもあり得る。

「まあ、まだ部屋はあるんだし探してみようぜ。貼ってないところが、お前のところかもしれないし」

「そうだね」

金丸信二は、面倒見がいい。

同じリトルで、同じシニアで、同じ高校。付き合いが深いからこそ、丁寧に付き合う。どこかのバッテリーとはえらい違いである。まあ、あれはあれで成立しているからいいが、かなり違う。

「おっ、あつた——ぞ?」

「どい?」

金丸が見つつけて固まり、東条が振り向く。

知っている人かな、と言う淡い期待を胸に秘め、目に映ったのは。

一番右、斉藤。

二番目、御幸。

三番目、東条。

「……え?」

「ま、まあ、有名じゃん。よかつたな。」

そ、それに……二年が二人、一年一人なんてあるのか？」

齊藤は二人居る。割とどこにでもいる苗字だから仕方ないが、その所為で齊藤智巳が登録名を齊藤智にしているのは、結構有名。

御幸とか、結城とか、小湊とか、伊佐敷とか。結構特異な——筒香、梵ほどでないが——苗字が多い青道高校に於いて、齊藤はいかにもありそうだった。だから被るの
だろう。

「そ、そうだね。齊藤さんじゃない方の齊藤さんかも知れないし」

「あ」

ここで、金丸信二が気づく。

齊藤じゃない方の齊藤は、電光掲示板では『齊藤』だが、実は斎藤なのである。齊藤じゃない方の齊藤は誤字で、斎藤だと言う。

つまりここに居るのは、齊藤の方の齊藤だということになる。

幸いにも、東条は気づいていない。齊藤が上で御幸が下ということも、勘違いに拍車を掛けたのだろう。

「じゃ、じゃあまあ、御幸さんと一緒だけど頑張れよ」

「うん。信二もね」

そう言つて、拳を合わせて二人は別れた。

金丸信二は丸亀シニアの滝川・クリス・優と。

東条秀明は斎藤と御幸と。

そう決められて、東条秀明はドアを開けた。

「失礼します……」

「お、来たな」

ニヤツと若干悪そうな笑みを見せて、御幸一也は新入生を出迎えた。

「俺、御幸一也。お前は松方シニアの東条だろ？」

「は、はい。覚えてくれていて嬉しいです！」

「うーん……まあ、そんなにかしこまる必要はないんだけど、これから二年、よろしくな」

「はいっ」

生真面目な東条秀明にとって、先輩後輩の立場の差と言うのは、かなり大きい。それがポジションは違えど尊敬できる先輩なら、なおさら。

「あの、もう一人の斎藤先輩はどこに？」

「ああ、あれね。あいつはじゃんけんに負けたから買い出しに行ってるよ」

あれつと、思った。

先輩後輩の立場に、差がなさすぎる。御幸一也はいい選手だが、それでも先輩後輩の差はあるはずで、じゃんけんに負けたからとか以前に、後輩が買いに行くのが普通な筈。

しかも、あれ呼ばわり。後輩の言葉ではない。
東条秀明、嫌な予感が蘇る。

齊藤じゃない方の齊藤なんじゃなくて、齊藤な方の齊藤なのではないか、と言う予感。
「おい、御幸。買ってきてやった——」

「あ、智。これ新入生な。松方シニアの東条って、覚えてるだろ？」

「ああ、あの時の二年生エースか」

智。

トモ。

言葉を切って、そんな呼び名が聴こえた。

齊藤じゃない方の齊藤には、そんな字は含まれない。齊藤な方の齊藤には含まれる。

「東条秀明か。俺は消去法エースの齊藤智巳。エース争いで手加減はしないけど、後輩だからと言って侮りはしないし、遠慮しろとかも言わない。実力で語り合っていこう。よろしく」

つまり、こういうことだった。

語り合う前から、結果がわかる。これを人は語るに落ちると言うらしいが、東条はそんな場面に出会ったことが今までで一度もない。

今、身を以って知ったばかりである。

「智、怖がられてるぞ」

「……何で？」

「縦に恵体だからだろ。188センチだっけか」

「192だ。少し伸びたからな」

そんな会話をしつつ脇を通り過ぎていく智巳を見送って、東条ははたと気づいた。

自分は、返事をしていない。

「あ、あの」

「うん？」

「よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

あれ、思ったより優しそう。

それが初対面の感想だった。

「智、用意よろしく。俺は東条と話してるからさ」

「……まあ、お前は人当たりいいからな。そこは任せる」

「はいはいっと」

少し引つ込んで、ガサガサと何かやっている智巳から少し離れるように東条を連れていき、御幸は改めて話しかけた。

「ぶっちゃけ、マウンドで見たのでイメージ固定されてるだろ」
無言で頷く。

三振を取り、咆える姿。投げ終わった残心が残る身体、振り抜かれた腕と、真一文字に引き締まった口元。

そして、場を圧倒する威圧感。

「まあ、別人だと考えてもいいよ。俺はどっちも慣れてるし、二年間過ごすんだからどっちかは慣れた方がいいんじゃないか？」

怖いつて思うのもまあ、わかるんだけどな」

あれはクソ怖えもんな、と御幸は笑った。

「でもまあ、味方にするのと頼れるんだよ。それに、マウンドでの見た目は怖いけど悪い奴じゃない」

「い、いや……あの、怖いんじゃないんですけど」

戸惑っている。それが一番なのかもしれない。

「怖いんじゃないんだと。よかったな」

「お前、そういうことするから威厳が消えて後輩から呼び捨てにされるんじゃないか？」

「そういうことって？」

「適当に言葉を引用して好き勝手に解釈してからかうとこだよ」

阿吽という言葉が、よく似合う。

間違いない関東一のベストバッテリーを前に、東条秀明は緊張の度合いを薄めていた。

鬼が出るか蛇が出るかと構えていたら、案外とそうでもなかった。

話してみると気さくで、あれ程威圧感のあつた顔はどこか親しみを感じる笑みが浮かんでいる。

「じゃ、これからの二年間に乾杯」

「乾杯」

「か、乾杯」

音頭を御幸が取り、三人は一気に烏龍茶を飲み干した。

部屋別でやることは様々だが、基本的に入寮日の今日は新入生歓迎会に費やされる。

馴染ませるための恒例行事が、春季大会を他所にはじまった。

中継ぎ、炎属性に認定される

「あの後、うちを倒して全国に進んで、準優勝だっけ」

「はい。最後は北海道の藤巻シニアに敗けてしまったので、東京代表の五連覇は逃したんですけど」

丸亀シニア↓大江戸シニア↓大江戸シニア↓大江戸シニアという順で、東京代表がシニア全国大会を制覇している。

シニアでも修羅の国な東京。それは高校野球に於いても何ら変わりなかった。

関東ナンバーワン左腕こと、現在スランプ中の成宮鳴。

世代最強右腕こと、消去法エースの斉藤智巳。

本来ならば甲子園の決勝であたってもおかしくないほどの実力者が、西東京に居る。

「藤巻ってことは、本郷正宗か」

「はい」

やっぱりな、と言いたげな御幸に反して、智巳の表情は暗い。

と言うより、少し憂鬱そうな面持ちである。

「なんか言ってたか、俺のこと」

「言及はしてませんが、こつちを向いて『お前らじゃねえ』って言っていました。多分これ、お二方のことですよね」

「どうなんだろうなあ」

昨晚も話した、嫌われていることを思い出して智巳が話を振るも、御幸がはぐらかして切る。

「……まあ、それは置いておいて何対何で敗けたんだ？」

「2対0です。ノーノーを喰らってしまつて」

「ほお……」

完全にリスペクトしてやがる。

御幸は思った。点差はともかく、ノーノーで決めるあたり根性がある。

恐らく、あの闘志を漲らせた瞳をやり切れない悔しきで満たして投げているのだろう。

彼が求める敵はもう居ない。だが、年齢の都合上追いかけられるのは二年後。

北海道と東京だけに、戦う機会も殆どない。

(いいぞいいぞ、この因縁。お互い切磋琢磨して、どんどんいい投手になってくれ)

一人では、野球はできない。それは強くなるにしても同じこと。ライバルが居て、鎬を削る相手が居て、はじめて得られる者もある。

成宮鳴と、本郷正宗。相手にとつて不足はない。それで、もつと智巳は強くなる。

そして、それをリードできる。役どころが最高過ぎた。

「……御幸先輩、どうしたんですか？」

「思案に沈むのは発作みたいなものだと諦めろ。放置しておけばいずれ現世に戻ってくる」

いきなり目を閉じてニヤニヤしだした御幸は、イケメンだから許されているが普通かそれ以下であれば通報されてもおかしくはない。

「あ、そうだ。俺達は左の二段ベッドを使うから、東条は右の二段ベッドの下を使うといい」

投手らしい長い手が、右を指す。

何故三人部屋なのに四人分のベッドがあるのかと問うてみると、合宿時に通いの部員が追加で泊まるためらしい。

現に、前回の合宿時には結城哲也がここに泊まっていた。

「理由があるんですね？」

「ああ。単純なことなんだけど、俺達結構遅くまでテレビ見てたりするから、電気つけっぱなしなことがあるわけだ。そうすると寝にくいだろ？」

「ここで言うテレビがアニメやバラエティだと判断する程、東条はおめでたい頭をして

いない。

プロ野球の試合か、メジャーの試合か、ライバル校の試合か。配球か、対策かだろう。「まあ、明日は適性テストだから早起きした方が良い。俺たちも今夜は外に出てくからヤ」

ここで、話者が御幸にスイッチした。

どちらかが話す時は、どちらかが何かを飲んだり食ったりしている。

阿畔だなあ、とくだらない部分に感心しながら、東条は少し緊張を感じた。

「適性テストって、どんな感じですか？」

「捕手はキャッチングかな。あとはリードは一打席とかで見れるもんでもないから」

「投手は制球重視のテストだった。変化球も見られるから、少しは投げておいた方がいいぞ」

言うまでもないが、この二人はそれぞれ最高得点を叩き出して一位で適性テストを終えている。

「球速とかは見られないんですか？」

「球速つてのは、必ずしも必要つてわけじゃない。今測つても、つて感じだし、即戦力はやつぱコントロールが良い奴だな」

御幸、魂の叫び。別に叫んでいないが、そこはかとなく迫るものがある。

「制球には少し自信が有りますけど、必殺球が無いんですよ」

東条は、四球をあまり出さないタイプのピッチャー。ストレートとチェンジアップ、カーブなどの変化球を駆使して何となく抑える。

斉藤智巳にはフォークがあり、丹波光一郎にはそれしかないとはいえ縦カーブがある。

川上こと、ノリに似たタイプかもしれない。

「下方向とか、かなりオススメ。フォーク、スプリット、縦スラ。どれも空振り取りやすい、いい球だぜ」

「下方向マニアは放つといて、縦カーブはどうだ？」

「縦カーブですか」

そう言えば、智巳は中学時代はあまり高速フォークを投げなかった。

緩いカーブとストレート、チェンジアップ。この三球種で完封して、ここぞのフォーク。そんなピッチングだったのだ。

緩急を利かせる遅い球、それを一際輝かせる糸を引くようなストレート。速球中心のピッチングだった。

「そう。強打者へのカウント取りには有効だし、詰まらせることもできる。エースを目指すならかなり使える球であることは間違いない」

「どう投げるんですか?」

「こうだから、カーブと大して変わらない。ただ、手首を寝かせるように投げると巧くと思うけど……どうせなら丹波さんに教えてもらえ。俺も縦カーブの握りは、あの年から教えてもらったから」

縦カーブの握りを見て、持参したボールを使って真似てみる。

握りはカーブと同じ、手首を寝かせるように、軌道をイメージして投げる。人差し指と中指で切るように、ということらしい。

中学時代の雲の上のエースから、まさかこんなにも早く直々に教えてもらえるとは思っていなかった。

「いい人ですね」

「優しいよ、丹波さん。安定してイニング喰ってくれるし。ちょっと大人気ないけどな」
そのちよつとの大人気無さが自分に向けられることを、東条は知らない。

まあ、エースの座に対して真摯なのだろう。誰にでも本気。素晴らしいことである。

『見本見せてやれよ』と言う御幸のもつともな言葉に従い、少し外に出て実演してやると、智巳は改めて東条を見た。

「で、東条はどうカーブを投げてる?」

「へ?」

「あ、こいつのカーブ、曲がらねえんだよ。曲がりにくいというか、曲がり方がピンポン玉みたいな感じで、オーソドックスな曲がりじゃない」

鈍いカーブ、と言われているアレである。

遅いカーブは緩やかに曲がるが、普通のカーブが緩やかに曲がらない。曲がらないカーブ。速いスローボールと似た雰囲気があるが、現実として存在するという箇所がことなつている。

曲がらないカーブは他の人に投げられないらしいから強いが、普通のカーブも投げてほしいということは、御幸も思っている。

フオークが完全に変態のそれであるから、あまり期待はしていないが。

と言うか、オーソドックスなのはスローカーブとチェンジアップ、カットボールにスライダー。

主戦球はだいたい変態だった。

「握りは同じです。強いて言うなら少し人差し指を外側にしてるくらいですかね」

「うーむ」

「投げてみ」

投げると、あいも変わらず鈍い。

改善の余地がないのだろうかと思わせる程の変化の無さである。

何球か実演で見せてもらったあと、イメージをしつかり頭に入れる。

そして、意を決した。

フォークを見たい。あの、あまり投げなかったとはいえ、自分たちの一つ上の黄金世代の四番をキリキリ舞いにさせてたことで強烈に網膜に焼き付いたあの球を。

「あの、フォークを見せていただいてもいいですか？」

「ああ、いいよ」

軽い。

マウンドとは別人じゃないかと言うほどな気さくさと、柔らかさがある。

「どこで見る？」

「できれば、マウンド側で」

ベンチからは見た。

速球のように伸びて、はたき落とされたかのようにいきなり落ち始める球。

打てる気がしない、と言うのが感想だった。打者の心を折れる球、と言うのはあるのだと思った。

振じ伏せる。この表現がしっくりくる威圧感とあいまって、一層その感想が深度を増したのだ。

「御幸、フォークな」

私服姿にマスク、プロテクターと言う奇妙な格好だが、この球を受ける以上はそうしなれば危険だというのが傍目から見てもわかる。

「よし、ハッ」

ミットを構え、片手を伸ばし、閉じる。

膝について、完全に捕球体勢に入っていた。

「握りは、こう」

スプリットとは違うことが、ひと目でわかる。スプリットはこんなに握り込まない。

一般的なフォークよりも、深く握り込んでいるのではないか。そう見て思うほどの握り方。

「で、こう投げる」

リリース直前まで行つて、球を放たずに止まる。

参考になれば、ということらしい。

誰にも真似できないとはいえ、サービス精神の旺盛な男である。

「で、これから実演だ」

ミットがはまった左腕と球を持った右手を上には伸ばし、片脚で立つ。

くいっ、と持ち上げた側の脚が動き、そのまま風を切るように右腕が唸った。

一瞬の間があり、ミットが鳴る。

疾く打者に迫り、遅く、深く落ちる。

必殺球の名に相応しい、魔球というべき球だった。

「今は、真ん中からそのまま。次は、外角からそのまま」

その通りに投げ、その通りに落ちる。

何回か繰り返されてわかったが、制球の難しいフォークボールを、智巳は完全に支配していた。

「智、今日調子いいな」

「かなりいい。試合無いけれども」

実演が終わり、離れていた御幸がボールを持ちながら近寄ってくる。

「終わり、ということらしい。」

「明日、ベスト16決定の試合があるけど見に来るか？」

ボールを智巳に投げ渡し、マスクを外し終えた御幸は、思いついたようにそういった。

「いつからですか？」

「適性テスト終わって、午後からだな。俺は出ないけど」

「斉藤先輩は、いつ出られるんですか？」

「3日後の市大三校戦。春の甲子園の東京王者だから、侮れないってことで、俺が先発する」

じゃあ、どうせなら3日後に行きたい。だが、それを言うとな角が立つ気もする。

「——まあ、適性テストの後の自主練とかもあるから、やっぱ来ない方がいいかもな。同学年の知り合い作るチャンスだし」

空気を讀んだ御幸がそう繋ぎ、空気を讀んだことを察した智巳も頷く。

「ま、適性テスト頑張れ。うちは今リリーフ陣に水属性投手のが居ないから、安定していたらそれだけで関東大会出場あると思うぞ」

「え……」

「炎属性しか居ないよ、マジで。一回3失点が好投だから、一回1失点とかだったらそれも救世主になる」

智巳、御幸の相次ぐ畜生発言に若干驚きながらも、東条は少し嬉しかった。

古豪なのに投手陣が薄いのはどうなのかと思うが、どうせなら一年から活躍したいと言いたいはある。

「頑張ります!」

「おう、がんばれ」

一瞬声色がマジになった御幸を少し省みて、東条は先輩二人と部屋へ戻った。

明日の適性テストが、高校野球の第一歩であることは間違いない。

全力を出し切ろうと、東条は決めていた。

御幸、寝坊する

適性テスト当日。

「あの……」

「うん？」

いつも通りの時間に起きて、ランニングから帰ってきた智巳に、今起きて用意を整えたところの東条が遠慮がちに質問した。

「御幸先輩を、起こさなくていいんですか？」

「いいよ、あれは。結局あの後寝てる俺を叩き起こして思いついた配球を検討してたからな。疲れてるんだろ」

明日適性テストだと言う東条を氣遣って、智巳も御幸も割りと早めに就寝した——と、思われたが、結局あの後色々検討していたらしい。

ぐつぐつと眠っている東条は、そのことに気づかなかつた。

「後輩の面倒を見るのは当然だけど、二年からは自己管理。監督もそう言っている」「じゃあ、一年生が遅れたら……」

「ランニングとか、そこらへんの罰が連帯で課されるだろうと思われる。御幸はまあ、遅

れてもこいつが走るだけだから全く問題はない」

寝ている御幸を他所に、二人はさっさと部屋を出た。

グラウンドに早く行って、損はない。顔は売れるし、勤勉さはアピールできるし、何よりも長く練習できる。

「東条ー」

後ろから、聞き覚えのある声がした。

金丸信二。同じリトル・シニア出身の親友。そして多分、御幸ー斉藤智バッテリーと
同室だということは何となく察していたであろう人間。

「……信二、気づいてたでしょ」

「ま、まあ、それはいいじゃんか。うまくやってるっぽいし」

そういう金丸は、見たところクリスとうまくやれているようには見えない。

と言うよりも、クリスの目に光が無い。何かを諦めたかのような目をしている。

「クリスさん、おはようございます」

「……おはよう」

快活に挨拶をした智巳に比べて、格段に声が小さい。

ボソボソとしていると言うのか、掠れているというのか。

シニアで対戦したことは一度しかないが、その時はこんな声では無かった。

それは、金丸・東条が共通して気づいたことだった。

「……御幸が肩を心配していたぞ。投げ込みを控えたらしいな」

「それはまあ、御幸が過保護過ぎると言ういつものことですよ。打撃に興味を持ち始めただけで、肩自体は大丈夫です」

「……いや、今日の午後から俺に付いてこい。軽い検査を行う。監督にも了承は得てある」

少し困ったような顔をしているクリスが何かを囁き、それに『それを言われてはまあ、何も言えませんので付いて行かせていただきます』と言っている。

何を言ったのか一年生の二人には声が小さ過ぎてわからなかったが、何らかの予定が入ったらしい。

「すまん、東条。少し先に行ってくる。やることができたのでな」

「あ、はい」

「新入生は特に別れて並ぶことはない。上級生と同じ場所、グラウンドに集合だ。並ぶ場所は違うから、間違えるな。あと、間違っても遅れるんじゃないぞ」

そう言って、少し駆け足になって去っていく。

クリスもいつの間にかやら何処かへ去り、金丸と東条は顔を見合わせてグラウンドに向かった。

少し身体を動かしておく。これはやるに越したことはない。

そして、グラウンドに着いた智巳は本日の先発投手である丹波に検査を受けに行くことを伝えていた。

「丹波さん、と言うことでリリースに俺はいませんのでよろしくお願いします」

「わかった。任せろ」

相変わらずの、強面。この顔でピンチに弱くてプレッシャーに弱いと言うのだから、世の中は不思議な物だ。

顔だけ見れば、すぐく頼りになりそうでピンチに強そうなのだ。

「オイオイ、またどっか悪いのか？」

「いや、心配性のバカが過剰に反応したんですよ。バット振ってただけなのに」

御幸と書いてバカと読む。

バカと書いて御幸と読む。

二種類ほどあるが、どちらも意味は大して変わらない。

ガサツそうに見えて案外周りを見ている伊佐敷の心配を、智巳は軽く流した。

『エラーした男が言うことではないが、無理はするなよ』

増子透はそう紙面に書いて、目の前に付き出した。

喋れないというわけではない。ただ、前回の智巳が先発した試合でタイムリーエラー

をやらかした為、自主的に黙っているのである。

守備は九人でやるものなのに、自分の打撃の不振にばかり目をやって気を散らしていた。

その事実を監督に指摘された増子はなんの反論もできず、罰として今二軍に居る。

単純なミスなら許すが、他のことに気を散らしてのミスならばスタメン降格も辞さない。

そんな片岡監督の気性が現れた人事だった。

「無理しなきゃ勝てないって思わなかったら、無理はしませんよ」

「おつ、いい切り返し。どうとでも取れる言い方だし、こっちに発破をかけてもいるわけだ」

ニコニコと、どこか腹の黒さを感じさせる笑みを浮かべながら小湊亮介がその裏を読む。

個人的に、智巳は御幸と青道高校の双壁だなど思っていた。何がとは言わないが。

「まあ、そうですね。息詰まる投手戦も好きですけど、楽にさせてください」

「援護は任せろ」

グツ、と拳を付き出して、キャプテンの結城哲也が笑う。

頼もしい笑みである。

「まあでも、今回の試合頼みますね。何と言うか、自分のいない所で敗けられると、モヤッとするんで」

「お前が居ない時の先発は任せろ」

「光一郎は七回3失点くらいに抑えてから言うべきじゃないの?」

ほのかに香る畜生のかほり。

御幸が先輩だからと言わないことを、小湊亮介は平気で言う。

まあ、それほど気心しれた仲なのだろう。自分は御幸にそんなこと言われたことないが。

「まあ、丹波さんはかなり頼りになりますよ。七回まではかなり安定して投げてくださいますし」

「お前はほんと、七回から踏ん張ればなーって言われてるもんなあ、おい」

「……走り込んでくる」

ああ、行ってしまわれた。

スタミナ不足、メンタルが弱い。そう言われてはや二年くらい経つわけで、体格はいだけに『もう一つ』と言われて続けていた。

だがまあ実際、丹波は毎回失点したりすることは少ない。打たれだすと止まらないだけで。

「と言うことでまあ、勝ってきてあげよう。次に進めば、市大三校か稲実と当たるわけだしね」

小湊亮介の暗い笑みに見られるように、どちらにも、最後に対戦した時敗戦で終わっている。

今度は勝つ、と言う心構えが全員にあった。

特に、小湊亮介は稲実に因縁がある。あのサヨナラの場面で送球を逸らさなければ、延長に行けたかもしれない。その悔いがある。

記録に残らなかったが、あれはエラーだった。自分に厳しいこの男は、常にそう思っ
て守備に磨きをかけてきた。

「誰であろうが、必ず打ち崩してやる。次の次の試合を安心して待っている」

「雪辱果たすぜ。ガンガン打ってやるからよ」

『同じく』

「エラーはしないから、安心して打たれていいよ」

増子の肩が、ピクリと動く。

そういう意図ではないとはいえ、そういう意図に聴こえなくもない。

その後ストレッチしながらの他愛もない雑談が続き、暫く経った辺りでキャプテンが時計を見て声をかけた。

「そろそろだ。行こう」

おう、と皆が応える。

途中で走り込みに行っていた丹波と新入生のチエックに行っていた倉持・白洲・坂井も合流し、青道高校のベストメンバーが全員揃った。

一番ショート、二年生、倉持洋一。

二番セカンド、三年生、小湊亮介。

三番センター、三年生、伊佐敷純。

四番ファースト、三年生、結城哲也。

六番サード、現在二軍の三年生、増子透。

七番ピッチャー、二年生、斉藤智巳。

八番ライト、二年生、白洲健二郎。

九番レフト、三年生、坂井一郎。

「あれ、御幸は寝坊？」

「たぶんそろそろ起きてるんじゃないかな、と。まあ、自己責任なんでいいですけど」

「走らされるだろうねー」

いつもニコニコ、地味に畜生、小湊亮介。どこか嬉しそうである。

かく言う智巳も、少し楽しみではある。どうやってあいつは誤魔化すのかな、と言う

方向で。

そして、どこかウキウキしてるのがもう一人。

「倉持、何でそんなに楽しそうなんだ？」

「同室の一年を夜ふかしさせてみたのよ」

そう言つて、ニヤニヤしている。

こいつも中々の畜生である。畜生双璧の小湊亮介と二遊間を組んでいるだけあつて、こいつも畜生。

畜生は伝染するらしい。

「じゃあ、遅刻か」

「ヒヤハハハ、そういうこと。俺もやられたし、洗礼つてやつよ」

「……まあ、人それぞれだけどな」

御幸をほっぽり出している以上は、大きなことは言えない。

最前列にベストメンバー全員で並びながらブツブツと話していると、いやでも後ろから並びはじめた後輩たちの声が聴こえてくる。

『春大会でもう六盗墨決めた倉持さんだ』とか、『小湊先輩、秋季大会から今まで深く追つてるのに失策ゼロらしいぜ』とか。

「やっぱり常日頃から見ている人が多いみたいですね」

「そりやあそうだろ。俺も青道高校の試合って聴けば、毎回見に行つてたぜ」

流石副キャプテン、と失礼ながら評価し直す。言動と見た目に見合わず、堅実なバツティングが持ち味の、伊佐敷純。

どうやら志望動機も堅実に決めたものであつたらしい。

「そう言えば、お前は何でここに来たんだ？」

「学費と遠征費と部費と寮費が無料の条件を出された学校の中で、家から一番近かつたからです。うち、御幸と同じであんまり余裕ないですよ」

御幸の家はスチール工場で、父子家庭。智巳の家はなんの変哲も無い母子家庭。因みにご近所さんである。

「……あんま訊かれたくなかつたか？」

「いえ、別にいいですよ」

本当に見た目によらずいい人だな、と思いつつ、そう言えば御幸はどこに居るんだろうか、と思案を巡らす。

そろそろ、起きていてもおかしくはない。

あの男、意外と家事スキルが高い。早起きできないが、それでも寝続けることはなからうと思われる。

「あ、監督来たぜ」

「御幸終わったな」

目敏い倉持の報告に耳を傾け、それだけをポツリと口に出して黙り込んだ。

「沢村もな」

「ん？ 沢村？」

「おう、沢村栄——と、後でな」

なんか聴いたことがある。記憶に残る名前と言えばそうだが、近々に聴いた覚えがあるのだ。

(沢村、ね)

伝説の投手、沢村栄治。

巨人の先発、澤村拓一。

記憶にある沢村はこれだけで、他にはない。

誰だったかなーと記憶を掘り返せど掘り返せど、浮き上がる物は無し。

「おはようございませすー」

キャプテン結城哲也の後に続き、部員たちが口を揃えて唱和する。

まだ、御幸はやってこない。

沢村、生贄になる

「これで入部希望者は全員か？」

三十代とは思えないほどに威厳がある青道高校監督・片岡鉄心が、新入生の群れを見渡して問う。

一拍後に、『はい！』の大合唱。傍から見ている方としては、少し懐かしい気分になった。

「まずは全員、自己紹介をしてもらおうか」

その一言からはじまった自己紹介。

智巳としては、それを聴き耳を立てている。

同じ選手が好きなのは居ないのかな、と言うファンあるあるな心理である。

「お前、誰が好きなんだっけ」

「稼頭央さんに比べたら地味かも知れないけど、もう忘れるなよ」

「おう。で、誰？」

「川尻さん」

川尻哲郎。阪神暗黒期のエースで、ジャイロボーラーでもあるサイドスローの名投

手。所謂軟投派で、典型的な本格派である智巳とはまるで違う。

しかも、智巳は完全にオーバースロー。川尻哲郎はサイドスロー。

「サイドスローにしようとか考えなかったのか？」

「バカがお前はオーバースローが似合う似合うとしつこかったから、こうなった」

「御幸がなあ」

倉持洋一は、松井稼頭央が好きである。憧れている、と言っている。

だから野球をはじめたし、だからスイッチヒッターになったし、だからショートを守っている。

「まあ、そのガタイでサイドスローってのはな」

「その頃は別段身長は高くはなかった」

「ほーん」

でも何だかんだ言って、御幸の投手を見る目は確かである。オーバースローにしようと言ったのなら、そうしたいだけの理由があったか、勘が囁いたのだろう。

最近、肩のケアとかマッサージとか、アイシングとかを学び始めているらしいし、そこらへんは余念がない。

「あ、バカだ」

「あ、沢村も居やがる。やっと起きたのか、あのねぼすけ」

横目で見てみると、メタクソに言われた御幸、現る。

隣には、沢村。ねぼすけと言っているということは、恐らく倉持と増子が出た時にまだグースカで寝ていたのであろう。

「こうして見るとあの二人、知り合いなんじゃないか？」

妙に打ち解けてるし、何やら話し込んでいる。

そこからと予想した倉持だったが、隣の智巳は証拠を聴いている。

「御幸と組んで東さんを三振にしたらしいぞ。俺は見えないけど」

「あ!？」

左隣から、凄みのある声。智巳の漏らした言葉に、伊佐敷純が反応した。

「東さんが三振させられたってのかわか？」

「ええ、御幸曰く」

伊佐敷は、東清国を慕っている。同じシニアだったとか、そういうことはないが、純粋にスラッガーとして尊敬しているのだ。

その尊敬の対象が、一年坊主に三振させられたというのは聞き捨てならないことだった。

「純さん、声デカイツすよ」

「……ヤベ」

いい加減、監督が黙ってない。

言外にそのことを匂わせて、倉持は伊座敷の音量を下げることに成功した。

「どういふことだよ」

「俺もよく知りません。丹波さんのところに行ってたんで。一緒に居たでしょう?」

「あー、あん時か」

あの時、スタメンは殆ど丹波の見舞いに行っていた。御幸は丹波に敬遠されているで行かなかったが、受ける相手も居なくて暇してたらしい。

結果、こうなったらしい。

「ノリは居たっばいですけど、そっちに訊いたらどうすか?」

「だな」

倉持の助言に従い、伊佐敷はひとまず追求の矛を収めた。

で、御幸と沢村である。

「……あのバカ、沢村に気づかれなくて合流する方法を教えるっばいな」

「ああー、前やってたもんな、あいつ」

位置としては、御幸と沢村が潜伏している位置は素晴らしい。

監督は新入生の正面に立っていて、当然ながら新入生の方を向いている。

三年・二年は、つまり自分たちは新入生たちの横姿を見ていて、御幸たちは新入生を

挟んで逆側に居る。

つまり、監督が三年・二年の方向を向いた時こそが合流チャンスということになる。「でもまあ、監督はよそ見はしないわけで、諦めんのかな。足掻きを見るのもそれはそれで楽しいからいいけどよ」

ヒヤハハハ、と笑う倉持。態度が完全に悪役のそれである。

だが、ここで智巳は敢えて手伝うことを考えついた。

たぶん、沢村は捨て駒であろうと思われる。捨て駒を踏み台に、こちらに合流して行くことだろう。

倉持は沢村と御幸が一緒に目的を達成しようと考えていると見ているが、それは甘いと言わざるを得ない。

(まあ、倉持も後輩を起こさずにおいてくるあたりハイランカーではあるが)

そんなことを思い、斉藤智巳は決意した。

「……よし、手伝ってやるか」

「え!?!」

「勘違いするなよ。俺は詐欺師と化した腹黒打点乞食のことは正直どうでもいい。が、沢村は少し可哀想だろう。何か変な奴に騙されかけてるし」

かと言ってどうするのか。

少し考えて、智巳はある案を思いついた。

前列の挨拶が終わり、沢村がスタートした、その時。

「監督、新入生の挨拶の途中で申し訳ないのですが、よろしいですか？」

「……よかろう。なんだ」

「はい。今日実は御幸に言われてクリスマスさんと病院に行くのですが——」

視線が、逸れる。

これによつて、監督の視線は三年・二年の整列地点に固定された。

つまり、御幸が紛れ込もうとすれば一発で気づかれ、紛れ込むべきところから視線が外れた形になる沢村は紛れ込めるわけである。

さあ、どうする御幸。沢村が合流してしまえば、如何にお前といえども合流することはできない。

そう思つて話している途中にバレないようにちらりと視線をやる。

御幸は、笑つていた。なにか考えがあるかのような、不敵な笑み。

してやつてり。そんな自信を打ち砕く一手が、御幸の口から放たれた。

「あーっ！こいつ、遅刻したのに列に紛れ込もうとしてるぞー！」

御幸は、監督がよそ見した隙にか、博打のような甘いことは考えていない。前列の挨拶がすべて終わり、二列目の奥の奴が挨拶をはじめたとき、確実に沢村を生贄にこち

らに合流する腹だった。

智巳は、甘さを痛感した。あいつの腹黒さを舐めたらヤバイと。あいつの天性のキヤツチャー、天性の畜生。人を騙すために生まれてきたような男。三味線引きのプ口。相手取るには少し役者の格が足りなかったらしい。

まあ、御幸の予想通り、監督の視線は紛れ込もうとした沢村に向かい、他の部員の視線も沢村に向かう。

そして。

「おつ、あいつを見てると去年の俺を思い出すなあ」

「何食わぬ顔して並んでんだ、お前は」

「まあまあまあ、そんなことはおっしやらずに」

2番と言う選手、現れる。一応補足するが、2番は背番号であつて打順のことではない。

2番と言う数字は、アマチュアの正捕手の証。

結局、この企みはバレた。

智巳の場合はアシストしようとしたのか、今日病院に向かう旨を改めて自分の口から伝えようとしたのが曖昧であつたため許されたが、倉持・増子・御幸・沢村が朝練中ずっと走り続けることになった。

「……バカだな、あいつ」

ポツリと呟いた智巳は、右手に外野手用のグラブを嵌めて監督のノックを受けている。

結構言われていることだが、今年のスタメンには穴がほぼほぼない。

強いて言うならばレフトのスタメンが固定できていないので、打てる投手である智巳を登板する時以外は外野に置いておきたい。

七番におかれていた時点で察せられるが、智巳の長打力はかなり高い。打撃では智巳、堅実性では白洲、守備では坂井。

センターは強肩強打でそこそこの脚が速い伊佐敷で固定、ライトは安定感抜群でなんでも出来る白洲で固定。

守備がマシになれば、坂井と併用と言うのが監督の方針らしかった。

「お前は肩は言うまでもないし、脚も早いんだから、後は慣れだ。ひたすら練習あるのみ！」

そう言われて、今ノックを受けている。

目で追って、取る。打球の伸びを判断して追いかけるなければならないので、正直かなり難しい。

今までやったことがあるのは、キャッチャーとファーストとピッチャー。打球を追っ

た経験が、そもそもあまりない。

シニアでは投げない時はファーストをやっていたわけだが、ファーストには不動の四番が居る。

その後もノックとサードのカバーなどであちこち動き回り、何回か捕逸しながら二時間ほど守備練習をして、朝練は終わった。

「いやあ、腹減ったな」

「……お前」

こうしてケロツと話しかけてくるあたり、全く反省していない。そして、ノリが軽い。だが、キツチリ先ほど監督に謝っていた。

なんとも世渡り上手な男である。

ドンブリ三杯と、ドンブリ五杯。

朝だと言うのにガッツリとしたカロリーを補給できるおかずと白米を共に食い終わり、御幸と智巳は少し休む。

入ったばかりの頃は二杯しか食えなかつたが、御幸は三杯に、智巳は五杯に増えた。身体が作られてきたということもあるし、慣れてきたということもある。

一方の新入生は、かなり苦戦していた。思いつきり動いた後に、すぐ飯。これは意外とキツイ。具体的に言うと吐きそうになる。

「あー、美味かった」

心の中で同意を返し、智巳はゆっくりと茶を啜った。

少しの苦味が心地良い。

午後からの試合に先発するならばこんな悠長にはしてられないが、どこかの誰かのせいで今日の午後はベンチにすら入れない。なので、心ゆくままに智巳はこの時間を楽しむ。

もちろん、御幸もそうなるだろうということは予想できていた。

少しして、太田部長が御幸らスタメン呼びに来た。

青道高校にあるグラウンドのうちの一つであるAグラウンドでスタメンが最後のチエツクに望み、Bグラウンドで新入生の適性テストが行われる。御幸が行くのはAグラウンド、東条・沢村が行くのはBグラウンドである。

「じゃまあ、勝ってくるわ」

「そこらへんは心配していない」

ただ、ベンチに入れないのが悔しい。消去法エースとはいえ、エースだというのに。だがそれは、個人の感情だから表には出さない。

茶を飲み終わり、智巳はBグラウンドに顔を出した。

既に、結構時間が経っている。最初は投手のテストだから、遠投とかからはじめてい

るのだろうか。

「……来たな」

「クリスさんもいらしてたんですか」

「御幸にすっかりと連れて行くようにと頼まれていてな。行動の先回りも兼ねて、今回の戦力チェックに来た」

今までは捕手として投手陣を鍛えていたと言つても範疇に収まるが、新入生のチェックとなると少し枠外にあるように思われる。

クリスは右肩の故障で、夏頃まで復帰できない。更に言えば、ブランクがあることも考えて片岡監督からマネージャーを兼ねたような役割を頼まれていたらしいが、どうやら本当らしい。

「試合、はじまりましたね」

監督はテストの最初にだけ眼を通し、後は太田部長と高島スカウトに任せている。

とうにスタメンとベンチ入りメンバーと共に球場に乗り込み、万全整えて敵チームと相対していることだろう。

「……やはり、登板はともかくとしてもベンチにすら入れないと不安か」

「まあ、怪我以外で入れなかったことがないので。クリスさんも、そのクチですよね？」

「……そうだな」

シニア時代の激闘を思い浮かべて少し笑い、クリスは頷いた。

基本的に、青道高校には即戦力が入ってこない。監督が育て、一流になっていく。

結城哲也がいい例だろう。彼は中学時代、シニアにすら所属していなかった。

勝負強さの片鱗は既に見せていたようだが、片岡監督のもとで育たなければ大した選手にはなっていないはずだ。

「これは、俺がチームを信じられてないってことなんですかね」

「……信じる」と、心配することは両立する。お前はチームを信頼しているし、チームはお前を信頼しているさ」

いくぞ、と声をかけ、クリスはリハビリの為に病院に向かった。それに、智巳も追従する。

試合は最近調子を上げてきた丹波が7回まで2失点、8回に3失点するも好投と呼べるピッチングを見せ、川上憲史が五人でピシヤリ。

中継ぎを使わなかっただけあり、試合は10対5で勝利した。

東条、学ぶ

辺りが暗くなり始めた暮れ時に、青道サインは帰ってきた。

泥と土埃と汗を含んだユニフォームのまま玄関に上がり、ひとまずと荷物を置いた御幸は、既に風呂に入っていた二人に声を掛けた。

「勝ったぞ。これでベスト16だ」

「よかったね。おめでとう」

「おめでとうございませす！」

智巳の肩は何ともなかった。

医師から何で来たの？違和感でもあったの？と言われるほど、何ともなかった。

『筋肉の鎧で脆さをカバーし打者と己を制圧するピッチング』なる御幸発の謎のプランに（一応トレーナーや医師と相談し、意見をもらって作ったらしい）従っただけあり、いい感じに進んでいるらしい。

「おいおい、素っ気ないな。俺はこれでも3打点を上げたんだぜ？」

「やっぱり、得点圏には強いんですね」

「得点圏でしか打てないけどな」

空気の読める東条のフォローを牽制で殺し、智巳はへの字の口のまま御幸を見た。

「何も無かったぞ、肩も肘も」

「まあ、何かあつてからでは遅いからな」

全く反省していないどころか、よかつたよかつたと笑っている態度を除けばぐうの音も出ない正論を喰らい、智巳は黙った。

エースとして全試合、チームとともに居られないのはどうかと思う一方で、御幸の心配を有り難くも思っている。

それに、ただ心配しているだけなら一言で押し切れるが、実際にこれをどうすれば怪我の防止になるかをちゃんと調べ、わざわざ専門家に聴きに行ったりと、その努力を知っているだけにそう軽々とは早とちりを責められない。

「その通りだが、少しはこちらの感想も加味しろと言っている」

「でもお前、チームに必要だと思つたら無理してでも投げるだろ?」

「ここぞという時に勝つてこそその、エースだと俺は思っている。必要だと言われて、個人の事情で断りはしない」

「まあ、そこが全く信用できないんだよ。わかるだろ?」

まあ、智巳としてもわからなくもない。

御幸の要望のコンセプトは持続で、自分の目標は持続よりも思いに応えられるかに重

きをおいている。

そのの、価値観の差だった。

「無理をするなどは、言えないよ。俺はお前じゃねえからな。だけど、これからもあるんだから程々にしろってことだ」

「大学か」

一瞬の、沈黙。

その後に結構重要な話だな、と思つて黙つていた東条が思わずといった様子で驚きを言葉にした。

「智さん、プロに行かれないんですか!?!」

「故障しやすい投手を、人は地雷と呼ぶ。つまりはまあ俺のことだけれども、地雷を指名しようと思うスカウトは居ないだろ。そういうことだ。行かないんじゃないやなくて、行けない」

「……ああ、うん、そうね」

適当に御幸が相槌を打ち、東条の耳元で囁いた。

（あいつ、自分に足りない物を高く見る質でさ。まあ、無事名馬と言うけど、そんなこと言ったら殆どの選手が、なあ）

（ヤクルトスワローズとか、最近すごいことになってますもんね。）

因みにどこが来てる、とかあるんですか?)

(シニア国際試合でやけに調子が良くて完封マシんと化してたから、そこらへんも一応は。国内でも結構。あ、俺も結構見られてるっぽい……かな。でもまあ、まだ話しかけられたりはしてない)

基本的にペアで行動しているから、正直どちらがどちらか、というのはわからない。

だが、今でも明らかにそれっぽい観客が居るのは確かだった。

「まあ、そんなことはどうでもいい。東条は、練習はどうだった?」

「はい、なんとか付いていけてます」

御幸の問いに、東条が答える。

最初、片岡監督は徹底的に基礎を仕込む。如何にシニア時代の猛者とはいえ、高校野球では通用しないことがままある為であり、体力をつけて怪我を防ぐ為でもある。

そう考えると、一年生でスタメンは希少だと言えた。単純に、二年か一年の差を才能と努力で超えなければならぬのだから。

「最初はキツイが、徐々に慣れる——と、丹波さんが言っていた。頑張れ」

丹波さん、優しい。智巳に対する姿勢を見ればわかるが、彼は強面だが、面倒見のいい先輩を目指していたのである。

大人気ないところは変わらなかつたようだが。

「先輩方はどうでした？」

「俺は練習終わった後ロードワークしていたぞ。はい、御幸」

「俺も割りと余裕あったな。練習終わった後配球の組み立てとトスバッティングをしてた」

はい、化け物。

初日だけに、軽めの練習。しかしそれが軽めだということ事前に聴かされている東条としては、戦慄すら覚える量だった。

「っと、じゃあ風呂に入ってくるわ」

「混む前にササツと入って戻ってこいよ」

「はいよ」

トスされた風呂用具一式を空中で掴み、玄関に立ったまま話していた御幸はスパイクからサンダルに履き替えて部屋を出ていった。

暫くして、智巳が声を微かに小さくして東条に話しかける。

「どうやら、御幸には聴かせたくなかったらしい。」

「正直なところ、投手は合宿以外は比較的野手よりマシだぞ」

「そうなんですか」

「まあ、自分でやらなきゃ一つ頭抜けられないし、それをやるにしても捕手を確保しな

きやうまいこといかないって言う欠点はあるけども、楽だ」

ネットスローもいいし、シャドーピッチングもいい。しかし、やはり他人に受けてもらうほど為になることはない。

「自分の球を取れるように、自分の意思が伝わるように、自分の強みを活かせるように。積極的にコミュニケーションをとっていけ」

捕手も人である以上、馴染みのある人間からの頼みを優先する。

どちらが受けていて楽しいか、どちらが受けていて勝てそうか。

配球を組み立てるのも、一瞬では済まない。投手の持つ球種を把握し、時間をかければ組めるには組めるが、経験値を積みれば積むほど精錬されていくことは間違いない。

「俺の強さは、4割は御幸のお陰だ」

「あと6割は何なんですか？」

「3割は野手陣、3割は実力。」

ちまたでリードは結果論とか、打たれたら捕手が悪いとか言われているのは、知っているだろうか」

ここで少し辺りを見回し、少し玄関から外に出て御幸の不在を確認し、智巳は改めて胡座をかいて話し出した。

「俺は、そう思ったことはない。納得して投げている。あいつの選んだ最善を信じてい

るから、結果論とかリードが悪いとかは思ったことがない。他人の所為にするのは、格好悪いしな」

「正直に言わせていただくと、そこまで信じられたことはないです」

指示された球種はどうなのか。こうしたら打たれなかったのではないか。

渾身の球が打たれた時に、そう思わないと言ったら嘘になる。

「打たれたのはあくまで、投手が投げた球。そこで他人の所為にするかしないかで、次の道が見えてくる」

「……一球一球、納得して投げろと」

「そうだ。一球に泣くスポーツだから、一球は大事にしなければならぬ。イマイチ付き合いの浅い捕手でも、こういう場合はどうするか、それを予め考えて、事前によく話し合う。それだけで大分変わると思うぞ。」

そしていつか、その最善を超えてやれ。超えた時、エースへの道の更に一歩進んだことになる」

実感と、少しの回顧とともに、智巳は言っていた。

捕手から投手に転向しただけに、投手であると言う意識が薄かっただけに、エースへの道に至り、進むまでには色々苦難があったのだろう。

そのエースの言葉を、東条は一言一句聞き漏らすことなく刻み込んでいた。

「御幸は、いい捕手だ。所謂天才って奴だろう。だから、俺も結構付いていくのに必死なんだ。あいつの要求を踏まえて、その上を行くってのはな」

最後に一言だけ、エースとしてではなく私人として漏らした言葉を、東条はしっかりと聴いていた。

そして、恐らくは御幸一也もそう思っているだろうと予想した。

天才のピッチングに付いていくのが必死。追い越され、取り残されるのではないかと悩み、必死で自分を磨き続けてきたのだろう。

だが、楽しかった筈だ。そこに辛さは無かったから、あれだけ健康に気を使っている。いつまでも、ベストなバッテリーで居たいから。

「さて、もうすぐ夕食だ。あの風呂入ってるねぼすけの分も運んでおいてやるとしようか」

「手伝います」

この後、東条は御幸を少し呼び止めて質問した。

『智さんとのバッテリーは、どうでしたか』と。

御幸は答えた。

『あいつには言わないけど、結構悩むこともある。出した要求の上を行ってくるから、最善ではなかったんじゃないか、もつと巧く引き出せたんじゃないかと、思うことも少な

くない』と。

しかし、御幸はそれに続けてこう言った。

『でも、楽しい。あの天才を最も巧くリードできるのは俺だ、と言う自負がある。だから秀才なりに頑張つてんのさ』と。

あなたも天才だと、東条は思う。

そして、この二人は止まらない。才能の果てを定めていないが故に、どちらかが常に進み続けているが故に。

才能を競い合つて、最善を競い合つて、笑い合つて、助け合つて、到達する場所はどこなのだろう。

それは恐らく、自分では覗けない場所にあることだろう。

自分の最善を尽くす。

自分の最善を見せる。

必要とされた場面で、まずはそれからはじめよう。

最初は何故この二人と、と思つたが、環境は人を育てるらしい。

少なくとも、東条秀明はこのときに何かを学んだ。そしてそれが活かされるときは、そう遠くない。

完勝

青道高校はかなりの当たりブロックに居る。

群雄割拠する東西東京地区で、最も恐ろしい稲実は調子を崩した成宮鳴を登板させずに市大三校に敗れた。

『さあ、この試合が終わればベスト8が揃うことになります』

後は、市大三校さえ倒せばほほ次の相手は弱いから、ベスト4確定。即ち、関東大会に行く権利を得る。

『春季東京大会四回戦、西東京の両雄激突の模様をお伝え致します。』

先攻め、市大三校の先発はエースの真中くん』

真中要。市大三校の三年生エース。丹波光一郎の親友にして、ライバル。高速スライダの使い手。コントロールとスタミナをバランス良く揃えた好投手。

真中は春の甲子園を殆ど一人で投げ抜き、ベスト8まで行ってその名を知らしめた。

『マウンドに立ちます、後攻め・青道高校の先発はエースの斉藤くん』

春先から夏にかけての絶好調男、斉藤智巳。

入ったばかりの後輩と、控えの同学年、先輩たちが注ぐスタンドからの視線を受けて、

智巳は深呼吸してロジンバックをマウンドに置いた。

「プレー！」

審判がそう宣告し、試合がはじまった。

市大三校対青道高校。共に絶対的エースと怖い打線を抱えた強豪校。

グラウンドには魔物が住んでいると言われる、高校野球。

一球に泣き、一球に笑う。

誰もが見るまでは予測不可能な試合が、幕を開けた。

マウンド上は斉藤智巳。

彼が投じた最初の球は、ストレート。

145キロ。

ネット裏でスカウトの持つスピードガンは、一球目の球速を測っていた。

とても、そうは見えない。手元でのノビが著しく、150は超えているように見える。

(よしよし、相変わらず春先は調子いいな)

——甲子園で投げる為に生まれてきたのか、或いはペナントレースで無双するため
に生まれてきたのか。

彼の絶頂期は、4月初頭から8月の終わりまで。今は、4月初頭。例年からすると問題はない。

(次、もう一球)

アウトロー。

指示した通りに、球が来た。

『空振り。ツーストライクです』

『今日の斉藤くんはいいですね。基本的に立ち上がりには不安はない投手ですが、これは真中くんの出来によって投手戦となるでしょう』

実況と解説の声は、マウンドに居る選手には聞こえない。

しかし、誰もがそう思っていた。

——真中要の出来に、この試合は賭かっている。

三球目、インハイのストリートで、見逃し三振。

オールストリートで三球勝負。力で捻じ伏せたと言っている。

(よしよしよし、今回のストリートは見逃し三振取れるキレか。これは中途半端に曲がらせるより、ストリート主体の配球に変えていこう)

二番は、高原。一発は無い。一番と違って怖くないバッター。

慎重さはいらない。この球なら、威力で押し切れる。

二球目、ストリートでファーストゴロ。

「ツーアウト！」

立ち上がりは問題ないぞ。

暗にそう言ったキャプテンに、マウンド上の智巳は、無言で手を上げその言葉に応えた。

(次はどうすつかな)

三番星野。二年生ながら一発がある。

縦カーブから、ストレートで外野フライかセカンドフライ。それがベスト
長打警戒に守備シフトを変えさせ、御幸はアウトローにミットを構えた。

(外からカーブを落とせ)

(わかった)

一際目立つ細身の巨軀がゆっくりと動き、マウンドに長い脚を振り下ろす。

縦カーブ。僅かに曲がって、ストンと落ちる。

三番星野のバットが出かかり、止まった。

「ボール」

球審がそう言った。どうやら、ここはボールらしい。

(今日は、外が狭い感じか)

制球は素晴らしい。全く問題ない。前に受けていた投手が結構ガバガバだからそう感じるのかもしれないが。

その後、またストレートで空振りを取り、外から入るスライダーでカウントを増やし、外れ気味のアウトローで釣ってセカンドフライ。

スリーアウト、チェンジ。

「ナイスピッチング」

「打撃の方、頼みます。今回、かなり調子がいいので」

「任せろ」

ファーストの結城と言葉を交わし、智巳はベンチに戻った。

ベンチでは、これからはじまる攻撃に当たり、監督から檄が飛ばされる。

「敵エースの真中は、春の甲子園をほとんど一人で投げぬいた。かなりの疲れがたまっているだろう。」

そこを逃さず、打ち崩せ。徹底的に立ち上がりを攻めろ」

片岡鉄心の静かな檄を受け、攻撃に移る打者たちに闘志が漲る。

——一番シヨート、倉持くん

呼び出されて、倉持が出た。

彼が出塁するか否かで、青道の攻撃力は結構変わってくる。

一方、防御面を支えるバッテリーはと言うと。

「御幸。実は新しい変化球を覚えた。高速スライダーだ」

「あー、このタイミングで言うってことは、アレか」
相当自信がある。

そして、敵エース真中の決め球に比べても遜色ない球なのだろう。
心を抉るレベルの変化球……なのかもしれない。

「今までは暴れ馬だったから言わなかったが、今回はかなり調子が良い。ここぞという時に要求してくれ」

そうこうしている内に、ベンチに倉持が帰還した。

「お、ホームランか」

「スコアの反映遅いな。故障か？」

「……お前ら、案外黒いよな」

現在、バッターボックスには二番の小湊亮介。

既に、フルカウント。カットに次ぐカットで、もう九球目になる。

因みに、倉持はファーストゴロ。セーフティーバント失敗、というやつだった。

「亮さん四球か。てことは伊佐敷さんはヒットかな」

「……何で？」

「いや、勘」

結果的に智巳の言う通り、伊佐敷は思い切りの良いバツティングとフルスイングから

のポテンヒットで出塁。

ワンアウト、一二塁。

(どうするか)

結城哲也は、しつかりと内角ボール球を見送りながら思案する。

ホームラン、ツーベース、ヒット。どれを狙うべきか。

ネクストバッターズサークルに居る御幸を見て、結城はバットを短く持った。

『センター返し!』

美し当たりでピッチャーの頭上を越えてセンターの前へ。

二塁ランナーは意図を察して三塁でストップ。

これで、ワンアウト満塁で御幸に回る。

「タイムお願いします」

このピンチに、市大三校の捕手細山が動く。

タイムを取って、慌ててマウンド上の真中に駆け寄る。

「真中、二・三塁は無視して、一塁ランナーと打者でゲッツーを取るつもりで投げてみる。相手は御幸だから最悪敬遠でも——」

「いや、ここはゲッツーで切り抜ける」

そうしなければ、負ける。相手はそう何点も取れる相手ではないのだ。

だが、捕手の細山には懸念があつた。御幸の調子はともかく、真中が絶不調だということである。

(今日は真中の調子が悪過ぎる。最悪ギリギリの球で歩かせよう)

押し出しでも、4点取られるよりはマシ。その考えは、シニア時代にもよくあつた考えだつた。

「1点か、4点か、選んできましたか？」

「……………」

「まあ、俺もあんまり気は長くないんで、早く決めてくださいいね」

打者が捕手にささやき戦術をかけると言う、ちよつと無いようなシチュエーションにもめげず、細山はアウトローにミットを構えた。

「クサイ所を攻めて、最悪歩かせるつて感じですか？」

アウトローのストレートを捕球したミットの位置を見て、御幸は言つた。アウトローギリギリ。判定はボール。

次の球は、インローのフォーク。

「なるほど、自信があるわけですか」

満塁でフォークは肝が太い。

そう話しかける御幸を軽く睨み、細山は次のボールを要求した。

ボールゾーンに逃げるシュート。これを御幸は見逃した。これで、ワンストライクツーボール。

次のインハイのストレートを、空振り。

低めギリギリに決まる外から入るスライダーを見逃し、フルカウント。

(よし、これでアウトローのストレートで、併殺だ)

コースの変化についていけまい。

そう予想した球が、眼前から消える。

『外角打ったあああ！』

マスクを外し、思わず立った。

どンドン流し方向に伸びていき、切れる。

「うーん……」

軽く素振りをして、御幸はバッターボックスに立ち直した。

(こいつ、やつぱり満塁時の集中力は尋常じゃない)

最悪の場合を想定する。それは、ホームランで4点入ること。

(外れてもいい。低めギリギリに決まる、内角を挟る、渾身の高速スライダー)

最高のコースに、最高の球を。

その選択は、悪くなかった。

だが、相手は恐怖の満塁男と呼ばれた男・御幸一也。最高の球が、最高のコースで来る。

ここにきて調子を取り戻してきた真中の、最高のピッチング。受け止めるはずだった球が、消えた。

左打席に立った御幸が、右手のみでバットを持っている。

それは、振り切ったということ。

打球は、高い弾道を維持したまま流し方向に伸びていく。

『伸びる伸びる、大きぞツ！』

レフトが追い、見上げる。

白球は無情にも、彼が届かぬ場所へポトリと落ちた。

『真中くん渾身の高速スライダーは、御幸くんが広角に捉えてスタンドへ——』

0対4。

スコアが灯り、がっくりと真中が肩を落とした。

『推定130メートルはあるでしょうか。すごいところまで飛びました……』

「はい、援護」

「これは天才」

グラウンドスラムを打った五番打者をエースが出迎え、打席に入る。

サードで六番の増子に代わって樋笠が入っている為、打順が繰り上がっている。

一番から五番は変化なし、六番斉藤智、七番白洲、八番樋笠、九番坂井の打順。結果、迎えるは六番・斉藤智巳。

まだ、ワンアウトである。

「どうしたらあそこまで流し方向に飛ばせるんや?」

「……得点圏にランナーが居れば、自然とできるんじゃない?」

増子の代わりにベンチに入っている典型的なプルヒッター・前園に問われ、御幸が答えた。

まるで参考にならないようだったが。

「お前、そんな適当な打撃理論があ——お?」

真中の球を、また捉えた音がした。

フライ気味の打球がライト方向へ伸び、ポトン、と入る。

真中、屈辱の二連発。しかもいずれも打ちにくい広角に打たれているだけに、その屈辱もひとしおだった。

余程打った瞬間の具合が良かったのか、打った瞬間に弾道を見て歩かずに、智巳は立ち尽くした。

リストの柔らかさが活き、振り切ったバットが背中から後ろに落ちる。

『二者連続、文句なあし！これで5点目が入ったあ！』

少し審判に注意されながら、ベースランを早々に終わらせた智巳がホームを踏んだ。

「はい、天才」

「ありがとう」

立ち位置は変わったが、出迎え、帰ってきたメンバーは同じ。

どちらも活躍しただけあって、かなりウキウキである。

「お前ら仲ええなあ」

「まあな」

「長い付き合いだからな」

その後白洲ヒット、樋笠三振、坂井セカンドゴロでチェンジ。

エースの真中がいきなりにして5点を失う大乱調で、一回は終わった。

「楽勝ムードか。素晴らしいことだ」

「こうなると、五回コールド狙える。きっちり締めていこうぜ」

わざと聴こえるように言い、わざと聴こえるように返す。

敵の反撃ムードを誘って、叩き潰す。そうすれば、楽に点が入ることを二人は経験から知っていた。

「任せろ」

市大三校の攻撃は、四番から。

だが兜の緒を締め直した斉藤智巳からヒットを打てず、ショートゴロ・センターフライ・ピッチャーフライで三者凡退。

「せつかく変化球覚えてくれたのに、使い時なさそうだな」

「まあ、それでもいい。勝つのが一番。他はいらん」

ここまで、斉藤智巳は十九球。

一方、真中要は三十球を超えている。

一瞬で攻めが終わり、守りに入った市大三校は、前の回二者連続三振のピッチングを見せた真中を続投。

しかし、これが裏目に出る。

倉持がしっかりとサードの頭を越すヒットで出塁、盗塁。

小湊亮介が十球粘ってツーベースで返し、伊佐敷がヒットで小湊生還。

結城哲也の追撃の、或いはトドメのホームランで、真中要は力尽きた。

そして、御幸はお約束のように自動アウト製造機と化す。

「自分からは打ち出ささない打点乞食の鏡だな、お前」

「4点取ったから許してくれよ」

ネクストバッターズサークルからひらひらと手を振る御幸を見てため息をつき、智巳

は変わった投手を見た。

あくまで明るく、冗談や軽口が叩けるほどの余裕がある青道側と違い、向こうには余裕がない。この余裕の無さが作用すれば恐るるに足らないが、うまく作用すれば点を取られる恐れがある。

まだワンアウト。追加点は充分にある。

ここは、繋ぎたい。

内角高めには、手が出ない。

外角高めのストレートも、手が出なかった。

だが、フォークを見逃し、次の球。

低めに制球された、外へ逃げる横変化。

「そこは甘い」

片手でうまくバットに当て、センター返し。金属バット特有の当てるだけの打撃で、ヒット。

次の打者は、白洲健次郎。

(八、九番でチェンジだから、ここで点を取りたい)

白洲に合図を送り、智巳は二塁へ走った。

まさか投手が走ってくるとは思っていなかったのか、牽制もない。余裕で成功であ

る。

「白洲、頼むぞ」

投手の立ち上がり捉え、二盗を決めた智巳の熱意に応えるように、白洲はあっさり
とライトへヒットを放つ。

三塁コーチャーの手が回った。

『白洲、タイムリーヒット。これで二塁ランナーの斉藤くんがホームに生還して1点追
加、0対10。五回コールドも見えてきました』

そして、チェンジ。二塁に白洲が残塁したまま二回目の攻撃が終わった。

「すまん」

「まあ、大打者でも半分は打てないわけですから」

謝る坂井を軽く励まし、智巳はさっさとマウンドに上がる。

五回まで投げて、無失点。多分このまま行けばできるだろうと、誰もが思っていた。

だが斉藤、一番のショートフライを挟んで八番九番二番に三連打を浴び、ワンアウト
満塁。

ここで、マウンドにタイムを取った御幸がニヤニヤしながら駆け寄る。

「相変わらずお前、下位打線に打たれるよな」

「完投目指すペースで投げてるからな」

「で、俺としては六球で終わらせて欲しいんだけど、どうよ？」

「敵は反撃ムード。続く打者は三・四番。ここで抑えられれば——」
敵を、捻じ伏せることができる。

「それに、似たようなパターンだ。と言うか、打順以外は同じ状況だ。格の違いを見せつけてやれよ」

「お前のその敵への容赦の無さ、嫌いじゃない」

「即座に頷ける豪胆さを知ってるからな。捻じ伏せてやろうぜ」
ニヤリと笑って、別れた。

ワンアウト、満塁。

危機だが、転用すれば好機となり得る。

(さあ、叩きのめしてやるか)

(根こそぎ、攻めへの希望を摘んでやれ)

—— 外角低め、ストレート。

糸を引くようにミットに収まり、ワンストライク。

(縦カーブ)

インロー、縦カーブ。

ボール球を、三番は振った。

打球は大きく逸れて、ファール。

ツーストライク、ノーボール。

『高速フォーク、空振り三振！』

最後の球は、高速フォーク。

146キロと、スピードガンは示していた。

(さあ、あと一人だ)

カッターボールを、アウトハイに。

これに手を出させ詰まらせて、ボテボテのファール。

これが、142キロ。

127キロのチェンジアップで緩急を付け、最後はやはり高速フォーク。148キロ。
口。

『これも三振！チャンスを活かすことができません！』

きつちりと荒れたマウンドを慣らしたあと、ロジンバックを起き直す。

悠々とマウンドを降り、ピンチを切り抜けた智巳はベンチに入った。

「ナイスピッチングだった。後は任せろ」

「はい、取れるだけ取ってきてください」

三回目の攻撃、

その後、市大三校は散発的に四安打するもスコアリングポジションにランナーを運べば三振、他ならばゲッツー、内野ゴロといった明らかに手の抜き方を心得たピッチングにしてやられ、0対17で大敗した。

青道高校、ベスト8進出。

この日最速は、真中の150キロのストレート。ついで斉藤智巳の148キロのフオーク。

被安打8、2四球、6奪三振、自責点0。まごうことなき完勝である。

「監督、今日は五回までだったので、次の試合も投げられますよ」

「いや、次の試合は川上を先発に回す。お前と丹波はリリースに回ってくれ」

片岡監督、酷使はしない。先発に回したら取り敢えず休ませ、故障の可能性を極力抑える温情采配。

と言うことで、二日後の試合に智巳はリリースとして御幸と共にベンチ待機。試合自体は先発に回った川上が7回5失点の好投。

中継ぎの槇原がホームランを三発喰らいながらも一回を4失点に抑える完璧なリリース。

抑えの智巳が一回を三奪三振に抑える良くも悪くもないピッチングで、青道はベスト4進出。

これで関東大会出場決定である。

奇跡への一手

春季東京都大会決勝戦前、控え室。

投手を燃やしたり燃えたりと色々あったものの、結果的にいつにない好調で勝ち上がってきた青道高校の相手は、帝東高校。

東の横綱と名高い、東東京地区の名門。

その東の横綱のエースは、一年生。ほんの少しまで、中学生だった男だった。

向井太陽。左投げのサイドスローと言う珍しさもさながら、彼はただでエースになつたわけではない。

抜群のコントロール。それが彼の唯一にして無二の武器。

正捕手は、二年の乾憲剛。抜群のキャッチング力と状況を選ばないパンチ力のある打撃が持ち味の大型捕手。

決勝戦。

青道高校の先発は、これまで好投を続けてきた丹波さん。

スターディングメンバーは一番から四番は変わらず。

五番にレフト斉藤智、六番にキャッチャー宮内、七番白洲、八番サード樋笠、九番ピツ

チャー丹波。

御幸は相性の関係からベンチ。

対戦相手は帝東高校。前にも言った通り、東東京の強豪である。

『春季東京都大会、決勝戦です。青道高校の先発は丹波くん』

そうアナウンスされてはじまった、決勝戦。

丹波の投げた初球は、綺麗にセンター前に運ばれた。

もうこの時点で嫌な予感しかしない。ベンチで待機している御幸は、そう思ったと言
う。

宮内のリードは、慎重なリード。それは巧く嵌まれば七回4失点くらいの好投を演出
できるが、悪い時はとことん悪い。

投手の調子に引き摺られる傾向にある。

『初球、センターに運ばれました。これは乱打戦が来るんでしょうか？』

そうだよ、とでも言うように、二番が甘く入ったカーブを捉えた。

ライト前のツーベース、ノーアウト二、三塁。

ここで宮内がマウンドに駆け寄るが、一度崩れ出したら止まらないのが悪い時の丹
波。

その後二連打を浴び、二人を歩かせて三失点、なおも満塁。

ここで迎えるは、七番高木。一発のないバッターで、所謂守備の人、の筈だったのだが。

ここでまさかの満塁ホームラン。7対0。

あ、まだノーアウトです。

「マズインじゃないですかね、純さん」

「……………見りゃわかんだろ」

スタンドへ消えたボールを見送ったレフトとセンターが一回表とは思えないほどの会話を交わす。

丹波光一郎、燃える。

関東大会への出場は決まっているからいいが、どうせなら優勝したかった青道高校としては、これは少しキツかった。

「で、何がマズイと思った」

「いや、逃げたら四球、その結果追い詰められて一発、という懐かしのコンボがですよ」
齊藤智巳は守備が下手なので、伊佐敷はレフトより守っている。

幸いにもライトの白洲は守備範囲が広いので、智巳がレフトの半分、伊佐敷がセンターの3分の2とレフトの半分、白洲がライトとセンターの3分の1を担当する変則シフトを敷いていた。

「対処法は？」

「ノーコンで苦しんだことないんでわかんないです。それにピンチこそ楽しく思える質なので、逃げたことないんですよ」

「……………懐かしのつてのは、やったことがあるってことじゃねえのか？」

「いや、俺はエースなのであんなことはしませんよ。エースがあんなことしたら、敗けてしまうでしょうし」

元投手で、ノーコン速球派の伊佐敷としては羨ましい限りである。

そして、ぐうの音も出ない正論。

そうこうしている内に、丹波がやっとアウトをとった。

セカンドゴロゲッツー。これで一気にツーアウト。点差は1点追加されて7点差。

その後ワンアウトを取り、丹波は初回7失点。初回の失点としては、丹波歴代ワースト二位タイ記録。

「さあ、攻撃だ。1点ずつ返していくぞ」

まだ諦めていない監督・片岡鉄心の檄に、野手陣が『応』と氣勢を上げる。

まだ、全員諦めていない。二桁失点するが、二桁得点できるチーム。それが青道高校なのだから。

だが、帝東高校の一年生エース、向井太陽が抜群の立ち上がり。

一番倉持、三振。

二番小湊、セカンドゴロ。

三番伊佐敷、サードゴロ。

新チーム発足した後の青道高校で初めて、上位打線が三者凡退に仕留められ、あつという間に攻撃が終わった。

「……まあ、あと八回あるし」

「下手しなくてもまこのままなら五回で終わるんじゃないんですか、智さん」

隣に座っていた御幸の小声ながらも熱い正論に何も言えず、智巳は黙ってレフト向かった。

先発は、引き続き丹波。というか、イニングを稼いでもないのに先発ピッチャーが降りられるとブルペンのやりくりが困る。

智巳は関東大会へ向けての調整中、川上憲史は前の試合で先発に回ってしまったこの試合は使えない。中継ぎ陣は炎属性でスタミナなし。

片岡鉄心としては、苦心の末に続投を指示せざるを得なかった。

その苦心を察したのか、丹波は何とか1失点に抑えて二回の表を終える。

二回の裏。

タオルを顔にかぶせて汗と涙を拭う丹波は、既に精神的に限界に近い。

そう判断したのは、智巳だけでは無かった。

「監督、三回から俺に行かせてください。関東大会へ行けたとしても、こんな負け方じゃ勝ち進めません」

「……敗戦を取り繕うつもりか？」

心にもないことを、片岡鉄心は問うた。教育者としては問うてはならないことでも、監督としては問わなければならない。

高校野球は、負けたら終わり。だが、ここで負けても関東大会には行ける。

負けを取り繕う為に、エースを使うべきではない。

しかし、そうではないだろう。

そう片岡鉄心は確信していた。

眼を見ればわかる。斉藤智巳の眼は、闘志溢れる、何も諦めていない者の眼である。

「まさか。勝ちにいくから、俺が投げるんですよ。8失点なんざ、返せない点数じゃない」

「……本気で信じている者にこそ、道は開ける」

頼むぞ。

任されました。

言葉にせずとも、意思は伝わる。

四番の結城哲也が打席に立ち、次は自分。

「さあ、ひっくり返してやりましょう」

エースとは、チームに一人しかいない絶対的存在。キャプテンに次ぐ、精神的支柱。少し前まで三者凡退のお陰で暗かったベンチに、ほのかに活気が戻っていた。

「なにせ、8失点しない試合より、する試合の方が多いいんですから」

その軽口に、皆が笑う。

エースが諦めていないことは、監督への発言を見ればわかる。

キャプテンが諦めていないことは、打席を見ればわかる。

エースとキャプテンが諦めていないのに、諦める奴は青道高校には居ない。

「当たり前だオラァ！いくらでも点取ってやらァ！」

「はは。事実だけど、言うようになったもんだね」

「ヒヤハハハハ！そこまで言われてマジにならねえ奴は居ねえっの！」

伊佐敷が吼える。

小湊が不敵に微笑む。

倉持が笑う。

場の雰囲気は吞まれずに、消沈しているのは丹波のみだった。

それはそうだろう。これまでエースを目指して必死に投げ抜き、ここで好投すれば或

いは後輩に追いつけるかもしれないと思った、春季東京都大会の決勝で、乱調してしまっただけから。

責任感は、人一倍強い。だからこそ、悔やむ心が自分を苛んでいた。

「丹波さん、夏の甲子園では頼みますよ。ここはまあ、後輩に良い所を任せてください」「良い所……？」

「8点ビハインドからの逆転劇。絵になる場面になると思いませんか？」

まるで理解できないという様子の丹波に、智巳はいたずらっぽく笑って答えた。

その笑みが、まるで『逆境なんざ楽しむ為のものですよ』、と言っているようで、丹波は思わず息を呑んだ。

自分なら、先発の擁護のしようがないハマでこんな点差がついた試合で志願登板しようとは思わない。

その差が、エースとエースではないものの差かと、彼はどこかで腑に落ちた。

「さて、哲さんに続いてきますかね」

結城哲也、ツーベースヒット。

ベンチに居た智巳は、素振りもしていない。

打席に向かうまでに軽く振っただけで、智巳は平然と打席に立った。

『さあ、ここでレフトに居るエースが打席に立ちます』

実況も、何かを期待している。

それはそうだろう。決勝戦が、一方的な虐殺であつて、楽しめる筈がない。

智巳は、実況の言葉を知らない。だが、この逆境が楽しかった。

この逆境。この不利。ここから皆でひっくり返せるのが、野球と言うスポーツ。

それが、たまらない。

「よろしくお願いします」

打席に立つ前に挨拶をし、オープンスタンスにバットを構える。

狙いはヒット。

自分からあんなことを言つて凡退したら、一生ネタにされるだろう。

だが、そう簡単に打たせてもらえないわけでもない。相手は東の横綱、帝東高校。エースはこれまで戦つてきた投手とは比べ物にならない。

真中要は調子が悪かった。だから打てた。しかし、絶好調であれば打てなかつただろうと考える。

だから、ヒットを。

『一球目、ボール。慎重です』

投げられた球は、内角低めのストレート。ストライクと言われても、おかしくないギリギリの球。

制球力が素晴らしい。これで一年生と言うのだから、驚きだ。深呼吸をして、構え直す。

こうなれば、ヤマを張る。打撃は下手だから、ヤマを張る。そうした方がいくらか出塁率は増すだろう。

敵の投手は、どこかで見たことがあった。

（一年生ってことは、シニアで一回戦ったのか）

少し考えて、思い出す。

コントロールがうまい、一歳下。

（御幸がカモにした奴か。確か名前は……向井太陽。前あった時はそれ程でもなかったが、成長したんだな）

だが、御幸なら打つだろう。逆転の目は充分にある。

では、何にヤマを張るか。

『帝東高校先発に向井くん構えて……投げたっ！』

高めギリギリ、釣り球。

手を出したくなる、ギリギリの場所。

打つたら多分凡打だろう。いやらしい制球力だと、言わざるを得ない。

正直、手が出なかった。考え事をしていたから、甘い球でも手が出なかっただろう。

計らずとも、うまくいつている。

そんな彼を後ろから見る帝東高校の捕手・乾憲剛は、大江戸シニアの猛威に最も晒された世代だった。

同い年で、大江戸シニアの最強コンビの片割れと同じポジション。

強いシニアには、強い選手が集まる。素晴らしいキャッチング技術とパンチ力のある打撃があると高評価だった乾憲剛は、そんな二人が巻き起こす旋風になすすべも無く負け続けた。

世代最強捕手。欲しい称号ではないといえば、嘘になる。

だが、そんなことは今やどうでもいい。

(これが、馬の合う投手をリードするという感覚)

あの二人は、ベストバッテリーと言われていた。傍から見てもそうだし、敵に回してもそうだった。

自分も、そう言われるほど相性のいい投手と会ってみたかった。

球を受けてみたかった。

その望みがこの春に叶った。

向井太陽のピッチングを見て、彼に雷の如き天啓が落ちる。

——自分にとってのエースは、この男である、と。

何をせずとも、そうなった。

乾憲剛は二年生にして四番で正捕手に。

向井太陽は一年生にして暫定だがエースに。

紅白戦の結果、拔擢された。

その、初陣。青道高校であることに運命を感じた。また、雷が落ちるような衝撃を受けた。

向こうは覚えてもいないだろうが、こちらは覚えている。

やつと会えたベストパートナーを、見せてやりたかった。

(だが、それは叶うまい)

敗戦処理に、エースは出ない。

二番手をぶつけてきたということは、関東大会に主眼を置いているということ。関東

大会で当たれば、その時はバッテリー同士相對しよう。

だかららせて、この打席は打ち取る。この試合には勝つ。

次に戦った時に、このようなことが起こらないように。

そう考えて強気に、されど慎重に攻めたが、斉藤智巳は動かない。

(むう、流石の選球眼)

二球目は考え事をしていただけだ、とは思わない。

乾憲剛はあの二人を買っている。それだけに、見極めたのだと考えた。

(太陽。外角いっぱい、奥スミを)

(オーケー)

ストライクゾーンは、紙に書かれたような平面ではない。

ボールが通過してストライクかボールかの判定が下る以上、奥行きがある。

二次元ではなく、三次元を意識した、文字通り次元の違うコントロール。それが向井太陽の強み。

『三球目、スライダー。ストライクです』

驚いたように、智巳は乾憲剛を見た。

彼も投手である以上、敵のやったことが如何に難しいことかはわかる。

だが、それでも笑った。

この逆境が楽しい。追われる時には、責任感がある。点をやらないという、責務がある。

だが、追う時にそれはない。ただただ、野球を楽しめる。

楽しい。こんな技術を持った投手がいることが。

嬉しい。まだまだ格上の技術があるということは、成長できるということだから。

「これ、何て言うんだ？」

「奥スミだ」

「奥スミ……いい投手だ。是非とも教えを請いたいな」

「太陽は、教えを既に請うたようだ。恩には報いるだろう。素直ではないが」

まだ、智巳には余裕がある。

自分が登板した試合で、こんなに離されていたのはいつ以来か。
楽しい。

「思い出したよ。三振の取り方つてのを、教えたんだつたな」

外角低め、ストレート。

立っているプレートとの位置をずらしたのか、斜めに入ってきてストライクゾーンを扶
る。

『ツーストライク、ツーボールです。追い込まれてしまいました』

—— 決め球は

乾憲剛は、思った。

斉藤智巳も、思った。

—— 内角低めの、ストライクゾーンをギリギリかすめる、斜めに落ちるスクリュー
ボール。

それが、向井太陽のウイニングショット。

「……ッ!？」

振り抜いた。

掬い上げたようなフォームから、背中へ。

担いだようになつた金属バットが、地面に落ちた。

「意地つてヤツなんだろうな。それがなきや、俺は三振だ。バットをクルクル回してな」

この男相手にスクリーンボールを使ったことは、聴いていた。

三振の取り方つてのを教えてもらったと、言つたことも知つていた。

だが、一歩及ばなかつた。

「さあ、反撃開始とさせてもらう」

8対2。

青道高校、2点を返す。

だが、向井太陽もこれ以上の得点は許さない。

宮内を三振、白洲をファーストゴロ、樋笠をショートフライ。

完璧に抑えて後続を断ち切り、エースの貫禄を見せつけた。

スリーアウト、チェンジ。

青道側の応援席の顔色は、まだ暗い。

「御幸、あの負けムード。俺とお前で勝利への希望に変えてやろう」

「希望？」

ピッチャー用のミットをつけた智巳が軽快に言う、プロテクターをつけて、御幸は笑った。

「確信の間違いだろ、智」

大胆不敵に笑い合つて、マウンドへ向かう。

——青道高校、選手の交代をお知らせ致します

——六番宮内くんに代わりまして、御幸くん。九番丹波くんに代わつて、坂井くん。坂井くんがレフトに入り、ピッチャー、斉藤くん。ピッチャー、斉藤くん

敗けを感じさせない大声援が、神宮を沸かせた。

三振宣告

帝東高校監督は、全国制覇を二度成し遂げた名将・岡本一八。

彼は野球を炎と例える。別に中継ぎが燃えるのが野球の醍醐味、と言っているわけではない。

監督の選手の魂がぶつかり合い、飛び散る火の粉。それこそが始まりの火。

野球の技術が向上し、設備が整っても、グラウンドで戦う人間がからつぽであれば勝負には勝てない。

技と身体を動かすのは、心。故に、監督たる自分がするべきことは、選手たちに火をつけること。

だが、極稀に火をつける前からメラメラと燃えている選手がいる。全国制覇をした二回とも、そんな選手が居た。

そして今、新たに二人見つけた。

敵のエースと、味方のエース。

「兼剛、太陽、聴いたか、あの声援をよ!?!」

マウンドに上っただけで、これほどの声援が上がる。何かをしてくれると思わせる。

まごうことなき、絶対的エース。

あの存在感は、ベンチから見てもそれとわかる。

岡本一八は、これからは点がそう簡単には入らなくなると確信して、主軸二人に声をかけた。

「あの怪物の立ち上がりは、先発した時は基本的に安定してることが多い。が、中継ぎ登板と先発は違う。少しの乱れも見逃さず、ガブツと咬みつけ」

ガブツと、ガブツと！

ジエスチャーを交えて、岡本一八は櫂を飛ばす。

「いいかテメエら、今主導権は俺らが握ってる。リードなんか考えず、ガンガン攻めて、攻め抜いて勝てい！」

——先頭バッター、三番内藤豊。

彼は一礼し、打席に立った。これまでの成績はツーベース一本。

通算打率は3割4分。通算本塁打二十本の、名門の三番に相応しい成績。

彼は、斉藤智巳との対戦経験がない。高校に入って花開いたタイプ。

しかし、同級生からその活躍は聴いていた。

佐野修造、斉藤智巳、本郷正宗、御幸一也。

こうしてシニアの有名人と言うのは、口伝いに広まっていくものらしい。

(……初球様子見、三球目で叩く)

敵をなめてはいない。だからこそ一球目は見逃す。

その判断を、御幸一也は見取った。

(初球様子見、三球目からとか思ってるな。まあ、定石だけど)

ど真ん中、ストレート。

最近、本当にストレートのキレが素晴らしい。国際大会の時に測った時、回転数は秒速38回転。

(40超えてんじゃないの、今のこいつ)

ミットに吸い込まれる、指にかかったストレート。

初球捨ててきているなら、最も威力のある球を最も効果的に入れてやればいい。

それだけで、『手を出さなかった』が、『手が出なかった』に変わる。

手を出そうと思えば出せたのに、出なかった。この微妙さを、打者は好まない。だから、思考が早まる。

(さっさと終わらせよう、智)

(どうするつもりだ)

(……)。球数使わずに打ち取って(こっ)

その打ち取る為に組み立てた配球、智巳は珍しく首を振った。

(力で潰す。こちらの反撃が終わるまでは)

(……うーん、まあそれも有りだろうけどな)

この奪三振マシーンにとって三振は『結構取れるもの』でしかないが、実際三振は取るのが難しい。

文字通り、バットに当たらなかった。手も足も出なかったということなのだから、それも当然なのだが。

(どうすんだ。関東大会)

(一瞬一球に命を懸けるのが俺だ。先のことなど知らん)

少し、気が抜けてしまう。

命を懸けるなら、下位打線に連打を浴びるなよ。

そう突っ込みたいが、結果的に点取られて負けなきや、智巳的には手を抜いていることにはならないらしい。

(まあ、いいけどな。らしいし)

三振を取るための配球に組み立て直し、御幸はミットを構えた。

「三球勝負で仕留めさせてもらいますよ」

「何？」

「奪三振宣告つてやつです。ここから三人、九球で終わらせますので、ご協力お願いします」

二球目は、内角低めのストレート。

(低過ぎる、ボールだ)

ボールだと内藤は思った。わざとあんな三味線を引いて手を出させる為なのだ。

だが、そのストレートは手元で吸い込まれるように上に伸びた。

「ツーストライク！」

わざわざ、御幸が言つて投げ返す。

あと一球だぞと、内藤には聴こえた。

次は何か。フォークか、スライダーか、カーブか。

カーブを決め球にすることは、少ない。三球目もストレートはないから、恐らくは遅

い球。

チェンジアップか、スローカーブ。それでバットを回すつもりだろう。

「ストレートですよ」

「……」

この男は、無視する。三球続けてストレートでは、リスクが大きい。対応されないと、考えていてもおかしくはない。

遅い球を待つ姿勢に入った内藤の横を、豪速球が射抜いていった。裏をかかれた。

或いは、かかれてすらいらないのかもしれない。あの忌々しい捕手は、真実しか述べていない。

悔しさを滲ませる内藤がバットを持って去っていく際に、御幸の声が背中に刺さった。

「宣言通り、あと六球で二人斬れよー」

帝東側の、ベンチがざわつく。

それを見て、御幸はニヤリと片頬を上げて微笑んだ。

「一人目には、ご協力いただいたんだからよ」

悪い笑みである。

その言葉に青道高校サイドも、帝東高校サイドも沸いた。

次のバッターは、四番で正捕手、乾憲剛。

(この人にささやきはいらねえ)

力で打者を捻じ伏せる。

内角の球を見逃し、ボール気味のストロートをカットして、ツーストライク。

外角高め、ストロート。

絶好球の僅か下を、乾憲剛のバットは空振った。

再び、雷が落ちるような衝撃。

(手元で急激に伸びている。映像ではわかりきれないところに、このストレーットのキレの良さはある！)

いいえ、映像を撮ったのが秋で、今が春先だからです。

正解を教える者はいないし、御幸は教えない。

春先から夏の終わりまでの絶好調男。その事実正直なところ、あまり知られたいくない。

「ツーアウト、あと三球！」

乾憲剛の打席中黙り続けていた御幸がまたカウントを進め、次の打者を迎える。

次の打者は、五番サード、板垣。

正直なところ、大した打者ではない。

「ストレート三球で締めるので、よろしくお願いします」

何をよろしくしろというのか。空振りにご協力ください、とでも言うのか。

献血すら協力することに少し戸惑うこの世の中。そんなに気を良くして空振りに協力してくれる者はいない。

一球目、予告通りのストレート。空振り。

二球目、同じくストレート。外から内へ、距離感が全く違うことに怯み、見逃し。
「あと一つ」

「お前の予告通りの三振はしねえ。カットして、前に飛ばしてやる」
「いや、ちよつと勘違いしてませんか？」

外角低め、ギリギリいっぱい。

カットしようとしたバットすらすり抜けて、ボールはミットに収まった。

エースが、グラブを前に突き出して吼える。

「これはエースの宣告であつて、予告じゃない」

——ストライク！バッターアウトオ！スリーアウト、チェンジ！

審判がそう宣告した。攻撃の時間は終わったのだと。

「三振しないんじゃない。するんです。三振させないんじゃない。やるんです。そこが少し違いますね」

あくまで、生殺与奪の権利は我等にあり。そう宣告した御幸は、マスクを外す。

完全にしてやったバッテリーは、打撃陣の手荒い祝福を受けながらベンチへ帰った。

『なんと、宣言通りの九球勝負の三奪三振！ボールがミットを叩く音しか聴こえません！』

『これはちよつと、見たことがない勝負でしたね……末恐ろしい二人です』

観客も、実況も、解説も。

全ての注目は二人へ向く。

となれば、風はどちらに吹くのかは言うまでもない。

「ナイスリード」

「ナイスピッチ」

隣に座った二人は、それだけ言って監督へと目を向けた。

諦めていないのは、監督も同じ。帝東高校のエース、片桐が来ると思った思考の裏をかく奇襲先発だが、さりとして最早攻撃は三回目。

対策は既に、出来ている。

「相手の先発は制球力に自信がある。だが、既に球数は打者八人で38球。この意味がわかるか」

「……ボール球が多い、ということですか」

「そうだ。相手はボール球を振らせ、三振、ないしは凡退でアウトをとっている」

——低めでギリギリの球は、全て見逃せ。球数を稼ぎ、ベルトの上に来た球を叩け。「相手の先発は一年だ。入ってきたばかりでスタミナは斉藤に比べれば格段に劣る。粘って粘って、脚で掻き回し、入ってくる球に痛打をくれてやれ」

野手陣が、応と答える。

最初のバッターは、坂井。現在打撃不振なレフトである。

(低めは見逃す、入れば叩く——)

そう考えて打席立った坂井だが、彼とは関係のないところで帝東高校のバッテリーは苦境に立たされていた。

——ボール

それは、ジャツジである。

斉藤智巳と御幸一也は、ガンガン入れて攻め抜いた。その時の残影がまだ目にある。要は、ギリギリの投球から荒い投球にいきなり変えられた為、荒い投球の判定が残っている。

わかりやすく入ってくる、或いは思いつ切り空振りする球と違い、四隅と奥行きを使うピッチングは審判の判断に影響されるところが大きい。

(おいおい、前はそこストライクだったじゃん)

(気を散らすなよ、太陽)

御幸一也、性格が悪い。

正反対のピッチングを演出し、彼は完全に帝東側をアウエーにした。

——フォアボール!

坂井がワンストライクスリーボールから選んで歩く。

だが、四球を出してすぐに崩れるほど浅い経験値ではない。

坂井を歩かせたのは、謂わば実験。変化したストライクゾーンへの対応の為。

(塁上で何かを仕掛けるタイプじゃない。どちらかと言えばそれは一、二番。こいつらを仕留めるために、歩かせる)

腹を括って投げた五球は、無駄では無かった。

再び、変わったストライクゾーンのコーナーへ球が集まりはじめている。

「あー、適応されちゃったか」

「またお前、なんかやったのか」

「まあ、寝技に近いことを」

敢えて追求しないが、またろくでもないことだろうと思う。

そしてそれはあっている。

だが、それで先頭バッターが出塁したことも事実。

「倉持か。ゲッツーはない。でも、出塁してくれても走れない。案外、歩かせても正解だったのかもな」

「うーん、どうなんだろうな」

五番と六番は、完全に敵のピッチングを観察する観戦モードに入っていた。

打つ為に。

そして、新たに技術を得る為に。

結果、倉持は七球投げさせるも、低めのスクリーンに手を出して三振。フルカウントからのボール球。度胸がなければできはしない。

「コントロール、磨いてみようかな」

「また、内と外の投げ分けとここぞという時の精密さがあればいいけど、磨くに越したことはないんじゃないか。球威で庄すのもらしいけど」

そうこうしている内に、二番小湊が四球で一、二塁。

次の打者は、伊佐敷純。悪球打ちのスペシャリスト。

彼が明らかにボール球のスライダーを捉え、ライト前に落として坂井が生還。小湊が快速を飛ばしてホームでキャッチャーのブロックを掻い潜る。

伊佐敷は二塁でストツプ。走者一掃のタイムリーツーベースで、8対4。4点差。

打席には、結城哲也。

青い旋風のよう

この世代の青道高校の絶対的エースが智巳ならば、絶対的主柱は結城哲也。打の柱で、不動の四番。

弛まぬ努力で磨かれた才能を持つ、ここぞという時に頼れる怪物クラッチヒッター。それが結城哲也だった。

一つ深呼吸をして、バットを掲げるように目の前に上げる。

(ここで打つ。それがキャプテンで、四番の仕事だ)

反撃ムードを途切れさせない。この雰囲気を作ったエースの為にも。

ワンアウト、二塁。塁上には伊佐敷純。脚で掻き回すタイプの打者ではない。

(投の怪物が斉藤ならば、打の怪物は間違いなくこの男)

チャンスお化けで、チャンス以外では打てない今岡こと、御幸は守備の人。

別に馬鹿にしているわけではなく、単純に彼は打撃面よりもリード・捕球・盗塁阻止など、守備面の方が優れている。

(ここを打ち取れば、止まる。打ち取れねば、続く)

向井太陽に、逃げる様子は微塵も見られない。

ここは、勝負。岡本監督も、その背中を押していた。

(クサイところに投げていく。最悪歩かせても——)

五番はエース、六番はチャンスお化け。

怖い打線である。四番を歩かせても微塵も油断できない。

内角低めの逃げ気味スライダー。

ギリギリの球を、結城哲也は一瞥もせず平然と見逃した。

——ボール！

ギリギリの球にもピクリとすら動かないその集中力に、今まで余裕の笑みを崩さなかつた向井太陽の顔が厳しい物になった。

ゆらゆらと、陽炎のように立ち昇る気。

強打者特有の威圧感が、向井太陽から余裕を奪っていく。

シニアからのエースとは言え、まだ高校野球では新人。このような怪物との対戦経験も浅い。

二年違えばレベルが違う。高校野球での最強がプロに通用するとは限らないように、シニアの最強が高校野球に通用するとは限らない。

(太陽、逃げてもいい。だが、甘い球は投げるな)

ハッ！に、来い。

大きなミットを、構え直す。

この怪物を倒すには、一人では足りない。二人でやつと勝ち目が出る。低め、スクリュー。

ストライクゾーンギリギリいっぱい。

これを、結城哲也は見逃した。

ワンストライク、ワンボール。

ここに来て、変化球が多くなってきている。

何も、この打者の威圧感に呑まれているのはエースだけではない。キャッチャーすら、その存在感に圧倒されていた。

(……低めは捨て、甘い球を打つ)

キャプテンとして、先輩として。

そして何より、誰よりもエースを援護しなければならない四番として。

高めに制球された、次の球で打ち取る為の球。

内角ギリギリに、ボールとも取られてもおかしくないインハイの球を、結城哲也は綺麗に捌いた。

『打ったあ、右中間!』

当たりが強い。伊佐敷がホームに生還するも、結城哲也は一塁ストップ。

だが、ここで踏みとどまるのがエース。

フルカウントから斉藤智巳をセカンドゴロゲッターに仕留め、スリーアウトチェンジ。

「すいません、哲さん」

「気にするな。またいくらでも打ってやる」

ぐつ、と拳を付き出してから守備に向かう結城を見送って、智巳は御幸と配球について相談しながらマウンドに向かう。

その去り際。

「それにしても、一回に一人で五個アウトカウント稼ぐなんて、中々できることじゃないぜ、智」

「次の攻撃をワンアウトからはじませるのも、中々できることじゃないよ」

いつもの会話を済まして、四回の表。

二人はそれぞれ定位置についた。

初球ストレート、空振り。

チェンジアップ、空振り。

ストレート、見逃し三振。

初球チェンジアップ、空振り。

スライダー、ファール。

ストレートの見逃し三振。

初球縦カーブ、空振り。

ストレートの見逃し。

ストレート、空振り三振。

そして、再び青道高校の守りは内野にすら転がらず9球で攻撃に移る。

そして先頭バッター、御幸。

「もらったあー！」

確信を持って振ったバットは、ボールと5センチくらい離れている。

「知ってた」

「俺も、薄々だけど知ってた」

前の回の攻撃と合わせると二人で仲良くスリーアウトを稼ぎ、二人仲良くベンチへ。

七番白洲がヒットを放つも、樋笠がセカンドゴロゲッツでチェンジ。

「どこかで見えたよな、あの光景。具体的に言うとな五番の打席あたりで」

「すまぬ」

そんなこんなでまた攻守が変わり、敵の打者は九番向井太陽。

打者としての向井太陽はそれ程でもない。

観客も七連続三振の九球勝負を期待していたのだが。

(あ、抜けてる)

カキン、と。バットが鳴った。

明らかに甘い球だった。7回を投げるための力配分の関係上なのだろうが、明らかにカーブのコースが甘い。

智巳は、その長身と威圧感で物理的にも精神的にも見下ろして投げる。

舐めているわけではないが、『お前にこの球が打てるかよ』と投げるわけで、その匙加減は投手がその場で適当に変えることになるのだ。

ここで御幸としては、自分のエースの弱点を再確認せずにはいられない。

ピンチでクリーンナップ。これはまず抑えられる。しかし、ピンチで下位打線。これが予想外の一発を喰らうことが多い。

ピンチ補正で力を入れるが、所詮は下位打線だから力を抜こう。その分クリーンナップに注ごう、となるわけで、これはもうどうしようもない。

常に全力で投げられると、ペース配分ができていないことになる。

それに、ここぞという時にギアを上げられる投手が、強いのも確かなのだ。

向井太陽、ヒットで出塁。

ここで御幸はタイムを取らなかつた。次は一番からの好打順。

自分が何を言わなくとも、抑えられる。

その予想は裏切られることなく、一番小山田をショートフライ、二番多田をセンターフライ、三番内藤を三振に仕留め、スリーアウト。

ノーアウトからランナーを出すのは様式美だとしても、3つ取るまではやはり若干不安が残る。

「今、向井は何球だ？」

「五回裏で、87球。かなり投げさせてるな」

実際、6ー4ー3と自動アウト以外の打者はかなり粘って出塁したりゴロを打ったりしている。

五回裏の攻撃は、九番坂井が三振でスタート。しかし、一番倉持がやつと出塁。

その快速を誇る脚で掻き回し、二盗からの三盗を決める。

その後は小湊が10球粘ってスクイズを決め、2点差。

「亮さん、粘りましたね」

「あそこまで負けん気が強いと、いじめたくなるんだよね」

フツツ、と暗黒微笑を見せた小湊亮介の次の打者は、悪球打ちの伊佐敷純。

クサイところに入った初球をセンターに運び、ヒット。

ネクストバッターズサークルに入った智巳に代わって、御幸がふとした疑問を吐い

た。

伊佐敷純、絶好調の案件である。

「何か、純さん絶好調ですね」

「まあ、元々選球眼の無さを反射神経でカバーしてるところあるからね。球筋を見て慣れれば、ああ言う手合いには強いんだよ」

悪球打ちなので、少しくらいズレてもその場で無茶苦茶して無理矢理飛ばす。

読み打ちの御幸とは違った意味で、伊佐敷純はストライクゾーンからボールにするような形で精密さを活かすのが売りの投手に強い。

一方で、向井太陽は逃げなかった。

誰かと言えば、結城哲也からである。

三度目の対決。今まで二度のヒットを許している。

ここで切って、勢いを得る。

その勢いに押された次の味方の反撃で、突き放す。

それがベスト。故に敬遠は論外。勝負して三振させるか、打たせて取るか。

(……逃げないか)

一礼し、打席に入る。

精密機械ばりのコントロール。エースが反撃ムードを作り、完全に敵打線を抑え込ま

なかったら、大差に焦って攻略できずにずるずると逃げ切られたらどう相手。相手にとって不足はない。

本日三度目の勝負を前に、結城はバットを掲げて精神を研ぎ澄ませて構えた。

一球目、外角低めのストレート。

大飛球が、レフトスタンドに突き刺さった。

ファール。

帝東バッテリーは、逃げなかった。青道の四番も、フルスイングでそれに応えた。

二球目、内角低めのストレート。

詰まった打球が、ライト方向へ。スタンドの壁に当たり、ファール。

三球目。

またも内角に、甘い球。

(……ボールになるスクリューか)

二球続けての、ストレートは無い。空振りを取れるような球ではないから。

そう思った結城の思考の裏をかき、その球はそのまま伸びてミットを鳴らした。

『青道の四番・結城くん相手に三球勝負！』

結城くんはこれで去年の夏の第一打席で成宮くんに奪われて以来の三振になります

！』

さらつと恐ろしいことを言う実況。

連続無三振記録が途絶えた結城は、少し笑ってから乾に話しかけ、打席を後にした。

「いい球だった」

だが、次は打つ。

身に纏うオーラが何よりも雄弁にそう言っていた。

「哲さんでも、三振することあるんですね」

「ああ、完敗だった」

その表情に悔しさはなく、闘志のみがある。

——次は打つ。その気持ちは敵だけでなく、味方にも伝わってきていた。

「相手はこれで更に突き放そうとしてくるだろう」

つぎの帝東の打者は、四番の乾憲剛。他にも五番板垣、六番馬場園と打力のある面々

が続く。

「頼むぞ、エース」

「期待に応えてこそそのエースですよ、キャプテン」

何よりも、このチームで敗ける気はしない。

悠然として、エースは再びマウンドへ向かった。

「フォークを混ぜていくぞ」

六回表になって、御幸が伝家の宝刀の解禁を告げた。

ストリートと同じような球速で、スプリットよりも遥かに落ちる魔球。

あと四回はフォークを織り交せて抑えようと、御幸一也はそう言った。

「決めに行くのか？」

「まあな。多分これが、敵の最後の攻撃のチャンス。完膚なきまでに叩き潰してやろうぜ」

悪い笑み。

それに応じるように、プレートを挟んで斜めに立っていた智巳は鋭く目を御幸に流した。

「相変わらず、容赦ないな」

「まあな」

「でもその叩き潰し方、嫌いじゃない」

グラブで口元を隠しているが、恐らく智巳も笑っている。

敵の全力を真つ向から踏み潰してこそ、本当の勝ち。

そんな真実の勝ちを求めなくとも良いが、求められるなら求めたい。

「三球な」

「わかった」

ピツ、と。わかりやすくミットをつけていない方の手の指を三本上げて、御幸は改めて三球勝負をするかのように見せかけた。

三球勝負といえ、頭に過ぎるのはあの打席だろう。

三、四、五、六、七、八まで。全てストレートを最後に三振させた。

計18球の蛮勇。それが、ここに来て生きてくる。

『さて、帝東高校の攻撃。打席には四番バッターが入ります。ここは青道高校としては抑えたい場面でしょう。』

『どう抑えてくるでしょうか?』

『先程御幸くんが三本指を立ててましたからね。三球勝負で決める腹じゃないでしょうか』

『意趣返し、と言ったところででしょうか』

『そうですね。それが難しいだけに、これが決まれば大きいですよ。反撃の芽をエースが作れば点を取ってくれる青道高校と、はつきり差がつくことになりますから』

打席には、乾憲剛。

マウンドには、斉藤智巳。

勝負の一球目は、ストレート。

バットにあたって、レフト方向へ。

『これは、ファールです』

『合わせてきていますね』

『二巡目ですからねえ。いくらストレートがキレていても、対応できないわけではないということでしょう』

乾程の打者であれば。

全国レベルの打者であれば、ストレートには二巡目でタイミングを合わせてくる。

そんなことは知っている。

御幸としては、ここまでストレートがキレていることが嬉しかった。

そうすれば自然と思考はストレートへの対策に向かう。

代名詞となっている、高速フォーク。そちらへの意識が薄れる。

『さあ、二球目。縦のカーブを使ってきました。これも、ファールです』

『このカーブだけみれば、丹波くんの方がキレているんですよ。カウントを取るための球と、割り切っている感じがあります』

『まあ、彼はフォークボーラーですからね。今日はまだ一球も投げていませんが』

二球目で追い込み、三球目。

頭に過ぎるのは、やはりストレート。手元で伸びる、空振りの取れる直球。

配球自体は変わっている。だが、決め球も変えるだろうか。

それほどまでに、今日のストレートは素晴らしいように思える。

(……読み打つ)

ストレートが来る。そう思つて構え、遅い球ならば片手だけでファールにする。そう思つて構え、目の前の怪物が振りかぶつた。

場を満たすは、押し潰されそうな威圧感。

投げられた球は、速球。

(もらつた！)

140キロ、後半はある。この球速とこのノビで変化球はない。チエックゾーンは近づくが、曲がりもしないし落ちもしない。

ずば抜けた身体能力を駆使してその軌道の上を叩き、空振つた。

キヤッチャーミットは、遥か下。

電光掲示板に、球速が煌々と燦めいていた。

《150》

捕球を終えた御幸がほつと一息ついて、勝敗が決まったかのような歓声が鳴る。

『150キロだあああ！』

その日最速は、152キロストレート。

青道高校対帝東高校、12対8。

青道高校、五年ぶり八度目となる春季東京大会優勝を果たす。
西東京に、青い旋風が吹き荒れた。

東都の怪物

『18球6K！宣言通りの三球勝負！』

『88球17K！敗勢から勝利を手繰り寄せたエースの熱投！』

『新世代の魔球使い!?遂に出た、最高速152kmながら、150kmスプリット!』

『青道高校、《東都の怪物》斉藤智巳、圧巻の投球!』

マネージャーたちが朝早く起きて買ってきた新聞を読みながら味噌汁を飲み、智巳は御幸に空いた器を突き出した。

「はいつと」

「サンキュー」

少し飲んで、器を置く。

一息ついて、智巳は言った。

「聴いた通り、哲さんと、俺とお前か」

地元スポーツ紙の、一面。

結城哲也が逆転弾を放った時の残心、最後の三振を取って吼える智巳、盗塁を刺し殺した時の御幸の残心。

バツ、と。左から順にこの三人の写真があった。

「いや、見出しで俺を使つたんだし、ここは哲也さんセンターだろ」

「俺は外野は守れないぞ、智巳」

「あ、そういうことではないです」

若干天然が入っている不動の四番のボケをいなし、智巳は隣に座っている御幸に見せるように広げた。

「あー、でもまあ、昨日の主役はお前だしな」

8対0の圧倒的敗けムードから登板。一人で空気を変え、7回を投げて、88球。奪つた三振は、17。無四球、被安打4。打席に立てば6打数4安打2本塁打。ただし2併殺。

本日の主役、のプラカードがなくてもそれとわかる活躍だった。

結城、6打数5安打2本塁打、6打点。

斉藤智、被安打4、17奪三振、無四球、6打数4安打2本塁打、3打点。

御幸、6打数2安打3打点。

どちらが一番凄いかというと、言葉に困る。投げる人の斉藤智巳も素晴らしいピッチングだし、結城の固め打ちも光る。

ただ、当人たちはお互い、自分が一番凄いとは思っていないかった。

活躍はできた。だが、それはキャプテンの援護あつてこそ。

活躍はできた。だが、それはエースの投球あつてこそ。

お互いを認めているし尊敬している。だからこそその感想だった。

「哲さん、昨日はありがとうございしました。純さんも、亮さんも、ここに居ない三人も。あとはまあ、倉持と御幸。

何か俺だけこんな扱いですけど、俺一人じゃ逆転できませんでしたし、しようとも思えなかつたと思います。皆さんを信じてるからこそ、あんな出来過ぎた投球ができました」

「ここには、昨日帰ってきて疲れ果てて寝たスタメンの殆どがいる。

結城哲也、伊佐敷純、小湊亮介、倉持洋一、御幸。

その全員に、智巳は頭を下げた。

「勝つ為の援護、ありがとうございしました」

エースにそう言われて、奮起しない打撃陣は居ない。

もつと打つてやりたいと思わせる。

「こちらとしても、あの投球には幾度となく助けられた。もう半年もないが、改めてこれからよろしく頼む」

全員を代表してキャプテンが応え、打撃陣がさつさと食べ終わつていそいそと練習に

向かう。

御幸と、智巳だけが食堂に残った。

「で、御幸。注文は？」

「エースの鑑としか言えないピッチングだったし、割りかし文句ないだろ」

間に合わなかったが、それを含めてもあそこで敗けるよりは勝った方が何かと良かった。

この雰囲気もあるし、OB会のこともあるし。

関東大会はほぼ一ヶ月後。智巳は一回投げると完全回復して若干連投（中一日で7回ずつ）が聞くようになるまでの間に一週間から10日ほど必要となるから、このモラトリウムは素直に嬉しい。

問題は、これまでベスト4決定から関東大会一回戦までの長い期間で少しずつ調整し、完璧に絶好調な状態で登板しようと思っていた監督のプランが崩れたこと。

「食って少し休んだら投げるから、受けてくれ」

「いいけど、あんまり量は投げるなよ」

御幸としても、昨日の神がかったピッチングの感触を確かめたいという智巳の気持ちかわからなくもない。

自分も二塁送球がいつになく完璧になった時は、一塁走者に走ってくれと思うことだ

し、アレに似た何かなのだろうと思う。

その後、少し休んだ後に肩を作り、何球か投げて御幸を座らせる。

その後ろには、スピードガンを持った倉持。

「出ないな」

「うん」

作って本気で投げてみても、フォークで150の壁は超えられなかった。

「神宮球場つてのは、球速が出やすいらしいけど」

青道高校にも、スピードガンはある。

ピッチャーにとつて、150に限らず10キロごとは壁に見える。智巳の場合は14

0後半をウロウロしていて、超えることができなかったのがある日突然超えられた。

それが、昨日のことである。

素直に嬉しいが、継続的に出したいし、そうとまでいかずとも意識して出したい。

「148だな。今までの最高は」

わざわざ付き合ってくれている倉持が、手に持ったスピードガンの数字を読み上げる。

「お前さ、あの時どうやって投げたとか、そういうのなの？」

「……どうやって投げたとか、か」

150キロ、フオーク。

最高のコースに、最高の球だった。自分が捕球できないかもしれないと思った程の落差とキレ。そして地味に要求通りのコースに来ていた。

縦変化の何がいかというと、人の目がついていけないと言うこと。

アレが連発できるとように、とは言わない。

狙って投げられるようになれば、それは素晴らしいことだ。

「でも、案外心理的なもんじゃねえの？」

「え？」

かなり理論派な御幸と智巳にとって、倉持の意見は意外だった。

心がピッチングを左右する。

それはわかる。ピンチの時の心構え、連打を受けた時の心構え。その出来次第で、打たれるか打たれないかが決まるのだと。

「智巳って正直、頼られるの好きだろ。あの時だつて哲さんに言われて、終盤の圧巻のピッチングが出たわけだし、案外そこらへんが鍵になる気がすんだけどな」

「あー、確かに」

他人をよく見ている倉持だからこそ、なのだろうか。

もつとエースを頼れ。エースに任せろ。エースだから問題ない。

そんなことを思つてそうで、その為なら平気で何でもしそうではある。

根性があると言うのか、頼られるのに弱い。多少無理してでも期待に応えたいと思う質。それがこの男。

「実際、練習試合でめっちゃめっちゃ連打浴びてたことあつたら」

「あ……」

倉持の言葉で時は遡り、去年の冬。

11月頃のことだったか。二軍から昇格者を決めるということで、1軍対2軍の練習試合をしたことがあつた。

投手は智巳、捕手は御幸。メンバーも普通の試合と変わらず、監督もまあ1軍が楽に勝つであろうと考えていた。

しかし、この男が燃えた。ずるずると五回までに被安打12、7個の四球。三振はゼロ。

お前どうしたの、と言いたくなる炎上っぷりで、五回6失点ノックアウト。疲れが残つてるとかそういうことはなく、単純に負けた。

まあ、五回までに17点取つていた(御幸5点、結城7点、増子3点、伊佐敷2点)為負け星は付かなかったが、それにしてもすごい燃え方をしてた。

一回二回はパーフェクトなだけに、それはかなり意外だった覚えがある。

フオークは平常運転だったが、満塁時の粘りが無い、スリーボールから粘れない、ピッチに弱い、上位打線に打たれる、下位打線には打たれないと、反転したかの様な有り様は、少し御幸も気になっていた。

「……あの時、確か打たせてやれよ、みたいな空気だったけど、良くも悪くも期待に応えんのかな」

「いや、そんなつもりはない」

「つもりはねえからヤバイんだろ」

応援されていると、強い。

期待されていると、強い。

だが、味方に打たれていいよ、とか思われていると弱い。

全く弱点とは言い難いが、『そういう空気』ではないと本気を出せないピッチャーも居ることには居る。

「アウエーに弱いのかもな」

「それは誰でも同じだろ」

そんなことないんだけどなあ、と硬式球を弄くる本人を他所に、倉持と御幸が条件付けを考えていた。

打てるチームとはいえ、エースが突如燃え出しては勝つのは難しい。

この二人からしても、そこらへんの条件付けを考えて解明していききたいという気持ちが強い。

何を置いても、勝つ為に。

「まあ、冬だったからつてのもあるな。多分」

「気温が上がるほど調子上がる変な男だもんな、智は」

秋↓冬↓春↓夏と、調子上がる。

確かにそれはあっている。でも、割りと酷いことを言われている気がしなくもない。

ブツクサ言いながら、智巳はグラウンドを周回し出した。

何よりも、完投できるスタミナを付けるためである。

「まあ、あの時の智にピッチングの神が舞い降りてたのは間違いない。受けててわかったけど、いつになく良かった」

「ストレートで三振取れてたしなあ……」

その時にピッチングの神が依代にしていた男は、ブツクサ言いながらランニングをしている。

「あの時のピッチングに拘るのが、俺は心配だよ。いつもストレートで空振り取れるわけじゃないし、いつも力で振じ伏せられるわけでもない。そのところはどうか考えてんのかつてのがなあ」

「一人相撲になりかねないってことかよ」

「かも、つてこと」

その一人相撲になりかねない男は、ランニングをしている。

因みに智巳の次の先発は、関東大会一回戦。案の定完全回復と調整が間に合わない為、二回戦では誰かが代わりに先発するだろうと予想されていた。

因みに今日は自主練の日。明日に迫った紅白戦に向けて各々英気を養え、とのことである。

片岡鉄心は、監督として大会の優勝を経験したことがなかった。

その為、お祝いと激励を兼ねてということ、休日と言うこともあってOB会に呼ばれてしまっている。

智巳は、肩を休めるように、とのことであった。

「お前ら練習しろよ。三振2個の脚だけリードオフマンと、ミスター自動アウトだろ」
「何も言えねえけど、併殺ロボに言われたくはねえよ」

「……俺も併殺一回叩いたからそこらへんは何も言えないわ。でも智、お前外野の守備がアレだよ」

因みに智巳は二個である。

脚が遅いわけではないが、打球が強いから併殺になる。

磯部式併殺ではなく、坂口式併殺と言うべきだった。

倉持は打撃が巧くない、バントもそこまででもない、三振が多い。

でも盗塁がうまい、走塁がうまい、出塁すれば得点に絡むことが多い。

智巳は安定感がない、守備が下手、併殺多い、怪我しやすい、疲れが貯まりやすい、回復が遅い、下位打線に弱い。

でも三振を結構取る、決め球がエグい、絶好調だとストレートでも三振を取れるようになる、四球が少ない、打撃がそこそこ、広角に打てる。

御幸は守備がうまい、リードがうまい、チャンスに強い、満塁お化け、広角に打てる。でも打撃にムラがあり、走塁もうまくない、チャンス以外だと打たない、チャンスでもランナーためてないと確実さがない。

二年生スタメン軍団四人の内三人は、一芸に秀でている。だからこそ、白洲を除いて欠点が多い。

だから、その欠点を埋めようとしていた。

「倉持は亮さんに粘るコツとかを教われよ。守備は正直、もういいだろ」

「智は守備を頑張れよ。純さんが介護に入ってるから白洲にも負担が掛かってんだぞ。あと、一年生の投手陣に色々手ほどきしてやれ」

「御幸。俺もだけど、お前は打撃の現実性を上げろよ。たぶん俺らの世代では四番打つ

んだし、哲さんに教わってこい」

智巳は倉持に、倉持は御幸に、御幸は智巳に注文をつけ、各々がその課題を克服する
為に動く。

何だかんだ内ゲバを起こしながら、この三人は仲が良かった。

ダイヤのエース

智巳は伊佐敷純を捕まえてノックをしてもらい、二時間程で終えた。

倉持は何だかんだ言って面倒見がいい小湊亮介の元でティーバツティングに勤しみ、御幸は結城哲也と特打。

斉藤智巳、暇になる。と言うよりも、休むことが仕事なのでやることがないと言うべきか。

片岡監督も、割りと過保護なところがある。先発してないのに、投球禁止とは。

いや、それでも少しは投げたのだが、あれくらいでは物足りない。

打撃マシンが打ち出した速球を流し方向に飛ばしながら、智巳は比較的集中力を欠いていた。

智巳が入ったネットに区切られたフリー打撃のケージには、人が見物しに集まっている。

記者も居るし、スカウトも居る。本人はスカウトだと気づいていないが。

彼が今、少なくとも東西東京地区では三年生を差し置いてスカウトや記者が最も注目する投手であることは間違いない。

雑誌の記事の為に、写真を撮っているものも居る。関東大会に向けての特集や、夏に向けての特集。その目玉になりうるスターだと、勘付いているものもある。

まあ何よりも、智巳はシニア時代から知名度が高かった。そこらへんも関係しているのだと思われる。

一通り打ち終えてケージを後にする智巳に、ある一人の記者が声をかけた。

「今日は投げないのかい？」

「はい。肩を休めるのも仕事なので、今日は打撃と守備を磨いて、早々に休ませていただきます。遠方より来られた方々には申し訳ありませんが、関東大会ではご満足いただけるピッチングをお見せしますので、ご容赦いただけます」

割りと取材とかに慣れてるだけに、丁寧に対応してついでに宣伝し、斉藤智巳はバットをケースに仕舞った。

明日は紅白戦。自分には直接関係ないが、関東大会のベンチ入りメンバーと増子透のスタメン復帰がかかっている。

サードの樋笠は守備ボロで打てない為、正直鈍足っぽい見た目ではあるがそこそこ俊足で守備が上手い増子に復帰して欲しい。

あと、何よりも打てる。

被安打4にしても、『ああ、この打球を当たり前のようにアウトにしてた増子さんは凄

かったんだな」と思うことが少しあった。

「智さん、今よろしいですか？」

「暇だよ、俺は」

左肩に担いだバットケースが、肩をすくめるのと同時にユサリと動く。

身長192センチの男がやったにしては、らしきがないコミカルな動きだった。

今の話し合い手であるところの東条は『意外と話しやすい人だ』と知っているから驚かないが、他の一年生が見たら必ず驚く。

それくらい、マウンドの智巳には気迫と威圧感があったのだ。

特に昨日、それを間近で見せられただけに思い出す者は多い。

だから、東条が一人でここに来ていた。

「明日の紅白戦って、2軍対一年生なんですよね」

無言で頷く。

わざわざ監督が一日開けたのは——そりゃまあOB会に呼ばれたと言う物理的理由はあるだろうが——一年生たちの動きを見ているのだろう。

2軍と言っても、弱小から中堅校にかけてのスタメンくらいの实力がある。

環境に適応できなかつたり、更に選抜された世界についていけなかつたりしているだけで、普通に中学時代は四番だったとか、エースだったとかいう輝かしい経歴の持ち主

が多い。

しかも、もう後が無い者が居る。そこに欠ける執念は尋常なものではないだろうと思われる。

「俺としては、やるからには勝ちたいと思っっています。でも、勝てないでしょう」

冷静に、東条は実力を測っている。

一年、ないしは二年。共に過ぎてきた仲間と組むのと、会って一ヶ月の仲間と組むのでは天と地程の差がある。

信頼が違う、連携が違う。そして何より、理解が足りない。

「勝たなくても、ただで敗けるのはごめんです。監督が一日開けてくれたのも、情報を集める為だろうと考えています」

「ふむ、それで？」

正しく意図を読み取っているな、と少し驚く。

監督はかなり善人だが、顔が怖い。何もこの試合は2軍相手にタコ殴りにされて厳しさを知れというものではなく、勝ち目があるもの。

一年生も構わず抜擢するという意思表示でもある。でもまあ、そんなことは外見から見れば考えていると思われなわけ。

「智さんは、一年前の紅白戦で投げられたようですね。無四球無安打の完全試合ペース

で」

「敗けたけどな」

「いつものパターンですよ。でも正直それはどうでもいいんです」

いつものパターンとは先発が好投、からの後続が燃えるのパターンを意味する。

もう説明の必要もないことだろうが、一応の補足である。

「……まあ、そうだな。で、何が知りたい」

「2軍の打者の情報を。どうやって、智さんたちは戦ったのかを。新入生の中でも勝つ気がある奴等が、諦めてない奴らが集まっています。凶々しいお願いですが、教えてください」

「そうだな……ま、いいよ。御幸を呼んでくるから待つてな」

そう言つて東条を日陰に押し込み、頼れる四番の元へ向かいながら、考える。

かなり少ないとは言え一年生の投手候補生を全員見ると言う都合上、東条だけが投げることが不可能。

勝てないでしょうと、東条は言った。冷静な分析である。当たり前だ。だから、最小限にとどめて一矢報いようとしている。

東条たちは勝てない。そもそも東条自身も実力が足りないし、何よりも高校レベルの捕手が居ない。

(まあ、居たとしてもよつぼどな好投を見せない限りは、7回は保たないけどな)
自分は完全に2軍を圧倒していたから、スタミナを測ることも兼ねてそこまで投げられた。

あと、まともな投手が川上くらいであったのも大きい。

だがそれは、絶対的エースが居なかつたから。今足りないのはリリーフであつてエースではない。

そして、誰であろうとエースの座は譲る気はない。

だから、平等に見られるであろうと思われる。

「哲さん、お疲れ様です」

「ああ、おつかれ」

頬に滴る汗を拭つて、結城哲也はバットを置いた。

隣は御幸が居る。相当疲れているが、まだまだ元気はありそうだった。

「少し、こいつ借りていつてもいいですか?」

「投げないのであればいいぞ」

「投げませんよ。一年生たちが色々頑張つてるんで、ちよつと手助けしてやろうと思ひまして」

フツと笑つて、結城哲也は再びバットを手に持った。

「わかった。俺からは皆に言わないでおこう」

フエアではないからな、と。

元々かなり不利な一年生側を慮って、主将は言った。

目の前のエースが一年生の時にやったことを、結城哲也は知っている。

ふと思ひ返すと、少し懐かしい。あの頃から既に一年が経ったのだ。

無敗のエースは敗けを経験し、自分はまさかのキャプテンになった。

たった一年で、こんなにも変わる。

「お前にとつて、ここでの初めてのの後輩だ。力になってやれ」

「勿論です、哲さん」

ぐっ、とお互い拳を突き出し合う。

この二人、なかなか馬が合うらしい。

「ほら御幸、行くぞ」

「はいよ」

キャッチャーの時のスポーツサンングラスではなく、平常時の黒縁メガネに、ユニフォーム。

そんな御幸を連れて、智巳は東条の元へと帰った。

「おまたせ」

「同上。で、一矢報いたいんだって？」

さつそく本題に入った御幸は少し前のことを考え、配球を思い出し、気づく。

自分はあるまり二軍のことを、知らない。と言うか、如何に既存のメンバーで勝つかを考えていたから下に目を向けていない。

倉持ならば知っていることもあるだろうが、そういえば隣のエースはどうだろう。

(知ってる?)

(野球をやっていて、お前にリトルで捕手奪われたのと怪我以外で控えに落ちたことがないんでな)

(だよな。俺もない)

斉藤智巳は、突き指と捻挫と骨折、あと御幸。

御幸一也は、あまり怪我をしない。クリスとのレギュラー争いに関してもどちらが基本的なスタメンマスクをかぶるかという争いであつても智巳が投げるときはマスクをかぶっていた。

怪我しないのも得難い才能。マスクを被り続けることも得難い才能だろう。

目を合わせないアイコンタクトでそれとなく互いの意図を汲み取り、二人は考えた。

青道高校の二軍は、一般的な中堅校レベル。監督としては二軍の中で傑出した打者や投手を二軍から漁るとともに、新入生の中で『一般的な中堅校』相手に満足行くピッチ

ングができるのかを見るつもりに違いない。

(どうする?)

(二軍だろ。普通に投げれば大丈夫じゃないのか?)

(まあ、注意すべきは増子さんの一発くらいだしそれはそれでいいんだけど)

増子透はまだ二軍に居る。自分を見つめ直し、打撃を鍛え、守備を磨いて一軍に合流する日を待っている。

精々強豪校レベルなのは、その増子だけ。後は似たりよったり、どんぐりが背を比べている光景に似ている。

どうするかなー、と互いに考えつつ、二人は東条に案内されてBグラウンドに来た。

ここでは主に2軍の選手たちが練習している——のだが、今日は一軍がAグラウンドをあまり広域にわたって使っていない為、2軍の選手にもAグラウンドの使用が許可されている。

意識を高く持つ為にも、設備の面でも、2軍の二・三年生はAグラウンドに押し掛けられてきた。

Bグラウンドに居るのは一年生くらいだが、この場合はそれで良い。

話(ただし目も合わせていないし言葉も発していない)が纏まらずにどうするかな、と考えているエースと正捕手を連れて、東条はBグラウンドにやってきた。

「やあ、一年生諸君。試行錯誤お疲れ様」

軽く入った智巳の一言に、お疲れ様ですっ！、の大合唱。

昨日の鬼神が憑いたかのようなピッチングを見ただけに、その緊張は固い。

彼等一年生は、全員が昨日の試合応援席に居た。強制参加であることもあったから練習をやめざるを得ずに来た者も居たし、純粹にスタメンの活躍を見たくて来た者も居た。

彼等は、二回が終わった時点で敗けたと思った。

取られた点は、8点。そうそう返せる点差では無いし、突き放される恐れすらある。

だが、目の前に居る青道のエースと、大活躍の打者陣の中にあつてひとときわ輝く活躍をした四番がそれを変えた。

エースが18球で六者連続三振を為した時、点を取られる予感はなくなった。

四番が逆転打を打った時、敗ける気配が無くなった。

このチームは最強だと、素直に思えた。

端的に言えば尊敬すべき先輩から、尊敬する先輩に変わったわけで、これは御幸にとつてのクリス、智巳にとつての哲さんに相当する。

因みに前者はエースの差で試合には勝つたものの捕手としての技量で敗けを感じたから、後者は初めてフォークを打ち返してきたからという『敗北の経験』に起因する。

閑話休題。

「まあ、そこまで畏まらなくてもいいよ。先輩後輩の間柄だけど、その前に迷惑を掛け合うチームメイト同士なんだから、仲良くやっていこう」

智巳がそう言うが、緊張は取れない。

緊張が取れているのは少し慣れた——と言ってもマウンドの智巳にはまだ慣れていない——東条と、後一人。

「お前、名前は？」

「……降谷暁」

御幸が問う。

一年生が答える。

マウンド度胸の有りそうな奴だ、と思う。正直言つて青道高校の投手陣でマウンド度胸のある奴はエースくらいなので、磨けばモノになるのではないか。

少し考えて、御幸はAグラウンドに予備としておいてある自分のキャッチャー装備一式を持ってきて付けて、投手適性を認められた人間の球を受けていく。

東条、降谷。今回行われた片岡鉄心・クリスによるかなり厳しめの試験に合格した者はこの二人だけ。

沢村は投手適性試験の第一関門、遠投でカーブを投げると言う快挙を成し遂げた為、

躓き、適当に外野手に振り分けられている。

そして、練習にも参加させてもらえていない。タイヤを引いてグラウンドを走る見習い部員扱いである。

推薦で来たのに。

「打撃陣は投手の特徴がこのノートに書かれてるから頭に入れること。捕手と投手二人は俺のところに来い。」

智、打撃陣はヨロシク」

智巳が高校通算17号、御幸が18号。

高校通算打率は前者が3割5分。後者が3割2厘。打点は30と45。

打撃能力に関しては片岡監督の起用法から見るとあまり違いはない。

チャンスに強いのか、並か。両者にあるのはその差である。

「で、お集まりの皆さん方。ポジションと得意コース、苦手コース、得意な球種、苦手な球種。これを言ってもらいましょうか」

智巳、謎の敬語。

どうやら先輩としてではなく、教える立場に立つところなるらしい。

単純に緊張しているのかもしれないから、真相はまあわからない。

皆が逡巡する中、沢村栄純が一步踏み出して猫目になりながらも口火を切った。

「チーフ！」

「あ、沢村栄なんとかか。お前、投手なのに何で野手に紛れてるの？」

エースをねらえ！

沢村栄純、外野手になる。

そしてその前に、チーフって何だ。

そう言う前に、その疑問が先に出た。

この男、確か投手だった筈である。御幸がそう言っていた。

ぐぬぬ、と言う顔をしている沢村をチラリと見て、金丸信二が補足する。

「こいつ、遠投でカーブ投げて外野手に振り分けられてるんですよ。と言うか、遅刻してきて謝んなかったおかげで部員ですら無いですし」

「まあそれは御幸が全部悪いからいいとして、そうか……」

御幸が悪いとはいえ、走った後に謝らなかつたのはいただけないのだが、可哀想と思わなくもない。

しかし、そのような厳しい環境に——例えばシニアとか——に身を置いていなかったのならば、習慣としてなかつたのだろう。

「沢村、お前シニアとか、リトルとかに入った経験は？」

「二度も無いッス」

「ふうん、まあ、ならいい。投手としてのイロハは後で俺が教えようか？」
えっ、と言うような空気が流れる。

シニアでは全国一、現在は関東ナンバーワン右腕なエース直々の申し出である。
断るのもアレだし、受けても付いていけるかどうか不明。

「中継ぎとしての教えなら、いらないうッス。俺はエースになる為にここに来てるので」
いっそ金丸の言葉に対して開き直ったのか、沢村栄純は少し不貞腐れたように言い切った。

「ほう」

沢村のバカ、と言いたげな空気が周囲に満ちる。

相手はエース。しかも周囲の信頼を勝ち得た、一人で試合の流れを変えた名門に相応しいスーパーエース。

その人に対して『エースを奪う』と言っているのだから、肝が太い。

一方、智巳はここまで堂々とエースの座を奪うと宣言されたのはかなり久しぶりになる。一年の時の丹波さん以来だから、1年ぶり。

だが、丹波さんも最近伸び代あまりが見えはじめた。

少なくとも、あと半年で自分を超えるエースにはなれない。

だが、この向こう見ずな馬鹿の才能を自分は知らない。

「わかった。エースとしての経験を、君に教えてあげよう。奪えるなら奪ってみるといい」

「有り難うございます、チーフ！」

清々しい程に明るく、沢村栄純は笑った。

とは言ったものの、智巳はここに居る皆に打撃を指導しなければならぬ。

「では、俺が打撃を教えている最中にやることを与えよう」

「はい」

ごくりと、唾を飲む。

なんだかんだで緊張はしているらしい。

「エースとは何か、考えてこい」

「はい？」

「答えは、一時間後な。それまで何をするのも勝手、どこに行くのも勝手、一時間後に答えを用意して戻ってこい。はい、はじめ」

結構な無茶振りである。

どんな投手を目指すのか、それが決まっていらないのにどんなエースになりたいのかなど出せようもない——とまでは言い切れないが、明確なイメージを抱く為には少々経験の浅さは否めない。

だからこそ、『エースとは』を問うた。

因みに智巳は、参考としてもこれに答える気はない。

「さて、打撃陣の諸君。我が青道高校の投手陣の説明をしよう」

どうすりゃいいんだ、と言うような沢村をおいて、説明に入る。

まず、二軍落ちした丹波。

大きく縦に割れるカーブと140キロ程度のストレートを持つ本格派。メンタルに問題を抱えている。

変化球に多彩さはないもののカーブがコースに決まればそうそう点を取れる投手ではない。

しかし、時折ストレートが甘く入る。そもそも論として球威のある方ではないので捉えられた場合、高確率でスタンドまで運ばれる。

「所謂一発病と言うものだ。そこで、攻略法。カーブは全て見逃せ。球数を投げさせて甘い球を待ち、痛打する。制球力もある方ではないから、『待つ』。このことが攻略の鍵になる。ただし、決め球は基本的にカーブだから、最初の三回はいい様にやられるだろうけど、そこらへんはいい。兎に角、カーブには振らないこと」

「決め球がカーブなら、三振取られるんじゃないんですか？」

「野球というスポーツはコースに決まらなければストライクはコールされないのよ」

つまり、大きく縦に割れる見た目に騙されて振らなければ案外ボールになる、ということ。

一先ず、一年生たちはここで少し安心した。

前の試合で見たとおり、化け物ではない。攻略法を知っていれば攻略自体は可能な投手だと思える。

「ただし、決まれば当然——つまり、甘く入ってもストライクがコールされるのでアウトになります。その場合はまあ、臨機応変に。二巡目からは振っていいよ」

「空振りはダメなんですか？」

「そしたらあの人調子に乗るから。俺の場合は見逃し三振の方が征服感があって好きだけど、丹波さんは空振り派なんだよ。見逃したというより、見切った風な雰囲気も漂わせるとなお、よし」

ここで言う調子に乗るといえるのは、悪い意味ではない。尻上がりに良くなっていくということである。

要は、嗜好の問題だといえる。

智巳は反応もさせず殺すことを好み、丹波は反応させた上で裏を掻き、殺すことを好む。

御幸はどちらも好きで、向井太陽は後者。智巳も勿論、後者も嫌いではない。

「次、川上」

川上憲史、通称ノリ。メンタルに問題を抱えている。

変化球は智巳が高速スライダーを覚えたのと同時期に習得したシンカーが駄目だった為、スライダーのみ。丹波ほど必殺のキレはないが、制球力は智巳並に高い。

低めの制球では智巳よりよく、スタミナもそこそこ。しかしメンタルの関係上球が散らばることがあり、必然的に四球とストライクを取りに行つた甘い球を痛打されることが多い。

「ノリの強みは何と言つても低めの制球。だけどそれ以外は微妙。決め球もないし、攻め過ぎた結果の四球もある。ストレートの球威もないから、当たれば飛ぶ。軽いつてほどじゃないけど、重くはないからな。あと、九回とか、勝敗が決する寸前に弱い。プレッシャーに弱いんだらうけど、大逆転劇もできなくもないよ。打力あればの話だけど」

智巳は、自分にも他人にも評価は厳しい。面と向かつて言わない優しさは持ち合わせているが、認識はする。

マウンドでの振る舞い、礼儀、活躍、いつでも登板する男気。

それらを兼ね備えた稲尾和久こそエースの理想、と思つている彼にとつて、怪我しやすい・安定感がない・回復力がない・疲労が溜まりやすいの四拍子が揃つた自分は評価に値しない。理想のエースにはなれない。

自分はエースの理想を追い求める者として理想と比べ、他の投手は一投手として見る。

御幸もそうだが、自分に求めるハードルが高いのだ。

無論、妥協を知らないわけではない。現に智巳が理想のエースになれないのは体質的な問題なのでどうしようもない為、彼は『ならば』と新たなエース像を見つけている。

「斎藤・桑田・槇原の先輩リリーフ三人衆と俺と同年の川島については容易に攻略が可能なので、説明を省きます。

はい、質問」

「先輩は、先発は誰でくると思いますか？」

「それは自分で考えましょう。後、これから俺に出来るのはそれぞれの決め球や球速に合わせてピッチングマシンを設定して、打撃に注文をつけることくらい。情報は与えただけ、実地での攻略は自分でやりなさい」

一年の代表役なのか、金丸の投げた問いをそのまま投げ返した。

智巳としては丹波であろうと思われる。あの敗戦から色々と悩んでいるようだし、それまでは好投していた。

片岡監督としても、その悩みの内容を鑑定したい、そして好投していた実績を買って二番手にしたいだろう。

エースには絶対的な存在が君臨しているが、あとはガバガバの廃墟状態なのが現在の青道高校。だからこそ、一年生の付け入る隙が生まれていると見れば総合的に見るとまあ悪くはない、のかも知れない。

各々が投手のデータを頭に入れて設定されたピッチングマシンが吐き出す球を相手に打撃練習をする。

やつてもあまり意味はないが、やらないよりは格段にマシ。

「もう少し待ってから素直に立って打ってみたらどうだ」

「素直に、ですか？」

「そう。脚で待つんじゃないくて、身体全体で待って、スイングだけを直球のスピードで開く感じで。自然体で待って、脚を拗じらずに前に出す」

金丸の打撃フォームに少し注文をつけていると、投手二人と捕手二人を連れて、御幸が帰ってきた。

「智、説明終わった？」

「終わった。打撃に関してはお前が面倒みるよ」

智巳は典型的なピッチャーを押し付けられたタイプで、全体的に身体能力が高い。

その打撃理論と言えば、ストレートを待って、来た変化球にフルスイングを合わせるという大雑把なもの。

恵まれた身体能力と天才的な反射神経で何とかやっているようなものだから、参考にはなるべくもない。

御幸も上記2つに加えて得点圏での異様な集中力を持つているが、何とか率を残す為に当てる打撃も習得しようとしている為、理論には詳しい。

一方、結城哲也は高校で開いた天才と言うべきであろう。

智巳のように生まれながらに体格に恵まれたりはしていないが、鍛えられた身体と研ぎ澄まされた反射神経と集中力で青道高校歴代四番の中でも最高峰のスペックを誇る。

打撃に関してまとめるならば、身体が天才だが投手故に努力が足りなく、守備が下手な投げる人。

努力をリードと守備に全振りしているが故に打撃に関しては才能だけで打っているチャンスお化け。

守備が巧く、努力と才能を打撃に傾けたガチビルドの四番。

投げる人が、体。性能に耐久力がついていかない、諸刃の剣の身体能力。

守備の人が、技。敵を攪乱し、味方を信頼させる技術力。

打撃の人が、心。敵を圧倒し、味方を引っ張る精神力。

それぞれ特徴のある三人が青道高校才能ランキング一位を争っている形になっている。

で、技術力の人はと言えば。

「いや、それなただけだよ」

球を受けていたのだろう、キャッチャー装備を付けたまま、御幸は智巳に向かつて手を合わせた。

「降谷と東条、あと沢村。この三人とお前で一打席勝負してくんない?」

その方が多分、一軍のレベルを知れる。打撃陣も、投手陣も。

紅白戦を情性ではなく、二軍入りのためでもなく、一軍入りの為に行おうとしている一年生たちに見れば、レギュラーの実力を知る好機。

御幸の言わんとすることを察し、智巳はわかった、と頷いた。

「お前ら、これから一軍の七番バッターと投手陣の一打席勝負をする。智が用意し終えるまでにデモンストレーションで投げさせるから球種を頭に入れとけ。投手陣はどの球をどう投げたら打たれるか、身を持って知れよ」

ニヤニヤと、悪そうな笑みである。

どうやら無用な自信を粉碎しようとしているのは間違いない。

智巳は肘のなどにつける防具を取りにAグラウンドに向かう。

その、途中。

「チーフ!不肖沢村栄純、参りましたあ!」

「……お前、タイミングいいな」

悪いとも言う。

どこに行ったかは定かではなかった沢村が、Aグラウンドからやってきた。

「エースとは何か、ですよね」

「そうだ。言ってみろ」

全く歩く速さを緩めない智巳の歩幅は、背丈の関係上沢村より大きい。

やや小走りになりながら、沢村は智巳の若干前を歩き、言った。

「わかりません！」

前を遮り、頭を下げる。

流石に智巳も空気を読み、止まった。

その答えは悪くはない。下手に適当に、おためごかしにエースとは何かを語られるよりは遙かに。

だが、これで終われば二流である。

「それで？」

「俺は、前の試合で同学年のエースを見ました。エースが登板した時に、チームのみんなが勝てると感じてた。だけど、それを吹き飛ばした人が居た」

その人がエースだということはわかるが、エースとは何かということはわからない。

だが、少し悩んでわかるほど軽いものではないということとは、わかる。

「でも、なりたいたいエースは居ます。チームから絶対的な信頼を受けて、勝利に導くエース。そんなエースに、俺はなりたいです」

新星たち

「合格だ。まあ、俺には何の権限もないが、お前はエースに向いてるよ」

沢村栄純は、その言葉に思わず張り詰めたものが切れるのを感じた。

やるのが一番楽しいから、プロ野球も見えていない。シニアやリトルも、高校野球も見えない。

赤城中学でたった一人の投手として投げてきた沢村は、マウンドに味方が立っているのを見るの自体が珍しい。

そんな彼がはじめて見た、エース。

マウンドに立つエースは勇ましく、頼りがいがあつて、そして何よりかつこよかつた。

まあ、少し威圧感が漂っていて怖くもあつたが、それでも沢村は心から応援できた。

青道高校のエースになると約束して、故郷の仲間に見送られて、留学してきたこの場所、自分以外がエースとして立っているところなど心から応援できるとは思えなかつた。

それはどこかに仲間たちに対する忸怩たる思いと、自分に対する情けなさが去来する

から。

だが、無心に応援できた。

だから、認められたのだ。この人が今のエースなのだ。

尊敬と、対抗心と、憧れと。

そして何よりも、いつかはそこに自分が立ってみせるという投手としてのプライド。

「チーフに追いつけ追い越せ、ガンガン盗ませていただきます！」

「マウンドでの振る舞い、変化球、投手としての心得、知りたいことがわかったならばいつでも聴きに来い」

そう言う智巳には、どこか年長者らしい余裕がある。

だが彼は、大人気ないほど本気である。誰であろうがマウンドは譲らない。

中継ぎエース？二番手エース？

ふざけるな。エースは先発で、ただ一人しかありえない。

自分はそれになるし、それはこれからも変わらない。

エースは、チームの中でただ一人。四番が一人なように、濫用していい言葉ではない。

「まあ、後輩だからと譲る気もないが」

「こつちも、譲られる気は無いッスよ」

奪いますから。

やってみろ。

無言の内に言葉を交わし、智巳はヘルメットと防具をつけて元来た道を引き返す。

「そう言えばお前、監督に謝っておけよ。エースになることはこれから次第だから誰であらうと不可能じゃないけど、前提としてチームに投手として認知されなきゃ無理だぞ」

「そ、それは、それを言ったらおしまいよ、と言うやつでは……」

「おしまいの前にはじまってないだろ」

ぐうの音も出ない正論に黙った沢村を後ろに連れて、智巳は進む。

一年生ピッチャーの球を打ち砕く為に。

「と言うかチーフ、そのバット、前の試合で使ってた奴じゃないでしょう」

「立ち直り早いな、お前。いや、そうだけどね」

黙らされて一分も経っていない。脅威の回復力に仰天である。

「不肖沢村、精神的なタフさが一番の売りだと言われております！」

「ほーん」

そりやまあ、エースの先輩に向かって、意識とはいえ『エースになる為の投球以外はいらぬッス』と言う奴が、精神的にタフではないわけもない。

「チーフ、めちやくちや適当な反応ですな！」

「お前、周りから騒がしいとか言われない？」

「元気だけが取り柄だとも言われております！」

元気だなあ、と思う。

ここまでの元気さは、自分にはない。しかし、多分暗い方ではないと思う。

周りの人を見渡してみても、哲さんは無口、亮さんは容赦が無い。東条はおとなしい。

御幸は御幸と言う性格なので、説明を省く。

「チーフはこれから何をなさるのですか？」

「一年生ピッチャーの鼻っ柱を折りに行くのよ」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべた智巳に、沢村はビクリと怯んだ。

結構珍しいことである。

「それはこの不肖沢村も——」

「外野手が何を言っておられるのやら、わかりかねますね」

「敬語?!」

「冗談だ。周りはともかく、俺は投手だと認識しているから、キツチリ折ってやるよ。周りはともかく、俺は投手だと認識しているからな」

ちらりと沢村を見た後、智巳は敢えて視線を外してもう一度言った。

「周りはともかく、な」

「ややや、三回も言われるとはつまり、まず周りを認めさせろ、と?!」

「当たり前だろう。何事も一歩から。練習をキツチリこなし、日々の努力で自分の価値と実力を認めさせろ」

少なくとも俺はそうしてきたぞ、と言う言葉を沢村は律儀にメモにとった。

どうやら、事前に準備していたらしい。

「で、質問に答えよう。これは木製だ」

「金属は使われませんか?」

「……妙に似合わない敬語だな、お前。まあ、答えは『使う』だ。使うけど、木製でも試してみる。そういうことだ」

なるほど、と納得してみた沢村が黙り、目的地についた。

Bグラウンド。結構ダラダラと来たおかげで、御幸が下級生をしごいているところを見ることができる。

「沢村、御幸が色々してる間にこれ読んどけよ」

「データツスカ」

「そうだ。敵を知って、己を知って、どうするか考える。これが戦いの基本」

「なるほど」

と御幸が言っていました。

サラツと他人の言葉をパクりながら、智巳は遠目に練習風景を見つめる。

Aグラウンドは、活気があった。だが、Bグラウンドの方が活気がある。

Aグラウンドには、切羽詰まった感じはあったが勝とうという気持ち薄く見えた。

Bグラウンドには、切羽詰まった感じは薄い、勝とうという気持ちはあるように思える。

(どう転ぶかな)

実力では二軍だが、野球というスポーツは実力では測れないところで勝敗が決することもある。

特に一戦だけならば、尚更。

「そう言えば沢村、お前球種は？」

「ストリートだけツス」

「あれ、遠投でカーブ投げたんだろ？」

「いや、あれは何か曲がったと言うか……カーブを投げようとして投げたわけじゃないツス」

ふーん、と。

智巳は少し見直す思いで、隣りでデータをまとめたノートを読んでいる後輩を見た。

御幸をして『面白い球』と言わせしめたことはあるらしい。

「お前、ちよつと見込みあるかもな」

「え、今までは!？」

「メンタルは認めてた。それ以外は未知数だから低く見積もつてたけど、お前はポテンシャル自体は高いよ」

予想通りなら、だけど。

結構重要なそのことは言わずに、智巳は自分の右肩を見た。

（御幸が敢えて投手を引つ張つていく時に無視して俺のところには押し付けたってことは、似たりよつたりな特徴をしてるってことか）

智巳の場合、肩と手首の関節の可動域がずば抜けている。特に手首。

これが原因で彼は、普通の人間には投げられない理不尽なフォークと、もう一つの変化球を連発できる。らしい。

御幸曰くホークスに似たような投手がいたらしいが、なるほど、フォームは似ていた。因みに御幸は南海ホークスに好きな選手が居て、それ繋がりソフトバンクのファンである。

セリーグならばヤクルト、とも言っていた。本物のスライダーを投げる投手が好きで、故障してしまつたからもう二度と投げられないらしいが、未だ見返すほどに未練があるらしい。

自分としては、酷使の所為で故障したんだから仕方ないじゃん。恨むなら酷使を恨めよ、と言ったが、酷使した側も好きな選手だったらしい。もう昼ドラである。

本物のスライダーがさあ、本物のスライダーがさあ、とうるさいから北川博敏の伝説の瞬間にまでビデオを飛ばしたこと数知れず。隣の実況・解説・ヤジ・観客を一人でもなす捕手がうるさく、未だともに本物のスライダーは見えていない。

と言うか本物とはなんぞや、と実際見たことがない智巳は思う。彼は楽天——と言うか近鉄のファンだから。

話は飛んだが、彼としてはスライダーは本人がそう主張すればスライダーだろ、と思わないでもない。

高津臣吾のシンカーはメジャーではサークルチェンジとかチェンジアップとか言われていた。だが、高津臣吾とシンカーだと言えばシンカーだろうと思うし、本物のシンカーではないとも思えない。

上原浩治もスプリットとフォークの違いは投げる時の感覚と言っていた気もする。

稲尾和久のスライダーも実際はカットボールに近く、シユートはツーシームに近かったとか。

要は、言ったもん勝ちだろうと言うのが彼の持論。実際智巳としても高速フォークをスプリットと言われて少し気に食わなかったわけであるし。

閑話休題。

「よし、行くか」

「オッス」

謎の体育会系アピール全部載せな沢村の返事を受け、智巳は二、三回素振りをして歩き出した。

「やることやつてきたよな？」

「ぼちぼち」

御幸の色々な意味が隠された言葉を正確に把握した上で、頷く。

沢村栄純（外野手）、投手になる。その第一歩は既に踏み出せたような気もしていた。「見てみてどうだった？意外とポテンシャル高いだろ、そいつ」

「磨けばな」

わざと周りに聴こえるようにした音量に付き合ってやり、何もわからずにいる沢村に囁く。

「一先ず今は、投手として練習していいってことだ」

「……マジっすか？」

「マジ・マジ・マジ・マジローだよ。ほら、肩作れ。受けてやるから」

果たして今、そのネタがわかる人間は居るのか。

いや、確かに自分たちが十代になるかならないかの子供の頃にやっていたけれども。「あつ、投手陣は智巳に打ってもらえよ。捕手は狩場な。球審は金丸がやれ。後の打撃陣も見たいなら見ていいぞ」

一年生三人が返事をして、それ用のスペースに移動する。

投手の前には、ライナー防止用のネット。打席には智巳、ホームを守るのは狩場航。

唯一降谷の球を前に落とせると言うことで採用された一年生軍団の正捕手。

素振りをやめて集まりはじめる打撃陣と、どこからともなく嗅ぎつけたのか許可を得て入った大人たち。

スカウトか、或いはOBか、或いは記者か。

観客の目線を集めて、斉藤智巳は打席に立った。

天賦の才

「最初は誰が来る？」

「………僕が」

降谷暁。情報はない。

自分ほどではないが、身長が高かった。

「よろしく」

打席に入る時にそう声をかけると、ペコリと頭を下げる。

よろしく、と言うことらしい。

（沢村を見た後だと、あれだな。まあ、あいつがフレンドリー過ぎるといえばそうなんだが）

めちやくちやうるさい奴を見たあとに少し物静かな人間を見ると不安になる法則、或いは、いけすかない奴が頬にしもやけを作っていた時に、ひよつとしたら良い奴なのか
もと思う感覚。

そんなものに囚われた智巳は、バットを掲げて自然体で立つ。

降谷の投球モーションがはじまる。

スリークオーター気味のオーバーか、オーバー気味のスリークオーターか。

そんな中庸のフォームから、第一球が放たれた。

球が大きく見えると錯覚するほど、浮き上がっている。

見るからに重そうで、ノビも素晴らしい。

(……なるほど、逸材だ)

悠々と見逃した智巳を、狩場航は信じられないように見た。

確かに高めに外れていたが、それを補ってあまりある威力がある。

高めの球に手を出してしまう。

手元でノビ、角度があるが故に思いつ切りボールの下を空振りしてしまう打席に立つ

エースの持つストレートとはまた違った強さのある直球。それを、一球目から見逃す打者が居たとは。

「金丸、ボールだよな？」

「はい」

防具をつけて後ろで球審をしている金丸が下した判断は、ボール。明らかに高めに外れている。

「これ、四球あり？」

「なしです。御幸先輩が、あいつならさっさと選べるだろうから、無しだと」

「あー、そう。ホームランかヒットまでってことね」

打者の癖にささやき戦術をかけていくこの男は、身体能力お化けである。

コントロール重視のめんどくさい駆け引きにはゲッツー叩いたりと安定感が無いが、速球派には滅法強い。

なぜなら、身体能力と身体能力の殴り合いだから。どちらの身体の反射神経が優れているかを競うのが、速球派。

筋肉と筋肉、神経と神経の真つ向勝負。そこに理屈はあんまり介在しない。

構え直して、第二球目。

またも高め外れて、ボール。

「金丸さん」

「……ボールです。何か、すいません」

謎のさん付けに妙な威圧感を感じ、何も悪くない金丸信二は神妙に謝った。

「いや、いいんだけどさ」

これ、待球作戦に弱いのではないか。選球眼がいい、哲さんとか亮さんとかならば簡単に歩けそうに思える。

あとの話になるが、この智巳の思いは的中することになった。

振りかぶって、三球目。

「ストライク！」

思ったよりいいコースに来て面食らって、手を出せなかった。

低めギリギリ。制球力があるのか、ないのか。つまりは単に荒れ球なのか。

その判別が難しい。と言うか、この荒れ球を捕球する狩場航も中々大した奴だろう。

「ワンストライクです」

「うん」

頷いて、構える。

やっと入ったか、と言う気持ち強い。

（戦力になるのはコントロールをつけてから、だな）

このままコントロールが悪いと、好投していても四球連発からの乱調、スタミナが切られて被弾が容易に想像がつく。

巨大な武器を持っているが、振り回すだけしかしていない。振り回すにしても、体力がない。

降谷暁を、斉藤智巳はそう見極めた。

（ただし――）

ストレートだけを見るならば、屈指の物がある。

ただのストレートに、空振りする。

思ったより速い。自分のストレートを打ったことがないからわからないが、手元で伸びるとはこういうことを指すのだろう。

だが、ここで打たなければ一軍とは呼べない。

自然体で立ち、降谷の投球モーションがはじまると同時に脚を上げた。

（狩場は緊張している。それまでのストレートを受ける時のそれではない。つまり、本気を出していないかったか、変化球か）

だが、前者はないだろう。一球目に手を出さなかったことに対して驚いていたのだから、ストレートは全力のものであるの見るべきだ。

ならば、変化球。御幸が携わって会得したものならば、下方向。

このストレートそのものを活かして変化球にするならば、十中八九――

「――縦スラだろうよ」

木製バットのスイングに、下へ逃げようとしていた硬式球が潰された。

アッパー気味のフルスイングでまともに叩かれた打球は、グラウンドの外へと消えていった。

（あー、よかった。これで縦スラじゃなかったら不覚つてレベルじゃなかったぞ……）

下方向の伝道師・御幸さんありがとう。

ここは身体能力お化けの面目躍如。恵まれた体格、圧倒的なパワー、反射神経の三つ

を駆使し、コツコツと使い始めていた木製バットでホームランが確定される程のアーチをセンターに飛ばす。

ぐんぐん天に伸びて落下し始めた打球は遠投用のフェンスに当たりは、あっさりとグラウンドに落ちてきた。

ここで暇している（と、無事は名馬主義の智巳は思っている）八人程のスカウトと、おなじみの記者が感嘆の声を漏らす。

（暇なのだろうか）

それか、新入生に金の卵がいるかどうか見に来たのだろうか。

だが、見てくれたのは嬉しいことである。社会人野球に対するいいアピールになるかもしれない。

大学に進学した後も野球をやって、社会人野球にでも入れたら最高だな、と思っっている智巳の野望は案外ちゃんまい。

「……もう一回」

よほど悔しかったのだろう。

目に見えるようなオーラを漂わせながら降谷暁は再戦を求めた。

次は一番自信があるストレートで、降谷は勝負するつもりだった。決め球で再戦を、と言う投手の意地。

「ダメだ。高校野球に次はない。一瞬に妥協した己を悔やめ」

その意地を理解しつつも、智巳は敢えて首を横に振った。

次の試合でサヨナラ負けを喫した男が言うと言わなければならない。

降谷もこれに納得したのか、オーラは納めずとも引き下がった。

「次は」

「俺が行きます」

東条秀明。シニア全国大会準優勝投手。しかし、高校野球とシニアには大きな壁があるとと言う。

その壁を何の苦もなく粉碎した天才が壁として、今や彼の前に立ちはだかっていた。

「よろしく」

「よろしくお願いします」

挨拶を交わし、打席に入る。

あくまでも、自然体。

(……………ふう)

何を投げるか。

もう決めていることを改めて復習して、腕を振りかぶる。

第一球目。

「チェンジアップか」

姿勢を崩されて空振りをした智巳の眼には、まだ降谷の剛速球の影が残っている。うまく利用したな、と言う思いが強い。

「勝つことが第一ですから」

「その通り。野球は思考のスポーツだ」

自分では投げられない降谷の剛速球を利用して、エグいほどに緩急をつける。

二番手を志願した理由はそこにある。

それほどまでに、最初のストライクを空振りで奪えたのは大きい。

（次の球は見てくる筈だ）

早打ちが失敗すれば球を見る。

選球眼に自信があるからこそその打撃方法だが、ワンストライクを取れさえすればツーストライクに追い込むのは簡単。

低めいっぱい、スライダー。

横に進みながら斜めに落ちていき、キャッチャーミットに収まった。

「ストライク！」

手を出しても良かったが、詰まっているだろう。木製ならば尚更。

得意とする力に対して、技で来る。流石は準優勝投手といったところか。

次に投げられたのは、縦のカーブ。

覚えが早いのか、それなりに使える球になっている。

「ボール！」

だが、制球は定まっていない。低めに外れてワンボール。

次で決めると、東条秀明は決めていた。

投げられた球が、カーブ特有の浮かび上がる軌道を描く。

（カーブか）

安直だな、思わないでもない。

縦のカーブから、大きく曲がるカーブ。

下方向がない東条からしてみれば縦のカーブが下方向の代用品なのだからそれもあ

りかと思う。

（が、外れる）

カーブの軌道ならば、間違はなく外れる球だった。

だが、その球はまるでスライダーのように激しく斜めに落ちる。

「ストライク！」

ストライクカウントが三個。バッターアウト。

見逃し三振である。

「してやられたよ」

「二度は通じませんよ、こんなのは」

スラップが頭に無かったから、三振を取れた。知っていれば——つまり、二巡目以降はそうはいかない。

打者は三回に一回ヒットを打てば勝ちと言われる。

まだまだ一軍の先発で使えるレベルではない。絶対に打てない球か、打たせない投球術がないと、一巡してきた敵打線を抑えるのは難しいのだ。

「それでも、俺の敗けだ。次、沢——」

「はいー」

喰い気味に、沢村栄純が立ち上がって返事をした。

投げたくて投げたくてウズウズしている。そう言いたげな態度である。

「……」打席勝負だ。投げてみる」

「はいー」

現在、読み打ちで勝って読み打ちで敗けて、打率五割。

三打席目のお相手は、沢村栄純。

自称ストレートだけしか投げられない男である。

「よろしく願います、チーフー」

「よろしく」

元気だけなら一番なんだがなあ、と頭の片隅で思いつつ、智巳はさり気なく一球目は見送ることをきめた。

御幸の面白いのは、打者にとってのめんどくさい。

面白い球を投げるイコール、めんどくさい球を投げる、と言うことだろう。

「行きますよー!」

「言わんでいい」

脚を高々と上げたフォームから、第一球。

思ったよりも伸びて、沢村の球はミットに収まった。

だが、若干違和感がある。

手でブレた、或いは動いた。

本人曰くストレートであるらしいが、これは厳密に言えばストレートではない。

手首と肩関節が柔らかいからこそできるフォームから繰り出される、天然のムービン
グボール。

まともな指導を受けていないからこそ、原石だった。

(当世流行りの動くボールと言う奴か)

世は加藤良三ボール全盛期。いやに今シーズンは防御率が低い、これが統一球、世

界水準なのだろう。

まあ、今年の末はWBCがあるらしいから、三連覇を狙う日本からしてみれば必要な処置だったのだろうが。

それにしても、今年のシーズンは巨人が強い。スタートダッシュこそ失敗したものの、5・6月で貯金17である。

首位の中日も含めて、少なくとも五年間は黄金期が続くんだろうなあ、と思わせる無敵っぷりと言っている。

あと、WBC。統一球にまでして備えたのだから、三連覇でV3確定だろう。楽しみである。

閑話休題。

「ど真ん中か」

「男と男の真つ向勝負ですよ、チーフ！」

じゃあストレートを投げろよ。

そう思うが、投げられない可能性まである。

木製バットをミートしやすすい金属バットに持ち替えた齊藤智巳は打席に立った。

投じられたのは、自称ストレートのムービングボール。

金属バットが、芯をずらしながら硬球を捉えた。

壁を越えて

次の日、紅白戦。スターティングメンバーは以下の通り。

二軍。

- 一番は中田（二年／遊撃手）
- 二番は木島（二年／二塁手）
- 三番は田中（三年／外野手）
- 四番増子（三年／三塁手）
- 五番遠藤（三年／一塁手）
- 六番門田（三年／外野手）
- 七番坂井（三年／外野手）
- 八番小野（二年／捕手）
- 九番丹波（三年／投手）
- 一年生。
- 一番小湊（二塁手）
- 二番高津（遊撃手）

三番金丸（三塁手）

四番東条（投手）

五番岡（外野手）

六番狩場（捕手）

七番金田（外野手）

八番西川（一塁手）

九番蒲原（外野手）

事前に東条が交渉した結果、選手交代は現場に一任されている。

片岡鉄心は球審を務め、二軍の選手交代は総代として楠本文哉が。

そして、一年生軍団の選手交代の係りはと言うと。

「監督代行の東条だ。よろしく」

「コーチ代行の金丸だ。よろしく」

一年生軍団に手を貸してやっていたことが監督に案の定バレていたバッテリー二人は観戦役兼ブルペン支配人に回され、松方シニアコンビが務めることになった。

各塁のコーチチャーなどは事前に割り振りを決めておいた為に、混乱はない。

全員が出るわけではない。あくまで見込みがあるものを試す。

あくまでも、戦力を求めている姿勢が示されていた。

「やるからには勝つつもりでいきましょう。全員を使えるわけではないので、アピールを怠らないように」

そう言つて、一軍の正捕手兼スコアラーの黒縁メガネを怪しく光らせながら決めたのがこのスタメン。

この時エース兼ブルペンコーチはおとなしくしているが、同じようなことを考えていることは想像に難くなかった。

「チーフ！先発は是非、この沢村に——」

「ホームランを打たれておいて何を言つてるんだ、お前は」

降谷、センター方向へホームラン。

東条、三振。

沢村、無理矢理引つ張つてホームラン。

誰が優れているかは言うまでもなく、先発は東条秀明になった。

スタメンは全員が、事前に勝とうと思つて集まつてきた者たちである。

ベンチ外、と言うかブルペンに追いやられた先輩二人が居なくとも、東条がある程度の統率を計れていた。

ブルペンには今、沢村と降谷。東条はベンチに居る。

現在、一回の表。一年生軍団の攻撃。

マウンドには、丹波光一郎。

打席には、小湊春市。木製バットの使い手である。

「チーフと同じですね」

「俺は全然慣れてないけどな」

その言葉に、隣に居る降谷の鬨気が更に増す。

変化球を投げ慣れていなかったとはいえ、特大ホームランはどう取り繕っても特大ホームラン。それが使い慣れていなかったバットによるものならば、尚更悔しさは増すのは当然だった。

立ち上がりには定評がない丹波は、三球目のファールで小湊春市を追い込んだ。

が、兄もそうないように、これからが彼の本領発揮である。

（兎に角、リードオフマンは塁に出ることが仕事）

クサイ球を三球続けてカットし、ボールを三球見逃して、計九球粘って四球。

クイックがあまりうまくないのか、或いは初回から盗塁はないと踏んでいたのか。

ランナーに対する警戒が甘いバッテリーの隙を付いて、小湊は二塁を盗む。

現在の打者、高津広臣。ワンストライクノーボール。ランナー二塁。

ここで東条が指示をしたのは、バント。

二番打者の本来の役目を果たし、小湊は三塁へ。ワンアウト三塁のチャンスを作る。

次の打者は、金丸信二。ストリートに強く、変化球に弱い。

案の定カーブを打てずツーストライク、ワンボール。

「気負わずにランナー返していこう！」

「投手はブルペンでおとなしくしてろ！」

仲が良いのか、悪いのか。

沢村の声出しに対して、少しムキになった金丸が返し、次の球の甘く入ったストリートをセンター前へ。

三塁ランナー小湊は生還。ランナーは一塁でストップし、四番で先発で監督な東条を迎える。

（甘い球待ち、カーブは捨てて、来た球を打つ）

四番の本来の役割はランナーを返すこと。それは金丸がやってくれた。

ならば、繋ぐ。

が、ここは丹波に軍配が上がった。

長身から繰り出させる縦のカーブがコースにピシヤリと決まり、四番五番と連続三振。

初回の攻撃は一点のみに終わった。

「あの二人もコースに決められたら打てないって言ってた。切り替えていくぞ！」

金丸の櫓に守備陣が応じ、守りに散っていく。

先発は、東条秀明。

(ファーストストライクを大事に、初回先頭打者をキツチリと切る)

一番中田は脚がある。打力はそこそこだが、処理に困れば内野安打もある。

打たせて取るならば、ファーストかサードかセカンド方向。ショートは少し危ない。各方向へのフライも可。

深呼吸して、甘めにスライダーを投げる。

二軍の選手たちは前を見ている。しかし、一軍の選手たちと違って、後ろは見えていない。

打ち気に逸っていることだろう。だから、敢えて甘めの球を投げる。

三振を取るのには、二巡目以降。

甘めに入ってきたと思ったスライダーが逃げ、当ててしまった形になった打球はセカンドゴロ。

小湊がボテボテの打球を見事に処理し、ワンアウト。

「ナイスセカン！」

小湊春市は無言のガッツポーズでその言葉に答えた。

兄と違ってまだ青い。目元まで髪に隠された顔が赤くなっている。

二番木島には一発はない。どちらかと言えば守備がうまく、打撃に粘りがある。典型的なローボールヒッター。

投じた球は、ストリート。

あつさりセンター前に運ばれて、ワンアウト一塁。

(三番の田中先輩に長打力はあるけど打撃が荒い。際どいコースを攻めれば、実績が欲しい以上手を出してくる)

ボール気味の球を三球続けて、カーブを打たせる。

「サードー！」

「任せろー！」

俊足木島を金丸が二塁で刺し、セカンド小湊がファーストに投げて併殺。

二回はこうも巧くはいかないかな、と思いつつ、東条はベンチに帰った。

「ナイスピッチ」

「そつちこそ、いい守備だったよ」

まだ顔を赤らめている春市の背中をポンポンと叩く。

実際、守備がうまいセカンドが居ると居ないのでは打たせて取れるか取れないかに大きく関わってくる。

そういう意味では、打てて守れて走れる一番打者・小湊春市の存在は大きい。

だが、このいい流れを丹波が断つ。

それがどうしたとばかりに三者連続三振を決め、あっさりと二回表は終わった。

二回の裏、二軍チームは四番からの好打順。

四番は、増子透。かなりのパワーと恵まれた長打力を持つ長距離打者。

脚が速く、若干アベレージヒッター気味な斉藤智巳の脚を若干遅くし、選球眼の良さを削ってパワーとミート力を入れ替えた感じと言ったところか。

勿論、技術でやっている増子と身体能力で何とかしている斉藤の守備力は比較にならない。

サード方向に飛ばしては、活路がない。

「……怖いな」

逃げ気味でもいい。一点を守り切る場面で、必ず勝負をしなければならぬわけではない。

自分には、降谷のような剛速球はない。沢村のような癖玉もない。

最低三回。それがノルマ。

迷わず東条は、四番の増子を敬遠した。

五番遠藤をファーストゴロ、六番門田をセカンドライナー、七番坂井をピッチャーフライに抑え、東条はこの回を九球で逃げ切る。

「東条、かなりクレバーだよ」

「ああ」

強い打者から逃げれば勝てるものではない。しかし、二巡目以降を耐えきる為に隠しているから、一巡目で本気で抑えにかかるともできない。

その結果の、敬遠だろう。

「チーフは敬遠ってどうなんですか？」

「時と場合によつては使う。勝つことが第一だからな」

そう言う沢村は、あまり好きではなさそうである。

だが、斉藤智巳はかなり敬遠が好きである。敵を調子に乗らさない為にあまりしないが、打たれる3割を如何に散らすかの確率のスポーツをやっている以上、あたりが来ると見れば容赦なく逃げる。

「俺はシニアで五回ほど満塁で敬遠されたことあるけど、実際押し出しの一点しか入らなかったからな。有効だよ」

ブルペンがそうこうしている内に、一年生軍団の攻撃が終わる。

九番蒲原ファーストゴロ、一番小湊ライト前ヒット、二番で送り、三番でチェンジ。

二軍の選手は、守備が良い。当たりのいいヒット性の打球が、ことごとく好捕されていた。

「ようやく、目を覚ましたな」

「ああ、チームとしての本気を出してきた」

個人個人のアピールの場ではなく、チームとして敗けを防ぎに来た。

そのことは、マウンドに居る東条にも伝わってきている。

(まあ、下位打線だからギアはこのままで。上位に回ったらギアを入れ替えていこう)

八番小野に長打はない。

外野前進で、内野後退。

歯噛みする、小野が見えた。

(その悔しさは、大振りが変わる)

八番小野、レフトフライ。

九番丹波は、投げる方では厄介だが打撃の面では穴でしか無い。

これで、ツーアウト。

次の打者は、二巡目中田。

(できれば、この回までこのギアで行きたい)

ここで切り替えれば、こちらの攻撃の時間で次のギアに対して思考の時間を与えてしまおう。

シフトを戻し、外角低めのスライダー。

ギリギリボール球になる球を、中田は綺麗に右打ちした。

一二塁間を抜けて、ライトの前。

反撃の号砲となるべきそれを、外野より後退していたセカンド小湊が掴み取る。

ライト前セカンドライナー。スリーアウト、チェンジ。

「ありがとう、小湊！」

「い、一応下がって置いて良かったよ」

またもファインプレーが飛び出し、二軍の攻撃は終わった。

しかし、次の二軍の攻撃は二番から。

東条がどこまで通用するかは、二巡目となる次の回にかかっている。

継投策

四回表、一年生軍団の攻撃。

先頭打者は、四番の東条。

三球続けて縦のカーブを投げられるも、完全に崩れた体勢から片手一本でバットに当て、レフト前へ運ぶ。

カーブを多投する都合上、やはりウエストは少なくなる。

ワンストライクワンボールから走られた丹波―小野バッテリー、ここでバントシフトを敷く。

結果、そこまでバントに自信がなかった岡はヒッティングに切り替え、三振。

続く狩場が前進守備の頭を越すヒットを放ち、ワンアウト二三塁とチャンスを広げ、七番金田の犠牲フライで東条が生還。

バックホームの間に狩場が二塁に進み、ツーアウトながらもチャンスが続く。

しかし、ピンチに弱い丹波がここは踏ん張った。

八番西川を三振に切って取り、チェンジ。

「今は勝てるけど、正直これまでのピッチングは運だった。皆の守備と、情報。これで

乗り越えてきた」

守りに入る前に、全員を集めて東条秀明はそう言った。

そんなことはない、金丸は思う。情報とそれを活かしたピッチング、好守備。それが合わさって今まで耐えてこれたが、それはあくまで東条のピッチングだからこそなのだ。

「これからは、総力戦だ。ランナーガンガン出すけど、よろしくな」

少し笑った東条に応えるべく、八人が各ポジションに散っていく。

その通りなことに、東条はあっさりヒットを打たれた。

ヒットを打ったのは、またも木島。

同じ二塁手として小湊の大車輪の活躍に触発されたのか、セカンドの頭を越す、綺麗なライト前ヒット。

牽制を入れ、相手は三番の田中。

ヒッティングだろうと、誰もが思っていたその初球。

(送りバント!?)

内野陣の誰もが驚いた。まさかそんなことをしてまで勝ちに来るとは、と。

サードの金丸が掴んでファーストに投げるも、ランナーは二塁に。

ここで、四番の増子に回る。

ここでやはり、東条秀明は敬遠した。

三巡目から勝負する。一塁を埋めた方が守りやすい訳であるし。

二打席連続敬遠で、五番との勝負を選択。

(悔しいだろうな。下級生に安牌と見られて、怒りがあるのかもしれない)でも、だからこそ。

今まで投げていなかったスラップを解禁。引つ掛けさせて、ショートの高津からセカンドの小湊、セカンドの小湊からファーストの西川へ。

「ゲッツー!」

ワンアウト一、二塁のピンチを切り抜けて、東条はあつさりとその四回をしめた。

次の回は、六番から。油断をせずにスラップを混ぜていく。

(高望みはしない。自分のやれることをやろう)

ブルペンにはあの二人が居る。自分にはない武器を持ったあの二人が。

剛速球も、ムービングボールも自分にはない。

自分にあるのは、投球術と経験。スラップとスライダー、縦のカーブ。これで敵の打線を凌ぐ。

かなり安定している丹波がこの回を三者凡退で切り抜け、五回の裏も東条はランナーを出すも凌いでみせた。

三巡目が、六回から始まる。

「この回で、俺は交代だ」

先輩二人と考えたプランとも合致している。

金丸、小湊、高津。この三人が実質的に一年生軍団の中軸。

その三人に言い含めて、東条はマウンドに立った。

二軍は九番丹波に代わり、代打前園。

「大振りな人を相手にすると、本当に疲れるよ……」

少し、東条の気が滅入りは始めている。

はじめて立った高校野球のマウンドで、援護点は二点。自分の出来次第で試合が決まる。

しかも、相手は甘く入れれば危ない打線。

東条は、自分を高く見積もっていない。だから、六回で自分に見切りをつけた。

前園を得意なインコースからのアウトコースで三振に取り、打順は三巡目。

一番、中田。

まずは、アウトコース。

そう思って投げた球が甘く入る。

中田はツーベース。ワンアウト二塁。

次は、二打数二安打の木島。

敵しいところを攻めて、四球。

これで、ワンアウト一、二塁。

バッター、増子透。

「——まあ、そう簡単には、逃げ切らせてはくれないよね」

二軍に紛れ込んだ、正真正銘の一軍の打者。満塁策もいいが、連打を浴びている現状はやりにくい。

それに、三打席連続敬遠は敵に勢いを与えかねない。

初球、ストレート。

外角低めギリギリに決まり、ワンストライク。

増子は、見送った。

初球ストライクを取れたことで、東条は少し安心する。

まだ、微妙な制球は効いていた。

二球目、スラーブ。

これは、空振り。空振りと言っても、空気を切り裂くようなスイングだった。当たれば間違いなくホームランだろう。

少し、蹴落とされるような気構えになるが、持ち直す。

怖くはあるが、恐ろしくはない。打者を打ち取るのが、投手の役割。

それをこなす。今までやってこれたことを、今もやる。

それだけだ。

投げた三球目は、ストライクゾーンからボールゾーンへ。空振りを取るための配球である。

勝つ為とは言え、東条にも投手の意地がある。

それを見て取って、増子は笑う。

敬遠されたことに恨みはない。今は、勝負をすることに喜びがある。

六回を投げて、今のところ無失点。二軍相手とは言え、素晴らしいピッチング。

相手にとって不足はない。

一球、カーブが外れてボール。

五球目のスラーブは、増子のスイングに捉えられた。

後ろを振り返らなくとも、それとわかる当たり。

(良い球だった)

打ち取るという気持ちで籠った、重い球。

それを打ち返した右腕を見て、増子はダイヤモンドを一周した。

「ごめん、打たれたー」

まだ、東条の気持ちは切れていない。

「続かせないように投げていくから、よろしく！」

つとめて明るく振る舞い、笑いながらバックに声をかけた。

「気にすんな！また援護してやるよ！」

「一点差くらいすぐに詰めてやる！」

バックの声を得て、打者へ向き直る。

三球でしめて、東条秀明はマウンドを降りた。

「ナイスピッチ、東条」

聴こえないだろうが、御幸一也はブルペンでそう呟いた。

冒険をせず、勝ちに徹する。勝つ為に投げていた彼も、最後の最後で欲が出た。

——あそこまでいったのなら、増子さんとは勝負をするべきではなかった

徹底さが、足りなかった。

それがこのスリーランを生んだと言っている。

七回表の攻撃は、

「降谷」

オーラで威圧をかけている降谷と、それを平然と受け流している智巳の方へ向いて、

御幸は言った。

「2イニング、お前の全てを出してこい」

「……はい」

メラメラと、再びオーラが燃え上がる。

投球術を駆使して抑えてきた技巧派の東条から、いきなり速球派の降谷へスイッチするのだ。

150に届いていてもおかしくない降谷のストレート。二軍はたった一巡では対応するのは難しいだろう。

欲を言えば、圧倒して欲しい。長引かせないで欲しい。

(あんま長引くと、狩場が3イニング持たねえかもしれないしな)

一年生軍団の攻撃は三番、クリーンナップから。

投手は代わって、斎藤になっている。

「この回、一、二点入るだろ」

「何で球が甘いところに全く行かなかつた丹波さんに代打送つたのかわからんけど、そうだろうな」

「いやでも、逆転した後なんですよ、チーフ」

二年生(ブルペン支配人)の二人が正論を述べていると、まだ中継ぎの状況に疎い沢村が会話を割り込む。

「え、だから？」

「いや、普通はリードを守ろうとがんば——」

智巳の疑問に、答えるまもなく。

ノーストライクツーボールからヒットで出塁した金丸を、東条が返した。
ホームランで。

「あ」

「丹波さんの勝ち星消えたな」

「先発の勝ち星が消えるなんて、いつものことだろ」

呆気にとられた沢村、勝ち星を気にする御幸、実体験として知っている智巳。

三人とも、感情を隠していない。包み隠さず、本音が漏れた形である。

「あの先輩——」

マウンドで佇むピッチャーを指差して、沢村が絶句する。

智巳はチーフ、御幸は御幸と呼ばれているから、おそらく名前が知りたいのだろう。

そう判断の元、二人は恐らくは名前を知りたいのだろうと推察した。

「斎藤さんな」

「斎藤さんって、調子悪いんですか？」

沢村、優しい。

遠慮していると云うべきか。

降谷も、何かを察してオーラを取めている。

「ノースリーになつてないのを見てないのか、沢村。すこぶる調子がいいだろ」と、御幸。

「まだ2失点しかしてない。このくらい普通じゃないか」

と、智巳。

中継ぎの定義が壊れようとしている。今更言うべきことでもないが。

「……俺、あんまり詳しくくないんですけど、中継ぎって一回に何失点してもいいんですけどったけ?」

「駄目だよ、ありや」

「勿論、失格だ」

一軍の最優秀バッテリーに口々に否定され、沢村は訳がわからなくなった。

じゃあ、アレは何だと言うのか。

「先発は2失点までなら許容されるけど、それは長いイニングくつてるからだからな。丹波さんの六回2失点とは訳が違う」

「じゃあ、アレは何です?」

「どうしてもお金がない時に一枚だけ買った宝くじみたいなものだよ。ほら、当たらな

くても驚かないだろ？

「当たったら逆に驚く。今はいつも通り、当たらなかつただけ」

御幸の説明に唾然とし、智巳を見る。

信頼度的に、智巳は沢村の中でかなり上位のヒエラルキーに居る。

因みに御幸は限りなく下である。言うまでもないが。

「いや、本当にそうだぞ。まともに抑えているところをついぞ見ていない。ピッチャーと言うより、投げる人と言ったほうが適切だ」

「じゃ、じゃあ、何故そんな人を使うんですか？」

「投手の駒が足りないからだよ。そもそも、足りていたら紅白戦などしていない。

でもまあ、ああして打てるのも一年生軍団のやる気ありきだけだ」

世知辛い世の中である。

決着

絶好調斎藤は現状一回三失点の好リリーフで一年生軍団を救った。

ブルペン支配人二人とお客さん（外野手）が話していたように、青道高校の中継ぎ不足は深刻過ぎる。

絶対的エース・斉藤。

二番手先発・丹波。

抑え・連日劇場型の幕張の土囊、川上。

中継ぎは液だだ漏れのガソリントankが転がっているだけ。

勝てないわけである。

「……俺、制球練習頑張ります」

「制球のコツは、繰り返しだ。フォームを確かめ、ズレを直し、投げる。地道だが、繰り返せば繰り返すほどモノになる。頑張れよ」

「はい、チーフ！」

そう言うチーフは、ストレートはともかくフォークの制球が抜群に良い。狙ったところに落とせるし、だからこそ御幸は巧く捕れるわけである。

沢村はコントロールが良い方である。あくまでも青道高校で見れば、だが。

まず、元投手の伊佐敷純。ノーコンで外野手転向。

次、丹波。メンタルが弱い所為で乱れる時は乱れる。良くもないし悪くもない。3位。

斎藤桑田楨原は論ずるに値しない。コントロールは伊佐敷よりはマシ、と言ったところ。投手としての最低水準をギリギリで満たすくらい。

智巳。これは実は結構良い。安定感が季節によつて違ふ為一概には言えないが、彼は豪腕つぼさを出しながらも、この手の細かいことが巧かった。2位。

川上。メンタルが弱い所為で乱れる時は乱れる。低めの制球に優れる。1位。

沢村。メンタルが強いから安定感がある。クソみたいな驚掴み素人握りから、恵まれすぎた潜在能力。ストライクゾーンに入り過ぎるタイプのノーコン。

ノーコンとは言つてもボールに外れるタイプのノーコンではない為、打たれても芯をずらせるナチュラルなムービングボーラーとしてはかなりステータスがまとまっている。

降谷。これはかなりマズイ。ガソリンタンク三人衆に匹敵するレベルで悪い時と、沢村より下を行ったり来たり。でもストレートがいいのでマシ。外れるタイプのノーコン。

総合的に見れば智巳がお話にならないレベルでぶつちぎり、次に縦カーブの恩恵を得た丹波。次に謎のビルドミスの無さを発揮した沢村、降谷、川上と続く。

一位智巳。球速同率一位、球威同率一位、制球二位、スタミナでぶつちぎり一位、変化球はお話にならないレベルで一位、メンタルでダントツ。

二位丹波。縦カーブが決まればかなり強い。メンタルさえ克服すれば更に強い。あと、ノーコンと言うほどノーコンではない。

東条は欠点がないが長所も投球術くらいで華がない。しかし堅実である。三位。

四位沢村、何よりも持ち球にあったストライクゾーンに集まるコントロールと、癖球。謎の度胸とメンタルの強さ。しかし一発病になりかねないので表裏一体か。

降谷は長所が短所を超えていたことだろう。だから五位。

川上の六位と言う順位の低さは、これと言った武器がなく制球力頼みなのに、メンタルの所為で乱れる時は乱れること。あと、クローザーなのに勝負どころに弱い。

何もかもが噛み合っていないのだ。

沢村と違う、正反対なビルドミスと言うべきだろう。単体で見ると悪くないが、絶望的に噛み合わない。

そうこうしている内に攻撃が終わり、6対3。

一年生軍団が下馬評を覆し、勝っている。

「降谷」

「……はい」

「悔いのない一球を、一つずつ投げ込め」

少し収まり気味だったオーラが、再び燃え上がる。

一球の重み。体験はしていないが、実感はある。

「誰にも打たせない」

「その意気だ」

「打たせなかつたら、もう一打席」

「四球三つ以下なら更に一打席勝負してやるよ」

「……」

かなり難しいインセンティブ契約に迷わず頷き、青道の豪腕はマウンドに上がった。投手らしく、負けん気が強い。

「球の威力で押していくぞ。どちらかと言えば打たせて取る形に近くなるけど——」

「わかった」

狩場航は、はじめて降谷のボールをまともに受け止めた。

捕球と言う技術までに達していないが、認めてはいる。

「できるだけ構えたところに投げる」

「いや、でも腕は振り切れよ?」

「うん」

中途半端な威力では打ち返される。コントロールが甘くても、威力のある球を。狩場航としては受けるのが怖くはあるが、勝つ為である。

勝つ為には、やらなければならぬ。だからやる。それだけだった。

「遠慮すんなよ。思いつきり投げ込んでこい」

「うん。遠慮しない」

捕れる相手に遠慮などすれば、かえって失礼になる。

その事実を、投手の本能が告げている。

まあ、捕手からすればそのおかげでひどい目に合うことも多々ある。

だが、捕れないだろうと加減されるよりはマシだった。

東条がライトに入り、ライトの蒲原がピッチャーに、そして蒲原が降谷と変わる。

—— 見せてやれ、降谷。お前の剛速球を

唸りを上げて迫る剛球。

それまで相手にしていた柔の投法とは正反対の、素質に物を言わせたゴリ押し。

それが、二軍の打者へさらなる絶望を与えた。

—— 一年の内から140キロオーバーで、なおかつ手元で加速するようなストレー

ト。

——ストレートと等速で同等のノビを保って落ちる、高速フォーク。

違いこそあれ圧倒的な才能の壁。

それを、去年も味わっている。

『お前に俺が打ち崩せるものなら、崩してみろ』

完全に自分たちを見下ろし、その投手は投げていた。絶対的な自信と、確かな実績と、唯一無二の才能を携えて。

(また繰り返し返すだけなのかよ、俺達はっ！)

今年来たのは、無名のルーキー。実績はないが、才能がある。

六番門田は、バットを振った。せめて当たれと祈りを込めて。

しかし、当たらない。まぐれで当たっても、ヒットになるようなことはない。

それほど生易しい球を、降谷暁は投げはしない。

高めのストレートを思いつきり空振りし、六番門田は三振に切って取られた。

(よかった)

その圧倒的な剛速球とは裏腹に、降谷は少し不安だった。

今投げた三球は、紛れもなく自分の最高のストレート。

だが、変化球とは言え、芯で捉えないと飛ばない木製バットで自分の球をセンター方

向にホームランとして、しかも初見で打ち返した奴がブルペンに居るのだ。

その経験が、降谷を慎重にさせている。

はじめて触れた変化球。自分でもかなり曲がっていると、投げて思ったその球を運ばれ、残ったのは口惜しさ。

そして、指から離れた球は一度投げれば取り返しがつかないということ。

一球一球に、全力を注ぐ。

(もう、二度と後悔がないように)

148キロ、150キロ、149キロで二人目を打ち取り、その後ボール球を投げてしまうものの5球で見逃し三振を奪う。

(でも、結構疲れる)

壁投げとは違う。

それが、降谷暁が投手として満足に過ごした最初のイニングで思った感想。

打席に、人が居る。打ち取りたいと思う。制球にも気を使う。

まだまだ、学ぶことは多い。

そして、その先に倒したい打者が居る。

ぐつ、と。三振を奪った降谷は、ブルペンに向かって拳を付き出す。

青道の豪腕は、平均球速148キロで三者連続三振と言う鮮烈過ぎるデビューを果た

した。

一方、ブルペン。

「グギギギギギ……」

東条投手、六回3失点。

降谷投手、一回3奪三振。

ブルペンに居る沢村外野手、未だ出番なし。

「チーフ！俺は次の回からでもいいけますよ！」

「御幸。思ったより降谷、安定してないか？」

「これはいい意味で予想外だな。四球の一つや二つは勘定に入れてたんだけど」

沢村外野手を無視して、ブルペン支配人の二人は完全に品定めのお話をしていた。

エースと正捕手。この二人は、監督に次いでピッチャーの質を気にするポジションにある。

東条秀明は使える。

降谷暁も使える。

それがわかったただけでも、この試合は終わりで良かった。

正直なところ、一分の時間も惜しいのだ。

「御幸一也あー！」

「なんだよ、沢村」

と言うか呼び捨てかよ、と言う独り言を聴いて、智巳は思う。

お前、そいつに結構な酷いことしてるから当然じゃないのか、と。

まあ、あの置き去りは沢村にも責任があるが、それにしても呼び捨てにされるくらいは許容すべきだろう。

「この未来のエース・沢村栄純の出番は!？」

「外野手だろ、お前。よくて代打……ってとこかな」

「ウガー!」

なんの捻りもない発言に激昂した沢村を躲しながら、御幸は思った。

やっぱりこいつ、からかうと楽しい。

「沢村」

「はい、チーフ!」

御幸とじやれていた沢村を呼ぶと、犬か何かのようにピシリと背筋を正して智巳の方を向く。

これが尊敬度の差である。どちらか高く、どちらが低いかは言うまでもない。

「何故お前をここに残したか、わかっていないようだな」

「……と、言いますと」

神妙に姿勢をただし、椅子に座っている智巳の前で正座する沢村。

ブルペンであることを忘れそうになる光景に、御幸は取り敢えず自分用の椅子に座り直した。

「いいか、沢村。東条は今のところお前ら三人の中で一番試合を作れる。そのことは、わかっているだろう」

「まあ、それはそうですけど」

降谷には負けたくない、と言う気持ちがある。なぜなら、同じホームランを打たれた者同士だから。

実力はそこまで離れていない。互角。勝っているまであるのではないか。ポジティブ沢村シンキングの厳正な思考の結果、そのような結論に達していた。

いやまあ、そこまで間違っているわけではない。

色々長所とか短所とかを差し引くと、この二人は互角なのだ。見栄えがいいのは降谷だし、エースらしいのも降谷だが。

「それを認められるならば、客観視はできているのだろう。では、二番目は誰か」
「俺！」

間髪入れない回答に、思わず御幸は笑ってしまった。

面倒くさい性格をしている。如何にも自分の負けを認めない、認めたとしても最後、

勝つまで諦めない投手らしい性格。

正直、こういった面倒くさは御幸としては嫌いじゃない。

「そう、お前。沢村栄純外野手。君が現状、一年生投手の中でナンバー2だ」

「え？」

「え？、じゃない。ナンバー2だよ。だからここに残した」

あれだけ自信満々に言っておいて、実のところ頷かれる自信はない。

面白い奴だと思いつつ、智巳は更に言葉を選んで話を続けた。

「ナチュラルに変化するムービングボール。太い神経。それに何より、ある程度の制球。突然乱れる降谷には、務まらないんだ——クローザーってのはな」

クローザー。

響きがなんかカッコイイ。

エース一筋沢村栄純、その語感と智巳の話術に釣られる。

「クローザーとはなんですか、チーフ？」

「チームの勝ちを守る、大事な役割だ。決して駄目な投手だから最後に回されたわけじゃない。中継ぎ陣の中で一番優秀な、一番安定した投手にしか名乗ることが許されない、チームの守護神。」

エースが序盤中盤の肝ならば、クローザーは終盤の要。エースが打たればチームは

負ける。それと同じく、クローザーが打たれればチームは負けるんだ」

「おお……」

「いいか、沢村」

目を煌めかせながら目の前に座っている後輩の左肩に手をやり、智巳は目を見て静かに言った。

「この左腕にこの試合が、東条の好投が報われるかどうかがかかっている。降谷の好投も、打線の奮起も、守備も。全てが『勝ち』という形で報われるか、『負け』となって水泡に帰すか……それは、お前にかかっているんだ。

それでも、その役目を知ってもなお、お前が一番使えない投手だから、俺がここに残したと思うか」

それは、実感がこもった言葉だった。本音と、投手が持つ役割に対する理解。

知識と経験。双方に裏打ちされた言葉を、沢村はしっかりと受け止めた。

「すいません、チーフ。俺が、浅はかでしたっ……」

「わかってくれたならいいさ。降谷が投げ終わったあと、キツチリしめてお前の手で勝ちをもぎ取ってこい」

「はいー」

勇躍して捕手の代わりにおいたネット相手に投げ込む沢村を横目で見て、御幸は椅子

を竹馬のようにして智巳に近づき、問う。

「で、本音は？」

「余計なことを一切度外視して、メンタルと実力だけで決めた。

あいつが正直なところ一番打ちにくいからクローザーに据えた。誰が一巡目に捉えられにくいかの確率論に頼った。それだけ」

「だよな。かなり美化した言い方うまいけど、お前は合理主義者などころあるし……」

沢村は、球質を知らなければまず二軍レベルならば初見で攻略が不可能な癖球を持つ。だから逃げ切り専門の抑え。

東条には一巡目で捉えられない特徴はないが、躲す術を心得ている。だから何巡もする先発においた。

降谷は、東条と正反対の投げ方をする。だから東条の次か前に配置したい。この場合、沢村が抑えで固定なので必然的に穴埋めセットアップとなる。

「降谷は長引かせるより、短い中で全力を出して欲しい」

「まあ、長引かせても長引かないもんな」

「それに、あいつは心が強い。もしも重く感じて、それを力に変えられると思う」
降谷暁にはスタミナが無い。

それは昨日、ちょこちょこテストしてみた結果わかったことだった。

一年生軍団の攻撃は、斎藤が作った満塁のピンチを引き継いだ川上がランナーを三人返しながらも自責点ゼロに抑え、更に点差が広がる。

対する降谷も負けじと先頭バッターをフルカウントから歩かせるが、ゲッツーで処理。後一人を三振でしめた。

その後の攻撃を終えた一年生軍団は、ここでクローザーを投入する。

「沢村。被安打³で満塁までならいつものことだから気にしないで行け」

「イエッサーー！」

降谷の熱い自援護ムランなどでリードは広がって、5点。青道の投手陣は研究されれば新入生にすら打たれるというレベルの低さを露呈させた紅白戦を、終わらせにかかるは沢村栄純。外野手扱いの三番手。

予め理由を説明してあるからこれまで完璧なピッチングを見せていた降谷を変えることに異存はない。

九番ピッチャー降谷に変わり、沢村。

守備シフトは、内野前進の外野後退。

打ちにくいが球質の軽い沢村の球は結構芯を外しても遠くまで飛ぶ。

一方、ゴロになることもある。

なので、その間の子というべきシフトを、狩場航は敷いた。

「全球ストライクに入れて勝負に行きますので、バツクの皆さんよろしくお願いいたします—」

高校野球、初めてのマウンド。

その土の感触を踏みしめて、沢村栄純は高らかに言った。

「打たせて取るのはいいけど、俺みたいになだ打たれないようにね！」

ライトに入っている東条の言葉を受け、沢村はニカツと笑って任せろとジエスチャーする。

あと、アウト三つで、勝ち。

みんなで繋いだ下剋上が、自分の手によつて紡がれる。

自分の手で投げ抜いて、勝つ。エースとは違った責任感。

他人の努力を背負うという、確かな重み。

(でも、チーフはそれを知つてて任せてくれたんだ)

——ここで、応えたい。その信頼に。

投じた一球目は、内側に決まる。

高低もコースも甘い。まだまだ原石の球を見て、増子透はバットを短く持ち替えた。

まだ、諦めてはいない。

油断はあったが、本気で向き合つて、その結果今のスコアになっているとしても。

自分が出ることによって、まだ逆転の芽は守れるのだから。

（増子先輩——）

自分より上の東条からホームラン。その打撃能力はやはり一つ頭抜けている。

東条は勝利を優先して逃げた。しかし、沢村は逃げなかった。

まだ勝負したいという青さがあり、抑えられないという根拠のない自信がある。

いや、根拠をあげるのなら『青道のエースが、抑えられると判断して自分を送り出したのだから』ということになるのだろうか。

カウント、ワンストライクノーボール。投じた二球目は、カーブ方向に僅かに動いてミットに収まる。

一球目はカットボール気味に動いていた。

（となると、沢村ちゃんは今ナチュラルなムービングボールを投げるということ）

攻略は容易ではない。ミートポイントが広い金属バットを利用して、なるべく当て、力で押し切る。

見たところ、それほど球だった。

沢村は、ストライクゾーンに入れてくる。動く方向にアテをつけて、バットを振り抜く。

神がどちらに微笑むか。誰もがどう変化するかわからない沢村の球は、下にブレた。

高々と、フライが打ち上がる。

沢村は、後ろを向かない。増子も、打球の行方を追わなかった。落ちた先は、ライト東条の真上。捕って、アウト。ワンアウト。

「おーしー！」

一人目を抑えた。それも、最も強い打者を。

闘志を剥き出しに、沢村が吼える。

あと、二人。

五番遠藤、六番門田。この二人を打ち取れば、勝ちが決まる。

ひとつ深呼吸して、投げ込む。

割りとめちやくちやなワインドアップモーションから、ど真ん中へ。

舐めるな、と打ち返した球は芯を外されても大きく伸び、セクターフライ。

四球でツーアウトを取り、沢村は目を瞑ってもう一度心を整え直す。

あと、ひとつ。

投げた球は、外角低めのムービング。

甘めの球がバットの芯から逃げ、門田の打球はセカンドへと転がる。

「セカンドー！」

「任せて！」

沢村が鋭く叫び、小湊から答えが返ってきた。

門田が一塁に到達する前。小湊春市の送球は、一塁手のグローブの中へ。

「おーし、おしおしー！」

沢村が叫んで、試合終了。8対3。

一年生軍団の勝利で、紅白戦の決着はついた。

余暇

紅白戦の結果を経て、関東大会の暫定メンバーが発表された。スタメンは、以下の通り。

一番シヨート、塁にさえ出てれば二塁打確定の男・倉持洋一。

二番セカンド、粘りの打撃と抜群のカット技術と高い守備の名手・小湊亮介。

三番センター、長打も狙える繋ぎの打撃巧者・伊佐敷純。

四番ファースト、勝負勘冴える不動の四番にしてチームの精神的支柱・結城哲也。

五番キャッチャー、ランナーがホームに近づけば近づくほど、貯まれば貯まるほど打率の上がる男・御幸一也。

六番サード、引つ張り方向へ強い打球を打てばほぼホームランなパワーヒッター・増子透。

七番ピッチャー、絶対的エースで投手陣のリーダー兼恐怖の守備下手七番打者・斉藤智巳。

八番レフト、どうせ微妙な守備ならば下手ではあるが一発のある打者をとという智巳方式で採用された男・降谷暁。

九番ライト、走攻守全て揃ったオールラウンダー・白洲健二郎。

全体的に見ると走攻守、全て揃ったかなり攻撃的なオーダー。打者の育成に定評のある片岡鉄心が歴代で最高と思える打撃陣。

レフト候補の二人の調子が上がらない為、打撃力のある（ただし守備が荒い）智巳と降谷を入れ替えてレフトに。守備に関しては伊佐敷が介護に入る。

一番が走り、二番が粘り、三番で進み、四番で還す。五番がランナーを掃除して、六番七番八番で一発狙い。

白洲が九番なのは、一番に繋ぐためである。決して評価されていないわけではない。斬新な采配と言えそうだが、説明を見る限り悪くはなかった。

打順の二巡目からは、実質白洲がリードオフマンを務めるわけである。

そして、投手陣。こちらは相変わらず薄さが見られる。

エースは勿論、斉藤智巳。

二番手は、丹波光一郎。

三番手は、川上憲史。

斉藤智巳の起用法は、完投。

丹波光一郎の起用法は、7回まで。

川上憲史の起用法は、7回まで。

横、斜めでカウントを取り、下方方向の必殺球で三振を荒稼ぎする完成度の高い身長192センチの大型右腕。

鋭く縦に落ちるカーブが武器の185センチの右腕。

低めの制球力に優れた、スライダーが武器の右腕。

これら三人が、暫定として先発する。

ロングリリーフに、東条秀明。

リリーフエースは、降谷暁。

クローザーは、沢村栄純。

東条秀明は投球術で二軍は抑えられたものの、一軍レベルの増子に打たれた為、失点覚悟のロングリリーフ。

沢村栄純は、智巳が出ざるを得ない僅差の場合は東条と同じくロングリリーフもこなす。

降谷暁のセットアップは動かない。

一点差の時の抑えは先発斉藤を抑えに使い、それ以外ならば沢村に任せる。

降谷が8回、智巳が沢村が9回。

相手と流れによつては沢村をセットアップにもするから、起用法はあくまでも目安。中継ぎに関しては固定された起用法はないと思つてもらつてもいい。

代打の切り札には、小湊春市と楠木文哉。

守備固めには、門田将明と坂井一郎。

川上と丹波用の控え捕手として、宮内啓介。

以上、十八人。

内、三年生九人。二年生五人。一年生四人。

このメンバーで、関東大会に挑む。

初戦の相手は、横浜港北学園。

投打揃った神奈川の強豪。

先発するのは、もちろんエースの斉藤智巳。

とまあ、決まったわけだが。関東大会までには一ヶ月ほどあるわけで。

必然的に、一年生が多い投手陣の力の底上げが求められる。

青道高校にはこれと言ったコーチがいない為、基本的に片岡監督は打撃陣と守備の面倒を見なければならぬ。そこで、捕手の出番となる。

「宮内は丹波と川上を見る。御幸は斉藤とリードとプランの確認。降谷と東条は小野に、沢村はクリスにリード面・マウンドでの心構えを教えてもらえ」

一年生捕手の狩場航は二軍に居る。小野の方がパンチ力があり、守備面もリード面も優れているからである。

これと言つて、上げる理由を持たなかつた。二軍でじっくり育てていきたい。控え捕手の宮内はメンタルの弱い二人と組み、新たな武器を開発して投球の幅を増やすことに勤しむ。

期待の星・降谷は、伸ばすべき点は御幸が既にある程度の土台を作っていた。

コントロールと、縦のスライダー。この2つを伸ばしていくことは、小野にもできる。新たに長所を作ることにはできないが、堅実さはある。基礎を教えるには、小野はもつてこいの男だつた。

智巳に関してはそもそも高速フォークを後逸しないのが御幸しか居ない。

20回フォークを投げた時の後逸数をカウントすると、御幸0回、宮内9回、小野17回。いずれも暴投ではなく、構えたところに落ちてゐる。単純に速さと、縦の変化に対応できないのだ。

その上、抜群の——性格的にも、リード的にも——相性を誇る為、ほぼこのペアは固定。

何も知らない沢村には、知識と経験豊富なクリスを付けた。

名采配、と言つていいだろう。いや、この場合は名人事か。

「そう言えばお前さ」

制球力に主眼をおいた投球練習を終え、打撃に開眼しつつある智巳と素振りをしなが

ら、御幸は言った。

「ノリがシンカー覚えてたって言った時、何か言いたそうにしてたけど、何だったの？」
「いや、その前にノリのシンカーはどうなった？」

何か言いたそうにしてたけど、と言うよりは『あー、別に今言わなくてもいいや。ノリと俺だったらエースと言う関係上俺が優先されるだろうし、ここは縁がなかったということで』と諦めたのだが、御幸はそれを知らない。

そして智巳は心配性の御幸に病院に叩き込まれていた為、試合の結果は知っていても経過を知らない。

ナイナイ尽くしの認識である。

「イーニング四死球で駄目だったけど？」

「あつ、そうですか」

時々敬語が混ざる男、智巳。どうやら軽く失望した時、或いはがっかりした時、驚いた時になるらしい。

この場合は、がっかりしたのでだろう。

この高校には一球種特化の人間が多い。使える球が二球種あるのは智巳だけという体たらくで、三球種も勿論智巳だけ。

彼はカットボール、スライダー、高速スライダー、縦カーブ、遅いカーブ、ただのカー

ブ、高速フォーク、ただのフォーク、チェンジアップと豊富な球種を投げられる。

主戦球はスライダー、縦カーブ、遅いカーブ、高速フォークだが、他の球もそれなりに投げられるので意表をつくことができる。これが案外御幸としてはデカイのだ。

特にチェンジアップとカットボールは。

話は飛んだが、まあ丹波のように縦カーブだけなら全国クラス、というのならわかるが、川上のスライダーは別にそれほど褒められたものではない。他に投げられる変化球と比べればマシ、と言うだけで。

丹波の縦カーブは智巳の縦カーブを遥かに超えるが、川上は智巳のスライダーに劣る。

だから、新たな可能性に結構期待して身を退いたのだが。

「駄目だったか」

「駄目だったよ」

200回目の素振りを終え、二人は土手の端つこに腰掛けて黄昏れている。

空には、夕陽が沈みかけていた。

「かなしいな」

「ホントにな」

川上、このままじゃ一年生に超えられっぱなしだぞ。

二人の心にその嘆きが過る。

散々『アカン』と思つてきたし、その防御率詐欺と炎上ぶりとメンタルの弱さには悩まされてきたが、この二人にとっては同級生。人並みの情はある。

でもまあ、戦力になる一年生の加入のほうが嬉しい。

彼等は勝つ為に今まで努力をしてきた。尊敬する先輩と一日でも長い夏を過ごす為に、努力をしてきた。

友情とチームワークを履き違え、皆で失態を拭い合うために努力をしてきたわけではない。

すべては、勝つ為に。

全員が、スタメンという席を勝ち取る努力をしてきたのだろう。だが、最後に見られるのは結果。

その点、この二人はとても合理に傾いている。プレイヤーとして、割り切つてしまえるところがある。

「降谷。あいつ制球難を克服すれば最高のセットアッパーになれるよ。投げてる内にスタミナもつくし、一年生の時はセットアッパー、二年から先発の柱にしていきたいよな」
「沢村に關してもそうだろう。制球もアレだし変化球もアレだが、度胸があつてムービングボールもある。暫定抑え起用は仕方ないけど、二年から先発転向させたいな。」

と言うか、それにしても監督も大胆な手を打ったもんだ」

川上、先発転向。抑えを一年に任せる。

大胆な采配である。

「でもまあ、今までも抑えなんか居るか居ないかわかんない感じだったし、最悪でも現状維持だろ」

御幸が息をするかのごとく正論を吐き、智巳も頷く。

抑えが燃える↓勝ち星が消える↓打線が奮起、サヨナラ。

この世代の青道高校には、秋から春にかけて結構このパターンが多かったりする。春の甲子園予選で負けたのも川上さんが燃えた（2失点）のが決勝点。

配置転換もやむなしだった。

「燃えるなら速い内に燃えていただいた方が逆転しやすいし、先発転向、ありだな」

智巳も自分なりの意見を出す、御幸としてはもう一つ片岡監督の目論見が見える。

このチームは、投の柱は智巳なのだ。絶対的エースと言えば聞こえがいいが、先発では連投できないし、体質を承知している監督はさせないから投の柱が抜けた状態でトーナメントの殆どを戦わなくてはならない。

だから、小出しにする。

先発させて、次の試合は極力休ませる。どうしても僅差になった場合は抑えとして

使つて相手をシャットアウトしてもらい、勝つ。

大差が付けばリリーフを投入。勝ち逃げして次の試合に智巳を先発させる。

この作戦を実行するには、まず監督が智巳が抑えとしてまともに投げられることを信じなければならぬが、そこは信頼しているのでまるで問題がない。

後は、イニングを稼ぐ先発の枚数とそれなりの質を持ったリリーフが必要となる。

つまり、投手陣全員でエースが居ない時の穴埋めにまわり、足りないところをエースに介護してもらっているわけだ。

高校野球とは思えない程にクリーンな采配だが、それが片岡鉄心の限界とも言える。

選手を酷使してナンボの高校野球。彼が甲子園に行けないのは、厳しさと言うより、酷さが足りないから。

他の投手はいいからエースを連投させろよ、と言う言葉を無視しての起用で、結果が出ていない。

(そろそろ勝ちたいよな、ここまでしてくれてんだから)

御幸としては、それは本当にありがたい。だからこそ、勝たせたくもある。

片岡監督を甲子園に。その気持ちは強い。

「春季東京都大会を優勝したから監督を疑う声も最近は収まりつつあるけど、やっぱり本番は夏の甲子園だ。がんばろうぜ」

「もとからそのつもりだ。手を抜くなんて選択肢はない」
なお、力配分はする。

しかし、それはもうどうしようもなかった。

新人たちの焦燥

スタメン発表を終え、練習をこなし、自主練も終えて風呂に入った二人は、無言でテレビをつけてゲームをはじめた。

実況パワフルプロ野球。モードは、二人で対戦。

「場所どこにするよ」

「甲子園」

「まあ、だろうと思っただけど」

先攻、智巳。後攻、御幸。

使うチームは青道高校。査定は、次の打順を打ってる打者に聴いたものである。

「先発俺かよ」

「他の人はまともに使えないんだから当たり前だろ」

「お前……言うてはならんことを」

「ゲームなんだからいいじゃん」

プレイボール。

智巳の一番は勿論倉持。御幸の先発は斉藤智。

「うわ、落ち方がエグいなこのピッチャー」

「自画自賛ってレベルじゃねーぞ、智」

「俺は初球フォークなんか投げねえよ」

「あー、そうだな。でもこれパワプロだし」

パワプロと野球は違う。結構よく言われていることである。

そうこうしている内に、倉持がバントの構えを取った。

「何!？」

少し虚を突かれた御幸とは違い、智巳はLRを連打していた。

こうすると、脚が早くなるらしい。オカルトである。

サードの増子が投げるも、間一髪セーフ。

「増子さん、もうちよつと肩強いよな」

「再現してみないとわかんないからな、こればかりは」

「倉持も本物はこんなバントうまくないし、増子さんはチャージ速いし……」

それを言っちゃあおしまいよ、という言葉を隠して、智巳は二番の小湊亮介を使つて

二、三回素振りをした。

相手の投球を待っている暇なときによくやる動作である。

「うわ、選球眼がいやらしい」

「それが亮さんだろ。ある意味原作再現——ってか、現実再現か」

だが、キャッチチャーフライでアウト。ワンアウト。

ここで智巳、併殺持ちの三番伊佐敷の前でランナーが一塁に居るのが怖い為、盗塁を指示。

「知ってた」

「俺も知ってた」

L R連打も及ばず、ウエストからの御幸バズーカで倉持は名譽の戦死。

肩A（智巳査定）は伊達ではない。ギリギリのタイミングだったことは、倉持の足を褒めるべきだろうなのか、智巳のクイックの下手さを責めるべきなのか。

「このキャッチャー守備もうまいし肩も強い。完璧に近いと思うけど、どうよ」
「打点乞食だけどな」

熱い自画自賛タイムを終え、伊佐敷はあっさりヒット。

次は、四番の哲さん。登録名は哲さん、音声がユウキである。

「哲さん、頼みます！」

「敬遠しても俺だしなあ」

「改めて見ると、うちの打線強いよ。何で勝てないんだろうな」

「ああ、何で勝てないんだろうな」

ゲームだからといって、迸る言葉は怒涛の如く。

しかし、哲さんには誰も文句を言っていない辺り流石哲さんだと言えた。

「あ、やば」

高速フォーク（オリジナル変化球）の落ち先は、外角低めギリギリ。

リリースした後には、ヤマを張られていることに気づいた御幸がそう漏らし、画面は確定ホームラン演出が起こる。

「雑魚ピッチャーが……」

「いや、それ自分……」

それは言わない約束。

哲さんが観客に手を振りながらダイヤモンドを一周して、ホームへ生還。伊佐敷とタッチして、2対0。智巳青道が今のところは勝っている。

「おっ、これは見るからにいいバッター」

五番、顔パーツは割りと適当だがスポーツサンングラスでそれとわかるキャッチャー、御幸。

熱い自画自賛はまだまだ続く。ゲームならではの熱い辛口トークも続く。

「ミートカーソルこんなんでかかないだろ、お前」

「いや、それくらいある。たぶん」

初球、スローカーブがすっぽ抜ける。

遅い球は魔球と言われるパウプロ、しかも失投。打てるはずもなく、御幸はど真ん中にくる球を空振りした。

「まさかの原作再現か」

「いや、流石にど真ん中打てるよ。たぶん」

でもちよつと自信はない。

ランナーが居ない時の御幸は、それほどまでに打たないのだ。

結果、ど真ん中失投を逃したのが痛く、三振。

「使えねーなあ」

「得点圏だと打つから……」

チェンジで、智巳の守り。

先発は、丹波さん。

「カーブ一択はズルい」

「カーブ打てない腕が悪い」

ふんわりと曲がってくるカーブは、ロックオン無しでは打つのは結構難しい。

結局、丹波は御幸青道を三者凡退に抑えた。

「……丹波さんなのに、逆球あんま無かったな」

「……お前、それを言うなよ」

「いや、受けてる身としては言いたくもなるよ。マジで」

とか言っている間に、下位打線が三者凡退。再び智巳の守り。

丹波さん、好投を続ける。

「この丹波つて投手欲しいな。リードしがいがありそうだ」

「おじいちゃん、もうウチに居るでしょ」

「見たことねえなあ」

「お前、重ね重ね言うてはならんことを……」

「たまにはいいだろ。ここに来てから、俺の捕手防御率が悲惨なことになってるんだか

らしい」

、具体的に言えば5くらい上昇した。無論全く嬉しくない。

地味に1点台をキープしていたのが嘘のようである。

と、そのとき。

丹波の頭の上に、黒いエクスクラメーション・マークが灯る。

黒いエクスクラメーション・マーク。それは、失投のサイン。

「あ」

「貫禄の原作再現」

一発病、発動。スリーランを被弾して、2対3。そのまま終戦。

一瞬の隙を見逃さなかった御幸の勝ちである。

「いやあ、あそこで失投こなかったらなあ……」

「でもそれも丹波さんらしくなくね？」

「それもそうだな」

テレビの電源を切り、PSPを取り出す。

新たな戦力が加わった今、追加選手を加えなければならぬ。

御幸が降谷、智巳が沢村を作ろうと電源を入れた、その時。

ドンドンと、ドアを叩く音がした。

東条が風呂から帰ってきたのかなと思つて開けてやると、そこに居たのは――

「変化球を覚えたいのですが！」

「おお……いきなり来たな」

午後9時47分。汗と泥にまみれた沢村栄純、現る。

呆気にとられて本音が出た御幸に代わり、智巳が改めて問いを投げた。

「いきなりどうした、沢村」

「チーフ。東条にあつて俺にないもの、降谷にあつて俺にないもの――それはなんだと思いませんか？」

「そうだな。球速、コントロール、スタミナ、投球術、フォーム、守備力、球の重さ、経験、変化球、綺麗なストレート。御幸、あと思いつくことはあるか？」

「頭の良さと野球知識」

結構めたくそに言われているが、事実である。

沢村の球速は130キロに満たないし、コントロールは悪い。スタミナもあまりないし、投球術なんてものは存在すらしない。フォームは適当で、守備力はザル。球は軽い試合経験が少ないし、変化球なんて気の利いたものは持っていない。所謂ストレートも投げられない。馬鹿だし、知識もない。

しかし素質がある。それが今の沢村栄純だった。

「で、言ったけど、何？」

「……最近、クリス先輩と組んでるんですけど」

暫定的にだが、沢村は例のアレのおかげで一軍に昇格した。

もちろん夏の甲子園でのスタメンが確定したわけではない。だが、その所為で練習メニューが先倒しになっている。

クリスはそのことを憂いて、徹底的に身体を作る基礎練習をやらせている。

そのことが、上昇思考の強い沢村には辛かった。

基礎をやらされているというよりは、延々と同じことをやらされている気持ちが強

い。

挙句の果てにクリスは先にどこかに姿を消すし、終わらせても投球練習には付き合ってくれないしと、不満づくしのここ一週間。

あと二週間足らずで試合がある。そのことに、沢村は一種の焦燥を感じていた。

「降谷みたいな速球と変化球、東条のような投球術。俺はこつちを学びたいんです」

その焦燥感が、使える物への渴望に繋がる。

降谷を降谷足らしめている重くて速い剛速球、東条を支える投球術。

焦ってるんだな、と思い、御幸は智巳を横目でちらりと見た。

沢村に今一番必要なのは基礎力。土台となる身体。土台となる技術。

クリスはそれをわかっている。だから淡々と練習メニューを渡して実行させている。

「沢村」

「はい、チーフ」

「例えば、砂漠に苗を埋めたとする。そのまま木は育つと思うか？」

「思いません」

「何で？」

「育つような環境じゃないからッス」

「そうだよな」

沢村栄純は素質の塊であるということは間違いない。その素質を活かす為の努力を怠らないと言うことも、間違いない。

「クリスさんは、お前に基礎力を付けようとしてくれている。基礎力は大事だ。怪我を少なくし、身体の土台を作る。身体の土台がしっかりしてから初めて、制球とか変化球とかに取り組める」

「でも、降谷は変化球覚えたじゃないですか」

「沢村さん」

謎の威圧感が漂う。

どこからか不吉なBGMが聴こえそうな雰囲気、沢村は思わずビシツと背筋を正した。

因みに、別に智巳は怒っていない。御幸もそれがわかっているから、何も言わずにただ見ている。

「はいっ」

「君の今までやってきたことを悪く言うつもりはないけど、君は素人だ。正直なところ、降谷と東条と比べるにはレベルが違う。経験に関しては降谷とどっこいどっこいだけど、土台で天と地ほどの差がある」

あの球速が出るということは、しっかりとした土台ができているということを示す。

勿論それは球の速さに特化したものであつて、全体的なものだとは言いがたいが。

「でも、俺は二軍の打者を抑えられました。実力自体は——実力は、負けてないと思ひます」

沢村は、勇気を出して言い切つた。負けん気が強く、クソ度胸の持ち主。それが沢村栄純。

御幸は智巳に臆さず意見を言う沢村を見て、内心ニヤリとしてしまう。

こう言う負けん気の強い投手は、本当にいい球を投げるようになる。

キャッチャーとして、楽しみで仕方がない。

智巳は、その言葉を聴いて微笑んだ。御幸とは違い、顔に出した。

この気質は、本当に先が楽しみになる。だからこそ、今は基礎を固めさせたい。

「そう。負けてないんだよ、お前は」

「はい？」

「いや、負けてないの。不思議なことだね。降谷はある程度土台を作つて剛速球を投げられるようになった。だから抑えた。東条もしかり。経験を積んで、投球術を磨いて、抑えた。お前はどうかした？」

渾身の球を、思いつ切り投げ込んだ。狩場航のミットに目掛けて。

勝ちたいという思いとともに、期待を裏切りたくないという、思いとともに。

投球術も何もない。そこには意地と誇りがあった。

沢村がそう考えたのを見越したように、智巳は言う。

「お前だけが、素質だけで抑えた。メンタルの強さ、投げる球の特異さ。その持ち前の物だけで、お前は二軍の打者を抑えたんだ。ここに基礎が固まれば………どうなるんだろうな」

「……………大エース沢村、爆誕!!」

「二年後のな」

「いや、一年で追い抜きますねーではー」

「いや、それは無——」

ガン無視して飛び出していく沢村を見て、智巳はサンダルを履いて追いかける。

「オーバーワークをするな。風呂に入って、俺の部屋に改めて来い。ほつとくと何するかわからんから、基礎的な投球術の前、心構えくらいは教えてやる」

「おおつ、チーフ！あなたが神か!？」

「エースだ」

あまりの直進ぶりに少し前途を不安視しつつ、智巳は沢村を休ませる為に掌を返した。

投球術の前の心構えくらいならばまあいいや、という判断である。実際この判断は間

違っていかなかった。

クローザー沢村のデビューが、近づいている。

大会前夜

時は、沢村ハードワーク防止事件の二週間後の午後練の後。

「東条！今日あの二人が自主練くらいなら見てくれるって言うけど、来るか？」

「いや、それを言ったのは俺……」

「あ、そうだったか？」

同室なんだから、自然と関わる機会も多い。今日はピッチング見てやるよとか、今日は受けてやるよとか、今日ちよつと投げてみるよとか、色々鍛えられている。

ピッチングを見られれば足りないところを痛感し、受けてもらえばまだまだ己が要求を満たせないことを感じ、投げてみるよと言われれば打たれる。

結構、東条はしごかれていた。精神的にボコボコにされていると言ってもいい。まあ、本人が望んでいることでもあるからたぶんイジメではないのだろう。

「そうだよ。俺はいつも見てもらってるから皆で見てもらえよって言ったろ？」

「あー、そうだった」

あつけらかんとして忘れていたことを思い出す沢村に、小湊春市がちよつとツツコミ気味に声をかけた。

「……栄純君、それくらいは覚えていようよ」

流石は貴重な常識人枠である。殆ど聖人とアレしか居ない青道高校一軍に加入した四人の内訳は、馬鹿（沢村）、天然（降谷）、常識人二人（東条&春市）。

伊佐敷・増子・白洲ら待望の常識人枠である。

特に白洲。誰かは言及しないが、残りの二年生スタメンがアレしかないのだ。

歯に絹着せない奴、後輩には優しいが同期と先輩には厳しく、自分には更に厳しい奴、基本的には面倒見がいいが後輩に厳しい奴と、レパトリリーに事欠かない。

「降谷は行くか？」

「……行きたいけど、ちょっと」

「え、なんで？」

「……………また負けたから」

またドーンされたのだろうと、小湊春市は察した。

実戦でも使えるようになった縦スライダーと、即戦力の直球。

それを木製バットで粉碎する智巳の野球センスは、ずば抜けている。安定感こそないけど。

結城哲也と御幸一也。この二人も木製を使うが、まだ金属バットを使っている。

それは勝つ為であり、打者だからなのだろう。金属バットの方がよく飛ぶのは間違いない。

がない。

勝つ為に貪欲なああのエースが木製を選ぶとすればそれは、打者としての自覚が薄いから。ただ、本当にそれだけののだろうか。

なぜ、彼が木製を使うのか。

それが気になる。同じ木製バットの使い手として。

「栄純君、僕も行っていない？」

「春市、投手になるのか!？」

負けねーぞ！と気を燃やす沢村と、それに釣られたのか、あるいはまた負けたことを思い出して気を高ぶらせているのか、降谷からもオーラが漏れる。

「いいいや、ならないよ。だけど、興味はあるんだ」

何を思っ使用うのか。

自分は偉大な兄に少しでも追いつく為。木製バットを使いこなせば、少しでも近づけるはずだから。

兄に、そのバットを使いこなせるようになっていけば凄い打者になってるかもね、と言われたから。

その疑問を胸に、小湊春市は少し重い身体を引きずって行く。

「どうだったよ、基礎は」

「キソこそ物の上手なれというらしいですよ、チーフ！この沢村、弱音を上げる気はございません！」

「おー、立派立派。じゃあまあ、見てやるよ」

「へいー！」

多分意味がわかっていない慣用句を使う沢村をへんなペットか何かを見るような優しい目で見えた智巳は、ネットの前に立てた九分割の的に向けて五球投げさせてその変化を見て取った。

「身体の軸ができてきてるな。球のブレが酷くなくなった」

「キソですか！」

「基礎のおかけだろう。コントロールも、思ったところに行くようになったようだし」
まあ、それでもストライクゾーンを四分割にしたくらいだろうけれども。

心の中で思ったことを口には出さない。分割出来ていなかった前より、遥かにマシになっている。

「あとは、球を散らばらせることだ。内角低め、外角低め。ここに狙って投げられるだけで、配球の組み立ては遥かに楽になる」

「今のままではまだまだ、とっ？」

「丁半博打のようなもんだ。今のままだとお前が投げて、それを御幸が受けているだけ。」

リードに応えられなければ、ピッチングは完成しない」

ネット前に立つ沢村と代わり、智巳はウィンドアップモーションを取って一球投げた。

四角いの中で一、と書かれた左端のパネルが硬球に押されて地面に転がる。

「二、三、四、五、六、七、八、九つと。まあ、これくらいできるようになるんだな」

言った数字と同じパネルが硬球に押されて落ち、ついには枠だけが残った。

今の沢村には、できないことである。

「ぐぬぬ……」

「まあ、本番では俺もこうもうまくいくことはない。打者が居るし、どちらかといえば球威で庄すタイプだからな。こうも丁寧に投げられるのは、七割程度の力でしか無理だ」
悪くはない、むしろ良い。しかしこれと言って誇れもしない。

向井太陽のコントロールより、自分のコントロールは遥かに低い。

「頑張りな、二年後のエース」

「いや、引退する前にいただきます！」

「応援してるよ」

「むがー！」

完全に相手にされていけないように感じる沢村だが、智巳は相手にしているつもりでは

ある。

だからこそ、新たな武器として頭の片隅にほっぼっておいた高速スライダーを一日に数回投げるようにしていた。

(急に思いついて、一夜で習得した変化球だからなあ)

まだ十五球も投げていない。

川上のシンカーは習得と使い物になるキレに一ヶ月かかって、それでも制球難に苦しんだと言う。

まだ慢心はしない。できれば、哲さん辺りに使ってみたいが、みつともない物は見せたくないという葛藤がある。

御幸にだけは捕らせておくか、と言う目算はあるが、今のところはまだ実行されていなかった。

「……先輩」

「おっ、どうした降谷」

「勝負を」

「関東大会で——そうだな。2回に付き一個の四球で抑えたら三打席してやるよ」

「……四」

「駄目」

御相手手に投げ込みをしている降谷をいなしつつ、智巳は一旦止まったのを見計らつて相棒に声をかけた。

「受けてみて、どうよ」

「制球はマシになつてるし、縦スラもいい。だけどまあ比較の問題だからな。あくまでも一巡専用つて感じは否めない」

智巳以外が先発する時は先発は引つ張るが、それ以外は小刻みに継投をして、的を絞らせない。

リリーフと先発の役割が逆になつてきている気もするが、それが現状の投手力を一番活かせるであろう策だった。

「でも、一回を無失点に抑えられるならいい方だろ？」

「まあな。東条はあくまでも投球術ありきだから、対策されると打たれるけど、この二人に関してはイーニングなら本当に問題ないと思うぜ」

自滅する可能性もあるかもしれないが、最初から飛ばせば低めに集められなくもない。

勿論高めに浮く可能性も高いが、長いイーニングを考えないならばここで全力を使わせればいいわけで、制球も多少はマシになる。

「そのこと、監督に言つてみたか？」

「東条は先発が崩れた時のロングリリーフも考えるってさ」

どうせ失点するなら、長いイニングを。普通の武器で躲すピッチングをしている東条と、オリジナルの武器で叩き伏せているこの二人とでは起用法が違う。

片岡監督も投手だっただけに、その辺りはよく見ているようだった。

「それにしても、東条にも欲しいよな」

——決め球。

智己が暗に匂わせたその案に、御幸は神妙に頷いた。

「躲せるのはせいぜい二軍まで。」

それもあいつはわかっているさ。だから増子さんを相手にしなかったんだ」

そして、勝負して打たれた。強豪校の一軍の、中軸相手には打たれることを東条秀明は知っている。

「本人は？」

「最近握力鍛えてるみたいだけど」

「フオークかな。俺も投げる為にはかなり握力を鍛えたよ」

「最初の頃は力まなきや潰せなかった林檎を、最終的に力まずに右手で潰してたもんなあ」

「力は込めたよ。一応言っとくけど」

最近では入学祝いをお隣さん同士でやったとき、一升瓶を中指と人差し指で挟んで御幸の父のグラスについだこともある身体能力お化けである。

その後、御幸に『ピッチャーが馬鹿なことすんな』と言われたことは言うまでもない。

「……先輩、いいですか」

「おお、ごめんな降谷。話し込んじゃまって」

「いえ」

降谷は、投げることに飢えている。

捕手としては投手のやる気は嬉しいから、できるだけ受けてやりたい。

勿論、オーバーワークは防ぐが。

「あ、智。後で新変化球について話があるから時間作ってくれよな」

「わかった。俺もお前には見せようと思っていたところだし、都合が良かった」

そう言葉を交わして、智巳は危ないネットスローの現場から離れる。

御幸が捕逸する可能性はないが、降谷の暴投が怖い。

自分で的を嵌め直して的当てを繰り返している沢村を横目で見ながら、智巳はもう一人に声をかけた。

「で、弟君。君は投手転向希望者ってわけじゃないだろ。何をしに来たんだ？」

「打撃についてお聴きしたいことがあります」

智巳の45球

関東大会一回戦。

青道高校（西東京）VS横浜港北学園（神奈川）。

打撃力の古豪対、投打が噛み合った強豪という組み合わせ。下馬評はあくまでも横浜港北学園有利と言ったところだった。

なにせ、ここ数年春夏の甲子園に出れていない青道高校に対して、横浜港北学園は激戦区神奈川を勝ち抜いて前回の甲子園にも出た正真正銘の強豪。

5/20日、朝9時。

青道高校からほど近い東京都で、両校は激突した。

『関東大会一回戦、青道高校対横浜港北学園の模様をお伝えしてまいります。』

青道高校の先発は、エースの斉藤智くん。横浜港北学園の先発は、エースの一柳くん
先攻は、青道。

後攻は、横浜港北。

一番バッター倉持が打席に入り、ネクストバッターズサークルには小湊亮介。
相手投手の一柳は、フォークピッチャーである。

低めのフォークをよく見て手を出さないこと。甘いカーブを叩くこと。それが、青道高校の作戦である。

相手の作戦は、敵エースを消耗させること。全力をぶつけられてはまともに点を取れる相手ではないと、映像を見た彼等は理解していた。

まあ、謎の下位打線に連打される光景もあつたので、一概には言えなかつたが、概ね勝負は五回からというのが既定路線と言つていい。

この日の倉持、実に調子が良い。初球のストレートを弾き、サードの頭を越すヒットで二塁まで進む。

敵の守備が良い方だということを考えると、相変わらずの快速だった。

「おお……チーター……倉持先輩はチーターや!」

「元気だね、お前」

正式に投手になつた沢村栄純は、クリスの指導に色々言いたいことはあるようだが基礎の大事さを知つてからはうまくやつているようである。

それにしてもここ最近、割りとぐぬ顔だったことを考えると、この切り替えの早さとさっぱり加減は、すごいのかも知れない。

「沢村栄純、先輩からしごかれつつも元気であります!」

その割にはぐぬ顔だったけどな、と心の中で思いつつ、スルーする。

思い出させてまた戻られても厄介なのだ。

そうこうしている内に、チーターが三盗を決めてノーアウト三塁。

バッターは小技も長打も狙える二番打者・小湊亮介。

片岡監督は、スクイズを指示した。

まずは、ここで一点。小湊の技術と倉持の脚を考えれば失敗はない。

これに領き、小湊はキツチリとツーストライクから一塁方向に転がし、スクイズを決めた。

青道高校、機動力を活かしてまずは先制。

続く三番伊佐敷純が三振、四番結城がセンターライナーで、スリーアウトチェンジ。

初回に一点しか入らないところは、流星は強豪校と言ったところ。

「チーフ、後ろも居ますから全力で！」

「そりやまあ全力で行くけど、お前らにはまだ回さないよ」

別に今のリリーフ陣を信用していないわけではないが、信頼できているわけでもない。い。

まあ、今まではリリーフ陣を信用したことも信頼したことも一度もないが。

これまで、彼が信じているのはレギュラー陣の守備と打撃。他はない。

「一点しか取れなかった。すまない」

「完封しますから問題ないですよ、哲さん」

守備に散っていく打撃陣を代表して結城哲也が声をかけ、それに対して智巳は何でも無いように完封を宣言する。

「そう言うな。もつと楽に投げさせてやる」

エースの頼もしさに軽く笑い、結城哲也は一塁につく。

少し踏み荒らされたマウンド。小高い丘に、エースが立っている。

192センチの長身は、完全に打者を見下ろしていた。

最初に要求された球は、縦のカーブ。横浜港北は、一番から九番まで穴という穴がない。

だが、これと言って怖い打者も居ない。

(今回は、プランD)

三振控えめ、コントロール重視。

球数を減らした疲労軽減狙いのプラン。

外角から沈む縦のカーブを引つ掛け、詰まった球がサードに転がる。

サードは増子。全く問題なく捌き、強い肩と巧みな守備で快速の一番を当たり前のようにアウトにする。

次の打者は、外角高めのストレートからスローカーブを投げ、スイングを腰砕けにさ

せた後、内角低めのストレートで見逃し三振。

三番はアウトローの147キロの球でライトフライ。

計5球で、智巳はアウトカウントを三つ稼いだ。

「ワンアウトからの攻撃ですが、増子さんよろしくお願いしますよ」

「任せろ」

「おい」

ベンチに帰るや否や御幸が亡きものにされたが、御幸は息をするように三球目でフライを打ってアウト。

宣言というか、予想と言うか。まあ、言ったとおりにワンアウトから六番増子が打席に立つ。

狙い球を絞って挑んだこの打席、結果はセンターオーバーのツーベース。

七番は、斉藤智。木製バットを引つ提げての参戦である。

『彼、バットを木製に変えたようですね』

『この時期に変えてくるのは珍しいですね。何を思っただけで変えたのかは、ちよつとわかりませんが』

実況と解説は訝しむが、この理由は単純だった。

三球見た後、狙い球のフォークを掬い上げて、木製バットが静かに鳴る。

『これは外野フライでしようか』

レフト中段へフライが飛ぶ。

それと同時に、柔らかいリストを使って宙を舞ったバットが地面に落ち、得もしれぬ、官能的な音を奏でた。

(この瞬間のこの音が、堪らないんだよ)

コーン、と。静謐な中に、ひとつ美しい音が鳴る。その為だけに木製を使っている。『思ったより伸びますね』

『犠牲フライには充分でしょう。ツアアウト三塁でどうくるか、ですね』
実況と解説の言葉を裏切るように、フライの勢いは落ちない。

高く、高く伸びて、放物線をかいて遂に落ちた。

金属で出来ていた広角に打ち分ける技術と、パワー。その維持の為に夜にも素振りを
して、ウエイトもした。

なぜなら、そうすれば気持ちよく打撃ができるから。

その為ならば、努力は全く惜しくない。

小湊春市に、斉藤智巳はそう言った。理由は他でもなく、より美しい音を聴きたいからだと。
『外野フライではありません！外野フライかと言うあたりを、パワーだけで振じ込みま

した！3対0！

青道高校、リードを3点に広げます！」

ゆつくりと、ダイヤモンドを一周する。

観客の拍手、歓声すらも今は騒がしい。あの静謐な音が、頭の中で鳴っていた。

「いやあ、思ったよりフォークが落ちなくて良かった。少し高めに入れば打ち頃だな」

「お前の感覚だとな」

打撃陣プラス控え陣に歓迎されたあとメットを外してベンチに座ってそうつぶやくと、倉持に熱いツツコミを入れられる。

酷い言い草だと思うが、小湊亮介、伊佐敷純、増子透が頷いていた。

結城哲也は、その打撃理論に理解を示しつつも外野フライムランに触発されたのか、メラメラと闘志を燃やしている。

「沢村、水くれ」

「へいつ」

寿司屋の店員かなんかかと思わせる返事で、紙コップに注がれた水が渡される。

それをひよいと飲み干して、斉藤智巳は回収してきた木製バットをグローブを填めた手で撫でた。

「いい音だっただろ？」

「そんなもん聴こえねえよ」

倉持、つれない。

まあ確かに聴こえないだろうけれども、空気を読んでもよかろうではないか。

「でも、綺麗なスイングでした!」

「春市君、ありがとう。君は本当にいい子だね」

その後、八番降谷はひっそりと高校初打席初ヒット初ツーベースを放つ。

これでワンアウト二塁。

続く白洲もツーベースで、降谷が生還。ワンアウト二塁。4対0。

「敵、動揺してるな」

「動揺するようなところあった?」

御幸の分析に疑問を呈すと、周囲の視線が突き刺さる。

特に降谷からの視線が痛い。

「……結構、木製であそこまで飛ばされるとショックがありますよ」

「あ、そう」

何となく頷いた方がいいような空気を察して、智巳は頷く。

ワンアウトながら、二塁で上位打線。取れるだけ点は取っておきたい。

倉持は送りバントでランナー三塁。

小湊亮介がヒットで白洲が生還。これで5点差。

三番伊佐敷ヒットでなおも繋ぎ、打席には四番、結城哲也。

フルカウントから明らかに逃げた球で選り、満塁。

そして、とどめはこの男。

(いつも受けてるアレより、速くもないし落ちもしない)

御幸一也、決め球のフォークを、一切手を抜かない魂のフルスイングでバックスクリーンに運び、満塁ホームラン。9対0。

男御幸、5点差でも手を抜かない。

なお、増子はヒットで出塁したものの智巳は安心の二ゴロに倒れた。

安心と安定のゲッツである。

「すいません、監督」

「如何なる一流打者でも、すべての打席で打てるわけではない。高めに釣られたことをよく理解して、切り替えていけ」

「はー」

片岡鉄心は全力でやったならば如何なる失敗も叱りはしない。次に活かせ、と言い、問題点を見せてくれるだけである。

だから、いつも調子が悪かったら二ゴロを打つてこの七番打者は自由気儘にフルス

イングできていた。

三割打って結構四球を選び、併殺が多い代わりにホームランをかなり打つ打者の存在を認める片岡監督、心が広がった。

兎に角青道高校、この回打者一巡の猛攻で一挙8点を追加。9対0。

5回コールドまであと1点である。

「御幸、どうする?」

「相手も焦ってるだろうから、甘いストライクゾーンから厳しいストライクゾーンに曲がる球で詰まらせていこう。このゲームは俺達が五回で終わらせてやるから、なるべく流して完封してくれ」

「了解」

御幸の読み通り、横浜港北は焦っていた。

エースがまさかの大炎上に見舞われたこともそうだが、格下にやられたのである。

甲子園常連で優勝校でもある横浜港北が、未優勝で常連とも言い難い青道高校に五回コールドされるなど、恥でしかない。

そもそも、勝負は斉藤智が疲れる五回からだと思っていたのだ。五回までは、疲れさせること。この作戦が完全に破綻した。

(完全に吞まれてんな。焦り、最高よ。焦れば焦るほど、こつちとしては打ち取りやすく

なるんだから)

チエンジアップ、カットボール、スローカーブ。

主戦球ではない球を脇に固めた配球でこちらが終戦に走っていることを匂わせ、更に怒らせる。

怒れば怒るほど、焦れば焦るほど、人の視野は狭くなる。

(それにしても、今日はカットボールがめちゃくちゃ冴えてる)

ファーストゴロ、サードゴロ、ショートゴロ。

(この分なら、スライダーもキレてるんじゃないか?)

二回の裏を終えて、三回の裏。

御幸は決め球に、スライダーを指示した。

(スライダーか)

言われた通りに、言われたコースに。

智巳は投げた。

スライダーは構えられたキャッチャーミットの上をすり抜け、打者の背中に直撃して地面を転がる。

『ああつと、ツーストライクノーボールからまさかの暴投!』

『どうしたんでしょうかね。彼、暴投とか死球のたぐいは少ないんですけど』

スピードガンを持ってネット裏で測っていたスカウトと、捕手だけがわかった。

この球は、失投ではない。もっと別の、得体の知れない何かだと。

「タイムお願いします」

御幸がタイムを取り、マウンドに駆け寄る。

帽子を取って謝った後の智巳は、黙り込んで空を見ていた。

「あの球、お前の言ってた高速スライダーか？」

「そう。笑い事だけど、投げられなくなったんだよ。あれしか」

「……スライダーを投げようとしても、か？」

「癖になってる、らしい。指の切り方とか、振り抜きようとか、そこらへんが。これから

戻していく」

「いや、戻さなくていい。今日はスライダーやめとこう。カットボールならいけるんだな？」

無言で頷いた智巳の左肩を小突いて、御幸は切り替えを促してホームベースに戻る。

(ストレートのキレが増したのは何でだと思ってたが……)

一球種覚えた結果、ストレートの回転が死ぬこともあれば、その逆もある。

今回は、その方向だろう。しかも、あのスライダー。

（「いや、今は目の前のことに集中しろ」）

目に焼き付いた球が、目の前にある。

そのことを必死に忘れようとして、御幸は配球に思考を傾けた。

ファーストライナー、セカンドゴロ、セカンドフライ。そして、ファーストフライ、センターライナー、ライトフライ。

その後は計九個のアウトを十八球でとる省エネピッチで、斉藤智巳は計三十六球で四回まで投げた。

そして、五回表。二回以来沈黙していた打線が爆発し、4点追加。これで13対0。となれば、沢村が出る場面なのだが。

「監督、あんなことしておいて何ですけど、五回も行っていないのですか?」

「勝ち進む以上、こちらの新戦力見せないに越したことはない。行つてこい」

対策しても一回は問題ないと思われるが、それでも余計な情報は与えないに越したことはない。

それにこのエース、まだ四十球いっていないのだ。

「キツチリ0封してきます」

「どこか少し『まずかったかな』と言う顔をしている監督に向かって、智巳はグツと親指を立てながら自信たつぷりに宣言した。

だが、監督の心配はそこにある。

「そこに関しては心配していないから安心してしろ」

むしろ、あの球と、先発として連投しようと考えているであろうことが怖い。

そのことをおくびにも出さず、片岡鉄心はエースを送り出した。

この絶対的な信頼に若干気を良くしたエースは完全に調子乗り、打者三人を九球で三者連続三振に切つてとつてピシヤリ。

被安打0、四死球1、奪三振4、45球完封勝利。

『脱三振』を題目にした関東大会一戦目は、敵のアシストが大きかったものの概ねうまく行った。

「ナイスピッチングだったぞ、斉藤。明日はレフトでその打撃を活かしてくれ」

「明日も行けますよ、監督」

「明日はレフトだ」

「45球しか投げ——」

「レフト」

犬がハウスと言われるように、智巳はピシヤリと抑えられた。

明日も使っても良かったが、守護神として使うかもしれないから温存する。

順調な滑り出しにもかかわらず、片岡鉄心に油断はなかった。

魔球

コールドの参考記録とはいえ関東大会記録となる45球での勝利と、一死球無安打のほぼほぼ完璧な投球。そして何よりも、木製バットによるホームラン。

試合が終わった途端マスコミに囲まれた智巳は、それらに丁寧に対応しながら最後まで長々と付き合ってやり、結果的に帰りはコールドしたのにしてないのと同じくらいになってしまった。

マスコミを味方につけるのも勝つ上での戦略。

そのことを片岡監督もわかっていたが、あまり負担をかけさせない為にインタビュなどはいつも軽く切り上げさせていた。

その強面も相まってそれはかなりの成功率を誇っていたのだが、今回は別。投げた球は45球。フォークが2、チェンジアップが4、カットボールが3、スローカーブが2、スライダー1、あとは殆どストレート。

正直なところ、精神的にはともかく身体にあまり疲れはない。

そのことを考慮して、インタビュを最後まで受けることを許可していた。勿論これは次の試合はレフトへ行く、ということが決定したからでもある。

イケメン、高身長、(対外的な) 礼儀正しき、お化けじみた野球のセンス。更には、相手もイケメンで(対外的には) 礼儀正しく、抜群の野球センス。

これらを総合してみると、智巳と御幸は甲子園のスターになる才能があった。

そしてこの二人は、リトルからのバッテリーで家も隣。マスコミにとっては格好の餌。

まあ、利用されてるのはどちらなのは神のみぞ知ることである。

兎に角、マスコミの注目はまずこの二人。次いで主将の結城。こんな雰囲気は漂っていた。

「大変ですね、チーフ」

「二年後のお前だぞ」

「うが……やっぱり、エースって大変なんですネ」

「そらそうだよ」

色々背負う物もあるんだから。だけど、その分やり甲斐がある。

マウンドに立てるんだから面倒くさいと思わないことだと論しながら、気を利かせて飲み物を差し出した沢村が何か言いたそうにしているのを見て一つため息をついた。

「なんだ」

「チーフ、何か変な球投げてましたけど、なんですか？」

「どんな球だった？」

変な動きをする球筆頭は現在高速スライダーだが、この試合では未使用。

次席は高速フォークだが、これに関しては沢村も知っている筈である。

「見た目ストリートだけど凡打にした奴と、やる気がない球ツス」

「前者はカットボール……あ、俺的には小さいスライダーと小さいシュート、それと小さいシンカー。後者はチェンジアップと言う。チェンジアップはともかく、前者ならお前のムービングの変化の中にも似たようなものがあるが、それがどうかしたか？」

「キソ終わったら、その小さい系統の球をいっぱい教えて下さい」

自分はまだ三振を取らないタイプの投手になると、沢村は前回のピッチングからなんとなく察した。

この察しははずれ裏切られることになるのだが、今のところは正しい。

なので、バラバラに動くムービングボールの方向を自分でコントロールできれば、と思いは始めている。

「うーん」

智巳としては、教えてやりたい。しかし、小さいシンカーと小さいシュートは3日前に投げ方を御幸から教わって何となく投げてた物。小さいスライダーも最近何となく投げられるようになったもので、カットボールとは本人の感覚が微妙に違う。

チェンジアップも副菜のようなもので、あまり優れているとは言えない。

「お前が基礎を終える前に、俺が教えられるくらいにまで投げられるようになったら教えてやる」

「投げられてたじゃないですか」

ケチー、とでも言うように口を窄めながら追及してくる沢村に青さを感じながら、智巳は少し苦笑して隣を歩く沢村の肩を叩いた。

「基本的に小さい系統は御幸が球数対策として新たに投げてみると言ったものだ。今はまだ、開発中。それに、お前のムービングの方が曲がっているから……教えた結果劣化する可能性もある」

「なんで？」

謎のタメ口を特に咎めることもなく、まだまだ実例やなにやらを知らない。

「そりやお前、一つ間違えればムービングボールが変わるかもしれないからだよ」

「野球って難しいんツスね」

「特に投手は繊細なものだからなあ……」

捕手にスライダーを勧められながらシンカーを覚えた結果、ストレートのホップするような回転が死んだ、という実例もある。

「じゃあチーフは繊細じゃないんですか？」

「俺はその微妙な繊細さが当て嵌まらない程に繊細な調整力を持つ指と肩と肘を持つてるんだよ」

「おおー………！」

聴き用によつてはものすごい質問に適当な嘘を言つて誤魔化しながら、智巳はさつきとバスに乗つた。

だが実際、最近異常は起きている。

ただのスライダーを投げられないようになったのである。だから、結局昨日も高速スライダーに関して誤魔化した。結果として今日のアレに繋がつたが。

(どうしたものか)

投げられないと言つても、曲がりを変というだけ。あとコントロールが割りと雑。でも、キレてはいる、と思う。

やはり早めに言つた方が良かったのだろう。あんなことが起きたわけだし。

「智」

「はい」

「ちよつと話がある。結構重要なことだから、よろしく」

「はい」

割りと反省モードに入っている智巳としては、領くより他にない。

「あ、怒ってはいないからな」

「は？」

「いや、マジで」

似たようなのだから大丈夫だろうと思いき勝手に新球種覚えた結果、ストレートのキレと球威が増し、カットボールのキレが上がり、新球種の高速スライダーを得てスライダーを失った。

「智巳からすれば貴重なカウントを取る扱を一個潰してしまったことは悔やまれることだが、御幸からすればそうでもない。」

バスに揺られて青道高校に着いて、珍しく御幸はクールダウンを終えた智巳に休めとも言わずにブルペンに立たせた。

「あの時、俺は斜め横に構えた。斜めに落ちながら横方向に進むのが、スライダーだからだ」

斜め横。右打者にぶつけるように投げるとよく曲がると言われるのが、スライダー。必ずしもそうではないが、利き手と反対方向にスラッシュを描くように滑る。

「だけど、お前のスライダーは落ちなかった。ついでにコントロールも乱れた。だから打者にぶつかった」

静かに、キャッチャーミットを構える。

「本気で、腕振って投げてこい」

「どこ行くかわからんぞ」

「それでいい」

ワインドアップムーションにはいる。

何の遠慮もない、十年前とかの古い時代を見るような豪快なフォーム。

天然でこの原型ができ、実戦の中で削ってきたフォームは、死球の後でも崩れていない。

0.01秒単位の世界で最良の時を判断して、エースの指がその魔球を切り抜いた。
(ストレートか)

すっぽ抜けたのか、或いは遠慮したのか。コンマ何秒の世界で咄嗟にそう思った御幸は、一先ずこのストレートを捕球しようと試みた。

相変わらず、キレている。それは間違いないが見たいのはそれではないのだと思いがら。

だが、その球はミットに収まるのを嫌うようにチエックゾーンを超えて、ホームベース付近で初めて横へ動いた。

——その魔球は、加速しながら滑るように真横に曲がる。

頭ではわかってはいたが、ストレートと誤認して触れさえ出来なかった。

いや、誤認していなくてもできなかつたろう。

他に誰もいないブルペンに、白球が転々と転がった。

「見たか」

「……ああ」

お前ごときが捕れると思うなど、憧れた魔球は笑っていた。

まだまだ技術が足りないのだと、それでは触れることすら無礼だと。

人が投げられる球ではないから、魔球と呼ばれる。

その名を冠すに相応しい球は、高速スライダーは言っている。

「このざまだ。まるでコントロールが利かない。完成してキレと速度は増したが、とん

だ暴れ馬だよ」

立って地面に転がった白球を拾った御幸に、智巳は言った。

茫然自失としているのは、カウントを取るときに頼みとするスライダー系がカット

ボールしか投げられなくなったからだろうと、智巳は察していた。

「……もう一回投げてくれ、頼む」

「は？」

「頼む。次は捕る」

鬼気迫る、と言うのか。いつになく本気の御幸に思わず頷いて、智巳はまたモーショ

ンに入った。

(来る。それはわかっている)

眼に、全く技術が付いていかない。と言うか、眼もついていっていない。

この男のフォークは一瞬消える。だが、勘と経験で捕れる。

この球は消えない。だが、予想を嘲笑うようにあり得ないくらい曲がる。陳腐だが、そうとしか表現できない。

ミットに僅かも掠らず、また白球が転がった。

また投げて、掠らない。

4度目で身体がやっと反応できて、5度目で掠った。

「智、今変化が小さかったけど」

「気の所為じゃないか？」

「いや、小さかった。と言うか、徐々に変化が小さくなっていったる。

お前、変化量調節できるんだろ」

マズツ、と言わんばかりの表情をしたエースの顔が何よりも雄弁に事実を物語っている。

謂わば、一番大きいのが最初の。二、三と対応できなかったから下げていき、四で明らかに縮めて五でこそぎ落とした。

「できるよな?」

「できるよ。五段階までだけど」

「どうやってやってんの?」

「指の切り方を変える。速くしたり遅くしたり、カット切ってみたり」

「見る分には同じなんですすがそれは、と言いたくなるのを堪えて御幸は黙った。

「こう言う感覚派に何を言っても無駄であることを、理論派の彼は知っている。

「わかった。カメラ持つてくるから、取り敢えずこのスライダーをもう3球、ネットに向かって投げてくれ」

「はいよ」

偵察班を引っ張ってきて撮影させ、撮影した映像をパソコンに移す。

「そこまでをちやちやつとやって、御幸はビシツとエースを指差して宣言した。

「二日十球まで投げ込んで、コントロールド強化よろしく。コントロールドが若干でもマシになれば、必ず捕れるようにするから」

「いや、その短い時間の中で完璧に制球できるまでにする。そしたら受けてくれ」

「……そうか。なら、その気でよろしく」

「ブツブツ言いながら部屋に戻っていく御幸を見送って、智巳は室内練習場に足を運んだ。」

目的は素振り。木製バットの美しい音をより聴くために、彼は毎日三百回これをして
いる。

より速く、より強く。

完全に打撃に面白みを見出しているエースを、一つの影が追っていた。

制覇

関東大会第二回戦。対戦高校は千葉の名門専大松田。

青道高校の先発は丹波。

スターティングメンバーは一回戦から降谷がベンチに戻り、代わって智巳がレフトへ。

前回では出番がなかった中継ぎも準備をさせている。

「丹波。7回までだが、9回まで抑える気持ちで投げろ。本来、お前ならばそれくらいはできるはずだ」

別にこれは鼻肩とかではなく、縦のカーブが決まり、ピンチで動じたり連打にビビったりしなければ普通に四失点完投はできる。

いや、これは本当に。

丹波も監督の言葉に答えようとしたが、現在守備には大穴が空いている。

(レフトには打たせたくなえなあ)

御幸としては、レフトにフライを打たせることすら怖い。

とんでもないファインプレー(オール身体能力製)があるが、何でもないフライを(技

術が足りないので)GGすることがかなりあるので、怖いことこの上なかった。

この日の丹波は、取り敢えずエースを目指すことをやめ、目の前の打者だけを見ていた。

飛躍は望まず、一歩ずつ進む。そちらに切り替えてから、ピンチでも少し周りが見えるようになった。

そして何よりも、三年の丹波には後がない。

一番を三振に切って取り、順調な滑り出し。

(よしよし、良いですよ丹波さん)

求めたコースに来る喜び。

縦のカーブもキレているし、あとは貫禄の一発病から崩れることがなければ何とかなる。

二番が打ち上げたフライは、センターへ。

ほんの少し左にズレたらと思うと御幸はゾツとせざるを得ないが、レフト寄りに守っている伊佐敷ならば全く問題なし。

あらかじめ智巳はレフトの狭い範囲に固定しているからセンターがいけると判断したら少ししか追わない。

続く三番、三振。

素晴らしい立ち上がりである。

「丹波さん、ナイスピッチ！」

「やればできるじゃん。でも、いつもやろうね」

「落ち着いていけば、できると思っていたぞ」

御幸が珍しく本音を口に出し、小湊亮介がたしなめ、結城が褒める。

もはや三凡でないことの方が珍しい智巳が投げている時にはない一体感である。

「さあ、点取っていきましよう！」

一年なのに謎の盛り上げ役と化した沢村が言う通り、まず点を取らなければじまらない。

一番は倉持。塁に出れば二塁打確定のスピードスターは、塁に出れず三振。

二番小湊亮介、安定の四球を選ぶが伊佐敷ゲツツーでチェンジ。

「投手戦になりそうですよ、丹波さん」

さり気なく『あなたも点は取られないでしょう？』とやる気の炎を煽りながら、御幸は付けっぱなしだった防具のまままでホームベースに向かう。

マウンドには、丹波光一郎。

（あと一つ変化球があればだいぶ楽になるんだけど、制球が安定してる今の方がリード自体はしやすい）

なにせ、縦のカーブが若干の誤差はあれどバンバン決まるのだ。やりやすい以外の言葉が出てこない。

御幸のリード、ここで初めて活かされる。まごうことなき朗報である。

丹波、三回を終えて未だ被安打ゼロ。背負ったピンチも勿論ゼロ。

言うまでもなく、今までの中でのベストピッチ。

「俺は、こんなピッチングもできたんだな」

ポツリと呟いた言葉を、片岡監督は少し胸が塞がるような思いで聴いていた。

長身に、縦に大きくキレるカーブ。素質はあった。しかし、開花しないでした。

ここに来て、後が無いという切羽詰まった感情がその素質を開かせつつある。

その後も、丹波は頑張った。

二回飛翔したものの、ピンチを背負ってもなかなか崩れないピッチングで連打を許さず、強豪相手に6回を3失点。

一方相手は七回に降板したエースに代わって出たリリーフが試合をぶち壊すという何処かで見えた展開。

その後は初登板の東条が五、六、七、八、九番から一失点するも何とか逃げ切り、その後は降谷が一番を歩かせるも、二、三、四番を連続三振で仕留め、この男の出番がやってくる。

「バックの皆さん、ガンガン打たせていくのでよろしくお願いします！」
一年生クローザー、沢村栄純。

7対4。最終回裏、3点差でマウンドに上がる。

因みにこの試合は、結城哲也が敬遠もあつて打点を挙げられず、御幸スリーラン、増子二打点、伊佐敷ツーランの二打点で計七打点。

伊佐敷は五打数二安打二打点

結城は3四球、二打数二安打。

智巳はフルカウントからの4四球で猛歩賞を達成、だが、残った一つは空振り三振。

御幸は五打数一安打三打点。

増子は五打数二安打二打点。

援護は十分だった。

沢村は初球でポテンヒットを一個許したものの落ち着いて次の打者を4ー6ー3に仕留めてツーアウトを取り、残る一人を三振させて全く問題ないデビューを果たした。変則的な三凡である。青道高校OBの耳にはポテンヒットを許した時に謎ののれんが見えたとの証言が相次いだが、何とか次のゲッツーで胃を保つ。

青道高校、関東大会準決勝進出。

準決勝は川上が先発。

七回を五失点で抑え、降谷が暴投で一点取られるも、その後は沢村がパーフェクトリリーフで裏を抑えて10対6で勝利。

そして、決勝の相手は西東京の強豪・成孔。

レスラーのような体格をした奴が集まった強打のチームである。

圧倒的な打撃力を誇る青道高校と熾烈な打撃戦が期待されたのだが、青道高校の先発がコールドされた時点で成孔ファンは帰り支度をはじめた者も居たという。

先発は、斉藤智巳。

試合展開はワンサイドゲームという言葉が一番似合う。

充分休んだ彼は一人のランナーも出さず、109球、被安打0、無四死球、25奪三振で九回を完封。

6対0の完全試合で鎧袖一触。関東大会優勝を決める。

表では決勝で完全試合と言うビッグニュースで新聞が賑わい、裏では鷹せんが破壊されるほどの盛り上がりを見せて、関東大会は閉幕した。

「盛り上がってますなあ」

「また、青道高校野球部の新聞費がかさんでしまう」

自身三回目の完全試合だから、今更やっても特に感慨はない。

ノーノーも六回やったから、特に感慨はない。

でも、優勝できたのは嬉しい。この新聞費を心配するエースの心境はそんなところである。

「優勝は当然嬉しいけど、監督を関東大会で優勝させられたのはかなり嬉しいよ。最近大型大会での優勝から遠のいてたし」

「エースらしい言い草だ、智」

「そりゃまあ、エースだからな」

ハハハこやつめ状態な二人は、実は寝坊組である。

理由は単純。マスコミに捕まっていたから。

『投手としてのあなたにNPBの十二球団やメジャーが興味を示しているようですが、どうですか?』に対して、『私が十二球団やメジャーに興味を示しているようですが、じゃないんですか?』と笑って答えたり、『完全試合をリードして演出した今のお気持ちは?』と訊かれて『智は調子が良ければ何処に何を投げると指示しても簡単に抑えるので、特に達成感はありません』とか答えたりと、色々あつて疲れている。

更には今日は練習がないから。

そして何より、二回目になるが疲れたから。

「にしても、これでシードは当確だろ。関東大会に出た時点で元々そんなもんだらうけど、やっぱり戦わずして勝てるのはいいよな」

智巳は、少し嬉しさを滲ませながら目の前の相棒にシード権について話す。

夏の甲子園予選、シード権が与えられると二回戦からの登場となる。

抽選がまだだから何とも言えないが、回復が遅い自分にとっては嬉しい。

「まあ、俺としてはそれはあんまり嬉しくないんだよね」

そう思つて発した言葉だったが、御幸としてはあまり歓迎されことではないらしかつた。

「なぜ？」

「一年生に場数踏ませたかつたんだよ。正直、一・二回戦までならノリでも安定して試合作れるし、そうなりや格好の場面だった」

4日間かかった関東大会も終わり、いよいよ6月。あと一ヶ月と少しで予選がはじまる。

「じゃあ、失点してあげた方が良かったかな」

「いや、お前と敵を容赦なく踏み潰すのは好きだからいいし——」

何よりも、沢村・降谷・丹波に炎が見えた。

格が違うピッチングを見せられての、負けん気の火が。

「——面白くなりそうだからな」

「あつそ」

味噌汁を飲み干して、少し休んでからグラウンドに顔を出す。

そこには、増量されたスカウト陣と記者陣がズラリと並んでいた。

「お前、人気者だな。阿部さんとか里崎さんとかいるけど、今は捕手不足だもんな。普段顔の見えないイケ捕は辛いな」

「いやいや熱き血潮の敗けないエースよ、何を仰る。あなたがお目当てでございますよ。と言うかお前も敗けず劣らずのイケメンだろ」

「新聞のアオリをリピートすんのやめろ」

「変な略し方やめろ」

壮絶な押し付け合いの末に、取り敢えずグラウンドではなく寮の周りでやれることをやろうという結論に達し、二人はそさくさと帰った。

スライダーの制球と捕球は、まだうまく行っていない。

「制球はマシになったんだから、俺もそろそろ取れなくちゃならないんだけど」

「マシって……三球に一球しか狙ったところにはいかないようじゃ投手じゃないだろ」
「……………うん、そうね」

いかなかった奴が居たんだよなあ、と回顧しつつ、御幸は構えた。

投げられた球はスライダー。

捕りに行くというよりも、今は止めに行っている感が強い。

パン、とグラブが弾いて、白球があらぬ方向に転がった。

「当てられるようになったけど、まだまだだ」

「数日で当てられるようになるんなら進歩じゃないか？」

少なくとも最初に高速フォークを投げた時はこうもうまくはいかなかった。

突き指と後逸の嵐だった筈である。

「いや、捕りたいんだよ」

「と言うか、何で降谷のコントロールが乱れた暴投は捕れるのに俺のそここのコントロールの球は捕れないんだ？」

150キロ近い上に外れた方向の暴投を咄嗟に捕れる男、御幸。因みに智巳は捕れないし、青道高校で取れるのはクリスくらいだと思われる。

「そりゃ、球があらぬ方向に消えるからに決まってるだろ」

「あらぬって……横にスライドするだけじゃないか」

「斜めに慣れた眼からしたらどうしても追っちゃうんだよな」

「なら俺のスライダーに慣れろ」

「おうおう、無茶を仰る」

実際、今はカットボールの延長として手を伸ばしている感覚に近い。

スライダーとして認識できなければ、この球は捕れない。

「もう一球は、ミットに目掛けて投げてみてくれよ」

「実際にはお前のコントロールはそんなにうまくいかないから散らばせと言ったのは誰だったか……」

とか言いつつ投げた球が、智巳の許容範囲を超えて僅かに外れた。

暴れ馬はまだ騎手を得ず、青い虚空を駆けている。

春を終えて

招待試合と練習試合が続いている。

無論一軍が相手をすることもあるが、そうではない相手——つまり格下は控えが相手をすることもある。

関東大会は終わった。ベンチ入りメンバーたちは優勝できたことに嬉しさをあらわにしつつも『次は自分があの時グラウンドに立ってしよう』と更に努力を重ね、スタメンは更なる技術の向上と打撃の調子の維持に励む。

ここ一ヶ月の主役は、経験の少ない者と一軍半たち。つまり沢村や東条、降谷、小湊春市など一年と、二軍の選手たちだった。

一軍スタメン軍団は時々各地の名門校と戦っている。

名門校の目当ては関東大会のパーフェクター智巳だが、連投が利かないので丹波や川上にも経験を積ませたい。

なので、この男は野手出場が主だった。

「沢村、フォーム変えた？」

練習試合から帰ってきた智巳を沢村が呼んで開口一番、エースはぺろつと今伝えた

かったことを口に出した。

ウィンドアップモーションから脚を上げる旧式と、ウィンドアップモーションから右手のグラブを潰して投げるようなフォームの融合。

ちろつと見ただけで、変化がわかる。

「そうですよ、チーフ！どうですか！」

「いいんじゃないかな。打者として立ったこと無いからあんまり大したこと言えないけど」

基礎を鍛え続けているからか、足腰周りがガツチリと上体を支えている。

変化球をそろそろ覚えてもいいが、どうせならまだ基礎をやらせたいので保留とする智巳だった。

まだ一年生なのだから、基礎を固めた方がいい。極論になるが、変化球は3日で何とかなる。

高速スライダーも高速フォークも、一晩で思いついて投げられた球だけに、更に言えば覚えようとして投げられなかった球がないだけに、彼は変化球に関しては目算が甘かった。

「それにしても、ウィンドアップやめなかったんだな。最近制球重視のセットが主流なの」

最近は、ちゃんとプロ野球を見ているし、東条と降谷と一緒に御幸投手ゼミに参加しているから主に最近ののだが、様々な名投手を見ている。

だからこそ、フォームを変えるならノーwindアップかセットにするかと思っただが、沢村栄純は変わらなかった。

「エース目指してますんで、格好にもこだわりますよ！」

「ほーお」

勝ちにこだわられよ、と言いたいが、自分も大概結構ええかつこしいところがある。

ホームラン打った時の音がいいから木製、サイドスローの次にエースらしいからwindアップとか。だから、大きなことは言えない。

因みにフォーム構築には御幸は一切関わってない為、智巳のフォームには無駄な動き多いがその無駄の多さが却って無駄のなさに繋がるといふ、天才特有のアレになっている。

だから、沢村には何も言えない。そもそも言う資格がない。

「お前の言うところのエースって、どんなもんよ」

「大振りのwindアップ！」

時代遅れの発想である。実際windアップは動作の無駄だと結構言われたりしている現在の野球。悲しいことにセットやノーwindアップが主流だと言える。

自分のことを柵に上げて、智巳は分析した。

「相手を押し、吼える闘志！」

これも少ない。ガッツポーズはあるが、吼えらるとなると稀少である。

「狙つてとる三振！」

結構それができる人は多いのではなからうか。と言うか、三振は狙つて取らないものなのだろうか。

そうならば、そんな丁半博打のようなピッチングはしたくない。

「あとまあ、身長が高いことですかね」

「わかる。丹波さんとか真木とか貫禄あるもんな」

「お前だろ、それ」

え？という顔をした沢村に、横からやってきた突き指男が援護射撃をした。

スライダーが捕れなくて、ついに軽く突き指してしまった正捕手の登場である。

もう治りかけだが、キャッチングは自粛中だった。

「あれ、そうなの？」

「そうツス。俺、テレビとか見ないから、エースつてあの時に初めて見たんですよ」

「ははあ、なるほどな」

この男、フォームが異様にカッコイイ。そりやあもう無駄な動きをするのかもしれな

いが、とにかくカツコイイ。

本人曰くその無駄な動きで打者のタイミングを外したり、何をどう投げかを調節しているらしいから、無駄と言ってはダメなのだろうが、傍から見たら結構無駄。

だが、カツコイイ。そして何よりも、身長と相まって挙措がエースらしいのだ。沢村が憧れるのも已む無いほどに。

丹波さん189センチ、智巳はあれから少し伸びて194センチ。

部の中で一番、このエースは背が高い。

「沢村。お前、何センチだっけ?」

スツーと自分の額のあたりに敬礼のように左手を当てて前にスライドさせ、沢村との身長差を確認しながら、御幸が問う。

「173ツス」

「俺は今179くらいだけど一年の時は172だから、そんなもんだろうな。智、お前高1の今頃何センチ?」

「190くらいが精々だった」

「精々って……そう言えば部内一位だった東さんを見下ろしてたもんな、お前」

因みにその後横浜にドラフト三位で入団した東清国は身長アップに取り組み、現在193センチにまで伸びた。

しかし、近頃は食べ過ぎで二軍に落とされたらしい。監督が少しお怒りだったことを覚えてる。

「チーフあの人より大きかったんですね……」

額を突き合わせるような感じに突つかかっていただけに、あのズツシリした肉つぽいデカさは体感している。

それよりこのシャープで硬質な感じがあるエースがデカイというのは、ちよつと信じ難い。

「意外か。まあ、あの人の場合打者としての迫力が凄いもんな」

「いや、横幅が無い分小さく見えると言うか。あと、チーフもマウンドだと背中になんか見えるみたいになってますよ。頼もしいツスけど」

忌憚のない正直な意見に御幸は笑い出し、智巳はへの字型に口を曲げる。

横幅がデカイ。背中に何か見える。その通りだろう。

あまりにも的確すぎる指摘に、御幸は少し笑ってしまった。

「でも、俺の方が体重重いんだぞ。お前と会った時のあの人の方が確か95で、俺は今朝方計ったら98だったから」

「ええ!?!」

どう見ても、東清国の方が重そうである。具体的に言えば10キロくらい。

「こいつ、関節が緩くて怪我しやすいからって言って筋肉の鎧付けてるからな。最近は特に筋トレしてるし、そりやまあ重い重い」

元はと言えばお前のせいだろ。そう言いかけて智巳はやめた。

確かに発端と継続を促したのはこの男だが、怪我をさせたくはないからと、全体練習でも身体づくりを中心にしたメニューを組んでくれたのはクリス先輩と監督。

御幸も含め、良かれと思ってやってくれている。実際最近は何も怪我していないわけだし。

「そんなようには見えませんか」

「内側に付けてることもあるし、着痩せするタイプなんだよ。そして何よりこいつ、背が高いから」

その背丈、実に御幸と14センチ差。

デコボコバッテリーってほどではないが、結構な差がある。

「俺も伸びますかね?」

「180センチが精々なんではないかな。線が細いし」

「殺生な!」

「俺も同じ様な感じだろうし、いいじゃん」

めちやくちや適当なフオローに苦笑して、智巳は肩甲骨と肩甲骨をくつつけて背骨を

バキバキ鳴らしながら手首を引っ張って腕に付ける。

今日は珍しく早く寝てそのぶん長く寝たから、かなり身体が凝っていた。

関節が柔らかいこの男は、サラッとこう言うびつくり人間万国博覧会みたいなことをする。

「沢村、フォームが固まって何よりだが、まだスタート地点にすら立てていない。コントロールが散らばっているようだが、そこも直していけよ。あと、ストレートをちゃんと投げられるようになれ」

「勿論であります！」

ワインドアップは、球威の代わりに制球が定まり難い。

脚の向きを調節したり、プレートの立ち位置をずらしてみたりと世話を焼きながら、沢村のフォームは完成に近づきつつあった。

降谷暁も、東条秀明も、身体に合った完成したフォームを持っている。

沢村栄純だけが未だに完成していない。

狙ったところにボールがある程度行くようになって、この日の自主練習は終わった。

「あとはそこからへん走ってる。二十周したら帰ってくるんだな」

「スタミナですか！」

「そう。エースは完投しなければな」

思想が古いなあと思うが、完投能力があることは悪いことではないので御幸も特にも言わない。

「では行つてまいります！」

「おう、行つてこいや」

と言つても、智巳も特にやることがあるわけでもない。

丹波・東条・降谷とスタメン軍団は練習試合に行つてしまつたし、ここに居るのは沢村と川上の前回の練習試合で投げた二人と、御幸以外が受けると後逸祭りを起こすエースと突き指した正捕手。

あと、二軍のみ。

「暇だし、ウエイトしてくる」

「俺はあんま手を使いたくないから配球とか稲実の分析とかしてくるよ」

午前中を丸々筋トレに費やしたとはいえ、さんざん沢村を見てやったから、体力は回復している。

この後結局三時間ほど鍛えて、木製バットでの素振りを二百回やって、右手の関節や筋肉の一つ一つをリハビリ用のハンドグリップで鍛えたあと、風呂に入つて飯食つて、東条と共に右手を鍛えながら左手で本を読んだあと、寝た。

東条はもはやルーチンとなつている握力アップを利き手ではない左腕で本を読みな

がら右手でこなし、飯も左手で食って寝た。

御幸は遅くまでテレビを見ていた。

必要な事とはいえ、後者は迷惑な奴である。

選抜

一夜明けて、御幸以外の野球部員にとつての朝。

「智さんが握ってるのって、ハンドグリップですよ。それで握力をまた鍛えてるんですか？」

「ああ……いや、これは筋持久力と関節を一指ずつ鍛えられるんだよ。俺はもう握力はいいから、持久力重視だ。疲れると靭帯が痛むらしいし、疲れにくい筋肉を作ってるんだよ」

「へー……持久力ですか」

朝飯食いながらすることではないし、する会話ではない。

「最大筋力を鍛えるより、持久力を鍛えた方がいいんですかね？」

「いや、俺の場合も何だかんだで並行して鍛えている。どちらかと言えば最大筋力を鍛えた方がいいんじゃないか？」

「なるほど」

その後もフオークについて色々話し、筋トレについても話し、東条は結局どんぶり飯二杯を平らげた。

そして最後、『敗けません』と言い残して食堂を去る。

智巳は左手でどんぶり飯五杯をさらりと食べて、取り敢えず御幸を起こしに行った。

もはや恒例の寝坊を放っておくのも飽きた。朝練に遅刻すると監督が怒るし、怒らせるのはよろしくない。

今日は土曜日。授業はない。

「眠い」

ボーツとしながらも結局四杯食った相棒を連れて、智巳は眼の覚めるようなことを呟いた。

「今日は紅白戦だから、スライダー解禁だぞ」

「よし、覚醒した。全く問題ないぜ」

もはや6月も中旬に差し掛かろうとしている。夏の甲子園予選の抽選会が迫り、そろそろ一軍を決めなければならない。

この紅白戦を終える。メンバーを決める。選ばれたメンツだけで夏合宿を行い、練習試合をこなして後は夏の甲子園予選を待つだけ。

「にしても、紅白戦つて言うのと監督もそうとうメンバーの選抜に悩んでるっばいな。今年の一年は豊作だから仕方ないけど」

「先輩たちと、特に俺たちの代の層が薄いんだろ」

「お前、あつさり言うね」

実にサラッと事実を言う。

まあ、事実である。不作の年と言われた三年生は成長して打線の層が厚くなったが、かつて豊作と呼ばれた現二年生はまるでそういう劇的な伸びがない。

と言うか、豊作と呼ばれたのはこのエースと正捕手のずば抜けた二人が居たからであつて他は結構強くない。

白洲、倉持が成長株だったからよかつたものの、他は全滅に近いのである。

江戸川シニアの三番斉藤出塁、盗塁、四番御幸が返すというルーチンが復活するかも知れないという嫌な予感もある。

そうなれば確実にワンマンチーム感が漂うだろう。

一番倉持、二番白洲、三番斉藤智、四番御幸。後は居ない。

そんなチームにならないことを祈る。まあ、その祈りは虚しく潰えてそうなるんだだけでも。

閑話休題。

紅白戦。スターティングメンバーはご覧のとおり。

一軍。

一番、チーターこと脚お化け、倉持洋一。

二番、微笑みの裏に何かが見える粘り打ちの名手、小湊亮介。

三番、豪快なバッティングに見せかけた繋ぎの名手、伊佐敷純。

四番、不動の主軸で怪物クラッチヒッター、結城哲也。

五番、阪神の今岡・近鉄の磯部の如きチャンスお化け、御幸一也。

六番、ゲツツと三振が多いパワーヒッターにして守備の名手、増子透。

七番、四球とゲツツが多い木製長距離砲、斉藤智巳。

八番、オールマイティな守備職人、白洲健二郎。

九番、打撃と投球に関してはセンスの塊だが、青道高校伝統の守備クソレフト、降谷
暁。

一方、二軍。勿論彼等は全員は出ず、ある程度実力の認められた者のみがこの試合に
参加する。

所謂、1，5軍のみ。

一番セカンド、兄譲りのミート力を駆使しする木製バットの使い手、小湊春市。

二番ショート、倉持並みの打撃力と智己並みの走塁技術、それなりの守備、楠木文哉。

三番キャッチャー、特に秀でたところはない能力と色物食いの御幸より結構下な捕球

技術、宮内啓介。

四番ライト、守備は下手だがそここの打撃力、田中晋。

五番レフト、坂井より安定した守備と坂井より若干下の打撃、門田将明。

六番ファースト、哲さんの完全下位互換、遠藤直樹。

七番センター、繋げなくて守備範囲が狭くて肩が普通な伊佐敷、山崎邦夫。

八番サード、多いエラーとそこそこの長打力、樋笠昭二。

九番ピッチャー、実はバントが下手、丹波光一郎。

控え投手。

一年生リリーフ陣の二人・東条、沢村。あと川上。

控え野手。

木島濤、麻生尊、金丸信二、中田中、小野弘、前園健太、関直道、坂井一郎。そして、

滝川・クリス・優。

「斉藤」

「は、」

片岡鉄心に呼ばれて、智巳は配球について御幸と喋っていた口を止めて振り向いた。

白組（一軍）対紅組（一軍候補）。もう何か、虐殺レベルの試合になる気しかないと、

それでも片岡鉄心はこう言わざるを得ない。

「お前には無意識に下位打線には力をセーブして投げる癖があるな」

パワプロで言うところの力配分だよな、と御幸に言われたことがある。ワインドアップと言い、本当に昭和の投手みたいだなと。

その癖に自覚はないが、捕手と監督に言われた以上そうなのだろうと思う。

「下位打線つて言うよりは、弱い打者ですかね。自覚はないんですけど、前の試合で完全試合できたのは打線全員に一発があつたかららしいです」

片岡鉄心は、無言で頷く。

あの時、智巳は欠片も油断していなかった。

次々と関東の名投手を燃やしてきた打線を見下ろして、完全に喰っていた。

巨大な獣のような打線の革を剥いで肉を捨て、その上に君臨する。終盤はそんなピッチングだったのだ。

「今から対戦する打者、全てに力を出し切って投げてみる」

「全員にですか」

それは難しい。単純に、この男は割りと手を抜いて延長に備える癖がある。

それを潰すことは、退路を断つこと。熱いけどここが必ず冷めており、結果としてクレーバーなどところがある智巳からすれば、あまりやりたいことではない。

「これはベンチ入りメンバーを決め、誰が二番手投手か、誰がリリーフとして出るかを決める紅白戦だ。しかし、お前も課題を持って望んでみる」

蛇か来るか、鬼が来るか。

点を取られるなどか、その辺りだろうと思っていた智巳は、次の言葉で度肝を抜かれた。

「——ノーヒットノーラン。エースのお前なら、出来るはずだ」

エースのお前なら、出来るはずだ。

こう言われると、期待に応えて上に行きたいと思うのが智巳である。

当然その気性は、片岡鉄心は承知している。

「出来るだろう?」

「完全試合を喰らわせてやりますよ」

負けん気と、プライド。

出来るだろうと問いかければ、更に上のことをやってやると返すこの感じ。

(神監督も、こんな思いで見えていたのか)

——目つきは悪い、敬語は使えないのお前に比べて幾分か従順で礼儀は心得ているが、マウンド上での闘志は似てるじゃねえか。

去年の夏の敗戦の後に、恩師にそう言われたことがある。もの凄く反抗的だったことを自覚しているから何も言えなかったが、確かにそう見える。

その嘗ての自分を思い出してしまふような燃えるような闘志は、そのずば抜けた実力

と共に、一年生ながらエースに据えた一因でもあった。

「あ、監督」

「なんだ？」

「去年は力が及ばず日本一の座にお連れすることができませんでした。今年はお連れしますよ」

思わず、珍しく呆気に取られる。

その言葉は、嘗てエースだった自分が恩師に向けて最後の夏に言った言葉によく似ていた。

「……唐突だな」

ほのかに口元を綻ばせながら、片岡鉄心は目の前のエースに言う。

エースは悠然と笑って、何でもないようにこう返した。

「日本一になった時のインタビューの内容は推敲するに越したことはないでしょう？」

では、と言って後輩たちを本気で捻るべく歩き出すエースの背を見て、片岡鉄心は歩きたした。

今度は、紅組の方へ。

「お前ら。斉藤は本気で叩き潰しに来るぞ」

一度も座っていないなかったとはいえ、目されていた次期エースの座を奪われた丹波光一

郎、木製バットの使い手として対抗心がある小湊春市、打撃力の差でレフトのポジションを奪われた坂井一郎と門田将明。

そして、エースの座を奪おうとしている東条秀明と沢村栄純。

彼らの闘志がみなぎった。

「もちろん、負ける気はないです」

丹波光一郎は、静かに言う。

彼は自分のチームの打線の強さと、あのエースを敵に回した時の重圧を知る唯一の選手である。

東条秀明も敵に回した時の重圧は知っているが、それは二年前のこと。

丹波は、一年前を知っていた。

それでもなお、自分を奮い立たせるように丹波は言うのだ。

負ける気はない、と。

「タイプは違いますけど、僕は僕なりに先頭打者としての役割を果たします」
パワーヒッターと、アベレージヒッター。

木製バットの使い方も違うが、使っているものが同じな以上対抗心はある。

その気持ちや隠さず、目標の兄へ到達する為の超えるべき壁とは認識していない。

だが、勝ちたい。ラスボスと隠しボスの違いと言ったらわかりやすいだろうか。

「レフトのポジションを奪い返す程のバッティングをしてみせます」
「俺は守備で打撃を補ってみせます」

坂井一郎と門田将明は、それぞれの得意な部分で雪辱とポジション奪回を誓う。

そして、東条秀明。

「今日は、自分の足りないところを教えていただくつもりです」

「ほう?」

片岡鉄心は、毛並みの違う答えに疑問を投げた。

続ける、と言う意味を込めて。

「俺にはまだ唯一の武器が無いので、この試合では打たれるでしょう。手の内を知り尽くされた一軍に通用するとは思いません」

降谷の剛球、沢村のムービングボール。彼等は一つの武器が一軍に通用する。他は全く通用しないが、一つあれば充分だとも言える。

「だからこそ、目の前のことを一歩ずつ進みたいのです。試してみたいこともありますから」

「そうか」

片岡鉄心は頷いた。

東条は聡い。やるべきことが認識できている。

前の紅白戦は、目の前の難敵に戦意を失わずに立ち向かえるか。一回敗けたら終わりの高校野球で、一回に全てを出せるか。

そしてこの紅白戦は、如何に自分の力を活かして一軍に立ち向かうか。更に言えば、この経験をどう活かすのか。その辺りが求められる。

「ボス、俺は……」

監督をボス、主将をリーダー、投手陣のまとめ役をチーフ。

沢村の呼び方には、かなり独特な部分が多い。

それを少し気にしていた片岡鉄心ではあったが、持ち前の寛容さによってスルーしてあげていた。

優しい男なのである。顔に似合わず。

「俺は、あの人に勝ちたい。他の誰でもない、あの人に」

「斉藤に、か」

「はい」

本気で目指している、真っ直ぐな目。

沢村は、いい投手になる。

「遥かに遠い道程だが、目指さなければ着くのは愚か追い越すことなど出来はしない」

その予感とともに、片岡鉄心は一言言い残して身を翻した。

「勝ってみろ。本気のあいつに」

「はいっ！」

先攻、紅組。

後攻、白組。

球審は、片岡鉄心。

最後の夏になる者も多い大会のメンバーを決めるコールドなしの紅白戦、プレイヤー。

天才の力場

「本気でやるのか？」

「ああ。完全試合ペースでやる」

誰もが課題を抱えてはじまったこの紅白戦、それは御幸とて同じこと。

スライダーが捕れない。全く捕れない。その克服、ないしは打開策の開発。それが課題。

まあ、そのことは一事置いておき、御幸はさりと隠しながら領いた。

「まあ、やれると思うよ。お前なら」

初回の先頭バッター、小湊春市。

一年生ながら抜群のバットコントロールとミート力を持ち、セカンドの守備も巧い名手。

「まずは、一人。仕留めていこう」

「応」

初球は、外角低めストレート。

サード前進、ショートサードより、他は定位置。

そう指示した途端、空気が変わった。

マウンドに居るのは、頼れるエースでも優しい先輩でもない。

視界から消える高速フォークと、わかってても当てることのできない高速スライダーを操る魔人が、静かにマウンドに君臨していた。

相手に与える絶望感と制圧力。これがフォークよりも、スライダーよりも恐ろしい。

異様な回転数を誇るストレートが、木製バットを押し折った。

「サード！」

「うがあー！」

気合一閃、高速でチャージしてきた増子の正確無比な送球が結城の持つファーストミットに吸い込まれる。

本気も本気。そのことをエースから感じ取った守備陣は、特に増子はなおのこと力を入れていた。

嘗てエラーした負い目がある。ならば、常に全力で。そう思ってからではエラーしてないが、あくまでも積極的な守備で助けたい。

「増子先輩、ナイスチャージ」

「当たり前前のプレイだ、エース」

増子ガッツポーズをしつかりと決め、定位置に戻る。

ストレートで圧していくシフトを解除し、楠本文哉を迎える。

内野後退、外野前進。

初球は、縦のカーブ。

丹波のそれには劣るが充分なキレを持った球がミットに吸い込まれた。

「ストライク！」

片岡鉄心の下した判定は、ストライク。低めギリギリ。巧く打たなければゴロになるであろう球。

それをストライクとしたのは、更に磨かれた御幸のキャッチング技術だった。

まだ大きいスライダーは捕れないが、技術自体は格段に上がっている。

二球目のストレートを空振りし、最後は高速フォーク。

バットに掠らせることすらなく、空振り三振を奪った。

宮内に対してもチェンジアップを振らせて三振に切つてとる。

そして、グラブを前に出しての居合の如き裂帛の咆哮。

これがエースの投球だと言わんばかりの手も足も出ない完璧な三者凡退で、敵を圧する。

これが青道のエースの投球術。

「ナイスピッチング。でも、あまりバット折らないであげてね。父さんが出費に泣い

ちやうから」

「これからは触れさせる気すらありませんよ。それより、弟さんの心配はいいんですか？」

「ハハ、千尋の谷に突き落とさなきや、あいつは育たないよ」

一回目とはいえ完全に封じられた春市のバッティングではなく、折られたバットの費用を心配する兄と、平然と三振宣言をするエース。

実はと言うか、かなり気が合う二人であった。

「でも、気をつけなよ。油断ならない奴だから」

「俺の前にはもつと油断のならない奴が座ってますよ」

「それもそうか。無用な心配だったかな？」

「いえいえ。有り難いです」

魔人が立っていたマウンドに、丹波光一郎は立っている。

やれることをやる。目の前のことを一歩ずつ進む。

東条の言葉に、頷く自分がどこかに居た。

だからこそ、先ずは一番を打ち取る。そのつもりで投げる。

まずは、縦のカーブから入る。

倉持は見逃し、ワンストライク。

「なるほど、あつてるな」

そのつぶやきに、宮内啓介は嫌な予感を覚えた。

次の球は、また縦のカーブしようとしていた。しかし、予想されているのか。

内角高め、ストレート。

それを倉持は、腕をたたんでコンパクトに弾き返した。

あまり勢いのない打球は三塁線上を転がる。

増子ならば捕つて刺せていたが、サードは樋笠。どちらかと言えば打撃の人。

そして打者は快速倉持。

走り抜けて、セーフ。

嫌な形で、ランナーが出た。

「ふふっ……」

にこやかに笑いながら、二番打者が打席に立つ。

小湊亮介。守備シフトの穴をつく正確な打撃が売りの守備の名手。

内角低め、ストレート。

要求された通りの球がミットに向かい、掬い上げるように打たれた。

(なっ……)

心の中だけで、宮内啓介は驚いた。リードが読まれている。

そう宮内啓介が考えたのも無理はない、ヒットエンドランによる初球攻撃。ライト前に落ち、倉持が生還。小湊はセカンドストップ。

三番は、伊佐敷純。

(読まれている、のか?)

おそらく解読したとあれば、御幸一也。底意地の悪い不動の正捕手。

チラリと御幸がいるベンチに一瞥をやり、宮内啓介は考えた。

さて、本当に読まれているのでしょうか。

解読したと思われる人は、ベンチで何をしているかと言うと。

「読んでないけど、傾向はわかるからそう見せかけてるだけ」

慎重派の配球は読みやすい。打者の特徴と投手の特徴を知っているからではあるが、初球変化球であるとか低めであるとかは案外予想がつく。

「お得意の盤外戦か」

「そう言うこと。だから、初球から打っていつてくれよ。ホームランでいいから」

「ピッチャーに無茶を言うなよ」

完全に守備以外は九人目の野手じゃねえか、と言いかけた口を嚙む。

どうやら今回は本気で投手に専念するらしいので、そうなるかも知れない。

伊佐敷が一二塁間を抜けるヒットを打ち、予めスタートしていた小湊亮介は三塁へ。

四番の哲さんがツーベースで繋ぎ、小湊亮介が生還。

ノーアウト二塁三塁で五番御幸。

「読んでいるな」

「同じチームなぶん、読みやすいですからね」

嘘である。

低めにカーブが決まれば打てない。縦に割れるカーブと言うのは、かなり打ちにくいのだ。だから智巳もわざわざ丹波に習って投げている。

強打者へのカウント取りに使える球。それが縦のカーブ。これを覚えることはエースへの第一歩とすら言われる。

だから、低めの後の高めのストレート。自分は左打者だから、右投手の丹波の投げるカーブが向かってくる。

これは割りと打ちごろの球だから、慎重派の宮内啓介のリード上、外の球が多くなるだろうと思われた。

（敢えて外から入る高めのカーブを叩くかな）

狙い球を決めて狙い打つ。それが御幸の打撃の基本。なぜなら彼は理論派だから。智巳は何も考えていない。甘いと思った球とか、来た球をポンと打つ。

だから、全く安定感がない。初球打ちも多い。

御幸には安定感がある。チャンスの場面だけの安定感だが、得点圏打率が高いならば良しとされていた。

そして、今は得点圏。

(丹波、最悪一塁が歩いているから歩かせるつもりで際どいところを攻めろ)

一球目、ボール。

二球目もボール。

ここまで御幸は全くバットを動かしていない。狙うと決めたら迷いがなくなるのが得点圏の御幸である。

余計なことを考えていない分、思考が研ぎ澄まされている。

三球目、内側にストレート。これが入り、ワンストライクツーボール。

四球目は外から入ってきたカーブが低めに外れてボール。

五球目、外角低めにストレートが決まる。

フルカウント。

(ここで外から斜め落ちて入るカーブを)

御幸の狙い球を、宮内は決め球として求めた。

あくまでも事故をなくすリード。最小失点に抑える、確率のリード。

現に御幸は、外角高めをホームランにしたことはあまりない。

たいてい変なコースをめちやくちやな打ち方でスタンドに運ぶ。

だが、ここで丹波は首を振らずにグラブを少し前に出した。

予め決めておいた、好きなどころに投げると言う時のサイン。

首を振れば御幸にバレる。バレたら今までのリードと傾向から逆算されて、狙い球を変えられるだろうから、ということでも予め決めておいたのだ。

——そこに投げれば打たれる

今までは曇っていた、限られた人間にしか持ち得ない投手としての危機センサーが、告げている。

御幸を打ち取るには、この球。

そう思つて投げたのは、内角に切れ込み落ちる縦のカーブ。

外角に来るだろうなと思つていた御幸は、驚いた。ここで攻めてくるリードは予想外で、ここで投げたということはピンチだと心が定まらない丹波が決めたということ。

(やられましたよ、丹波さん)

得点圏、しかも満塁の次に打率がいい二、三塁で御幸が凡退。

極めて稀な光景に、観戦しているOBやスカウト陣がどよめく。

「今日の丹波さんは強気ですよ」

「二皮剥けたか」

ネクストバッターズサークルから打席に歩く増子に情報を伝えて、ネクストバッターズサークルに居る智巳に話しかける。

「今日の丹波さんは要注意だぜ。かなり球がキレてるし、強気だ」

「……」

「おい、智?」

考え事のしすぎでボーツとしている。

一言で言えばそうである。

「え?」

「いや、だから、今日の丹波さんは——」

言いかけたところで、増子が三振。

ツアアウトで、智巳としては打席に立たなければならぬ。

「あ、行つてくる。配球なら後でな」

「いや、配球じゃないし、後でじゃ遅いんだけ……」

無視して打席に立った智巳は、一礼してオープンスタンスに構える。

自然体だからこそ、何を狙うかわからない。

(内角低め、カーブ)

厳しい攻め。まずは姿勢を崩す。

そう投げられた球は、少し避けなければ危ない球。
だが智巳、全く避ける素振りを見せない。

(危な——)

カン、と鳴った。

全く内側の攻めに揺らぎもせず、居合切りのように下から振り抜き、そのままバットを投げて残心で左打席に飛ぶ。

長い脚を悠然と急かして一塁ベースに向かう頃には、とつくに白球は流し方向の柵を越えていた。

「……マジかよ」

ポツリと、三塁上の伊佐敷がこぼす。

ハイボールヒットターの鏡のような完璧に掬い上げるスイング。

おそらくタイミングがズレていればただのフライ。

「君、何打ったか覚えてる?」

「来た球ですかね」

小湊亮介の問いへの適當すぎる解答に頭を悩ませながら、取り敢えずスタメン全員が出迎える。

何も考えていない打撃の恐ろしさ、と言うべきか。

不調だと全く打てない。何故ならなぜ調子が悪いのかわからないから。だが、好調だと。

「御幸、次の配球だけどな」

——こうも投球に集中してて、打撃をまるで無視しても細胞が反応する。

（おっそろしいやつだよ）

現在、5対0。まだまだ試合ははじまったばかりである。

師弟の絆

「さあ投球だ」

「打撃の楽しさとやらはどっこへ？」

「知らぬ」

丹波は結局、あのあと崩れることなく八番白洲を打ち取った。

初回の5失点。いい投球ではないが、リードミスで2点、事故ムランで3点。

内容だけ見れば制球が定まり、ピンチに強く、粘り強くなっていた。

(丹波さんの成長が最大の補強だからな……マジで嬉しい)

目の前の怪物は魔人に進化したわけだが、正直別にそれはいい。

進化する前の怪物のままでも、充分勝てたわけだし。

四番五番六番、無慈悲な三者連続三振。かかった球数は12球。

(今、五番から露骨に手を抜いてたなこいつ……)

もう癖はどうしようもないのかしら、と思いつながら御幸は智巳の胸を軽く小突く。

手を抜くな、と言う戒めである。流石に先輩相手に手を抜いて投げ、三振させたこと

を直接言うわけにもいかない。

「誤解です」

「敬語使つてる時点であ……」

「いやでも、ほら、三振させたじゃないですか御幸さん」

力配分。

立ち上がりが遅い（丹波・降谷）、一発病（丹波）や四球癖（降谷）、乱調癖（降谷）、球質の軽さ（沢村）よりはマシだが、もはや代名詞レベルな手抜きっぷり。

ものすごい手を抜いてもあつさり抑えるのが凄いのかと、ここまで来るとそう思う。

本人曰く、別に手を抜いてるわけではなく、平均で投げていないだけなのだ。

ピンチに本気を超えた本気を出す。

だが、平均値で投げていればその切り替えのためのエネルギーが足りない。

でも、エネルギーの温存の為に打たれるのは馬鹿らしいし、本末転倒。

なら、安牌で力をセーブしてピンチで本気を出そう。

このような思考回路である。

相手を見下ろし切っているからできることだと、御幸は思う。

「見下ろすのはいいけど、見下すな。いくら全力出さずに勝てるってわかってても、な」

「わかつてはいる」

釘を刺して、御幸は更に一言付け加えた。

「完全試合、やるんじゃないのか。ならランナー背負うことなんかねえだろ。

——ま、やる自信ないなら手加減すればいいよ」

悪そうに笑って肩をすくめる相棒に、まんまと煽られたエースは鼻で笑いながら胸を張る。

「一人も走者は出さん。俺はできることしか約束しないんだ」

「約束に迫いまくられてるくせによく言うね、お前」

ぐつ、と詰まったエースを見て、御幸はちよつと目を逸らしながら悟った。

（と言うかそんなこと言うってことはまた何か言ってきたんだろうな）

凶星である。

でもそれはいつものことなのでさして問題は無い。

全国制覇しますと言って日本一になり、好きな投手のように国際大会で一度も負ける気はないですと言って世界一になった男であるし。

リトル・シニアでは無敗、全国制覇しかしたことはない。

三回国際大会に出て、六戦して無敗。自責点は3。味方の期待を一身に受け、アメリカ相手にノーノーしてアウエーでの大ブライニングの中、不敵に笑って帽子を取り一礼して、黙らせた男。

（その所為で向こうのスカウトが時々来てるけど……）

齊藤智巳、そんなことには気づかない。あー、クリス先輩の父さんの知り合いかなー
と思つているくらい。

まあ、あながち間違いではないけれども。

とにかく、言つたことをやれるだけの実力と意志はある。

とか言つている間に、下位打線プラス倉持がやられていた。

「七八九、次の回から代打攻勢来るけど本気でいけよ」

「お前も遠慮なくサインを出せ」

煽られた結果とは言え、ギアを入れ替えた智巳を打てる程、青道の一軍半は強くない。

一球も掠らせずに、三回の守りを終えた。圧巻である。

三回裏の攻撃。二番小湊兄から。

(覚醒したのか、いつもの確変か)

度々、いけると思えた瞬間があった。だが、それが長続きしないから一年半前にエースの座をぽつと出に奪われ、現在不動のものにされている。

(不動を動かせるのかな、光一郎?)

表情を崩さずに、打席に立つ。

立ち上がりはどうか。先頭から切れるか。ピンチを乗り越えられるか。被本塁打を減らせるか。打たれた後立ち直れるか。四球はどうか。

(進歩してるけど、まだまだ課題は多いよ)

セカンドの頭を越えて、ライト前。

この回の先頭バッター小湊亮介、2の2。

大きくリードをとって、一塁線に居る。

(牽制は、盗塁の警戒は？エンドランもあるよ、光一郎)

牽制球が投げられ、戻る。

打席には伊佐敷が入っている。

(盗塁はなし。エンドラン)

(わーってる)

サインを交換して、仕掛けた。

ボテボテの当たりだが、進塁には充分。これでワンアウト二塁。

チャンスで、結城哲也。

「来い、丹波」

「行くぞ、哲」

三球目の甘く入ったカーブを捉え、フェンス直撃のツーベース。

一発ではなく、走塁と单打と長打を絡めた集中砲火。

打ち出したら止まらない打線と形容されるのもわかる強さ。

五番は、御幸。

小湊が生還し、ランナーは二塁。ここが切り時ではあるが、どう止めるか。御幸は、三振。

増子は、レフト前ヒット。

そしてここで、今日事故ムランを喰らっている斉藤。

ツーアウト一三塁。ワンアウトの前回とは微妙に違うが、怖い事は怖い。

(最大の関門・春市をどう打ち取ろうか)

初球は、ストレート。見送り。

(あいつミート力があるから打たせて取るのは怖い)

二球目、カーブ。ボール。

(やっぱりフォークかスライダーで空振り三振。これがベスト)

三球目、ストレート。

(アウトローのフォーク、いけるかもしれない)

四球目に投げられた遅いカーブは、ほぼ初見。

体勢を崩されかけながら、下半身の粘りとリストの強さだけでセンター前へ。

無心で走って、単打。

(提案してみよう。御幸が何を考えているかはともかくとして)

塁上のこの男はまるで関係のないことを考えているが、状況は掴んでいる。

ツアアウト一二塁。

白洲が抑えられてここは丹波に軍配が上がった。

7対0。スタメンの打撃力の高さが、浮き彫りになってきている。

「抑えられるとできつちり抑えられてる感じだな。堅実だ」

「あ、投球の国から現世に帰ってきたか」

「まあな。あと、春市の時の決め球はアウトローに落ちるフォークにしよう」

「おつ、同感。紅組の中でヒットを打ちやすいのは、間違いなくあいつだからな。こつちとしても最大級の警戒をする」

意思疎通を終えて、迎えるは一番小湊春市。間違いなく、一番厄介な打者。

初球ストレートをギリギリのファールゾーンに運ばれたあたりからも、その厄介さがわかる。

(末恐ろしいな)

(同意するよ)

僅かなジェスチャーでの意思疎通を終えて、共通認識が生まれる。

それは、その末は今じゃないと言うこと。

高速フォーク、空振り三振。二球目のスローカーブで緩急を付けていた為、全くつい

て行けていなかった。

ここを抑えれば、全く問題はない。

完全に蹴落とされている二、三番を仕留めて、この回も被安打0の四死球0。

この回は二回と同じく丹波に抑えられて、チェンジ。

そして、五回の表も智巳は四五六を三振に切つて取り、ここまで小湊春市以外全員三振。

被本塁打が極めて少なく、奪三振が異様に多いピッチャーの本領発揮であろう。

しかし丹波、ここで調子を上げ始める。

三番伊佐敷にヒットを許すも結城を打ち取り、五番御幸で4―6―3のゲッツー。

代打攻勢を木っ端微塵に打ち砕いた智巳に応ずるように、次の六回の守りでは増子に打たれるも、打撃に対して何も考えないことをやめた七番の男が4―6―3のダブルプレーに倒れる。

白洲がツーアウトからのヒットで繋ぐも、降谷四球、倉持三振でピンチを脱出。

「大物食いしない代わりに手を抜かないし下位打線からはぼ事故はない。いい投球だよ。リードしがいがあるようだ」

「丹波さん凄いな。多分、本来ならもつとできるけど」

二人仲良く二回で合わせて二度4―6―3を喰らったバッテリーは、この回も四五六

番をセカンドゴロ、見逃し三振、空振り三振に仕留めてご満悦で引き返す。

まだ完全試合継続中である。

「投手交代。東条秀明、マウンドに上がれ」

尻上がりに良くなってきた丹波が、六回七失点でマウンドを降りた。

決して良いスコアとは言えないが、成長が見られた投球。

次の投手の東条は、逃げなかった。

どこに投げたら打たれるのか、どこに投げたら怯むのか。

それを確かめるようにめげずに投げぬき、一回で六失点という『決め球がないこと』の欠点を示すピッチング内容で3つのアウトをとってマウンドを降りる。

この回も、智巳は三者連続三振。スライダーこそまだ使えないが、ちよつと相手にならないレベルの実力差がある。

次の投手の川上も、東条を燃やし尽くした打線の勢いは止まらない。

智巳の威圧感と場の空気、打撃陣の怒涛の攻撃を見ていた川上は蹴落とされておろ、アウトを一つも取れずに打者一巡の攻撃で八失点でノックアウト。

決め球がなく、躲すピッチングしかできない二人が仲良く燃やされたと言うことは、ある程度勝ち進んで対策を立てられればこの二人は戦力として見込めないということに他ならない。

そして、ここでマウンドに上がるのは最後の投手。

「沢——」

「はいっ!」

「マウ——」

「待つてました、ボス!」

途中で言葉をぶった切つて、軽やかにマウンドに。

この男の心臓には毛が生えているのか。

智巳の咆哮と威圧感にあてられて緊張でカチコチだった川上とは偉い違いである。

「チーフ! 投げ合いですよ!」

「そうだな」

「負けませんから!」

ものすごいポジティブな男・沢村に、御幸はたまらず声を掛けた。

「お前さ、お前より確実に技術的には上な二人がノックアウトされたわけだけど、緊張とかないの?」

「つまりそれは、ここで上位打線を三者凡退にしたらこの沢村栄純が投手ランキング3位……いや2位になるということでは!」

スーパージティブシンキング。

因みに現在の二位は丹波である。

こんなポジティブな男に自分より上だと一瞬でも認めさせた丹波はすごい男なのかもしれない。

「あー、うん。そうね……」

御幸が目を泳がせたが、沢村はお構いなしに前のみを見る。

「守備交代。センター山崎に変わり、滝川・クリス・優。宮内に代わり、坂井一郎。クリスが宮内啓介に代わり捕手の守備に、坂井は山崎に代わりセンターへ」

その名がコールされた時、御幸の口元が嬉しさと緊張で少し上がった。クリス先輩なら、あのスライダーを止められるのでは。

陰でそう思って、公式戦のベンチ入りメンバーに推薦したのは彼だった。

怪物君をやつつけろ！

沢村ムーブに毒されたマウンドが、続いてコールされた内容に静まり返った。

今の一年生は、クリスのことをよく知らない。二年生でも知っている人間は少ない。シニアの時有名だった人、という認識でしかない。

「御幸、お前の差し金？」

「沢村を一番活かせるのはあの人だからね。三番手捕手としてベンチ入りメンバーに入れてみてはどうですか、とは言った」

スライダー云々が主であるから、嘘である。まあ、あながち嘘ではないから、嘘でもあると言ったところか。

智巳は少し驚いているが、クリスの肩は完治している。

沢村専用のイーニング逃げ切り捕手としてならば、まるで問題なくこなせるだろう。

今は２イーニング投げなきやいけなけれども、最近の黒土館戦では一試合キャッチャーとしてマスクを被っている。おそらくは問題はない。

たぶん監督はフルイーニング出場を許さないが。

相手にする打者は、小湊亮介。

「お兄様！行きますよ！」

「おいで。軽く捻ってあげるから」

一球目、ボール。

二球目、ボール。

三球目、ボール。

四球目、ボール。

構えたところに入らず、ストレートのフォアボール。これで川上の残したランナーを含めて満塁。

一瞬の沈黙。

クリスも、御幸も、智巳も、沢村も何も言わない。

ワンポイントフォアボール。そんな単語が頭を過った。

「さあスピッツ先輩、いざ勝負！」

(こ、こいつ、何事もなかったかのように言いやがって……)

一瞬真顔になったが、それにしても素晴らしく切り替えが早い。

いや、確かに出した四球に囚われすぎてもいけないが、それにしても凄まじい。

何も感じていないかのごとく振る舞うその姿は、丹波や川上など神経の細い投手にはないものだった。

まあ、気にしなすぎるのもどうかとは思うが。

「おい、しゅー……」

謎の掛け声と共に投げられた球は、きつちりの構えたゾーンに決まる。

構えたミットに収まったわけではない。そこまでコントロールはよくない。ギリギリ許容範囲というレベルである。無論キツチリと捕球してはいる。

この球を見送った伊佐敷は、妙な感覚を抱いていた。

(腕が見えねえ……)

ボールがリリースされる瞬間まで左腕が隠されているようなフォームなので、球の出どころが掴めない。

「おいしゅー……」

そして、クリスのリードも沢村の投球もテンポが速い。考える時間を与えない、馴らす時間を与えない、攻めのノータイムの投球。

森福並みとはいかないが、打者のタイミングを外す二段気味なフォームの所為で一動作一動作がゆつたりしている智巳にはできないことであった。

「だらあぁー！」

気迫と気迫の応酬の結果、金属バットが甲高い音を立てて白球を打ち上げた。

セカンドの小湊春市が捕って、ワンアウト。

タッチアツプは当然できない。

「春つちナイス!」

「栄純くんも!」

「ふははは、エースは満塁でこそ無敵となるのだよ!」

そのエースはお前じゃねえだろ。恐らく誰もがそう思ったであろう中で、智巳は面白そうに沢村を見ていた。

「恐怖の満塁男、どうよ」

「容赦するつもりはねえけど、クリス先輩だからな」

「だろうな。だけど哲さんが返すだろう」

結城哲也。不動の四番。

沢村栄純が癡球と言えども、そうやすやすと全国屈指の打者は打ち取れない。

長打ではなく、单打。当てるバッティングに切り替えた結城哲也からオーラが見える。

だが、沢村栄純は怯まない。

クリスも、怯まない。

「タイムをお願いします」

キャッチャーがマウンドに上がり、ピッチャーに話しかけた。

怯んではないが、あてられてはいる。

結城哲也の雰囲気呑まれかけて自力で復活したものの、沢村に僅かに残った緊張をほぐす為である。

「怖いか」

「怖いッス」

素直な感想に、クリスは思わず笑った。

怖いという感情を恥じることはない。それを感じ取ることができずに打たれる投手が何人いることか。

怯むのと、怖がるのは違う。打者は逃げられないが、投手は逃げられる。

しかし、それは今ではない。

逃げるべき時は、今ではない。

「だが、甲子園にはこれ程の打者が何人も居る。試合独特の雰囲気呑まれることもあるだろう。ここで切れなければ、エースにはなれないぞ」

「そうッスよね。」

それに——」

どんなピンチでもどんな不利でも。

どんな強打者相手でも、あのエースは不敵に立っていた。

お前が俺を打てるのかよと見下ろし、心の余裕と剥き出しの闘志を武器に。

「そうだな。あいつはいつも敵を見下ろして立っている」

「エスパー!？」

「視線でわかる」

ドン、と胸を小突いてホームベースに戻る。

(さあ、来い。お前がエースを指すならば、ここで結果を見せてみる)

そう思つて構えられたアウトローに、球のブレと共にムービングボールが決まる。

ワンストライク。

軌道をよく見てその動きのブレを見極めた結城は、もう少しバットを短く持つ。

(クリス、智。あの二人が面倒を見ているから素質はあると思つていたが)

公式戦でのピッチングでも感じていたが、原石が大きい。

球速とコントロール、変化球のキレ。これ以外の伸びしろがない智巳と違い、フォームしか固まっていない。

それでも、化けた。その印象が強い。

二球目は、三塁線を僅かに切れてファール。

(次の癖球は、何が来るか)

どう来るか、と言つてもいい。

どう変化するかがわからない球。だからこそ対応しがいがある。

「来い」

「いきますー！」

今までブレていたストレーートの軌跡が、急に美しい物になる。

——速い。

ブレを気にする必要がないと判断する前に、その認識が先に来た。

ブレも何もない、綺麗なストレーート。手元で加速するようなノビがある。

それがインコースいっぱいに決まった。

「ストライク！バッターアウト！」

少し驚いていたからか、片岡鉄心のコールが一瞬遅れる。

「ツしやああああー！」

だがそれでもその言葉を待っていたかのように、沢村が吼えた。

四番結城哲也、見逃し三振。

「智。お前、変化球教えてなかったんじやなかったっけ？」

「ストレーートを投げられるようになれって言ったのは聴いてた。嘘はついてない」

「ハハッ、なるほどね……」

変化球ではない。ただ、ムービングボールを更にきらめかせる綺麗なストレーートを教

えただけ。

あくまでも、基礎の範疇でしか無いのだ。ストレートの投げ方なんて言うものは、それを敢えて教えた智巳、活かしたクリス、土壇場の勝負所で決めた沢村。この三人に勝たなければ、打てない。

ツーアウト、満塁。

迎えるバッターは、満塁時打率八割超えの恐怖の満塁男・御幸一也。対するは、滝川・クリス・優と沢村栄純のバッテリー。

ここで切るか、ここで続くか。

ここ一番の勝負と言える幕は上がった。

「中2の時以来っすね」

「……ああ。あの時は、随分してやられた」

御幸は、自分にできないことをやってのけるクリスを尊敬している。

戦って負けたことはないが、それは自分のリードを活かせる絶対的なエースが居たからこそで、捕手としての実力では敗けていた。

二度対決して二度とも勝ち、そして二度ともそう思った。

勝ったのはバッテリーとしてであって、捕手としてではないのだと。

だから若干劣等感がある。

「あいつ、強打者には強いんですよ」

「そして、下位打線に弱い。この試合でも手を抜いていたな」

「あー……そうっすね。でも、あいつはそれを補って余りあるピッチャーですから。ぐちぐち言わず、長所を伸ばしていこうと思います」

「だが、いずれその力配分が命取りになる。セーブして抑えられる相手が下位打線にいれば良いだろう。しかし、そうとは限らない。そして、成孔のように下位打線全てが強打者とも限らない」

褒めて伸ばすか、叩いて伸ばすか。

沢村は散々叩かれて伸びて、智巳は褒められて伸びてきた。

そう指摘されて、黙る。

甘いのは身びいきと言うやつで、腐れ縁（智巳談）の親友だから。

そして、何もしなくても勝手に化けていくから、怪我についてとやかく言うだけじゃなかった。

思考を乱され、初球のストレートに空振り、ムービングボールを引つ掛けさせられる。冴え渡る、クリスのリードの前に、青道打線は三者凡退。スリーアウト、チェンジ。

「まずはこの回を無失点で抑えた。次の回で、完全試合はおしまいだ」

クリスは不敵に笑い、御幸はどこか苦しそうに笑う。

すれ違って、一塁側と三塁側のベンチに二人は帰った。

また読み合いに敗けた。

そして勝つと言われて、ちよつと緊張している御幸を迎えたのは、エース。

「おお御幸よ、満塁でクソボールに手を出すとは情けない」

「ハハッ、手厳しいな」

この強心臓なエースとは違い、緊張している。

次の打者は守備交代の調整により——七番センターに代わって入って守備位置を

交代しただけだが——七番に入ったクリス。

どの配球で打ち取るか、正直自信がない。

「お前なら打てたのに、打てなかった。さては、余計なこと考えてただろ。

打者にささやく奴が打者になった途端ささやかかれて無様晒すとは」

「期待してた?」

「信頼してた。裏切られましたけどもね」

正直、その信頼に応えられるかどうか怪しい。

完全試合。このままいけば昼寝してても行けたが、クリスの存在が大きい。

リードで勝てるか、読み勝てるか。

試合に勝てるか、勝負に勝てるか。

自信家の御幸には珍しく、あの冴え渡るリードを目にして敗けのイメージが先行している。

智巳ではなく、自分の負けが。

「ごめんごめん。公式戦では打つからさ」

「打たなかったら何があつたのかと思うわ。満塁で凡退するお前なんか一年に一度見ればお腹いっぱいだよ、本当に」

「……言うね」

「知つての通り俺は信頼する奴には容赦なく頼る質でな」

信頼も信用もしていない奴らには一切頼らないのが、智巳のエースとしての欠点なのだろう。当然弱みを見せない。強さだけを見せる。

チームメイトを信頼することがエースとしての条件ならば、智巳は確実にそれを満たしていなかった時期の方が多い。

江戸川リトルでも、シニアでも、二人で野球をしていた。

凡退しても全く動じないこの男を見て、周りの大人は冷静だとか言った。

しかし凡退して帰ってきた時に散々見せられた、は？つと言うした顔や、おい、と言うような顔を見てきた御幸は知っている。

自分が後逸した時に見せた『え？』と言う顔と、味方のエラーを一切責めない態度で

もそれとわかるだろう。

——頼ってない奴を自動アウト及びエラー製造機だと思ってるだけだな、こいつは、と。

エラーされて得点が入りました。智巳は怒らない。

三振取れなかった俺が悪い。そつちに飛ばした俺が悪い。

凡退して帰ってきました。智巳は怒らない。

そりゃあそうだろう。お遊びで抽選に応募して、外れて怒る奴は居ないのだから。

守備位置に居ないと困るけど、代わりがいるから別にいい。代わりが居なくても、三振取れるから別にいい。

彼には、明確に頼られている側から見るとそう言う冷淡なところがある。

今のスタメンたちには裏表なく頼ったり打つてくれと言ったりしているし仲も良いが、その信頼の基は実力。

実力がなければ聖人でも頼らない。実力があれば誰でも頼る。

実力抜き、人間的にも完全に尊敬を勝ち得ている哲さんみたいな例もある。完全な実力主義ではないが、この男の場合、仲の良さで信頼はイコールではない。

「……お前、俺がクリスさんに敗けてると思う?」

「思うよ。だってお前がそう言ってたしな」

判断基準が御幸の言葉というところに、智巳のらしさが表れている。

信頼した奴の言葉は信頼するのである。御幸の冗談は信頼も信用もしないが、真面目なときは信頼する。

「ぶっちゃけ、どう配球するかなーって、迷ってる」

これが最高、と思ったリードを打たれたこともある。

そして抑えられた時は、決まって智巳の力に頼った力押し。

ストリートで詰まらせて、フオークで空振りさせて。

そこにリードは要らない。智巳の適当配球でも抑えられただろうと思う勝負のみ、御幸は勝てた。

そのことを、御幸がそう思っていることを智巳は知らない。

「でも、お前がクリスさんに敗けても俺とお前はクリスさんに勝てる。

だから、迷わずにこれと思ったリードをしろ。俺はそのリードに従ってやるから」

だから無意識に、全く意図せずこういうことを言う。

こういう、過去の敗北から吹っ切れさせてしまうことを。

クリスが、智巳ならば言うだろうと思っていたことを。期待を裏切らずにこの男は言う。

「———そうだな」

クリスに勝ちたいと言う、思いはある。一人の捕手として、何よりも尊敬しているから。

だが、一対一で勝つ必要などない。

自分にはこの相棒が居る。化物じみた実力を持つガラス製の魔人が。

「お前の力に頼った配球を、させてもらおう」

「ああ、いいぞ」

「最後の球を打てないと仮定して追い込むことだけを考える。頼むぞ、相棒」

「完全に勝つ為だ。力を惜しむ気はない」

ホームベースに向かい、マスクを被る。

打席には、クリス。

「クリス先輩」

「吹っ切れたか」

「ええ。前の打席でやられておいて何ですけど、させませんよ。あいつの無茶苦茶に応

えないと、相棒なんて務まらないんで」

そうだ、そうでなくてはとクリスは思った。

最近、まるでスライダーが取れていないということ御幸は少し自信を無くしつつあった。

ここで自信を改めて植え直すには、何かの壁を超えさせることが手っ取り早い。その壁とは、自分。憧れにして個人としての勝利者。

「そうだな。それがお前らしい」

「悩んでたこと、バレてました?」

「表に出さないが、わかる奴にはわかる」

ミットが構えられる。

アウトコース低めいっぱい、152キロストレート。

——速い。

沢村の手元で加速するストレートより角度があるからか、基本球速が違うからか、回転数の差か。

(コントロールの差だろうな)

冷静に考察し、クリスはバットを構え直す。

次はどうくるか、カウントを取りにくるならば、カーブ系かストレート系。

——この球速は、ストレートか。

逆らわずに打ち返す。

そう考えていたクリスを裏切るように、甘めの球はミットに落ちた。

カウントを取るのに高速フォーク。

「なるほど、次はあれか」

「ええ。俺が止めれば勝ち、止められなかったら負けです」

止められるさ、今のお前なら。

心の中でそう呟く。

技術が足りないわけではない。要は経験と、心。捕れるか捕れないかではなく、捕る。化物じみたスライダーは、その意志を削っていった。それがわかるからこんなことをした。

本質的に教育者のクリスとしては、御幸の可能性を広げてやりたい。

お前はまだできるのだぞ、と。

「次、スライダーです。インハイから、アウトハイに真っ直ぐ横に切れ込んでストレイクゾーンに入ります」

「そこまで言うとは、打たれるぞ?」

「それでも打たれない球があるんですよ。俺が捕れないんですもん」

すつかり克服した御幸の後逸はない。

となれば、自分が打つしかない。

沢村を援護したい。この思いは、御幸の成長と同じくらいの比重を持っている。

ワインドアップモーションから、三球目。

小細工なしの真つ向勝負。それが似合うエースが目の前に居る。投げられた球が、ストリートと同じような唸りを上げて迫る。

インハイ、外れている。しかし、ここから曲がるのだ。

クリスは、御幸が捕りそこねているところは見えていても、打席に立ったことがあるわけではない。

(まだ曲がらないのか)

ホームベースにつくまであと少し。なのに、曲がらない。

訝しむクリスとは違い、御幸は知っている。

この魔球は、ホームベースに僅かに侵入してから加速するように真横に滑るのだと。

金属バットが、空振った。

「ストライク、バッターアウト！」

ワンアウト。

魔球は、御幸のミットの中で完全に沈黙させられている。

「見事だ」

クリスが眩き、エースが吼えた。

復活

「沢村」

どこかブーツとしている沢村にドリンクを投げて、智巳は隣に座った。

「チーフ……」

「駄目だったな」

一回、一奪三振、被安打0。無失点、自責点0。1四死球。

結果は悪くなかったが、先頭バッターへの四球が痛い。

「はい。駄目でした。まだエースには遠いです」

九回の表。智巳はあっさりと八番に出された代打前園を手抜きピッチで三振に切つて取り、最後の打者は沢村。

縦のカーブ、ストレイト。そして最後は高速フォーク。

力をセーブせず、全力で弟子を振じ伏せて、試合は終わった。

「先頭バッターへの四球、あれはコントロールがまだまだな証拠だ。後続を断てたからいいが、よろしくはない」

「はい……」

沢村の球は打たれにくいが打てないわけではない。

コースが甘ければ、打たれる。

綺麗なストレートに投げることに注力しすぎて、楽しくて、コントロールを磨くことを怠っていた。

「あのピッチングでは、エースにはなれない。まだあと一年あるのだから、もう一回癪球を磨き直し、基礎を鍛え直せ。まだお前にストレートは早かった」

そう言って去っていくエースの背を見て、沢村は拳を握りしめる。

悔しい。浮かれていた自分が。

情けない。一度認められたのに、それを不意にしてしまった自分が。

背番号1。何も書かれていないはずのその背中に、エースの番号を幻視して俯く。

不動の四番を打ち取れて、チャンスお化けの五番をも打ち取り、その背中に近づいたと思った。でもそれは一時的なことで、総合的に見れば遠のいた。

あのフォークは、あのスライダーは、沢村にはない。わかっているでも打てない球なんて、持ち合わせていない。

「……厳しいだろう、あいつは」

滝川・クリス・優は、去りゆくエースをちらりと見て俯く沢村に話しかける。

偶然聴いてしまったと言うか、聴いていた。

あのエースが向かうとしたら、そこは沢村に対して言うことがあるから。そう思った勘は、鈍っていなかった。

「……辛いか？」

そんなことは無いだろうと、クリスは内心思っている。

辛いからと言って、泣きはしない。沢村が泣くのは、悔しいから。

期待に応えられなくて、悔しいから。

浮かれていた自分が、情けないから。

そして、一回とは言え目の前の野球の師のリードに応えられなかった自分が、情けない。

「情けないです」

そうだろうと、クリスと思う。

お前はそういう奴だ。だから、あのエースが目をかけている。

負けん気の強さ。期待に応えたいという強さ。それは、心の強さ。

エースにとって必要不可欠なもの。

「……だが、あいつは何と言った？」

「今みたいなピッチングでは、エースにはなれないと」

「そうだ。そしてこうも言った」

——まだあと一年あるのだから。

沢村の高校野球ははじまったばかりで、あとちょうど二年。

だが、斉藤智巳はそう言った。

あと一年だと、そう言った。

「……お前は今、純粋な意味であいつの後輩ではなくなった。弟子でもなくなった。あいつは、お前を投手として見たんだ」

最後の一年でエースの座を脅かす者として、沢村を見た。

絶望的で、絶対的な君臨者。圧倒的な実力を持つ自分を覆し得るポテンシャルの持ち主として育てていた智巳が、自分を覆し得る実力を持つ者として初めて見た。

「二度や二度転んだくらいで、あいつはお前を見放しはしない。見放すときは、歩みが止まった時だ」

「止まりません！」

「そうだ、転んでもいいが、止まるなよ。一歩ずつ、進んでいけ」
泣き止み、まだ目は赤いが元気になった沢村の肩をポンと叩く。

そして、クリスは立った。

智巳の元へ、このことを話してやらねばならない。

その後ろ姿に、沢村はお辞儀しながら大声を出す。

「ウツス！ 師匠、わざわざありがとうございましたあー！」

「……声が大きい」

声が掠れたような小ささのクリスだからこそ、沢村と比べるとギャップがすごい。

「不肖沢村栄純、まだまだ未熟者ゆえこれからもご指導ご鞭撻の程をお願い致します！」
「……ああ。みっちり基礎を叩き込んでやる。あの調子に乗ったピッチングは、エースのそれではないからな」

ヒエツ……とビビった沢村を見て少し笑い、クリスはあらためて歩き出す。

クリスは智巳や御幸が一年の時に怪我をした。

まあ、御幸が『ヤバイんじゃないすかね智さん。クリス先輩怪我してるような気がするんだけど』とか何とか言っつて割りと比較的早期に気づいていたからリハビリ含めて十ヶ月で済んでいる。

実のところ、智巳と共に怪我人候補用にはあるが通常練習に復帰しているのだ。

怪我してないのに終身名誉怪我人候補筆頭のエースは放っておいて、ブルペン捕手としては役に立てる。

（今日の試合は、花道か）

監督の気遣いに感謝しつつ、沢村の球を受けた左手を見る。

綺麗なストレートの感触が、まだ残っていた。

この一日後、ベンチ入りメンバーの20人が発表された。
背番号1・投手。

エースは勿論、斉藤智巳。

背番号2・正捕手。

これもお約束、御幸一也。

背番号3・一塁手。

キャプテンにして不動の四番、結城哲也。

背番号4、二塁手。

俊足巧打の二番打者、小湊亮介。

背番号5、三塁手。

長距離砲の六番打者、増子透。

背番号6、遊撃手。

快足の一番打者、倉持洋一。

背番号7、左翼手。

降谷と智巳の控え兼守備固め。門田将明。

背番号8、中堅手。

守備クソレフトの介護役、伊佐敷純。

背番号9、右翼手。

レフト寄りになるセンターの介護役、白洲健次郎。

背番号10、投手。

ピンチの弱さが治りつつある、丹波光一郎。

背番号11、投手。

謎の安定感と謎の活躍、沢村栄純。

ここまでは、大方の予想通りと言っている。

だが、次の背番号12が呼ばれた途端、部員たちがざわりと騒いだ。

「背番号12、滝川・クリス・優」

二番手捕手というポジションが、宮内啓介ではない。

そのことに驚いた者の気持ちを察してか、ここで片岡鉄心ははじめて発表以外の言葉を口にした。

「クリスはブルペン捕手と、沢村が登板した時の捕手を御幸に代わってやってもらおう。これは宮内と御幸の強い推薦によるものだ」

宮内は先の紅白戦でのリードの読まれ方と、代わったクリスが失投で四球を出したとはいえ、沢村の癖球を活かしたことを苦にして、御幸は沢村専用の三番手捕手としてど

うですか、と提案した。

正直、御幸は暴走高速スライダーの最大ギアの制御が全くできていない。

あまり、他の投手に時間を裂けないのだ。

だからこそその提案だったのだが、この展開は予想外だった。

御幸の案は決め球が誰も捕れない智巳・暴投しがちな降谷を自分が担当、丹波・川上を宮内が担当、捕手次第で完封を狙える程に化ける沢村をクリスが担当するもので、一投手一捕手制。

片岡鉄心と宮内啓介が考えついたのは、智巳・降谷・丹波を御幸に、川上・沢村をクリスに任せるというもの。

前も言ったが、御幸は一流を化物に、化物を魔人にすることはできるが、二流三流を押し上げることができない。

クリスには一流は一流にすることしかできないし化物は生み出せないが、二流三流を押し上げることができる。

江戸川リトル↓シニアと、斉藤智巳と言う怪物と己を中軸にしてきたワンマンチームに居た御幸と、丸亀シニアと言う実力が拮抗して飛び抜けた投手が居ないチームに居たクリスの差と言っていいだろう。

環境こそが人を成長させるとはよく言ったもので、ボール球を使った駆け引き等はク

リスの方が巧みだったりする。

斉藤は奪三振を取る割りには球数が少ない。

何故かといえば、三球勝負が異様に多く、勝負所のコントロールと球のキレが抜群な為、ボール球を使う場面があまり無いから。

クリスはそのことをできる贅沢なピッチャーは居なかったから、自然と考えるようになった。

閑話休題。

「クリス。お前は一度故障し、リハビリを余儀なくされながらもここを辞めはしなかった。治った今、この背番号を受け取って欲しいというのが俺の考えだ。受けてくれるか？」

「……一年、練習に参加していなかった自分で良いのかと言う思いがあります」

だが、受けてみたいと言う気持ちがある。

沢村の球は、魅力的だった。あの球は、捕手が活かしてこそその球。

「俺に気を使うなよ」

葛藤しているクリスの背中を、宮内が押した。

「そうだ。お前が誰よりも真摯に野球に向き合い、最後まで復帰を諦めなかったことは俺達が誰よりも知っている」

結城哲也も、その背を押す。

「頼みますよ、クリスさん。俺一人じゃこいつらの面倒見きれないんで……」

御幸が押して、クリスはやつと一步を踏み出した。

「謹んで、いただきます」

「頼むぞ」

背番号12、滝川・クリス・優。

受け取った背番号は、ただ一枚の布でしかなく、ただの数字でしかない。

だが、それが重かった。

エースの重さではない。正捕手の重さでもない。スタメンとしての重さでもない。

これは、三年間の重さだった。

「背番号13、楠木文哉」

まだ、発表は続く。

背番号14、小湊春市。

背番号15、坂井一郎。

背番号16、樋笠昭二。

背番号17、田中晋。

背番号18、川上憲史。

背番号19、遠藤直樹。

背番号20、降谷暁。

以上二十名が、ベンチ入りメンバーとなる。

スタメン以外は控え投手四人、控え捕手一人。あとは控え野手。投手が多いが、基本的にオーソドックスと言っている。

投手陣の起用法、先発陣は三枚。

先発完封型の斉藤智の起用法は、完封。

7回くらいでスタミナが切れる丹波の起用法は、スタミナ限界。

リリーフでは嵌らなかった川上の起用法も、スタミナ限界。

降谷暁の起用法は、8回専門。

沢村栄純の起用法は、守護神。

連投が利かないエースの所為で、控え投手がかなり多いのが特徴か。因みに因縁のライバル・稲城実業の先発は二枚で、リリーフは一枚。

成宮鳴が基本的に先発するスタイルである。実に高校野球らしい。

ベンチ野手の起用法、代打要員は四人。

九人目の野手斉藤智が、投げない時でスタメンではない時は代打の切り札。

普段は、小湊春市が代打の切り札。

楠木文哉、坂井一郎がそれに準ずる。

門田将明は、守備固め。

他は怪我した時の交代要員。

こうして登録を終えて、抽選会を終え、地獄の夏合宿がはじまるのだ。

「クリス先輩！」

「……お前と組むのは黒土館で最後だと言いながら、昨日組んで、拳句の果てにこうなつてしまったな」

この師弟は、練習試合で組んでそれが最後だと思っていた。それが紅白戦でも組んで、今に至る。

沢村はともかく、クリスは一軍に居たが自分がベンチ入りメンバーに入るとは思っていなかった。

「よろしく頼むぞ、沢村」

「はい！」

快活に返事するこの若き守護神の舵取りは、最後の夏となる嘗ての正捕手・クリスに託された。

信頼のカタチ

沢村がクリスと会っている頃。

智巳は、御幸に会っていた。

「厳しいな」

「あいつなら、あれくらいできるようにならないければ」

実力への信頼というより、才能への信頼。

どうでもいい奴に甘い、信用してる奴には普通、信頼している奴には厳しい。

後輩には全体的に優しく、上を敬い、同期に厳しい。

そんな男。

「で、俺に言うことは？」

「随分捕れるまで遅かったな」

「あ、そうですか……」

相変わらず容赦が無い。

まあ、それだけ信頼されているということなのだろうが。

「アイシングは？」

「今からする。あんなことを言う時に肩が盛り上がったたらかつこ悪いだろ」
「まあ、それはある」

中々に見栄えを気にする男であるから、この判断になるのだろう。

ええかつこしいな奴なのだ。二回目になるが。

「と言うかお前、さっきの何あの暗さ。キモかつたんだけど」

「おま……少しくらい凹むのは許してくれよ」

「凹む暇があつたら練習すればいいだろ。全く」

ぐうの音も出ない正論を叩きつけられて口をへの字にする御幸だが、ふと気づいて声をかける。

「もしかして心配してたり？」

「しない。第一、あれしきの暗さで心配したらお前に失礼だろう。お前は乗り越えられる男だ」

不器用な奴、と思わないでもない。

この男、何だかんだで面倒見はいいのだ。沢村を見ていればわかるとおり、ちよつと要求が高めなだけで。

その試練を乗り越えられない者からは敬遠されるが、乗り越えられた者からは親しまれる。

「お前、そう言うことはこまめに口に出した方が良いぜ。ゾノとかノリとか、そこらへんに苦手にされてんのは間違いないがそれが原因だよ」

「別に好かれようと思つて、これなら出来るだろと言つてるわけじゃない。勝つ為に、強くなつて欲しいから言つているんだ」

同期で仲が良いのは、倉持と自分くらいで、後輩たちの中では沢村と小湊弟、東条がそれにあたる。

(頼られてはいるんだろうけどなー)

頼れるけど、近寄りがたい。

同学年の中ではそんなポジション。

どちらかと言えば弱い選手はプレーで引つ張り、素質のある選手は言葉で引つ張る。

「無理だった奴にはしつこく言つてないだろ」

「わかつたわかつた。それでいいよ」

それが沢村とかと比べて見ると見放されたつて思われるんだよなーとは、言わない。

沢村は、異例中の異例。あれだけ絡んできて、地道な基礎からやれと言われて馬鹿みたいになんてそれをこなし、やつと教えてもらえたストレートを披露したら基礎の甘さを指摘される。

それでも文句は言わなかつた。

(お前とは違うんだよ、とか言わないもんな、あいつは)

そう言われては『何を当たり前なことを言っているんだこいつ。俺ならとつくにそれ以上のことができとるわ』という目で見ていた智巳だが、沢村に関してはそう言う『無理ですコール』がない。

馬鹿だからかしら。

そう思わないでもない。

「沢村、あいつはいい投手になれる。コントロールとスタミナをつけて、球速を上げる。あとは癖球が死なないような変化球を探さなきゃな」

智巳はわざわざ沢村の癖球に合わせ、綺麗なストレートの投げ方を改造して教えている。

あのストレートは、所謂フォーシームではないのだ。沢村のオーソドックスに適当な握り方を少しずつ変えていって投げさせ、酷似したものを探してフォーシームめいたものにする。

だから、厳密に言えば変化球になるのだろうか。沢村のストレートは、独自のもので、他の投手にはない武器。

自分の睡眠時間を削って、智巳はその工夫をやっていた。

ハードルが高い分、親身にはなってくれるのだ。ハードルが高いけど。

ハードルが高いけど。かなり、高いけど。

「カーブ系はいらぬ。スライダー系——カットボールと、チェンジアップとかどうだ？」

「左だし、サークルチェンジもいいかもな。シンカー気味に沈めば投げやすいだろうし」
「採用。流石捕手」

智巳の投球の幅を広げる為、そこからへんの知識はある。

沢村は正直見たこともないタイプの投手だから、分析は大変だがやり甲斐がある。

「あとはお前がフオーク教えてやれよ。まるつきり投げ方違うから、癖球は死なないと思う」

「いいよ。高速投げられるかな、あいつ」

「さあ。てか、お前って本当に握り方とかあつさり教えるよな。勿体なくないの？」

投手は、自分の決め球を教えたがらない。

それは、決め球とは生命線でもあるから。その決め球は自分にしか投げれない。そうなれば、当然打たれにくくなるし希少性も増す。

投手としての、価値になる。

「沢村の可能性を潰す方が勿体ない。それに、あくまでも教えられるのは贋作。オリジナルを超える為には、そこから努力しなければならぬ。その努力を経た球は、もう俺

が教えたものではない」

——努力する道を、エゴや欲で阻む気はない。

それが彼のエースとしてのスタンス。チームを勝たせるのがエースであり、それは登板時のみに勝てばいいというものではない。

更に言えば、その努力する道のルールを敷いてやっても、なお敗けはしないという自信。

これがエースの余裕。

傲慢と言え、慢心と言え。そうする余裕を持つ為の努力はしている。

自分が教えなかったから、素質を絶ったからエースになれた？

違う。教えた上で勝ちたいのだ。全力で育て、なお凌駕する。

お山の大将になりたくて、エースを張っているわけではない。

それが誇り。それが実力。

そう示してこそ、エース。

エースとはチームを勝たせ、チームを引っ張り、チームを育てる。そして、敵と味方に個人として勝つ。

「お前、プライド高いよな」

「エースだからな」

クイツと、鷹のように目を鋭く細めて顎を上げる。

僅かに漏れる威圧感。

今更基礎をやれと言われた沢村栄純の明日はどちらに向かうのか。

このプライドの塊のような男に教わり、どう育っていくのか。

これから番号発表が終わり、梅雨が開けて、初夏がはじまる。

三桁を越える部員の中から20人が選抜されて扱かれる、地獄の合宿の時間である。

一日目は沢村、降谷の素人組はAグラウンドでベースカバーなどの守備練習。

それが終わったら、外野のノックで捕球した球をホームに返すことを繰り返すことで、走らせながら遠投。

降谷は本格的に外野手での出場が視野に入ってきたので、それも兼ねている。

内外野のスタメンはBグラウンドでノック。

丹波は投げ込みと制球強化、智巳はスライダーを完全に捕球できているとは言い難い御幸に慣れさせることと、制球強化。

午前中動き続けて、マネージャーたちの飯を食って午後。

今度は、投手野手関係なく全体的に足腰の強化。

インターバル90秒で、ポール間ダッシュ20本。

ベースランニング100本。

グラウンドを20周。

沢村栄純、降谷暁、小湊春市、死亡確認。

入ったばかりの一年生には、かなりキツイメニューだが、スタメンに選ばれる程の三年生と二年生にとっては余裕がある。

「沢村、死んだか？」

「死んでない！」

御幸のからかい混じりの問いに、頑張つて立つて手脚をバタバタさせながら沢村は答える。左隣では降谷が、右隣では小湊春市が死んでいる。

「まあ、これは序の口だからな。今日は早めに寝ろよ？」

「じよ、序の口？」

「そう、序の口。明日はもっと、明後日は更にキツイから」

ハハハハツ、と快活に笑う御幸と、木製バットをケースから取り出す智巳。

二人はまだまだ元気そうである。

「御幸、この後バットを振りに行く。お前も来るか？」

「行く行く。俺も三年からは木製に切り替えようかなって思ってるんだよな。コツとか

あんの？」

「ストレートを待つて、速さに対応する。変化球が来たらタイミングを合わせる。ジャストのタイミングで振り抜く。これがコツだ」

「あ、そうですか」

合宿の一日目、終了。

なお、二人は300回バットを振って風呂に入って寝た。

豊富な体力の持ち主は、自然と練習を多くすることができる。

基礎体力を鍛えまくっていたお陰で、この二人には余力が大量にあった。

そして、二日目の朝。

トスバッティング200回、ノック、ランニング。

これらを難なくこなして、授業を受けて、午後4時から練習がはじまる。

降谷は外野ノック、沢村は的当て。丹波はクリスと新球種の練習。

内野はノック、智巳は外野組に入ってシートバッティング。これを二時間交代。

智巳、二時間で3エラー。

どうなつてんのつてレベルで守備があれな男であった。

投手の時にはそこそこやれるのを考えると、単純に外野の守備が下手なのだろう。

その後全体でランニング30周、ストレッチして二日目は終了した。

疲労の回復が速い御幸と、怪我防止にはやはり筋肉持久力と体力を、という方針の所

為で最大体力が多い智巳。

メーターで表すなら、御幸は体力の底がつき始めているが、智巳はまだ五割くらい残っている。

御幸は一晩寝れば八割回復するが、智巳は一割しか回復しない。

これは体質的な問題だからもうどうしようもないとはいえ、投手に向いている身体と精神から、向いていない体質。それがこのエース。

そして、合宿は三日目を経て、四日までいって、五日目が終わった。

「体力が……」

「だろうね。お前回復力無いし」

残り体力三割くらい。

一日一割ペースのあるのかわからない回復力でここまで残せる体力が逆に凄いと、御幸は思う。

三年、二年と、結構死んでいる。

余裕で生きているのは、結城と御幸、あとは智巳。

肘と肩はピンピンしているが、足腰が疲労の極みにある。

更には言えば、夜の素振りで腕も疲れている。

「智さん、明日は先発つすよ」

「リードで何とかしてくれ」

本当に死んでるんだな、と思わせる返す言葉のキレのなさ。

普段だったら『三下口調やめろ』とか言っているだろう。

明日は一戦目の大阪桐生相手に、足腰が赤疲労状態の智巳が投げる。

明後日はダブルヘッダーで一戦目丹波、二戦目川上が先発する。中継ぎの降谷と抑えの沢村はこの二戦にしぼって連投。

「あー……リードね。失投とコントロールミスしなければ三失点までに抑えられるけど？」

「荒れ球用のは？」

「お前疲れててもある程度ゾーンに来るから荒れないんだよ。風物詩の時のお前は荒れ球ってことでいけないこともない。けど、中途半端なお前が一番困る」

いけないこともないとは九回投げて六失点ということである。

中途半端な制球、中途半端なキレ、中途半端な変化量。

人はそれを雑魚と呼ぶ。

中学一年生レベルにまで落ちた智巳が投げて、大阪桐生に勝てるわけもない。

「酷い言い草だな……」

「智、現実を見よう。リードは頑張るけど、こうなったら潔く散ろうぜ」

「……いい加減、プランを」

死の淵から蘇った中継ぎ、乱入。

沢村は今回は制球強化を中心に、降谷は外野守備と球威とスタミナ重視に。

どちらもまだ、コントロールがあるとは言えないが、ないとも言えないレベル。

「縦スラ制球できるようになった？」

「……三球に一球は」

「駄目じゃん。プランつつーより、その場の丁半博打中心。無理な時は力で圧してく形になるから、全力でいけよ」

鷹をうちおとせ!

大阪桐生高校。去年の夏の甲子園準優勝校で、部員全員の背筋力が180キロを超える全国屈指のパワー野球が持ち味。

激戦区大阪の、甲子園出場筆頭候補。

「チーフ、いつも通りやればあなたは敗けません!頑張ってくださいよ!」

「お前、何か更に騒がしくなったね」

「気のせいです!」

クリスと組めたことでテンションが上がっているのは否めない。

そう思っても口に出さないこの男は、やはり疲労でキレがなかった。

「……夏に限らず高校野球は連戦になるから、どうしても全力は出せない時もある。これほど酷くはないだろうけど、それでもそこでどのようなピッチングをするか。それがお前に求められていることだ」

沢村の隣に座るクリスの言葉に頷き、智巳はマウンドに立った。

大阪桐生の打者たちは、関東ナンバーワン右腕がどのようなものかと、やや緊張して打席に入る。

『外角低め、ストレート』

球質とあいまって、難しい球。

要求された球を、投げる。

いつもならできることが、疲れている今は難しい。

彼は長身で、足と腕が長い。

その都合上、思いつ切り前に踏み込んで投げるので、結構足腰が重要なフォームなのだ。

足はガタガタ、腰はまあまあ。

疲労とは怖いもので、その球には速さがなかった。

(140出でないな……まあ、切れてはいるのが救いか)

残り四割の体力を27個のアウトを取るために配分する為、迂闊にギアチェンジもできな

い。いつもならばストレート・フォーク・スライダーの平均球速は145から147。最大球速が153だと考えるとかなり速いが、体力が潤沢にないところなる。

「ナイスボール！」

(嘘をつけ)

御幸の言葉の前に含まれた『今の状態にしては』と言う前置詞を読み取り、内心でつ

ぶやく。

でもこれが限界なのだから、そこでちよこちよこことやっていく他ない。

二球目、またアウトローへストレート。

これに、桐生の打者は振り遅れた。

(振り遅れてるし、球はキレてるんだよな)

ただ、絶望的に球速と変化量がない。

伸び上がる様にホップする回転はそのままだが、おそらく変化球は死んでいる。

(内側、高速フォーク。全力で決めにいけ)

二球目を見た桐生の打者は、すぐさま自分がストレートの下を振っていることに気づ

いた。

ストレートは、ノビてくるしキレもある。

三球目を見た打者は、速いと感じた。実際、さきほどの137キロと比べても145

キロだから速いのだろう。

ただ、打てないわけではない。コースも真ん中で、内側を攻められたとはいえ打ち頃。

ノビもあまり無い。

(もらった!)

振って、空振り。

そりや当然だろう。フォークなんだから下に落ちる。来た球の上を叩くつもりでバットを振ったら空振る。

誰にでもわかる理屈である。

「ナイスボールナイスボール。まだ力はセーブしていけよ！」

また盤外戦を仕掛けてやがる、と一個目の三振を奪った後、鬨志剥き出しに吼えた智巳は思った。

セーブしてゐるのではなく、出せない。それが事実なのに、御幸は敢えて出していないような口ぶり。

そして、最初のバッターに全力の高速フォークを見せてつけて敵の打者の目を惹かせる。

(こいつ、今回は打たせて取る気か)

決めに来たフォークより、ストレートの方が打てる。そう桐生の打者は思うだろう。

だが、あんなフォークはそう何回も投げられない。

セカンドフライとキャッチャーフライに打ち取って三者凡退で切り抜けると、御幸は智巳に囁いた。

「ツーストライクまで見切られたら要所要所でフォーク見せて、気を散らす。早打ちされた方が節約にもなるだろ。ボール球は釣り球にしかないから、そのつもりで投げて

くれよ」

「わかった」

相変わらず、疲労の色が濃い。

さっさと援護点をやりたいというのが、御幸の本音である。

公式戦ではないとは言え、エースが打ち込まれるのを見てしまっただけは野球は楽しめない。

「援護頼みます」

「任せろ」

相手先発は、館。長身、重い球、キレのあるスライダーと、どこかで見たような本格派右腕。

普段はシャイボーイだが、調子がいい時に見せる笑顔が素敵なお方である。

「倉持さん、ホームランですか?」

「スコアの反映、相変わらず遅いですね」

「そのネタもうやっただろ」

二年生コンビにイジられている倉持が内野ゴロでワンアウト。

二番は、小湊亮介。

(ウチのエースも疲れてるし、そのぶん疲れてもらおうかな)

制球された重い球をファールにし続け、十二球目に来た甘い球を痛打。ツーベースヒット。

倉持が四球で死んだのと比べれば、相変わらず頼りになる先輩である。続くは、青道のスピッツ・伊佐敷純。粘れて長打力もある、繋ぐ三番。

「ボール、フォアー！」

結局七球目で散歩し、一二塁。

バッター、結城哲也。

敬遠しても満塁男。

「相変わらず片岡はんは、怖い打線をつくりなせる」

館の弱点は、立ち上がりの悪さ。

その弱点を容赦なく叩いてくる青道の打線は、全国屈指と言っている。

なぜ今まで甲子園で優勝できていないか、なぜここ六年甲子園に出られていないか不思議でしょうがない程の打線なのだ。

大阪桐生の監督・松本が指示したのは、勝負。

だが、それは敬遠気味のもの。

歩かせるのと歩かせてしまったのでは、大きく異なる。

逃げたか、攻めたか。その結果が同じでも、ピッチャーの精神状況が変わってくるの

だ。

結城も歩き、次は御幸。

「セクターだな」

「は？」

ベンチでポツリと漏らした智巳の呟きと、御幸のスイングが完全にシンクロした。

捉えた初球はセクター方向へ。

大きな当たりが伸びていく。

——うおおお！完璧に捉えやがった！

——グラスラ何本目だよ!? あいつ満塁男過ぎるだろ！

観戦に来た、OBやスカウトが沸いた。

因みにシニア含めて通算12本目である。

「援護」

「天才」

疲労からか、若干省略気味ながらいつものが行われ、4対0。

そして、バッター増子。

カキーン、と。完全に捉えた音が鳴った。

「動揺してますなあ」

「そうですね」

グランドスラム、ヒット。

そしてこの回のトドメは、この男。

七番ピッチャー、斉藤智巳。

彼の木製バットが館の重い球を捉え、6ー4ー3のサイゲ。これでスリーアウト。

初回から相手に熱い炎上を与えるファンサービス旺盛な高校・青道らしい攻撃であった。

「斉藤の馬鹿……」

「自己批判とはかなり重症っすね、智さん」

「三下口調やめろ」

敵の打順は四番ピッチャー・館から。

登板時に浮かべていた笑いがグランドスラムを打たれて真顔に変わり、更に今ツーベースを打ってまた笑いに変わる。

かわいい。

そしてさらつと強打者に打たれた智巳。地味にピンチでもある。

(まあ、3失点覚悟でいくか……)

コントロールの定まらぬこと降谷の如し。

ピンチに弱いこと川上の如し。

スタミナのないこと丹波の如し。

その調子の悪いこと風物詩の如し。

控えめに言つて酷い。控えめに言わないならヤバイ。

「ボール、フォア!」

ここで五番にフルカウントからのフォアボール。

迎えるは六番サード、村田。大阪桐生全体に言えることだが、当然ながら一発がある。

(ここで流れを切ろうぜ)

ゲッツーシフトを敷いて、投じた一球目は内角に切れ込むカットボール。

球威とキレに押されて、村田はゲッツーに倒れるが、二塁ランナー館は進塁。

ツーアウト三塁。いつもならばここであつさり三振を取れるのが智巳だが、甘く入つ

たカーブを痛打されてあつさり失点。

バッターは八番キヤツチャー谷野にヒットを打たれて一三塁。

これで4対1。なおもツーアウトでチャンス。

(仕切り直されたな)

流石は大阪桐生だと思う。いけいけムードをゲッツーで切つても、すぐさま切り替えるその速さ。

高校野球で三振が取れないピッチャーは先発に向かない。

投球術で誤魔化していくにしても、狙って取れる三振はどうしても必要となる。

()で三振を取ろう。フォークだ)

五番にフルカウントから歩かれたように、早打ちの意志が薄れてきている。

恐らくは向こうの指示なのだろう。フォークを捨ててかかれ、と言う。

(でもまあ、ちらつかせてもらう)

一球目二球目を厳しく攻めて、一球外れて四球目の甘い球を、軌道そのままに打ちに来た。

だが、それはフォーク。

この試合二つ目の三振である。

いつもならば四、五奪三振くらいはさせているから、やはり濃い疲労は怖い。

(中軸もこの配球で行こうつと)

頭に焼付けさせてやる。

監督が捨てろと言おうが、頭には残る。

頭に残った残像は、そうやすやすと消えはしない。

「智、ストレートのキレがいい。こうなったら速く投げようとししないで、指先に神経やつてキレ重視でいこう」

「わかった」

頷き、マウンドに立つ。

館はツーベースを打ったことと、監督に喝を入れられて気持ちを切り替えたことが功を奏したのか、この回は素晴らしいピッチング。

4対1。

館は2四球、被安打3。智巳は1四球、被安打2。

三回の智巳は最初から、甘く入ったストレートを三連打されて満塁とする。

いずれも、抜けていてもおかしくない当たり。好捕した守備陣のおかげで、何とか無失点でノーアウト満塁となっている。

「タイムお願いします」

御幸がマウンドに駆け寄り、キャッチャーミットで口元を隠しながら話しかける。

「どうした?」

「言いたいことはわかる。だけど、この一打席だけ好きなようにさせてくれ」

珍しい。

基本的には、リードに従う男が珍しく好きなように投げさせると言っている。

(鳴がこう言うなら間違いなくノーだけど……)

練習試合だし、あまりない我儘。聴いてやらなければ女房役とは言えない。

「わかった。スライダーは投げんなよ」

「全球ストレートだ」

「え？」

「この回はこれから全球ストレートでいく。わかったらホームに戻れ」

足腰の問題で、速さは無理。

変化球も、イマイチ。

なら、ストレート。指先の感覚と、切り方。

全てを一旦忘れて、ただ無心になる。

(リードに応えるほどの、余裕もない)

勝ちたい。

勝ちたい。

勝ちたい。

エースなのだから、無様を晒したくはない。

空振りが取れるストレートを。速さで取るのではなく、常に空振りが取れるストレートを。

投げた一球目は、大きく外れてボール。

(まだ切り方が拙い。切り時が遅い)

二球目も、大きく外に外れてボール。

「おいおい、四球で押し出しだけは勘弁してくれよ?」

館広美が、笑顔のままに御幸に圧をかける。

自分がやられたことをそっくりそのまま返す、絶好の機会なのだ。

「ここは、何が何でも打ちたい。」

「さあ、俺にはちよつとわかりませんね」

「何?」

「あいつ、俺の制御下に無いんで。ブレーキの壊れたブルドーザー、首輪の外れたシベリアンハスキー、封印から解かれた怪物。それくらい挙動が予想できないんですよ」

「おいおい、そんなことじゃあ——」

話しながらも、ボールは見ていた。

来たのは、インコース低めいっぱい。

唸る様に、伸びていた。

「そんなことじゃあ、なんですか?」

「……いや、話してる余裕なんか無いみたいだな」

「それが賢明ですよ。あいつはまあ、本気なんです」

——本気で、全球ストレートで切り抜けようとしてるんで。

そう御幸が言った瞬間に、インコースいっぱい 스트レートが決まった。快速球。そう形容するしかない速度を、館広美は感じた。

(今、少し修正できたな)

そんな打者のことも、正捕手のことも知らず、智巳は親指の爪の甲で人差し指の腹を撫でていた。

(もう少し、あとコンマ何秒か速く切る)

スパツ、と。

イメージとしてはそんな感じ。

ツー 스트ライク、ツーボール。

最後に投げられたのは、ど真ん中のストレート。

全く反応できずに、四番でエースの館は見逃し三振を喫した。

ワンアウト。未だ満塁。

(今のは良かった)

137キロ。スピードガンはそう示しているが、体感としてはもつと速く見えた。

(あとは、連続して投げられるか)

キレを維持する。コンマの世界で一瞬も躊躇わずに、悩まずに指先の切る。

集中力がガリガリと消費される感覚が、エースを襲っていた。

(遅れた)

そう悟った瞬間、五番の金属バットが鳴る。

高々と上がって、センターへのフライ。

三塁ランナーがタッチアップ。二塁ランナーも悠々タッチアップできる飛距離。

だが、センターは伊佐敷。

「死ねや、オラア！」

三塁手増子がストライク返球を捕球し、タッチアウト。

三塁ランナーが先にホームに生還したからいいものの、下手をすれば得点取り消しもあり得たタイミング。

「純さん、ありがとうございます」

「たまにはこうやって助けさせろや。てめえ一人でアウトを取ることもいいけどよ」

「頼つてますよ。本当に……」

4対2。この回、1点返されて2点差。

まだ三回裏、青道の攻撃がはじまる。

勝てる男

「いやあ、三回で二失点もしてしまいました。強いですね、彼等」

伊佐敷のファインプレーでやつと抑えた。

その感じが強い。

だから、敢えて笑った。

しんどいと言う感情は、エースには相応しくない。

「これからもガンガン取られると思うんで、よろしくお願いしますね」

「何人でも刺し殺してやらア」

「二遊間に転がせばカウント一つ取ってあげるよ。ねえ？」

「ぜつてえ捕つてやるよ。俺はシヨートだからな」

伊佐敷純、小湊亮介、倉持洋介。

これから打席に立つのは、小湊亮介。

「あの笑顔をいじめてあげないと、少し辛いかな？」

「そうですね。あの人、尻上がりに良くなっていくタイプだと思っんで、今のうちにお願

いします」

「いいよ。可愛い後輩の頼み事くらい、叶えてあげなきや先輩じゃないしね」
飄々と。

「それに、甲子園で当たる時に死ぬほど思い出してもらわなきや」

そして黒く。小柄ながら頼もしい先輩が、打席に立った。

一球目、見逃してボール。

二球目、三塁線鋭く切れてファール。

三球目、一塁線切れて、ファール。

四球目、ストライクゾーンからボールになるスライダーを平然と見逃す。ボール。

五球目、三塁線にフライを打ち、フェンスにあたってファール。

六球目、またも平然と見逃す。ボール。

七球目、セーフティの構えで乱してボール。

「歩かせてくれてありがとね」

次のバッターは、伊佐敷純。

打って変わった初球叩きで右方向にポテンヒット。

ランナー、一三塁。

「俺は守備では悪送球を処理することくらいしかしていないが、ウチのチームは困ったことに悪送球がない。だから、四番の仕事でエースの勝利に貢献しよう」

内側に鋭く切れ込んだスライダーは、右方向のフェンスを超えた。
スリーランホームラン。

館広美、鬼門の三回までで7失点。

「2失点、3得点。プラス1点の得だ。気にするな」

「本当に頼りになりますね、哲さん」

「エースに頼られない四番にはなりたくはない。好きだけ頼れ」

五番御幸が館の動揺を付いてヒット、増子も続き、打席には今日併殺打を打っている
智巳。

(ここで切るんや、館。内野ゴロゲッツーからの八番切りでチェンジ、そしたらウチの攻
撃やで！)

深呼吸をして、智巳は打席に立った。

援護、好守、好捕。

そして、御幸が珍しくチャンスを作った。

ここで打つ。攻めの流れを止めたくはない。

「よろしくどうぞ」

ヘルメットをとって挨拶し、構える。

シニアの時の神主気味のフォームと、今までの自然体のフォーム。

それが綺麗に融合している。

体力がないから、見栄が消えている。かつこよさではなく、打てるフォームに集束していた。

(ガルベスとかムーアとか桑田とか、打撃力のある投手って言うより、こいつの構えましま野手やんか)

一切の見栄えと力感の抜けた強打者のそれである。

手首と股関節の柔らかさを活かした、柔軟な神主気味のフォーム。

木製バットを松明でも掲げるように両手で持ち、投手から目を離してバットのみを見つめる。

一秒か二秒で、それは終わった。

集中力を高める為の、自然な動作。

打ち込んだ打撃は投手に転向してから無駄になったと思つたが、案外そうではないらしい。

スラツとしなやかに、打席に根を張つたように立っている。

投じた一球目を、見た。

ノビのあるストレート。見るからに重たそうだが、動揺からか僅かに甘い。

「あ」

誰かが呟くのと、バットが宙を舞って縦回転するのは同時だった。守っているポジションに喧嘩を売るようなアーチから、芸術的なバット投げ。

ニヤリと笑いながら、悠々と左打席へ歩き出す。

手首が天然物の柔らかさだから、打球が伸びるのは逆方向が多い。

スカウト陣がそう論評するのを裏付けるようなバツティング。

「力が抜けた、完璧なスイングだ」

「ありがとうございます、哲さん」

「俺も敗けてはいられんな」

なお、この後館は八番九番にヒットを許すも続く上位打線を三人切ってチェンジ。

現在10対2。青道高校、8点まで差を広げる。

「ウチの打線は最強じゃないか、御幸」

「相手も疲れてるんだから本番はこうもうまくはいかないだろ。お前が抑えてるのも運みたいなもんだし」

「完全体なら運に頼らずに抑えられるぞ、俺は」

「それは知ってる。けどまあ、慎重に行こうぜ」

そろそろ化けの皮が剥がれてくる頃なのだ。

二巡目には入っているし、前の回を見ればわかる通り、いつもあのストレートが投げ

られるわけではない。

「まずワンストライクな」

と言ったが、智巳は制球が定まらない。

二者連続でフォアボールを出し、何やかんやでこの回3失点。自分が作った貯金をゲロってしまった形になる。

「完全体なら……完全体ならば……完全体になれていたら……」

「見せたらバレルるだろ」

そんな会話もあり、四回の裏。鬼門の三回までを超えた大阪桐生・館もエンジンがかかり始める。

先頭バッターの四番結城、七番智巳がストレート散歩したものの、それ以外を抑えて無失点。

四球、本塁打、四球。三振のないアダム・ダンと化しつつある結城哲也の成績が異次元に到達しつつあり、智巳は併殺、本塁打、四球と極めてらしい成績。

御幸は得点圏にランナーが居ないのに打つという緊急事態が発生したものの、それなりにらしい成績。

尻上がりに良くなっていく館は、五回・六回・七回と、ランナーを出すも失点を許さない好投。

智巳は無失点、1失点、1失点と、コンスタントに失う。

足腰の疲労がピークに達したのか、八回には4失点して負け越すも、裏の攻撃で熱い援護を受けてあっさり逆転。

九回はようやく慣れた智巳が無失点……と思いきや、2失点でまた逆転される。

裏の攻撃で御幸のスリーランが発射され、壮絶な打撃戦は終わった。

両軍合わせて27安打、7四球、6本塁打の熱闘であった。

15対13。九回、129球、7奪三振、13失点完投勝利。謎の記録と、『疲労した智巳は弱い』と言う事実が浮き彫りになった試合だった。

殆どストレートを投げていたから肩肘は楽だったが、疲れた。

そして連投させるとうるさかったOBも校長も、やっとわかった。

これは無理だ、と。

片岡鉄心は今年甲子園に行けなければ辞任する腹なだけに、後にこのエースが連投させられないか心配だった。

だから、割りと端的にやったらどうなるかを、選手生命にかからないところを程々に酷使してわからせる必要があったのである。

このエースのヤバイところは肩と肘なので、変化球（特にフォークとスライダー）をこの試合で投げさせなければあまり問題はない。

あまり休めない時の力配分を学ばせ、連投を牽制する。一石二鳥と言うべきだろう。

「斉藤、本当によく投げた」

「いやまあ、それほど疲れてはいませんよ」

「明日は観戦だけでいい。休め」

「え、レフト——」

「休め。これもエースの仕事だ」

と言うことで、次の日。

智巳はベンチに幽閉され、レフトには門田が入った。

その結果、残塁が飛躍的に増える。

二日目も大阪桐生とやったのだが、相手先発の前川は舘以下の投手なのにも関わらず、点が入らなかった。

理由としては、レフトにアレ（併殺ロボ）が居ないと青道の打線らしい打線は六番でぶった切れるから、だろう。

結城との勝負が避けられると五番御幸が打つ。でもこの男は得点圏にランナーが居ないと打たないので、かなり自動アウトになる。

増子も三振とフライが多いタイプの典型的なパワーヒッター。繋ぎのバッティングと言うよりは、一発攻勢。

で、この面々の更に後ろに併殺ロボが控えていると、一番から五番までは繋がりが、四番から七番までは一発が怖いと言う凶悪な打線が完成する。

しかし、レフトが守備の人になるとちよつとくらい怖くても繋がらなくなるのだ。

そして何より、智巳の目に見えない謎の力（勝ち運）が打線の繋がりを良くしているから、割りと点が取れなくなる。

結果、丹波は七回まで五失点と昨日のアレ（十三失点）よりはるかにマシな好投を見せるも、打線が沈黙して四点しかとれず、敗北。

サイドスロー川上は午後から中堅の修北高校と対戦。七回一失点でマウンドを降りて、あとは降谷沢村がパーフェクトリリーフ。

まともに試合を作ったのが川上だけ、まともに勝ったのも川上だけ。

先発川上いけるやん！と言う期待をOBが持つて、合宿は終わった。

大阪桐生と修北のレベル差には、触れないのが優しさである。

No more ISOBE

ペンを口にくわえて、御幸一也は唸っていた。

夏合宿にかまけていて、スライダーを織り交ぜた配球を考えるのを完全に忘れていたからである。

あのスライダーになる前のスライダーは、カウントを取るのに適した球だった。

そりや主戦球の中で一番雑魚だったが、それなりにスライダーは使えた。

一番の雑魚とは言え、中堅校で無双できるくらい——つまり、川上のそれを上回るくらいにはキレていたからである。

だが、今のスライダー（一様に速いというわけでは無い為、ピンポン玉みたいな変化をするからPスラ、略称Pと呼称する）は、空振りが取れる。

これをカウントに使いたくない。勿体無いし、頻繁に投げていい球でもない。

つまり御幸は、空振りが取れるFF (Fast Fork)、FS (Fast Slide r)、P (スライダー) の中から選ぶ贅沢を味わっている。

因みにこの略称は配球ノートだけの言語である。

(FFは145〜150、FSも似たようなもん、Pスライダーは140であれば速い方。

これを加味しなきゃいけない)

それに、高速フオーク、高速スライダー、は手元で加速するようなノビがある。

そりゃあ絶対調な時はもつとノビるからバれる可能性もあるが、調子がイマイチなときのストレートと誤認させるには充分なほどの。

(考えれば、沢村のストレートとあいつのストレートのノビは似てるんだ……癖球の配球を流用したりできないもんか。

いや、前者は軽くて後者は重たいんだよな)

沢村のストレートは実際は130キロっていないが速く見える。だが、打たれるとよく飛ぶ。ホームランもあるが、差し込まれるから打たせて取りやすくもある。

智巳のストレートは速く見える。そして実際速いし、背が高いからつけられる角度が凄まじい。球質も重い。ただし、ボテボテのゴロで出塁されたりする。主に倉持みたいな奴らに。

重くてノビのある、空振りが取れるストレート。

縦横の高速の変化と普通の速度の縦横の変化。

緩急の取れるチェンジアップ、打たせて取るカットボール、小さいシユートと小さいシンカー。

カウント取り用と化した、ただのカーブ、スローカーブと縦のカーブ。

使える球、使えるコースが豊富だからこそ、最良の組み合わせに悩む。

あれはリードが悪いなどと全く言わない男だけに、完璧なリードをしてやりたい。複数の状況を想定してゲームを支配するためのプランを用意しておきたい。

(と言うか、その前に高速スライダーをあれ以来捕れてないんだけどな……)

だがそれは自分の怠慢なので、容赦なく配球には入れる。

中々、自分に厳しい男なのである。

隣では智巳がアイシングの余った時間で勉強をしている。御幸は配球ノートを書いている。

でも成績は御幸が上。才能とは悲しいものである。

授業中でも構わず配球の組み立てをするので、教師もなんとかしようと思ったりするが、指されてもちらりと見て答えられる為、既に一杯喰わすことは諦めていた。

御幸も智巳もブツブツ言いながらノートに書き足したり消したり、忙しい。

東条は夜だと言うのにまだ頑張っている。

地獄の夏合宿地獄は終わり、休日祝日を使った地獄の練習試合地獄が終わり、抽選会が終わり、夏の予選もはじまった。

今は7月18日。夏の予選、一回戦が行われた。青道のメンツはシードだから、こうして呑気にいられる。

開会式を終えて、青道のスタメンは身体を動かすというより、5日後の試合に向けて調整している、という感じが強い。

「対戦相手の情報のまとめが終わった。ベンチ入りメンバー含む二十人は食堂に来るようについてよ！」

「了解」

「応」

脚が速い伝令係・倉持の一言で、御幸は立ち上がった。

智巳も立ち上がった。

夏が、はじまるのだ。

名門復活をかけた、青道の夏が。

「勝ち上がってきたのは、米門高校。エースは左のオーバースロー菊永正明。MAXI 30キロ後半のストレートに、カーブ、スライダー。コントロールはあまり良くはありません。打線はバントとスクイズを多用し、出たランナーを大事にし、堅実な最後まで守り勝つチームです」

クリスから偵察のノウハウを教わった偵察班の渡辺久志は、少し慣れない様子ながら集めた情報を開示した。

ここに居るのは、20人。選ばれた者と、選ばれなかった者の差がこうもはっきりと

現れる。

残酷な勝負な世界が、既にここにはあつた。

「……よく集めたな」

「は、はい！」

クリスが褒め、渡辺が照れる。

沢村とはまた違う形だが、この二人の師弟ではあるのだ。

「相手は待ち構えていた俺達とは違い、初戦を勝ち抜いて勢いに乗ってきているだろう。油断せず、自分の野球を貫けば、自ずと結果はついてくる」

はいッ、と。20人が声を唱和して相変わらず強面の監督の言葉に答える。

「初戦の先発は——」

（俺だろ）

（何言つてんだ、智）

小声で囁くエースと、返す正捕手。

エースを初戦に先発させる。それは定石だ。しかしそれは連投が前提の高校野球、一戦落としても次があるプロ野球での話。

連投が前提ではない高校野球と言う謎の競技に参加しているこのエースが、初戦の——口を悪く言えば雑魚高校相手に登板するわけがない。

「——丹波。お前に任せる」

「!？」

「落ち着け。エースはお前だ。だが、初戦は一番・レフトだ」

一番レフト、斉藤智巳。

二番セカンド、小湊亮介。

三番センター、伊佐敷純。

四番ファースト、結城哲也。

五番キャッチャー、御幸一也。

六番サード、増子透。

七番ピッチャー、丹波光一郎。

八番ショート、倉持洋介。

九番ライト、白洲健二郎。

最近打撃が開眼してきた智巳を一番に置いて、二巡目からは八番から攻撃を始めるお
試し打順変更。

「斉藤、お前は併殺が多い」

「はい。そのことに関しては何というか、打ったら捕られてしまうといえますか」

「だが、出塁率はウチのチームの中で二位。長打もあつて脚も速い。そして——」

敵の心を砕くのが何よりも巧い。

木製で華麗に打球を彼方に飛ばし、バット投げで死体蹴り。

先制の為の超攻撃的な核弾頭。併殺が多いが、使いやすい。

因みに併殺数はブッチギリ一位。出塁率一位は言うまでもない。

二番の小湊亮介はかなり打てる割に犠打で倉持を三塁に運ぶことが多いので、僅差で二位を逃している。

「そして、何です?」

「まあ、出鼻を挫くのがうまい」

(出鼻と一緒に心の柱を無意識に押し折ってんじゃないかなって……)

御幸、極めて正しい心の声解説。

威圧感もあるし、盗塁技術と脚の速さは倉持に敗けるが出塁率と打率では大幅に勝る。

いつぞやの巨人の一番高橋由伸を思い起こさせる起用である。

守備は比較にならないが。

「そうですかね?」

「そうだ。初回先頭打者ホームランを狙っていい。何も考えていないで来た球を打てるお前が打てば、如何な状況でも突破口になり得る」

エースが口車に乗せられ、そして迎えた、夏の西東京予選二回戦、米門西高校戦。
「……相手のピッチャー、菊永ではありませんね」

「背番号10の南平守。一年の時は投手として試合に出ていたようですけど、それ以降公式戦には出ていないようです」

控え捕手としてベンチに入っているクリスト、スコアラージャー兼情報収集役としてベンチに居る渡辺。

青道の先攻。

敵の投手はアンダースロー。

「見たことないな」

「おま……シニア全国大会での秋田代表がアンダースローだったでしょうが」

「覚えてない」

ノーノー喰らわせた相手のことを忘却の彼方へ置いてきた智巳に情報を思い起こさせようとするも、まるで記憶にないらしい。

「斉藤。一般的な一番打者の役割は求めないが、なるべく粘って出塁することを考えろ」

「了解しました、監督」

木製バットを肩に担いで、一番バッターが打席に入る。

米門西の監督・千葉には、勝負の鉄則と相手の油断への確信がある。

一、どういう形であれ先手を取ること。

菊永から秘密兵器南平へのスイツチ。

そして油断とは、エースを先発させずにレフトにおいたこと。

そしていつも下位打線を打っている長打力が売りの男を、試験運用のような形で一番に置いたこと。

「どこかで都立のウチを舐めてるんだよ、強豪つてのは！」

油断の中に潜むは魔物。青道高校恐るるに足らず。

と、思っていた。

——一番、レフト、斉藤智巳くん

そうウグイス嬢にコールされた相変わらずフルネーム登録の身長194センチの威圧感漂う先頭打者の木製バットが振り抜かれ、残心そのまま縦回転。

初回初球先頭打者ホームラン。

所謂プレイボールホームランを、唾然とした顔になった秘密兵器が被弾するまでは。

バットを投げた時はドヤ顔、一塁回るときは得意顔、二塁を蹴るあたりで観客に手を振り、三塁回るあたりで気づいたのか、若干顔がこわばる。

小湊亮介に何事かを呟き、先頭打者は帰還した。

「監督、すいません。あまりにも遅くて打ちごろだったもので、つい手が出てしまいました」

た」

凡退した選手がする言い訳に聴こえるが、こいつはホームランを打っている。

「……粘れと言ったはずだが、打てると思っただけならよし」

采配も打撃も、結果論。

粘って敵の球種を割れさせることに関してではまるで期待していなかっただけに、片岡も優しかった。

まさかこうもうまくいくとは、と言うのが心境である。

やってくれたら楽になる、くらいには思っていたが。

「次は粘る所存です」

「いや、次に回ってくる頃には球種も割れている。狙っていけ」

アンダースロー独特の浮かび上がるような軌道を苦にせず、木製バットで、一発で、それも一球目で、ライト方向に流し打ちホームラン。

怪物だな、と。少し誇らしい思いの片岡の頭にその単語が過った。

「綺麗な流し打ちだった」

「手首が柔らかいからできるらしいですよ。まあ、あんまり褒められたことじゃないですわね」

オーラが出ている結城哲也と話しながら、智巳は少し自分を戒めた。

粘れと言われて初球打ちと言うのは、流石に何も考えていなさすぎなのではないか。配球は読めないので読まない。

ストレートを待つ。

来た球を反応で打つ。

変化球は曲がってから打つ。

変化球は「あつ、曲がった」と思うぐらい。

曲がったんだと意識させるだけ。

変化球が来たと考えた瞬間にワンテンポ遅れるから合う。

四球を意図して選んでみようと思う智巳であった。

(ふうん、動揺しちゃって)

小湊亮介は、三球見た後に相手の動揺を見て取る。

こう言う時は甘い球がくる。経験上、小湊亮介にはわかっていた。

だからボールを見て、ファールにして待つ。

「甘いよ」

巧く運んでレフト前。

ヒットでつないで、三番伊佐敷もヒット。

結城哲也も単打で繋いで、御幸がフェンス直撃のツーベースで走者一掃。

ワンアウトも取れずに四失点。

更に増子のホームランで二点を加え、丹波がアウトになるも白洲と倉持が更に繋ぐ。

ワンアウト、一塁二塁。

そして一番のゲッツーロポ。

だが、ここで米門西バッテリーはこの一番との勝負を避ける。

(四球を選べたぞ)

(選んだんじゃないなくて歩かされたんじゃないのかな?)

ホクホク顔の智巳と、その思考を読む亮介。

スクイズか、ヒッティングか。

ちらりとベンチを見てサインを確認すると、監督の指示はヒッティング。

(一気に畳み掛ける、と)

軽く当てて、センター前へ。

ランナーが一人生還して、なおも満塁。

伊佐敷がライトに犠牲フライを放ち、更に一点追加。

結城哲也が智巳と違って本当に四球を選び、御幸。

満塁ホームランで、12点目。

初回から安定のビックイニングが炸裂し、増子がファーストゴロでチェンジ。

その後も極めてコンスタントに5点6点と畳み掛け、27対0で5回コールド。

続く三回戦は村田東と対戦。先発は川上。

この日も一番打者齊藤は初回プレイボールで初出のスローカーブでアーチを描き、3対0で圧勝。

強過ぎて申しわけない。そんな声が聴こえてきそうな圧倒的な試合展開で、青道高校は四回戦に駒を進めた。

精密機械

四回戦の相手は、明川学園。

精密機械と渾名されるエース・楊舜臣を投打の中核に置いたワンマン気味のチーム。実際のところはそうではないが。

「あの四隅を丁寧についでくるコントロールを見ると、投手戦になる恐れもある。そこで、次の試合の先発は——丹波。お前に任せる」

エース斉藤智巳、今季の登板は未だゼロ。

ちよつと悲しくなってきた智巳は、また一番レフトで出場することになっている。

因みに今までの夏の成績は、丹波が5回を投げて無失点、川上が5回を投げて無失点。リリーフ組と智巳は、未だブルペンにも入ったことがない。

雑魚高校が二戦続いたとは言え、悲しい現実である。

「斉藤。この明川を越えれば次は市大三校、その次は仙泉、稲実と続く」

「はこ」

片岡鉄心の考えは、単純である。

大量失点しては絶対に勝てないところ、大量失点する恐れがあるところにエースをぶ

つけ、それ以外は力量を測って丹波か川上をぶつける。

リリーフ陣は短いイニングとはいえ連投になりやすいから、勝てる時には投入しない。

幸いにも経験自体は関東大会で積めたわけだから、一年生の温存もそう悪いことではない。

「市大三校と稲実を、お前に任せる。西東京ビッグスリーの他2つを打倒できるのは、お前しか居ない——そう。青道のエースの、お前しかね」

「抑え登板でも駄目ですか？」

「チイイーフ！後輩の役割を奪わないでいただきたい！こつちも投げられてないんですよー！」

「……同意」

投げたい病に罹っているエースは明日も元気に一番レフトで出場する。

片岡監督は、この核弾頭を気に入ったらしい。

現在二試合でプレイボールホームラン2本、スリーラン1本、ツーラン1本、併殺0、三振1、4四球のいい感じな活躍。出塁率は弱い相手だったからということもあるが、八割を超えている。

併殺もない。この采配、案外当たりだった。

「明日の試合でお前に求めるのは、精密機械の立ち上がりを狂わせる一打。お前がプレイボールホームランを打ち続けていることも、向こうは知っている。コントロールが自慢なだけに、厳しいところに来るぞ」

そして翌日、明川戦。

先攻は青道。後攻は明川。

『西東京予選四回戦、明川高校の先発はエースの楊くん。青道高校は右の丹波くん』

——精密機械。

そう渾名されている楊舜臣は、これまで一回も先制点を許していない。

(今回の大会で未だエースの登板はなし……)

何かがあったのか、それとも野手に転向したのか。

一番打者として、と言うか景気づけとしては最高の打者と思われるが、相変わらず守

備が雑。

その線は、おそらく無い。

ならば、温存だろう。

(プレイボールホームランを二試合連続で打ち上げている。ここはインコース低めから攻めるぞ。三試合連続を狙っているなら手を出してくる。手を出せば、打ち取れる)

(わかった、舜)

極めて優秀な核弾頭役。

切り込み隊長が九番の倉持ならば、この男は砲兵。後続が荒らし回る為に敵投手を砕く。

これまでバントをしたことがない、破壊力のある一番打者。

この男が一番にいるあたりに、打撃陣の層の厚さが見て取れる。

モーションに入ると、すぐさま構えが変わった。

セーフティー。

(揺さぶりをかけるつもりか)

当てることはせずに元の構えに戻したが、今の動きで性格は読めた。

個人の記録を屁とも思っていない。勝つことを目的に据えている男だと。

(となると、セーフティーはどうだ)

脚が長いからか、全力疾走してもそれほど走っているようには見えないこの男の脚の速さは、案外知られていない。

レフトで怠慢してる、くらいなものである。

(小技の巧さも未確認。内外野は後退させたまま。下手なバントならば俺が刺す)

捕手に意思を伝え、次は一球外す。

これを、智巳は見てきた。

(選球眼はある方。情報通り)

そして良く審判を騙す。

散々選球眼を見せつけておいて、スリーボールの状態でギリギリストライクの球を見たらさつさと歩き出すとか、そういうことをよくやる。

楊は捕手の構えたところに投げ込んでストライクゾーンの縮小を狙っているが、それと似たようなものである。

対角線上に投げ込む、制球重視のピッチング。それが楊舜臣の投球。

これと言って凄まじい球はないが、そのコントロールで決め球の欠如を補う。

ある意味、技巧派の極み。

インハイへ。

長身であることは必ずしも良いことづくめではない。

ストライクゾーンが広がり、ゾーンを広く使える。

針の穴を通すような投球ができる技巧派にとってはやりやすい。

インハイのストレートは、顔付近。

迫る硬球に避けるどころか眼すら瞑らず、智巳は静かに投手を見ていた。

「ボール、ツー！」

球審が宣告し、これでワンストライクツーボール。

(避けすらしなにか)

片岡鉄心と御幸は避けない男にハラハラものだが、そんなことは知ったこつちやないのがこの男。

「コントロールいいな」

ボソリと呟き、構え直す。

何に狙いを絞るとか、そんなことは一切考えていない。思ったことが口に出た。

四球選びたいな、とは思っているが、打撃に関しては打てると思えば打つだけで、実にシンプルである。

ストレート待ち。変化球が来れば合わせる。それだけの打者。

アウトハイの直球を投げ、ストライク。

ツーツー、平行カウント。

五球目、インロー。

これはボール。フルカウント。

塁に出た場合、面倒くさいわけではない。しかし、この男に打たれて止められないままに失点という光景がよく見られた。

この上は、キツチリと打ち取りたい。

(インハイ、ストレート。先程の球より一個分内側に投げる)

ギリギリストライクゾーンに入った球を、智巳はわざとらしくならない程度に身体を逸らして避ける。

球自体は入っているが、今までインコース際どいところに投げても避けなかった男が逸らしたことは、大きい。

楊の示した球一個分の制球も可能とするコントロールか、際どい球を避けすらしめない選球眼か。

こうなつてくると、どちらを信じるかになつてくる。

ここで力になるのは、知名度。

語学留学で来た無名の留學生と、シニアから名を轟かせている野球エリート。

「ボール、フォア！」

どちらの目利きが上かは、言わなくてもわかるだろう。

『おっと、ここで楊くんは先頭バッターにフォアボールを与えてしまいました』

『珍しいことですね。今まで研ぎ澄まされてきた制球が、少し乱れたのかもしれませんが』

そしてこの四球は、判定が打者よりになる瞞矢になる。

(いい仕事するねえ)

見逃し三振していれば、ピッチャーよりに傾く。

それをわかつていて、ストライクゾーンに入った球を演技して見逃すその不敵さ。

塁上から、『行きますよ』とサインを送ってきている。

(盗塁……できるの?)

ノーリードだから、初球ではこない。二球目くらいだろう。

だが、盗塁したところを見たことがない。

脚も速いようには見えないから、慎重に行けとはサインを送ってみる。

(一球目は見て、二球目スイング……って!?)

モーションに入った瞬間にスタートを切り、ノースラで二塁へ。

実にあつさりど、得点圏にランナーが置けた。

(走るならリードを大きく取って少し帰るか、何球目からかくらい言おうね)

二塁上でとった、ごめんなさい、と言うジェスチャーを受けて仕切り直す。

(まあ確かに二球目に走られるよりは楽になったけど、博打過ぎない?)

サインは送りバント。

これくらいならば、小湊亮介ならばツーストライクからでも決められる。

だから、二球目で走っても良かったのだ。

ワンアウト、三塁。

(守備の時は本気で走ってなかったな、あの野郎……)

明らかに、レフトを守っている時とは別人レベルの脚。

打球を追いなれていないから全力では無理なんですよ、と言う言い訳をしたい智巳を余所に、伊佐敷は怒りと共に初球を打つ。

「後で説教だ馬鹿野郎オ！」

向井太陽と対戦した時からとおり、伊佐敷純はコントロールのいい投手に強い。

悪球打ちだから、一個分の出し入れをされてもヒットになりやすいのだ。

高く上がった球はセカンドとライトの間に落ち、智巳は落ちたのを確認してから悠々生還。

1対0。

青道高校、ヒット一本で鮮やかに先制。

なおもワンアウト一塁。ここで四番・結城哲也。

(そう簡単にはいかないな)

一番の駆け引き。

二番の技術。

三番の打撃。

これであつさり1失点。

強豪を抑えるのは、そうはうまくいかない。

しかし、ここで切る。

楊は丁寧に四隅をつき、最後はこの試合初めてスライダーを引つ掛けさせてゲッツーに仕留めた。

あつさりとした表現だが、結城哲也がゲッツー叩くのは一年ぶり。

「次は打つ」

「哲、オーラー！」

隠し切れないオーラを滲ませる結城哲也と、投げたい病に罹患している智巳以外、この1点の大きさを感じている。

丹波は、大物食いはできないが格下相手にはむぎむぎ打たれない。

更に言えば、ピンチの弱さが克服されて粘りが増しているのだ。

「いい仕事だった。ああ言う駆け引きだったならば避けないのもいいが、危ないと思つたならばきつちりと避けるよ」

「でも当たつても塁に出られるからいいじゃないですか。一番としては——あ、はい。避けますね」

眼つきがヤバくなった片岡鉄心から逃げるようにレフトへ行き、その先でもエースは伊佐敷に捕まる。

「お前、本気で守備でもあんぐらい走れ！めちやくちや脚速エじゃねえか！」

盗塁技術も有るが、何と言つても身体能力が高い。

単純に脚が速くても盗塁は成功しないというのは言われていることだが、身体能力が低ければ成功率は低くなる。逆に言えば脚が速ければ成功率は高まるということである。

「いや、本気で走るとどこで止まるか可視化されないと止まれないですよ、純さん」

「そこは落下点を予測して走るんだよ！」

「勘じゃなくて理屈でお願ひします」

「来た球を打つお前が言うなア！」

「いや、それは理屈として成立するじゃないですか」

「そんなこと言えば俺も理屈だろうが」

「え？」

「あ？」

投打に優れた才能に秀でた者、守備の才能に秀でた者。

その二人の会話が話が噛み合うわけもなく、取り敢えずダツシユしろということではついていた。

才気の壁

先発は丹波。青道不動の二番手ピッチャー。

縦のカーブと、新たに習得したシンカー気味に落ちるフォーク。

そして長身から繰り出される角度のあるストリートが持ち味。

一番を三振、二番に四球を許すも三番をダブらせて、全く問題ない立ち上がりを見せる。

「ナイスピッチングです、丹波さん」

「お前の登板前に敗けるわけにはいかないからな」

相変わらずの強面をピクリとも動かさず、丹波は冷静に自分を見ていた。

斉藤は弱い打者から予想外の連打を喰らうことがある。

しかし、自分にはない。強打者に打たれるだけ。

こういう相手をするぶんには、全く問題がない。

「俺は俺の役目を果たす。お前はお前の役目を果たせ」

「稲実戦ですか」

「……その前の市大三校戦もだ。油断すると足を掬われるぞ」

市大三校のエース、真中要は丹波光一郎の幼馴染で、小中学校が同じ。当たり前と言うべきか、同じチームでやってきた。

真中がエース、丹波は二番手。

真中と甲子園を賭けて投げ合おうと思い、エースになる為に青道に来た丹波だが、今も二番手。

同学年の四投手の中で頭角を現し、順当に登り詰めたところにこの男がやってきた。

「真中さんからなら悪くても5点くらい取れますよ。で、俺は5点も取られません」

「あいつをあまり侮らない方がいい」

自分にとっての壁が、こいつにとっては踏み石でしかない。

その事実が、悔しい。

「侮ってはいけません。ですが、普通に投げれば勝てる相手である以上、市大三校はあくまで通過点です」

自分の実力への自信と、エースの誇り。

この発言を責められない自分が、丹波は悔しかった。

普通に投げれば勝てる相手。そうだろう。この男にとつては。

だが、その相手は自分にとってのライバルで、超えられない壁。

やはり苦手だと、丹波は思うのだ。

自分や川上が見えない景色を、超えられない壁を、天才は軽々と翔んで超えていく。

「チーフ！少し良いですか！」

「おっ、なんだ？」

「実は不肖沢村、外角への投げわけを模索しております。ブルペンで見ただけな
いでしょか！」

「いいぞ。内角へは投げられるようになったんだな？」

「勿論であります！」

この二人は、既に超えた。

いや、超えたと言う感覚すら無いかもしれない。

斉藤は比べるまでもなく自分を超え、チームメイトと監督の支持を得てエースとして
君臨し、沢村は自分が望んでいても叶わなかったクリスと組める程の実力とポテンシャ
ルを見せた。

「丹波さん、ということ失礼します。たしなめ、ありがとうございました」

「いや、いい」

—— お前、それにしても今言うか。この試合終わってから教わったら？

—— 突然思いついたんですよ！できればピッチングの幅が広がり、チーフをも！

—— 俺はとづくにできるけど？

—— 遠いッ……遠いッ……でも諦めませんから！

—— 頑張れ。なるべく付き合ってやるから

—— チーフ……

—— 青道の、『守護神』だからな

—— 俺はエースになりたいんですよお！

—— 三年時にはなれてるよ

—— チーフ！

—— と言うかお前、内と外の投げわけはクリスさんに言われてたろ。突然思いつい

たっつーより、思い出したんだな

—— だ、だからクリス先輩の目がまた冷たく……！！

—— やってしまいましたなあ

—— チーフ、なんとか御知恵を！

—— 謝れば許してくれるよ。優しい人だからな

エース争いをしているのに、遠ざかっていくのは、妙に明るいその会話。

少なくとも、自分は自分を脅かす相手に、こうも真摯に向き合えただろうか。

こうも明るく、向き合えただろうか。

（向き合えはしない。自分のことで必死だった。今もそうだ）

だが、だからこそできることもある。

天才ではできないこともある。

丹波光一郎はマウンドに立つ。

天才ではできない、なんでもないことをする為に。

「……わざわざすまないな」

外角への投球と言うより、コントロールの手解きをしている智巳に、ブルペンで沢村の球を受けているクリスが声を掛けた。

「いえ、馬鹿な後輩ほどかわいいっていうの、わかりますよ」

「……わかるか」

「ちよつとそこ二人、チーフと師匠！人を馬鹿扱いしない！」

明川のエース・楊舜臣は、ランナーが居なければ自動アウト製造機をあつさりピッチャーゴロに打ち取り、六番の増子透を外角の球を使って引つ掛けさせてツアアウト。

現在七番の丹波を迎えている。

「……投手戦になると思ってるか？」

一旦ブルペンから外れて、クリスは沢村から少し離れて智巳に話しかけた。

「まあ、そうですね。向こうのエースも中々のもんですから」

「……俺はそうはならないと思う。どこかで、あの精密機械が捉えられる時が来る」
そうなった場合、沢村は僅差での登板ではなくなる。

「僅差で、公式戦での登板。このような場面での投球は、やはり経験でしか埋められない」

「……その通りだ。沢村は心は強いが、まだまだ未熟。ここぞという場面を超えてこそ成長もある」

打線が強いということは、厳しい場面を経験できないという事でもある。

強さとは、常に諸刃の剣。

インナーマッスルを鍛えて怪我をしにくい身体を作れと言われた時に、御幸に言われた言葉を思い出す。

「でも、油断して僅差にして敗けるわけにもいきません」

「その通りだ。だから、こまめに気遣ってやろう。俺も気をつけるが、お前も頼むぞ」
無言で、エースは頷く。

沢村はまだ一年生。そのことを、クリスはよくわかっていた。

「あ、守備行つてきます」

「ああ。引き止めて悪かった」

丹波三振で、スリーアウトチェンジ。

ブルペンからそのまま、智巳はレフトに入る。

監督からの指示はない。この回もしっかり守る。堅実にそれを続けていけば、勝てるのだ。

丹波は、差と違いを改めて見て更に堅実さを増している。

五番の楊にヒットを許すも、そこから崩れずに後続をピシヤリ。

八番白洲がセンター前ヒット、九番倉持がセカンドフライ。

そして、一番の斉藤に回る。

結果は、いつものゲッツー。

精密機械は、狂う兆候を見せない。

だが丹波も崩れない。

「すいません」

「次打てばいいよ。次打てば」

「仕事はしてるから許す！」

「気にするな」

いつものこととはいえ、ゲッツーを打ちたくて打ってるわけではないし、すまなさがある。

後続の二・三・四番に謝って、智巳はまたレフトに行った。

三回表が終わって、1対0。
まだ、スコアに動きはない。

四回、五回と無失点。そして、六回の表。
バッターは、結城哲也。

六回までに二巡。現在三巡目。

ヒットは出ているが点には結びついてない、それが今の状況。
ここまで結城は併殺打と、四球。四番の仕事はできていない。

一番斉藤がヒット、二番小湊亮介がヒット、伊佐敷センターフライで回ってきた打席。
研ぎ澄まされた怪物スラッガーの気が、楊舜臣を圧していた。

「ボール、フォア！」

明らかに制球が乱れ、フォアボール。

ワンアウト、満塁。

バッターは、満塁男の御幸一也。

(こう言うピッチャー、実は結構好物なんだよな)

コントロールがいい投手は、配球が楽。つまり、配球がかなりの確率でまともに決まると言うこと。

御幸の応援歌は、狙い撃ち。

その応援歌通り、得意な打撃も狙い撃ち。

一球目は、インローギリギリ。

(ビシッと来たな……すぐに修正してきたってわけか)

二球目は、外から入るストライクゾーンギリギリのカーブ。

(次はインロー……つてのは、安直)

俺ならインハイに直球。

そこを、狙い撃つ。

予想通りに、球が来た。

「いただき」

金属バットが、音を鳴らす。

飛んだ球は遙か彼方、バックスクリーンへ一直線。

しかし、楊舜臣もやすやすと崩れない。

丹波を三振させ、更に白洲にツーベース、倉持にタイムリーが飛び出すも、智巳がサー

ドフライ。

6対0。

六回裏に丹波から降谷にスイッチ。四球こそ出すも三者連続三振に切つてとり、七回表、コールドのチャンス。

打順は、二番からの好打順。

打者に傾いたストライクゾーン。初回で行ったこの行為が、ボディブローのように効いてきている。

審判をその制球で味方に付けるといふ機能を制限された精密機械と、弱小校故に隙さえ与えなければ点を入れられない弱い打線。

渡辺久志の情報から御幸のリードが冴え、自力の差もあつて完全に封殺。点が取れない焦りが、守備の乱れを生んでいる。

「ふーん」

サードが狙いめかな、と。

小湊亮介はニコリと笑つたまま黒いことを考えた。

アウトコースを流し、サードへ痛烈なゴロを放つ。

「あっ!？」

エラーをしてはいけない。エラーをしてはいけない。

そう追い詰められていた相手のサードのグラブから、白球がこぼれる。

記録は内野安打だが、明らかにサードを中心に動揺が生まれていた。

伊佐敷も続き、トドメはやはりこの男。

結城哲也、息の根を止める流し方向へのスリーラン。

9点リードで、沢村栄純はこの夏初めてのマウンドへ向かう。

「……初球ストライク。先頭バッターは楊舜臣。このチームの投打の要だ。逃げずに攻めて、打ち取るぞ。こいつを打ち取れば、息の根は止まる」

「はいっ！」

野球の基礎を教えてくれた師匠と共に、マウンドに立つ。

それが嬉しくて、沢村は緊張と言うよりもワクワク感が先に立っていた。

「バックの皆さん、ガンガン打たせていくので、よろしくお願い致します！」

三振を多く取るピッチャーではない。だが、それでも守護神に据えられているのは、心の強さ。

ピンチでも動じない、精神の強固さ。

（インコース攻め中心。外との投げ分けは、これからの成長で身につける）

戦っていくうちに、一戦一戦ごとに強くなるチーム。

その中心になるのは、間違いなく一年生の三人。その中でも、沢村が核となる。

（身になった時、それは必ず武器になる。それも、インコース攻めを代名詞としたピッチャーならば、それは必ず意表を突ける鬼札になる）

インコース低めに、癖球が決まる。

関東大会で登板があったが、コントロールはそれ程良いと言う印象は懐かなかった。

だが、ここに来てコースに決めた。

(それに、このフォーム)

左腕が、リリースの寸前まで見えない。球の出どころがわからず、リリースが遅いから球持ちが良い。

(初見で攻略するのは――)

またも、インコース。

金属バットを振り抜くも、ライトフライ。

初見で攻略するのは、厳しい。

そう思った楊舜臣は間違っていないかった。

癖球による徹底したインコース攻めに、丹波を三巡しても打ち崩せなかった打者が打てるわけもなく、あっさりと三者凡退。

綺麗なストレートを隠した状態で、沢村は夏初めての登板を終えた。

未だ、通算失点0。被安打は僅かに1。セーブには恵まれないが、絶対的な守護神となりつつある。

ダークホース

市大三校対薬師高校。

西東京ビッグスリーと呼ばれている名門と、無名の新鋭の対決。

初回の表に市大打線が6点を上げ、誰もがコールドで勝つだろうと思った予想を覆し、薬師高校がサヨナラ勝ちで試合を決めた。

轟雷市。四番に座った一年生の特大の一発が真中の心を打ち砕き、真中は三回7失点でレフトへ。

その後は二人の投手を使つて四回五回を耐え、ここでエースに立ち直つて欲しい市大三校は真中をレフトからマウンドへ。

しかし真中は登板直後の六回こそ無失点に抑えるも、七回に轟のピッチャーライナーが直撃して負傷退場。

真中の離脱（一回ぶり二度目）を予想しない継投策をとつていた市大三校、サヨナラ負けで力尽きる。

試合が終わり、そのまま観戦していた青道サイン。

彼らが見た最後の光景は、サヨナラを喰らった市大三校二年生・村上が両膝を付いて

帽子を取って泣き崩れる場面。

7回にピッチャーライナーが直撃して退場した親友・真中要を案ずる丹波以外の全員が、一年前を思い出した。

1点も取れなかった打線、九回に遂に力尽きたエース。

一人で127球投げた男を、全く助けてやれなかった不甲斐なさ。

野手陣の顔は、勝ったはずなのに何処か重い。

快刀乱麻のピッチングを見せた丹波も暗く、明るいののはあの試合を見ていない沢村ら一年生ズのみ。

「どうでしたか、チーフ！」

三者凡退させ、コールド成立。

帰りのバスで、前の席から身を乗り出した沢村が後ろの智巳に話しかけた。

もちろん、どうでしたか、とはピッチングの内容。

結果は良くしなければ、話にすらならない。

求める壁が高いが故に、沢村の意識は高い。

「初球のコントロールが甘い。これからずっと守護神となつて敵の意表を突くならばそれでもいいが、エースになるならば最低三巡は抑えなければならぬ。三巡すれば、目が慣れてくる者も居るだろう。今のよう甘いところに投げれば、打たれるぞ」

「はいっー！」

「不規則な変化をするムービングだから、コマンドに決めろとは言わない。しかし、コースには決められるようになれ。コースに決められてこそ、お前のムービングボールは輝く」

因みにこの男も、全力で投げればコースが精々。ストレートやカーブをコマンドに決められるのは本当に調子がいい時だけ。

フオークとスライダーはピンポイントに決められる。

「帰ったらクリス先輩と反省会をやるので、ご出席いただけませんか？」

「……いいよ。やろう」

「あざっすー！」

あの敗けを思い出して自分の弱さに不快感を感じていたこの男としては、気持ち切り替えたい。

というか沢村は反省会に鬼を招いて平然としてお礼を言う辺り、と言うかあれだけこれまでの反省会でボロボロに言われてめげないこのメンタルは相変わらずすごい。

道路に立っている、オレンジと白が組み合わさったシマシマの円柱。

あれの復元力を思い起こさせる。

「……沢村。斉藤は二日後先発する。あまり迷惑はかけるなよ」

「無論、今日以外はクリス先輩だけに迷惑を集中させる所存であります！」

「……………」

「……………あの、お疲れ様です」

「……………気になるな。それに、始まってすら居ないんだ。終わった時に言ってくれ」
迷惑をかけないという選択肢は無い。

そう高らかに宣言した沢村はおそらく無意識なのだろうが、この時も彼の隣に座っているクリスの疲労が懸念される。

でもまあ、沢村に会う前の黒い瞳からハイライトが消えている状態よりははるかに楽しそうだから、いいのかもしれない。

どちらが心身にいいのかは定かではないが。

「御幸、お前はこの後何すんの？」

「降谷とちよつとな。沢村に刺激を受けてるらしいから、ここでビシツと基礎叩き込んどくわ」

「四球出してたし、それが良い。あいつも原石なんだから、頼むぞ」

「あいよ」

御幸の隣、エース。

クリスの隣、守護神。

小湊亮介の隣、倉持。

このように職務上と言うか、ポジション上で話すことが多い二人を並べて、バスは静かに走っていく。

青道高校、ベスト8へ一番乗りを果たす。

だが、どこかその顔は暗かった。

次の対戦相手は、薬師高校。

一年生三人のクリーンナップと、二年生エースを擁したダークホース。

「初球。これ。低めに決まったけど、低過ぎる。これだとクリスさんと御幸とかじゃなかったらボールだぞ」

「ど、どういふことでございましょうか？」

「……キャッチングするタイミングで少し上にズラした。勿論その後完璧に静止させたが、こういう細かいことをしないとあの球はストライクではなかったということだ」

ほお……と関心顔な沢村に、次の問題点を見せる。

「五球目。これは明らかに高い。お前は球質は大したことないんだから、これが哲さんだったらバックスクリーンだぞ」

「むむむ」

「球質の軽い球は、振り抜いただけである程度は飛ぶ。ミートポイントが狭い木製なら

ばお前の球は振り抜いただけではそこまで飛ばないだろうが、金属バットはミートポイントが広い。少し外しても振り抜いただけで内野の頭を超えてしまう」

軽い球。無茶苦茶な握り方をしているから、キレはあるが重さがない。

片岡鉄心や御幸、智巳はそう思っている。

球を重くすれば、ムービングが死ぬ。

ムービングボールこそ、沢村の沢村たる所以。そこを殺してまで重くする必要はない。

「チーフの球は重いと言われてますよね！」

「ああ」

「教えていただけませんか！重い球！」

今まで制球のコツとか、キレのコツとか、闘志のコツとか、ストレートのコツとか、パワプロ風に言うならそんな感じに受け継いできた。

今度も教えて下さい、というわけである。

「無理。そもそも俺の球が何で重いかもはつきりわかってないし、球の重さ軽さの原因も解明されていない。背を伸ばせ、としか言えんな」

「お前の球が重いのはフォームが大振りだからと、オフアーム———クラブをつけた手の動きがシャープだかららしいぞ」

これには、沢村だけではなく智巳も頭に疑問符を浮かべた。

沢村は頭の切り替えの為にグラブで壁を作っているが、智巳はオフアームと言うのも初耳だし、グラブをつけた手の動きなどあまり意識したことはない。

「そう。腕の引きが速く、鋭い。球質の重い投手は、そのようなフォームのことが多い。ジョシュ・ベケット、ティム・リンスカム。彼らはフォームは似通っているとは言い難いが、オフアームの引きが速い」

「チーフ、見せてください」

「いや、もう撮ってあるものがある」

今日の沢村から、練習試合の智巳へディスクを入れ替え、クリスはある程度まで飛ばして見せる。

「腕を上げる、脚を上げて、腿と足首から土踏まずを少し動かしながら若干間を取って、投げる。これが前から見た斉藤のフォーム。あいにくこの試合ではランナーが出ていないから、セツトの場合は無いが、こちらの方が見やすいから良しとする」

「相変わらずかっこいいツス」

「おお。ありがとう」

「でだ、これが後ろから見た場合」

肩が撓っているかのように鞭のように繰り出された右腕に連動して腰が回り、脚が回

り、左肘が背後霊に肘鉄でも喰らわせるかのように攻撃的に動いているのが、はつきりわかった。

一連の全く無駄のない連動の中、唯一無駄っぽい、この肘鉄。

「これですか」

「これだ。ある意味、お前の身体で為しうる理想形のフォーム。完成度が極めて高いと絶賛されていたぞ」

ただし、負担は大きい。疲れやすいし、溜まりやすい。だから連投ができないし、関節を筋肉で鎧っている。

「え、誰にですか？」

「……………まあ、父の友人にと言っておく」

「へえ……………では、これを言ったのも？」

「父の友人だ。ヒューストンで宇宙飛行士をやっていた。もう現役引退したが、まあそれは置いておいて、斉藤。お前は肩甲骨はどのくらいまで開く？」

よく来てるあの人かな、と心当たりがある智巳はそれではいいいと納得した。

沢村は最初から気にも止めていない。

「右と左が背骨の辺りでくっつきますよ。関節が柔らかいらしくて」

「沢村は？」

「俺もくつつきます。柔らかいってのは知りませんでしたけど」

沢村は天然のムービングを投げられて、智巳は人間離れした変化球を投げられる。似たような柔らかさをしていても同じ球を投げられる者など二人と居ない。

個性だとも言えるし、才能だとも言える。

「なら、少し参考にしてみるといい。脚の踏み込み、腰の入れ方、オフアームの使い方。利き手は違うが、今までそうしてきただろう？」

「はい、師匠！」

沢村の成長が著しいのは、智巳と言うエースの理想形が居ると言うのが大きい。

目標は遙か遠く、手を伸ばしても届かない。

それに諦めを抱くことなく一歩、また一歩と。

一年生二人は進んでいる。

「にしてもチーフ、市大三校は何で敗けたんですか？」

個人個人の力、連携。チーム力では勝っていた。

それがわかる程度には、沢村栄純は知識を深めている。

「エースが好き勝手やったからだ」

棘のある表情で、智巳は言った。

「どうやら、含むところがあるらしい。」

「好き勝手？」

「打たれて立ち直れずにマウンドを降り、ライナーが直撃して交代。この茶番が無ければ、継投策をとっていた市大三校は敗れることはなかっただろう」

「でも、仕方ないんじゃないですか。負傷退場ですし」

沢村には、割りと一般的な常識がある。

確かに燃えていたが、そこまで言われる謂れはないのではないかと、思っていた。

「沢村。ノリが三回で7失点したら、レフトに下げられると思うか？」

「ベンチ行きだと思えます」

「じゃあ、俺は？」

「レフトに下げられると思います。エースつてのは、チームの軸なんですからやられっぱなしだと——」

ここで何かに気づいたのか、沢村は妙に神妙な顔をした。

「——信頼の質の差つてことツスか」

「そうだ。エースつてのは、チームを勝たせるのが役目なんだ。勝たせたら別にマウンドで死のうが、ぶっ壊れようが、役目を果たしたことになる。再登板させてもらえた時点で、真中さんは我慢して投げるべきだった」

鬼気、と言うのか。触れれば切れるようなオーラがある。

「かけられた信頼には、死んでも応えなければならぬ。それができなかつた時点で、エースとしては常にマイナスからのスタートになるんだ。

お前がエースになった時に、これを強制する気はない。が、俺はそう思う」
信頼。

重い言葉の意味を、沢村は黙って考えている。

そしてクリスは少しの危うさを秘めたエースをちらりと、しかし鋭く見た。

「で、クリスさん。薬師高校ってどんなチームなんですか？」

見たところ強打って感じですけど。

軽い形で、話題を変えて智巳は言った。

この夏初先発初登板なだけに、かなり相手が気になるらしい。

「……その認識で間違いはない。しかし、エースは居る」

「一番は大したことなかつたですよ。見たところ」

「背番号18、真田俊平。市大三校戦でも、最後に出てきただろう。リリースでしか姿を現さないが、薬師のエースはこの男だ」

「あー、なるほど。あいつは守護神じゃないんですか」

インコース主体の強気なピッチングに、右打者の胸元を抉るシュート。

三振を取るといふより、打たせてとるタイプ。最後に出てきたこと、さらにはその投

球内容が沢村に酷似していることも有り、智巳はクローザーであろうと思っていた。

「チーム盗塁数は現時点で大会一位。積極的に走る分、バントは全くしてこない」

「じゃあ問題ないですね」

「……なぜだ？」

「走つても御幸が刺すでしょう。ランナーが出ないって可能性も高いですし、バントバントが一番面倒くさい」

カバーとか、フィールディングとか、この男は割りと下手。守備クソと言うほどではないがうまくはない。

「……信頼しているんだな」

「ええ。それなりに」

エースは俺だ!

西東京都大会、準々決勝。

薬師高校対青道高校。

「先発は斉藤、お前に任せる。強打のチームだが、頼んだぞ」
「任されました」

青道高校は関東大会のものに打順を戻し、一番倉持のオーソドックスなものに。
先攻は、薬師高校。

「……相手のスターティングオーダーが変わっていますね」
渡されたオーダー表を見て、クリスが呟いた。

三番秋葉、四番轟、五番三島のクリーンナップで得点を荒稼ぎ。それが、薬師高校の
攻撃の軸。

だが、オーダーは以下の通り。

一番レフト・秋葉。

二番サード・轟。

三番ファースト・三島。

四番ピッチャー・真田。

五番ライト・山内。

六番キャッチャー・渡辺。

七番セカンド・福田。

八番ショート・小林。

九番センター・大田。

「出塁率の高い秋葉を一番に、轟を二番、三番には長打のある三島、四番はエースの真田……今大会初先発ですね」

「これまで先発してこなかったのはこの為か？」

結城哲也は、そう睨んだ。

自分たちのエースからは、そう点は取れない。1点を争うゲームになるから、敢えて温存してここにぶつけてきたのだらうと。

「二番轟は1点じゃ勝てないと思ってるからだらうね」

「2点ってことか」

小湊亮介と伊佐敷純が言った通り、彼らの狙いは轟で2点取ること。

智巳の被打率が一番高いのは、一塁にランナーがいて、一塁にしかランナーが居ない時。

要は、点を取られる可能性が少ない時。

「極めて斬新な打順変更、市大三校に合わせたのクリーンナップ変更、エースのリリーフでの温存。向こうの監督がこれを狙って行っているならば、かなりのやり手ということになります」

「でも、強打者を当てても点は取れないんじゃないか?」

「そんなこと言ったら弱い打者並べてもウチの守備じゃ長打は出ないんだから、こつちにとつてピンチになる。」

ピンチにして強打者ぶつけるより、ピンチじゃない時に強打者をぶつけた方が勝てるでしょ」

倉持の疑問に、小湊亮介が返す。

それもそうだと倉持は思ったが、納得していない男が一人。

「下位打線に対する俺への信頼度低くないですか?」

「するわけないじゃん。自分で勝手に下位打線相手にピンチ作って上位打線で切り抜けてつてことを今までやってきたんだからさ。それに、稲実を見据えてるキミが、本気で抑えに行くわけもない」

ぐうの音も出ない正論と、極めて正しい分析。

小湊亮介、恐るべしである。

一方、薬師高校のベンチでは、轟監督が青道のオーダーを見て溜め息をついていた。「来たな、怪物が」

苦々しく、しかし、どこか嬉しそうに笑うこの監督の胸中は複雑である。

愛する息子とあの怪物のぶつかり合いを見たい。

だが、勝つ為には来てくれない方が数段良かった。

「カハハハハ！楽しみ！」

「おめえは気楽でいいよなあ、雷市よお」

バットを振っている息子に向かって声をかけ、組んだ膝の上に肘をのせる。

不良中年、と言うべきか。この社会人野球で40歳まで現役だった男は、自分の息子がこの試合の鍵を握っていることを知っていた。

「マナカも、すごかった」

コースに決めてくるスライダー、自分たちが勝ち上がるのだという気迫。

それを全てぶつけられたラストボールは、虚を突かれたとはいえピッチャーライナー。

振り遅れた。

あれが、本物の投手。

あれが、本物の勝負。

轟雷市は、橋の下で素振りこそしていたが、野球をするのはこの高校野球がはじめてである。

一回戦、二回戦と大したことはない投手に当たり、その度にそのフルスイングで投手のプライドを打ち砕いた。

三回戦の真中は、いい投手だった。四回戦の投手がしよぼかっただけに、そう思う。

「次対戦する奴は比べ物にならないくらいすげえぞ、雷市」

「サイトウトモ?」

「登録名だ、そりゃあ。だがまあ、大事なものはラベルじゃねえ。中身さ。お前も見ただろ?」

成孔学園戦のピッチング。あれこそが斉藤智巳のベストピッチ。

三振が25個、被安打0、四死球0。

キレのあるフォークと、ノビのあるストレート。ストレートで奪った見逃し三振は11個、フォークで空振り三振を7個。後はチェンジアップなど。

「雷市、あいつは間違いなく右腕一本で大金を稼げる投手だ。お前もバット一振りで大金を稼ごうとするなら、いずれぶち当たる壁を粉碎してこい!」

轟雷市は笑って、獰猛に頷く。

すごいピッチャーとの勝負を楽しむ。それが、轟雷市の全てが活きるバッティング。

「真田、あいつからは何点も取れねえ。んでもって、あの打線は三野じゃ抑えられねえ。九回まで、頼むぜ」

「わかつてますって」

薬師高校の、拾い物。

三島、秋葉、雷市。息子を含めたこの三人は轟監督が連れてきた人材だが、真田俊平は元から居た人材。

その男が、今や育てられてエースになっている。

「秋葉、お前が一塁に出るか出ないかでこの試合は決まるって言っても過言じゃねえんだ。頼むぜ」

「雷市のホームランの確率を上げる為、ですよね。わかつてます」

「ミツシーマ、秋葉と雷市が出たら、お前が返すんだ。ブンブン振って簡単にやられんじゃねえぞ」

「雷市が出るまでもなく、俺が打ち砕いてやりますよ。シニアでの借りは、ここで返してやる」

頼むは、珠玉の四人と育てた五人。

『薬師高校、スターティングメンバーは——』

先攻故、先に読み上げられるスターティングメンバー。

——連日の下剋上を成し遂げた薬師、今度は青道も喰うか!?

——エースが何か登板ねえからな。このまま稲実ごと喰らっちゃう可能性もあるぞ!

場は沸く。連日の下剋上と、ド派手な打撃戦で名門を喰ってきたその戦いぶり。

短期の活躍とはいえ、人気が生まれ、声援が浴びせられるに相応しい。

「智、あいつら元気だな」

「これから静かになるさ」

——下剋上。

——魔物。

そんな物は顔を出しすらしない。

『青道高校、スターティングメンバーは一番ショート、倉持くん』

この時点で、静まった。

一番が、レフトではない。

一番が、斉藤ではない。

連日の打撃戦、空に打ち上がった白球による花火。

そして、ドラマティックな下剋上。

そんな物を期待する人間は、この時点で口を噤んだ。

『七番ピッチャー、斉藤智くん』

ウグイス嬢にその名を呼ばれた怪物は、少し前に名前を呼ばれた相棒に話しかけた。

「随分静かになったな」

「現実を知ったんだろ」

至つて静かに、青道ナインは守備につく。

マウンドには、斉藤智巳。

ホームベースには、御幸一也。

打席には、秋葉一真。

対戦経験は、シニアの時に一度だけ。

しかしその記憶は焼き付いてる。

歯牙にもかけられず、薙ぎ倒された。

(なんとしても、食いついく。俺の仕事は、塁に出ること)

プレイボールが告げられ、大きなフォームから一球目が投げ込まれる。

『一球目、アウトローに決まってストライク。140キロ、真っ直ぐでした』

構えたところにすぐ決まる。

140キロというが、今まで対策に打ってきたバッティングセンターの150キロの

マシンよりも、断然に速い。

「三人、全球ストレート勝負で行くぞー!」

投げ返ししながら、大胆不敵に御幸は告げる。

打線が軸のチームは、如何に精神を叩きのめすか。それが鍵だと思っている。

打線とは、水物。乗ってくればすぐさま爆発し、点差をひっくり返すことができる。

(一番秋葉、二番轟、三番三島。こいつらがこの試合の主軸。余裕を持ったようにして、

圧倒的な格の差を見せつけたようにしろ。できるだろ?)

(できるとわかってるから言い出したんだろ?)

右手で帽子のつばを抑えながら左手で返球を受けて、智巳はまたモーションに入
た。

(全球ストレート……?)

舐めている。

秋葉は思った。

予告されて打てない程、力の差はない。それに、球種がわかっているなら狙い打ちも
可能なのだ。

(インハイに來い)

(ふーん)

狙い球を絞ったな、と御幸は思った。

アウトハイにギリギリを投げさせて反応を見て、御幸は予想する。

(インハイ狙いね)

精神を叩きのめすには、わかっていても打てないと思わせること。

(智、インローでカウント取って、インハイに最高のストレートを。大阪桐生相手に投げた奴でいいぜ)

(無茶を言うなよ)

要求通りインローに投げて、ストライク。

『ツーストライク、ワンボール。大胆不敵なストレート三番勝負、一幕目の結末が決まるか!?!』

最後の球を投げるにあたって、智巳は体温が下がるのを感じた。

指先に熱が集まり、その感覚だけでコンマ一秒を削り出す。

秋葉は、待っている。

インハイに、最高の狙い球が来るのを、巢を張った蜘蛛のように待っている。

しかし、蜘蛛では鷹は捉えられない。

消えたと思う程の快速球が、インハイに突き刺さった。

『インハイツ、見逃し三振！最後は145キロストレートオ!』

『狙いが外れたのか、狙い通りだったのにバットが出なかつたのか……とにかく、これ以

上ないほどのストレートでしたね』

三振を奪い、エースが吼える。

秋葉は、項垂れるのも忘れて、半ば呆然とベンチに帰った。

「狙い球外されたか?」

「いいえ、狙い通りの球でした」

ただ、バットが出なかった。

当たったら死ぬのではないかと思うほど、凶器じみたノビだった。

金縛りにあつたかのように、立ち尽くす。それが一回目の打席の結果。

少し右手の人差し指と中指を見つめている智巳は、返球を受け取って目の前の打席に

視線をやる。

『二番はサード、轟くん。今までの打率7割を超え、本塁打は5本!』

今大会既に5ホームー。真中を打ち砕いた怪物スラッガーが、これからはじまる勝負への期待に笑いながら打席に立っていた。

本領発揮

(こいつも大概怪物だからなあ)

打席とマウンドに怪物が居る。

ホームベースにも、壁を超えてその怪物を完全に補佐できるようになった守備の怪物が居るわけだが。

(智、アウトロー)

(決め球は?)

(インロー。少し球威頼みになるけど、少し無理して三球で切ろう)

(わかった)

こいつらエスパーかなんかかと言うレベルで正確な意思疎通を終えて、智巳はアウトローにストレートを投げ込んだ。

轟雷市は、フルスイング。

ストレートの下を振って、ワンストライク。

『ストライク。思ったよりは速くありません。今のが135キロです』

『どうにも球速が安定しませんね。見たところは、145くらいあってもおかしくない

「くらいの見た目なんですが」

轟雷市は、振ってくるタイプの打者。悪球もヒットにする技術と腕力がある。

（真ん中。外側に少し外せ）

（三球で決めるってのは？）

（こいつ、どうせ振ってくるよ。若干コース自体は甘めだけど、お前の球威なら持つてかれないだろ）

（あつそ）

振ろうが振るまいが、打ち取れば全く問題なし。

二球目は、144キロストレート。

これを、轟雷市は空振った。

下を振ったと言うより、振り遅れた。約10キロ上がったのだから当然と言うべきだろう。

しかし、下は振っていない。

「すげえ、すげえ……！もつとゴーツと、もつと速くしなきゃ追いつかない！」

（二球目で確実に、しかも平然と誤差を減らすのやめてくれよな……普通の打者なら二巡目からなのに）

無邪気に勝負を楽しむ轟とは違い、そのままの球速であったならばアジャストされそ

うになった御幸は少し溜め息をつきそうになった。

返球し、インローに構える。

投球モーションが若干遅め（沢村・降谷が速いのもあるが）だから、テンポよく投げさせるにはさつきと構えてやるしかない。

（インロー、全力で）

（さつきのよりも?）

（球速も含めて、全力だ）

秋葉を三振にした時の145キロの球と、轟に向けて投げた二球目の144キロは、最早全く違う球と言つていいほどノビが異なる。

元々手で生き物のようにホップしていたのが、消えるように加速するようになった。

少なくとも、体感的には。

怪物と呼ばれた江川卓の球は、160キロは出ていたと言われる。

無論、そんな球速は出ていなかったろう。しかし、体感でそう感じたのもまた事実。

ストレートは球速ではなく、ノビとキレ。

その点で、この新たな怪物のストレートは見劣りしない。

カーブはかなり見劣りするが、ストレートは互角だろう。

コンマ一秒を削り出して、なおかつしっかりと本気で腕を振り抜く。

135から、144。

144から、153。

合わせられない球速の変化ではない。数字にすれば同じ9キロで、しかも打者は打の怪物。

しかし、この男にもコンマ数秒を切り出した153キロの球は消えたように見えた。

『153キロ、見逃し三振！』

『あれが153ですか……』

御幸の構えたミットが、大きく鳴る。

どれだけキレていたか、どれだけ重かったか。

その音だけで、それとわかる。

「カ、カハハハ……」

手も足も出ない、見逃し三振。

打者としての敗北を喫したにもかかわらず、轟雷市は心底楽しそうに笑う。

あんな球は想像したことがない。

あんな球は、見たことがない。

——打ってみたい。

「もつと、もつと、もつと、打ちたい！」

「……元氣だなあ、おい」

快速球。

名前をつけるならそんなところだろう。

そう思いながら、轟監督は息子の楽しげな様子を見て少し笑った。

(にしてもあの球を地味ーにストライクゾーン誤魔化しながら受けるキャッチャーもやべえな)

相手エースの斉藤のコントロールはいい方だが、ここぞという時にだけコマンドに叩き込む能力に優れているだけで、本来はそれ程でもない。

外角高め、中央、低め。

内角高め、中央、低め。

真ん中高め、中央、低め。

この区分の中で、見たところ際どいところから甘いところに散らばる。

決めに来る球はコマンドに決まる。つまり、外角高めの若干内角より、高さは少し抑えめ、と言うような要求に答えられるのだ。

戦車の『ここらへんの座標』と言うようなガバガバ砲撃が、突然『ここ居る人間の頭』と言うようなピンポイント狙撃になる。

戦車のガバガバ砲撃がボール気味になれば少しストライクゾーンに戻し、狙撃は不動で受け止めるイケ捕も大概凄い。

キレが凄まじいストリート、空振りの取れる決め球・高速フォーク、緩急の取れるスローカーブとチェンジアップ。

スライダーは投げられなくなったらしいが、スライダーがあればそれなりに組み立てが複雑化していたしていただろうことを考えれば、なくて良かったと、轟監督は思う。

『空振り三振ツ！三島くん、全く当たりません！』

三島は最後にはあの快速球が来るとヤマを張って振ったものの、あまり投げられない快速球をここで投げるはずも無く、普通にアウトローのストリートで空振り三振。

一番から三番に繰り上げたクリーンナップがストリート一球で三者連続三振に切って取られ、攻守交代。

『宣言通りの全球ストリート勝負で三者連続三振に切って取りました。先ずはエースの斉藤智くん、立ち上がりゼロに抑えています』

「相変わらず完璧な立ち上がりだことで」

「やばいっすね」

苦々しい顔をした監督に、同じ学年の投手の凄まじさに闘争心が刺激される真田。

青道高校は『絶対的エースと止まらない打線』のチーム。

止まらない打線を止めるのが、真田俊平の役目だった。

「頼むぜ、エース」

「なんとかやつてきますよ、監督」

真田は、綺麗に整えられたマウンドに上がった。

ロジンバックはプレート横に添えられており、スパイクで削られたマウンドはならされている。

（一番は倉持洋一、塁に出せば厄介だけど——）

真田俊平のピッチングは攻めの姿勢。インコースでゴロを連発させる、グラウンドボールピッチャー。

倉持もそれを知っているだけに、そう軽々とバットを振らない。

カウントツーツー、四球目にまで追い込まれて、やっとシユートでゴロを打たせた。

二番小湊は、『すぐ点を取ろう』とは思っていない。

監督も、思っていない。

片岡鉄心は、言った。

青道のエースは、敵の打線を完全に抑えられる。

ならばこちらは、相手エースに常にプレッシャーを掛け続ける。まだなれない先発のマウンド、完投への意識。スタミナへの不安。付き纏うこの不安を、粘りによって加速

させるのだと。

いつものように、無理する必要がない。

——勝負は、二巡目からだ

(でもそれは、凡退していいってわけじゃない)

8球目の甘く来たシュートを捌き、出塁。

しかし伊佐敷がシュートを引つ掛けてゲッツーで、チェンジ。

三人の打者相手に計18球。

一回の攻撃を、真田は凌いだ。

「ナイスピ―真田!」

「俺達も絶対援護するからな!」

この回は、四番真田からの好打順。

五番六番も、よく鍛えられた中々の打者。

しかし。

『この回10球でまたも三者連続三振!これまで全て直球勝負です!』

『今まで片岡監督はこのエースを投げさせなかつたわけですが、それがここに来ての圧倒に繋がっていますね。ここまで全球ストレートなのに、ボールに掠らせても居ませんから、余程キレているんでしょう』

三者凡退の一瞬で、攻撃が終わる。

相手にならないとばかりに、手を抜いたストレートで。

本気を出すのは、秋葉・轟。他は手抜き。

清々しい程に、あと七人を眼中に入れていない。

真田は結城にツーベースを喰らうも、御幸を結城に進塁打にとどめてファーストゴロに、増子をキャッチャーフライに抑えた。

そして七番は、斉藤智巳。

内角攻めに全く怯まず、むしろ向かっていつて木製バットを振り抜いた。

ミートされた白球は、セカンドの頭を越えてライトの前へ。

『シュート打ったあ！セカンド後方、ライトの前！三塁ランナーホームイン！』

『貴重な、そして重い1点が入りましたね』

その後白洲を詰まらせてセカンドゴロでスリーアウト。

打順は、下位から。

「あいつは、力を配分するタイプのピッチャーだ。下位だからこそ、チャンスがある。自分のスイングを忘れんなよ！」

「はいっ！」

キャッチャー渡辺、ショート小林、センター大田。

一番秋葉を含め、この四人が本来の上位打線の役目を担っているが。

『掠りもしません！立ち上がりから圧巻の九者連続三振ッ！』

かかった球数、12球。

球種、ストリート、チェンジアップのみ。

33球で、一巡目が終わった。

元祖怪物の江川。

彼の残した10者連続奪三振まで、あと一人。

日本記録の壁

「記録、知ってたか？」

江川卓の持つ、10者連続奪三振。

そんな記録の更新が間近に迫っている。

だと言うのに、智巳は沢村から受け取った水を軽くあおっているだけで特に緊張する様子もない。

「おい御幸、言うなよ」

「あー、別に緊張とかしないからいいですよ」

空気を読んでいた三年生を代表して、伊佐敷純がツツコんだ。

ノーノー前とか、フラグを立てるのを防止するために話しかけたり意識させたりはしない。

それに近いことが、青道ベンチで行われていた。

「と言うか、御幸。そんな記録に拘って、無理に三振狙うなよ。内野ゴロ、内野フライ、外野フライ、ライナー。アウト一個はどう取るうが等価値なんだ」

本気でこう思っているこの男は、オールストレート勝負に関しては『できる』と思っ

たから首を横に振らなかつたし、『ストレートだけで手も足も出なかつたら、変化球が混ざつたらどうなるかってのは、いい絶望になるだろ?』という言葉に賛同したからああした。

「でもどうせならお前に更新させてやりたいつてのが、女房役としての本音だな」

「記録より、何より、勝つことだ。エースに個人的な感情なんかいらん。記録もいらん。勝つことが第一、あとは全て些事だ」

「なんだかチーフらしいですね……俺としては連続奪三振記録更新して欲しいツスけど」

「へえ、なんで？」

「超える壁がでかくなるほど、やりがいが出るじゃないですか!」

相変わらずだなー、と言う視線に晒されながら笑う沢村の顔は明るい。

本気で超えようと思っているし、本気で応援している。

「いや、次の秋葉はゴロに打ち取——」

「俺達としても、出来る限り伸ばして欲しい。俺達のエースに泊がつくのは、喜ばしいことだからな」

「御幸、無理しない程度に三振狙っていいこう」

「あ、はい」

結城哲也の言葉でも、矜持は曲げなかった。

が、投球の一環として狙うこと自体は認めた。

えらい掌返しである。

「斉藤、無理はするなよ」

「怖いのは一人で、他はすべからく弱い。流してやってもいけますよ、監督」

人差し指を親指で掻きながら、智巳は悠々とマウンドに上がった。

10者連続奪三振が、かかっている。

「お前ならやれる。自分の投球をして、いつものようにマウンドに立て」

「わざと打たせて取ったの含めないと、通算平均17奪三振とかだっけ？」

逆に今まで出来てなかったのが不思議だよな」

「気張っていけよ！外野まで飛ばされても文句は言わねえ！」

「サードに転がってきたら任せろ。ヒットにならない程度に見極めて、できるだけファールにしてやる」

「チイイーフ！あなたはやればできる男！その打者を独楽のように回しておしまいなさいー」

三年生四人衆に励まされ、ベンチからひときわうるさい奴に声援を送られ、球場の観客は記録の立会人になれることを期待して声も枯れろとばかりに『あと一つ』コールを

連呼する。

青道の応援団も、斉藤コールが収まらない。

「期待されてんだな」

「お前はそれに応えられる男だろ？」

「当たり前だ」

去りに、御幸は少し振り返って言った。

「——皆あと一つって言うてるけど、あと一つじゃねえからな。あと18個だ」

「俺が一番、よく知ってるよ」

「ならいい。いつも通りに行こう」

いたずらっぽく笑って、御幸はホームベースでミットを構えた。

初球、ストレート。

球威のある直球がミットを鳴らす。

ワンストライク。

二球目、遅いカーブ。

112キロの緩急の取れる球は、ふわりと縦方向に浮き上がって落ちた。

空振り、ツーストライク。

『さあ、あとワンストライク。あと空振り一つか、見逃し一つで記録に並びます』

あと一つコールが、やかましいほどに鳴り響く。

完全に勢いで負け、観客に期待されていた薬師の下剋上。

それが、たった一人によって塗り替えられている。

『真ん中、空振り三振！150キロストレートで決めたア！』

『……決めましたが、今のは若干甘い球に見えましたね』

『どうかしたんでしょうか？』

『いやあ、この球速差は打てないでしょうから、極論になりますが見栄えでしょうね。アウトローよりもインハイよりも、真ん中で空振りと言うのは誰にでもわかる凄まじさですから』

ど真ん中ストレートで江川卓の記録タイ達成。

この言葉だけで、怪物ぶりがわかる。

だから、御幸は要求した。

対戦する敵の精神を、最初から負け犬ムードにする為に。

『ですが二番はサードの轟くん。今大会屈指の左バッターです。

ここまで来たら更新される瞬間も見たくはありませんが、そう簡単に三振を取れる相手ではありません』

『彼、まだフォークを見ていませんからね。二巡目は何とかできるとしても問題は三巡

目ですよ。ストレートに合わせられましたし、轟くんならばフォークをヒットにしてもおかしくはないです』

ツーストライクまでカウントが進み、誰もがフォークだと思った。

そして、その期待は裏切らない。

スターとは、誰にもできないことをすること。

スターとは、賢くあること。

スターとは、熱くあること。

そしてスターとは、周りの期待を裏切らないこと。

『最後に打たれたのは、一年生の時の紅白戦、頼れる主将に打たれたのだと本人は言っておりまして、この魔球！』

凄絶な笑みで勝負を楽しむ轟も、観客も消えて、ミットが映る。

ここに落とせと、存在を示す。

薬師旋風を巻き起こしたバットが、フルスイングで空振った。

『152キロを落としました……！』

空振り三振、11人連続、11個目の奪三振。怪物江川を、東都の怪物が超えました

『

ストレートと同じ軌道ですよ。手元でノビるか、落ちるか。その違いなんですけど、

それが大きい。ちょっとこれをコマンドに決められてしまつては打てないですね」

その後三島を見逃し三振させ、肘鉄でも喰らわせるかのように下げたオフアームを軸に半回転させ、吼える。

12者連続奪三振。

その日本記録を引つさげて、怪物は闘志を溢れさせたままベンチに帰つた。

「おめでとう、エース」

「ありがとうございます、哲さん」

この回は、二番小湊亮介から。

敵先発真田も好投し、智巳のヒット以来ヒットを許さず。

「キミなら1点で充分かな？」

「あ、投げ切る気は無いのであと2点ください」

ヘルメットを被つた小湊亮介の冗談半分の言葉に、智巳は平然と何が起ころうと完投する気がないことを明かした。

現在は12者連続奪三振。被安打はなく、四球もない。

言うまでもなく、完全試合ペースである。

「へえ、完全試合ペースなの？」

「勝てば記録なんてどうでもいいですし、降谷と沢村に経験を積んで欲しいんです」

「勝利、か」

「はい」

個人の記録より、チームの勝利。

誰が何を言おうが、ピッチャーになることを強いられたその日から、自然に身に染み付いたその信念に揺らぎはない。

「じゃあ、純、哲。あと2点取りに行こうか」

「あたぼうよ」

「祝砲代わりに返してみせよう」

敵エースに全く歯が立たない打線、強打者揃いで苦戦続きのエース。

それでも、薬師のエースの心は折れていなかった。

真田俊平は、未だ3回1失点。この回を抑えて、自分のバットで1点取り返す。そのつもりで投げている。

先頭打者は最も面倒くさい打者の小湊亮介。

(最悪ヒットでもいい。問題は長打を許すこと。次の三番でゲッツー、四番は歩かせて五番でシメる)

ふうー、と。

気持ちの切り替えと、敵エースの圧倒的な投球を頭から消す為に、一つ真田は深呼吸

をした。

(問題は、粘られること。早めのカウントで打たせたい)

真田のフォームは、投げる時に上げた左脚に大きな負担がかかるのだ。

着地した左脚で地面を引っ掻くように投げ、下半身のエネルギーを余すところなく上半身に伝えて投げることでボールの威力を水増ししている。

春先に痛めたふくらはぎはまだ完治していない。

小湊亮介はかなり粘る。何球も投げさせられるのは、避けたい。

だが、先頭打者に四球もマズい。

「ファール！」

三球連続で、振り抜いてのファール。

カッツに見えないカッツ打法。甘い球を待つ粘り打ち。

9球目、フルカウント。

「ボール、フォア！」

小湊、歩く。

これでノーアウトでランナーが出た。

「こいやオラア！」

一打席しか回ってきていないとはいえ、無安打で一併殺。

三番の仕事を出来ているとは言えない。

(俺が出て哲に繋げば、必ず点が入る。哲が歩かされても満塁で御幸)

どちらにせよ、自分が出塁するか否かで点を取れるか取れないかで決まる。

一球目のシュートを見逃し、ワンボール。

二球目のストリートが外に外れて、ツーボール。

歯を食いしばって、鬼気迫るような顔つきで投げ込まれる、インコース寄りの球。

(つて言つても——)

シュートを捉え、センター前へ。

(ウチのエースよか怖くねえだろうが！)

一年生対補欠の紅白戦で、今の主力は入ったばかりの智巳と戦っている。

あの時の智巳の方が遥かに大きく、何か鬼が憑いているように見えた。

「しゃああああー！」

思い切り走り抜き、一二塁。

『真田くんは、ここが正念場ですね。ランナーが二人いる状態で四番の結城くん、敬遠しても満塁時は17打席16安打10本塁打5二塁打と言う満塁男の御幸くん。理想で言えば、ここでゲッツーを取りたいところでしよう』

『彼は打たせて取る投手ですが、球数自体は三振を取るタイプの斉藤智くんより二十球

近く多いんですよ。ここで粘られると、キツくなってきますね』

だいたいこの二十球は半分近くが小湊亮介の所為なのだが、斉藤智はボール球が少ないピッチャーで、ボール球を振らせるよりはストライクゾーンに来る球を振らせるピッチャー。

(……さて)

掲げたバットを見て視線を束ね、集中力を高める。

バットを肩に、目線は真つ直ぐ。

(今の一点は、自分での援護)

初球が、わずかに甘い。

勿論結城視点であり、全く甘くはない。

振り抜いたバットが手から落ちて、白球もスタンドへ落ちる。

『いったああああ！これはもうホームランでしょう！間違いないと感じられるこの一発ッ！』

静かにダイヤモンドを一周して、結城哲也は走者二人とベンチに帰った。

「ただいまー」

「帰ったぞ」

「祝砲だ。受け取ってくれ」

「先輩三人方の御祝儀、ありがたくいただきます」

4対0。

そして御幸があつさり初球打ちでアウト、増子がヒットを打つも智巳がいつものセカンドゴロでゲッツー。

バッテリー二人で仲良くスリーアウト。もはや増子が可哀想になる程のスリーアウトサンドイッチである。

「打点乞食」

「ゲッツーロボ」

「出稼ぎクラッチヒッター」

「セカンドゴロマニア」

圧倒的自省。

一応連続奪三振の日本記録は更新中だが、もはやそのような雰囲気ではない。

バッテリー二人でスリーアウトと言うのは、最早様式美だった。

「あ、フォークは控え目な。チェンジアップとスローカーブを絡めて、緩急でさつさと狩っていこう」

「応」

「掠らせてないから、一応カットボールと小シユートと小シンカーは封印な。掠らせな

いで勝てたら、それはそれでいい風聞になるだろうし」

この回も、智巳は緩急を混じえて堂々のピッチング。

下位打線に手を抜く病がナゲタイナゲタイ病に喰われている今、本当にまるで弱点が消えている。

片岡監督の名采配だろう。

一番斉藤からはじまり、温存策による力配分解消、因縁の稲実に向けての調整登板で宿敵を軽く潰す。

名将である。

恐ろしい十六歳

「圧倒的ではないか、チーフは！」

沢村の言う通り、16人目でセーフティバントを試みるもフォークで空振りさせ、19人目の秋葉がバットに当て、ピッチャーへのフライ。

しかもこの男、落地点に入るのではなく横から搔つ攫うようにしてボールを掴んだ。相変わらず、ええかつこしいな奴である。

（お前、ほんとにええかつこしいだよな）

（まあな）

はじめてバットに当たった秋葉に、場内から盛大な拍手が送られる。

あと、無駄しかないけど見た目だけはかつこしい捕り方をした智巳にも声援が送られる。

（智さん、轟つすよ）

（三下）

（まあまあ、キツチリ抑えようぜ）

（最初からそう言いたまえ）

返球を受け取る必要はない。

サインを確認して、ワインドアップモーションへ。

最初は、ストレート。

もう完全に認識したのか、ほぼ振りが速かつただけのジャストミート。

大きく左に切れて、ファール。

「楽しい……楽しい……カハハハハハハ！もつと打ちてえ！」

格下を打ってきた轟にとつて、はじめて迎える格上。

マウンドでの姿が巨大に見える。

マウンドからバッターボックスの距離が目と鼻の先に見える。

それほどの圧力、威圧感。

（すげえ、すげえよこいつ……こんなピッチャーがまだ全国にはいっぱい居るんだ……
！）

もつと、もつと、打ちたい。

勝ち進んで、勝ち進んで、その先にある強敵を。

自分のバットで勝負を挑んで、楽しい勝負がしたい。

格下ではない。

ライバルでもない。

超えたい壁が、目の前にある。

「ビュッて来て、グリーン！こうか！こう！」

素振りをして、再び構える。

智巳と同じ、勘で振ってるタイプ。

いや、この場合は感覚の感か。

（こういう奴、来た球を打つから面倒くさいんだよなあ）

智巳と川上との一打席勝負、降谷との一打席勝負。その度にリードを担当したが、智巳は勘で来た球を打つからたいてい当たれば長打になった。

敬遠してえな、と言うのが本音である。

結局少し迷って、御幸は高速フォークを要求した。

「——ッ！」

ガン、と。

異様な音が鳴って、打球が大きく右に切れた。

151キロ。これ以上ない球。

「速えエ！ギユッて来て、トーン、か！ギユッて来て、スカッじやなくて、トーン！」

謎言語である。

少なくとも感覚で野球をやっていない御幸にはわからない言葉。

「タイムお願いします」

珍しく智巳がタイムを求めるように要求した為、御幸にはタイムを求めてマウンドに駆け寄った。

「どうした？」

「多分、次打たれるよ」

平然と、智巳は言った。このプライドの高い男が。

このエースは、自分と味方を投球と闘志で鼓舞して理性的に熱くなる。が、急に窮地で投手の本能が理性を冷ますことがかなり多いのだ。

有り体に言えば、ヤバイと思った時に冷静になれる。

熱い自分を客観視して、冷やす術を知っているのだ。

「もうあの快速球は投げられないし、フォークはタイミング合わせられたし、カーブなんか投げようもんならポーンよ」

「スライダーは？」

「見せるわけ無いだろ。稲実を倒す為の秘蔵の剣なんだから」

正論である。

練習試合では使ったが、あそこはOBとスカウトしか来ていなかったからノーカン。外部流出はされていない。

「でも、打たれるわけにもいかんだろ」

「どうすんだ？」

「使えよ。スライダー。チームの核に打たれるくらいなら、次の奴に打たれたほうがお前らしい」

「ふーん……まあ、お前が言うならいいけど」

高速スライダーは、実際見せても構わない。

何故なら、打たれないから。そして何よりも、フォーク・ストレート・スライダーの150キロ超えの決め球の三択を強いることができるから。

読まれても打たれる可能性は極めて低いし、読まれない配球はつくれている。

「三球ストレートで外して、出力5な」

「捕れるのか？」

「捕るやい」

ホームベースに戻り、構える。

轟雷市は左打者。背中を通すのではなく、バットに当てるつもりで投げる。

その意図を読み取って領き、御幸はおおきく外に外して構えた。

『完全試合中なのに、敬遠ですかね』

『決め球のフォークに当てられたのだから、万が一を避けたんでしょか。ああ見えて

割りとクレバーなどところがあるピッチャーですから、おかしくはありませんが』
『ですが、残念ですね。どうせなら完全試合もして欲しかった、というのが正直な観客の
気持ちでしょう』

実況の言ったとおり、観客は勝負を望んでいた。

怪物スラッガーは、ここまで怪物に完全に抑え込まれている。しかも被安打0、四死
球0のパーフェクトピッチング。

勝負を見たい。確実に、この二人は怪物なのだから。

『ツースリー。フルカウントです』

『御幸くんはまた外へ構えました』

だが、ワインドアップモーションに入ると同時にミットが横にスライドする。

少し内側。ストライクゾーンギリギリいっぱい。

暴投か、サインミスか。

投げられた球が嘗て御幸のミットが構えられた場所へ向かう。

150キロ近い。御幸と言えども咄嗟に手を伸ばして捕るのは難しいが、やらないよ
りはマシ。

そう思う観客や解説の期待を裏切って、御幸は動かない。

ストライクゾーンギリギリから、動かない。

ホームベースに差し掛かり、突然そのストレートは動いた。

ピンポン玉の様に、減速すらせずに真横に加速しながら一瞬で滑る。

152。

バックネット裏、少し談笑していたスカウト八人の持ったスピードガンがそれぞれその速度を告げ、観客が静まり返り、実況も解説も何も言わない無音の時間。

エースの咆哮が、その時間を破った。

「ス、ストライク、バッターアウト！」

球審が告げ、途端に観客が沸く。

グラウンドが沸く。

全てが、未知のボールへの賞賛を送っていた。

『今のは……何なんでしょう？』

『高速スライダーでしょう。市大三校の真中くん、天久くんなどが使っている、球速のあるスライダーですが……曲がり方が違いますね』

それはない。一緒にしないでいただきたい。

そう言うかのように智巳はこの後しつかり三島を三振に切つて取る。

「ナイスボール」

「あれを使えば鎧袖一触。当たり前のことだ」

ベンチへ帰っても、まだ完全試合中。

片岡監督が少し言い難そうにしているのを見て、智巳は自分から声をかけた。

「8回からレフトに行つていいですか？」

「ああ。完全試合中の上に一試合最多奪三振の記録にも挑戦中だが——」

「これくらい、何なら次の登板でもやれますよ。個人の競技じゃないんですから、記録は別にどうでもいいです」

「……そうか。すまない」

「いえ、そもそも俺が連投できないのが原因ですし、気にしないでください」

一年生二人と前に投げた丹波、川上しか居なくなるのは怖い。

邪魔になる打撃力ではないから、一応レフトに回して雲行きが怪しくなったらリリーフで再登板させる。

その為の守備交代だった。

「8回からは降谷、お前が投げろ」

「……はい」

メラメラと鬨志を燃やし、降谷暁はオーラを放つ。

エースを目指しているのは、沢村と変わらない。

沢村に先を行かれて、智巳の背は見えないが、追うことに迷いはない。

「相手はバテてきている。次を勝つ為に、ここで取れるだけ点を取ってこい！」
ナイン全員が、応、と返事を返す。

真田俊平の弱点は単純なスタミナ不足と怪我によるスタミナ不足。

真田俊平、7回まで128球。

斉藤智巳、7回まで82球。

7回まで球数を投げさせることに徹した青道高校が、ここで一転攻勢に出た。

先頭打者の斉藤が内外野を棒立ちにするほどの飛距離と弾道でホームランをバツクスクリーンに叩き込み、八番白洲が三振で、九番降谷がヒットで一塁。

一番倉持が守備の粗さを狙ってバントを決め、小湊亮介が右打ちで進塁、結城哲也が伊佐敷の四球を挟んでタイムリー。

そして、御幸のフライでチェンジ。

2点追加し、6対0。

コールドには届かなかったが、敵のイケイケムードを冷やすに相応しい猛攻と言っていい。

『青道高校、選手の交代をお知らせいたします。レフトの降谷くんに代わり、斉藤智くん。ピッチャー、降谷くん』

次の打席は、増子から。次は斉藤だから、打てる奴をベンチに下げる意味もない。

大江戸シニア時代、味方からムエンゴやエラーに苦しんだこの男は、ホームランや一打サヨナラの場面に異様に強い。

と言うか、ホームランでサヨナラの場面はともかく、一打サヨナラの場面は逃したのを御幸は見たことがない。

次はサヨナラの場面である。たぶん沢村に場数を踏ませるために打たないだろうが、どうなのだろうか。

「降谷、低めに集めていくぞ。今回は縦スラ封印、稲実でのもしもの時の逃げ切りの為に手札を隠しておく」

「……わかりました」

打者に大きく見える程の圧力を持つストレートの降谷は、降谷暁のみが持つ独自の球。

沢村は徐々に加速していくようなストリート、智巳は手元で目から上に消えるようにホップしながら加速するストリート。

力で圧す降谷には降谷らしい、癖球を活かす沢村には沢村らしい、とにかく三振を積み上げる智巳には智巳らしいストレートを。

口で言うならば同じだが、投手によって投げる球は違う。

この回の先頭打者は、真田。既に疲労困憊の薬師のエイズ。

本来ならば強打者だが、下半身への疲労が原因でスイングが崩れていた。

外野前進でポテン封じ、三振狙いではなく打たせて取る。

ゴオオオツと唸りを上げて、重い球がミットに収まった。

(三者三様……)

巖のような降谷の球。

風を切る羽のような沢村の球。

気づけばミットにある、無音の智巳の球。

(この違いを楽しめるのが、捕手のいいところだよなあ……)

ナイスボールと言つて、投げ返す。

低めに決まつて、球威もある。全力の球威には劣るが、低めに集められるということ

は高めでいくから球威があつても変え難い魅力がある。

(次も、低め。細かいことは言わないから、ちゃんと高低守つて決めてこい)

沈む様に突き刺さる剛球に、真田のバットが空を切る。

(最後のコースは高めでいい。思いつきり腕降つて投げ込んでこいよ?)

ポーカーフェイスだが、燃えるようなオーラあつてわかりやすい。

本気で来る。

それがわかり、真田も疲れた身体を奮い立たせた。

どのみちここで誰かが打たなければ、轟雷市には回らない。

ならば、その誰かには自分になる。

そもそも、ここまで点差を広げられたのは自分が打たれたからなのだから。

だから、真田は懸命にバットを振った。

しかし、相手も怪物の卵。如何にストレートに強い真田と言えども、疲労があつては打てはしない。

『152キロ、空振り三振！』

『青道高校はやつと、今年になっていい投手が出てきましたね。彼の存在と、何より守護神の沢村くんの存在は大きいですよ』

守護神、公式戦・練習試合含めて18登板、18イニングス無失点。四死球2、被安打3、自責点0、失点も0。無論、防御率は0.00。

念願の点を取られない、終盤の得点調節のスコアラーではない抑えのスペシャリスト、守護神である。

その後、真田さえ抑えられれば降谷に対しての対策が情報量の関係上不十分な薬師打線が捉えられるわけもなく、あつさり二個の四球を挟んで五者凡退。

青道打線も増子・智巳がヒットを打ったところで二番手投手にスイッチした薬師を攻めきれず、サヨナラはならず。

九回表、青道は守護神をマウンドに送る。

防御率0.00 神話崩れず

『青道高校、選手の交代をお知らせいたします。レフトの斉藤智くに代わり、門田くん。キャッチャーの御幸くんに代わり、滝川くん。ピッチャーの降谷くんに代わり、沢村くん』

エースを下げた守備を固め、守護神をマウンドへ。

御幸は不安だからエースに残っていて欲しかったのだが、片岡鉄心としてはより合理的な判断をした。

御幸を下げる以上、斉藤を残していても最大の力を出せるわけでもないからあまり意味がない。

ならば万が一を避けるべきだ、と。

『九番ピッチャー、沢村くん』

二度コールされ、絶対的守護神はマウンドに上がる。

失点0、自責点も0、防御率も0。

抜群の安定感、初見殺し性能が素晴らしい。

更にはクリスとのバッテリーで実力以上の駆け引きができるのだ。

スライダー、ストレート、そしてフォーク。主力三球種を全て受け止められるのが御幸しかない智巳が、御幸（マグネットコーティング済み）の専用機と化している程の『絶対的』な組み合わせではないが、それに次ぐ。

性格的な相性もいいし、実力がまだまだで、なおかつ経験の浅い沢村の力を巧みに引き出せるのはクリスが一番なのだ。

何回目かになるが、御幸は一流を化物にできる稀有な捕手。化物と組んだらどうなるかは、この試合を見てももらえればわかるだろう。

クリスはその逆。経験の浅く、弱い投手を活かすことができる。

普遍的に見ればクリスの方が使える場面も広いし有用だが、組む相手によっては御幸が遥かに超える。

つくづく、面白い力関係である。

「打順は九番から。敵の勢いはあの二人が完全に殺したが、ここで打たれれば息を吹き返す恐れもある。それに、この打順だと確実に轟に回る」

「チーフが敬遠しようとした相手ですもんね」

「……いや、どうなんだろうな」

本人は敬遠しようって言ったのにこいつが勝負したんだよ、と言ったが、プライドの高い奴だということをクリスは知っている。

「でも、完全試合って言うすごい記録中だったんですよ？」

「そんなことはあの二人にはなんの意味も持たない。散々やってきたし、目的は勝利と
言うところで完全に合致している。勝つ為なら敬遠もする」

「よくわかりますね、師匠」

「性格がわかりやすいんだ。あの二人は」

勝つ為なら敬遠もするし三振も取る。

なぜ勝負するかと言えば、それは相手のチームの核を捻じ伏せて心を折り、勢いを殺す為。

「確実な勝利を得る為には？」と訊かれて、『相手の心を折ること』と即答する二人である。

「……まあ、あれで打たれていれば誤算だったろう。あいつらはゲームプランを一々用意して、完全に管制下に置いてる印象だが、割りとミスをするからな」

ただし、それを利用して誤魔化す。

チラリとホームベースを見て、クリスは少し早口気味に後の言葉を紡いだ。

そろそろ、戻らなくてはならない。

「このようなミスを犯さないために、敬遠はある。お前は嫌っているようだが、あれもなかなかいい戦法だぞ」

「ウツス！」

「ファーストストライク。腕を振り切る。俺から言うのはこれだけだ。後は、リードを見てその意味を自分なりに考えること。これを忘れるな」

「了解であります、師匠！」

——ガンガン打たせていくので、バックの皆さんよろしくお願いいたします！
クリスがホームベースに帰る途中で聴こえてきた大音声に、少し笑う。

（試合を作れるエース。それは唯一無二の物だが、お前は試合を決めるクローザー）
誰にでもなれるものではないんだぞ。

そう思っつて、ミットを構えた。

初球は、真ん中高めのやや甘めのムービング。

（こいつの最大の長所は、ビデオで見てもわかりにくいこと）

斉藤は素晴らしいピッチャーだ、とクリスは思う。

最速153キロの、空振りの取れるキレとノビを持つホップするストレート。

最速153キロの、追い込まれたら当てることすら困難な、使用率に比べて被打率が

異次元な魔球高速フォーク。

最速153キロの、結城哲也や自分を相手にして五度とも掠らせずらなかつた死神
じみた必殺球、高速スライダー。

わかりやすい強さ、である。これは如何にもエースらしい。そして決め球三つが等速と言うのもこの男の特徴で、見てみてすぐに凄いとわかる。

野球をしていなくても、これはヤバイとひと目でわかる凄さ。当然偵察班も、偵察班が撮ったビデオを見た相手もわかる。

しかし沢村は、打席に立ってみなければわからない。

リリース寸前まで見えない左腕、手元で動くムービング、傍から見ると普通にいい球としか見られないストレート。

(お前は気に食わないだろうが目に見えない凄さこそが、あいつにはないお前の武器)
甘い球としか思えないコースに、相手はすぐに手を出してしまう。

死んだ打球は、セカンド方向へ。

「お兄様!」

「わかってるよ」

沢村が呼び、いつもの通りの華麗な守備でファーストの結城が捕ってワンアウト。

秋葉も二球目に手を出し、ツーアウト。

ここまで三球でツーアウト。安定感が凄まじい。

(が、どうなるか)

次の打者は、轟雷市。

いつそ清々しい程の点差と、斉藤に粉碎されたことへの敗北感、三年生たちの夏を背負っていると言う重圧と期待から解放されたスラッガー。

自分のスイングを貫くことへの信念が、微塵もズレていない。

智巳が悪いよ智巳がー、と言うことになるが、額面上は2打点マイナス無失点なので2点のプラス、ということになっている。

最悪逃げてもいいが、前任者が三振、三振、三振と言う真っ向勝負を演じてしまったので、逃げ難い。

(勝負で行くぞ)

示したリードに、沢村の顔が輝く。

唯一の取り柄の制球が乱れ、まさかお前、真中が打たれたホームランが頭に残って……とかクリスに言われたりはしない。

他人が打たれたホームランでメンタルがガタガタになる程ヤワではないのだ。

まあそんな平行世界で沢村が打たれた後の川上のこととはどうでもいいから置いておいて、沢村である。

彼はメンタルが強かった。

(チーフが本気で行ったこいつに勝てば、また近づける……！)

と言う相変わらずのポジティブ思考。横浜の非公認顔文字も同志認定するほどのポ

ジティブっぷり。

端的に言つて、凄い。もうここまで来ると才能である。

(行きますよ、師匠！)

低めギリギリいっぱい、ムービングが決まった。

僅かに上に動いたその球は、ストライク。

勝負か、と。球場がざわめいた。

「ナイスボール」

「照れます！」

「……………」

緊張しているが、強張つてはいない。ほぼ理想的なコンディション。

追いかける背中を見ていて地面を見ていない。そんな感じだが、結果的にはいい感じなのでよしとしよう。

クリスはそう思い、ついでにこれからは無言でボールを投げることを決意してホームベースに座った。

二球目はボール球が轟のバットに当たり、ファール。

三球目。

(外にボール二個分外す、ボール球)

普段三球勝負の鬼を見続けている沢村はこの配球の狙いを掴みかねるが、従って投げる。

後で考えて、自分なりに答えを出す。

それが成長に繋がることを、割りと厳しい師匠とチーフに言われた沢村は知っていた。

ただ今は、あのミットに 대응することに集中する。

「ボール！」

轟も手を出さず、ボール。

ツーワン。未だ投手有利のカウント。

要求されたのは内角低めに外れるボール球。

轟が少し避けて、ツーツー。

並行カウント。

(外、低め。ストライクゾーンに掠る意識で)

そんな投げ分けは、青道投手陣の中では(部長曰く)低めの制球で一番の川上すらできない。

智巳は3つ目のストライクを取りに行く時限定でできる。

もちろん沢村もそれはできないが、もとより不規則に動くムービングボール。

多少クサイところに投げておけば、勝手に相手は手を出す。

鋭い当たりが一塁線を駆け、ギリギリファール。

轟は流石に、目を慣らしてきていた。

「……タイムをお願いします」

バッテリー間のタイムは制限がない。

クリスがマウンドへ上がり、沢村に話しかける。

「あいつは、眼を合わせてきている。次は打たれるだろう」

「でも、何か秘策が……」

「ない」

「え!?!」

「冗談だ」

常時とはいかないが基本的に表情に乏しいクリスの冗談は、わかりにくいことこの上ない。

「ここでタイムを取ったことを、相手はどう思うか。そして、極限までに『ムービングを捉えるために』研ぎ澄まされた集中力はどうなる?」

「打たれるくらいなら逃げようって、そう相談してる、と?」

「そうだ。集中力は?」

「途切れるんですか？」

「そうだ。しかし相手も怪物。すぐに復活させてくる。そこでボール球のムービングを投げ込み、『逃げている』と言うことと、『やはりムービングだ』と言う認識を植える」

復活した意識は、より強固になる。

なんだ、と思えば思う程に。

「一球外して、ストレートで決める。渾身の球を、投げ込んでこい」

「はいッ！」

「ただし、一球外す前に首を何回か振って、一球外した時に悔しげに地面でも蹴っておけ。」

あいにく俺は演技派ではないが、お前の目指すエースは演技派だ。実際使えるから、慣れておくんだな」

ムカついても顔に出さない。

動揺しても顔に出さない。

満塁の時でも、笑う。

顔に出すのは、味方を鼓舞する闘志と敵を押し折る余裕だけでいい。

「どう演技すれば!?!」

「悔しかったことを思い出せ」

「流石師匠、天才ですね！思いつきもしませんでした！」

「……………」

と言うことで、タイム解除。

ホームベースに戻り、大きく外す。

ここで沢村が、首を振った。

何回かこのやり取りがあつて、クリスがわざと再び立とうとすると、沢村はいかにもイヤイヤとした感じで頷く。

ちよつとわざとらしいが、割りと演技派である。
だが。

「演技派だな、あいつ。クリスさんも中々だ」

「演技とはまあ、中々あくどいな。まあ、勝つ為ならいいけど」

「そうだな。演技つてのは、自分が演技つて思わないレベルにまで浸透させなきゃいけないわけだし」

「おつ、智は言うね。流石は本職」

「お前もな」

このプロ二人には気づかれている。

沢村はマウンドでしかできないが、こいつらはマスコミ相手にやっているから場数

が違っていた。

とにかく、沢村。

一球大きく外して、ボールをクリスを見ずに受け取って地面を蹴る。

いかにも悔しげなそれである。

「わざとらしい。ひと目でわかる」

「わかる。大袈裟でそれっぽくない」

「モロバレ。稚拙過ぎじゃない？」

「あれが限界なんすよ。馬鹿ですし」

ベンチのエースが正捕手に、正捕手がエースに、グラウンドの二塁手が遊撃手に、遊撃手が二塁手に。

計四人が酷評する演技力は、少なくとも割と余裕がない薬師の面々は騙せた。

(最後は、ストレート。渾身の球を、投げ込んでこい)

綺麗なストレートは、バットをすり抜け、加速するようにミットに吸い込まれる。

この試合の沢村、一回を投げて1奪三振。被安打0。

防御率0.00 神話は終わらない。

邂逅

——完全試合中でしたが、何故降板したのですか？

——この先を勝ち抜く為、体力を温存していたかったからです。

——7回まで投げて、三振は20個。73年の江川卓の21個、34年の沢村栄治の23個、地方大会における1試合最多奪三振である25個の更新も視野に入っていましたか？

——勝ちより重いものではありません。チームの勝利が第一で、他はありません。

——個人記録に興味がないんですか？

——チームの勝利を目指すのが野球ですから、個人記録に興味があるなら他のスポーツをやっています。

——その勝利至上主義は誰かの影響を受けてのものですか？

——特に居ません。ですが、エースとはチームを勝たせてこそだと思っので。これは野球というスポーツで投手となつて以来、漠然と浮き出た感情です。

——最後に投げられた『ですが、今までに無いほど素晴らしいピッチングでした。完全試合も狙えたのでは？』

という質問に、『何なら甲子園の決勝戦でこれをやりますよ。後先考える必要がないのはこの一戦くらいですし』こう答えて、片岡監督が取材を打ち切つて終わった。

このように、今更なことを問われた智巳は、5日経つて仙泉を撃破し、桜沢対稲実を観戦している今もまだゲンナリとしていた。

「何でこう、個人の競技じゃないのに個人の記録の更新をさも偉業のように言うのか」

「誰にもできることじゃないからだろ」

「俺は別に100失点してゴミとか言われても勝てばいい。27個三振とつても、敗ければ終わりじゃないか」

「それがわかつてないんだろ。ピッチャーつてのは、得てして個人主義なところが多いし」

「俺は違う」

知つてるよ、と心の中で呟きながら、御幸はエースのカウンセリングに従事していた。

この上ない素晴らしいピッチングをしてこれほどムカムカしている奴を、他に知らない。

「まあ、次は稲実。仙泉では打者として活躍したんだから、次に備えて投手としてその真価を発揮できるようにがんばれよ」

「知っている」

もう、仕方ないんだからってな感じな寛容さでスルーできる御幸は女房役の鏡。

愚痴を聴き、才能を引き出し、脆い身体を労り、無茶ぶりに答え、リードを考え。

御幸は割りと苦勞していた。本人は苦勞と思っていないが。

「にしても轟。素晴らしいバッターだった。打ち取り甲斐があつたと言うもんだよ」

「フオークに当てられたのは去年の哲さん以来だもんな」

なお、対戦結果は3打席3三振。

まあ、相性が悪かったのだ。同学年であれば話は違っていただろうが、まだ轟はチー

ムスポーツとしての野球をはじめて数ヶ月。

イメージトレーニング、素振りは橋の下で行っていたが、まだまだ素人なのだ。あれ

で。

「末恐ろしいな」

「嬉しそうだな、智」

「ああ。楽しかった」

あ、機嫌直った。

御幸は思う。こいつは割りと気難しいと思いきや単純だと。

「三塁手と言うスラッガーのポジション、左打者、フルスイングながら率も残せるホームランバッター。叶うならまた対戦をしたい。あいつは面白かった」

この齊藤、ウキウキである。

強打者（を振じ伏せること）が好きなので当然とも言えた。

ひとまず改善された機嫌に胸を撫で下ろしながら、御幸は風呂に入った後特有の眠気と脱力感に苛まれながらブーツと背を伸ばす。

「お前、何も言わないけどさ。前回俺はお前のスライダーを初めて受け止められたわけよ。あ、本番でつてことな」

「……ああ、そうね。でもまあ、別にお前だったら出来てたことだと思うけど」
相変わらずの信頼に喜んでいいのか、悲しむべきか。

しかしまあ、その言葉に無言で頷いて、御幸はだらりと机に上半身を横たえた。

「これで稲実戦のリードが広がる」

今日戦った仙泉だが、相手エースの真木はフォークとスライダーとストレートを無くした智巳と言ったところである。

195センチの長身から繰り出されるカーブは一級品だが、所謂ドロントしたカーブ。これは智巳が投げる三種のカーブの内の一つと同等のクレだが、現三年生は何回か智巳と対戦した時にスライダーと合わせて思いつ切り狙い撃ちしていたものである。

何故ならストレートとフォークよか打ちやすいから。

齊藤智巳、194センチ。

真木洋介、195センチ。

斉藤智巳、制球はA。

真木洋介、制球はC。

斉藤智巳、スタミナは特A。

真木洋介、スタミナはB。

斉藤智巳、変化球は特A。

真木洋介、変化球はB。

斉藤智巳、将来性はD。

真木洋介、将来性はB。

地味に同学年のこの二人に対して下された結果がこれだった。

身長に関してはおもかく、将来性に関してはラスボスと主人公を比べるようなもので、完成度で劣るわけではない。

つまり、下位互換。

しかも丹波並みの一発病持ち。カーブピッチャーの宿命なのか。

まあ打てるだろ、と言うのが青道の総意だった。

現に、仙泉戦はあっさり斉藤智巳が扱いになれてきた木製バットでカーブを完璧に捉え、推定140メートル弾のプレイボールホームランで先制。

一回表に5点取り、5回に斉藤2ラン―結城2ラン―増子ソロの三本のホームランで5点追加。

エースとリリーフを休ませる為の丹波―川上のリレーで4失点したものの10対4で勝利した。

この夏、丹波と川上は二人仲良く初失点。無失点はリリーフコンビと、エースだけ。

「稲城戦。リードは頼むぞ、御幸」

「それを活かしてくれよ、エース」

西東京の両雄が、いよいよ激突する。

そして、六年ぶりの甲子園に行けるのか、行けないのか。

それも、たった3日後に決まる。

だがまあ、先ずは稲実がどう勝つか。それを見なければならぬ。

桜沢高校対稲城実業。

この二校の戦いを、あつさりとは仙泉を破って決勝進出を決めた青道ナインは見つめていた。

桜沢高校は、ナックルボーラーを中心に据えたワンマンチーム。特に野球部が有名な

わけでもない進学校の彼等がここまで来れたのは、そのエースが投げるナツクルと言うボールの稀少さ故。

ほぼ無回転でゆらゆらと揺れながら不規則に落ちる球は、ストレートの回転が死ぬから投げるなど言われたシュートとシンカー以外なら割りと全ての球種を投げられる智巳も投げられない。

桜沢高校のエースは立派だった。

ナツクルだけを磨き続けたのだろう。ランナーを出しても走られることなど気にも留めずにナツクルを投げ続ける。

ナツクルボーラーには、何よりも冷静な心が必要となる。冷静で、平静に投げなければただのスローボールになってしまうからだ。

欲を出さず、一歩ずつアウトを取る。そんな心構えと、ナツクルへの信頼。

ナツクル一つで敵を抑えられる代わりに、その代償も大きく、重い。

そんな彼を崩したのは、成宮鳴。

苦戦しながらも、打線の圧力に耐えながらも投げ抜くエースの心は負けなかったが、打撃陣が負けた。

その圧倒的な投球で、『勝てない』と言う意識を植え付けられた彼等は、エラーが伝染、腐ることなく投げ続けた桜沢のエースも、遂に力んでナツクルがただの棒球になり、

キャプテンの原田雅功にホームランが飛び出したのを皮切りに打線が爆発。 11対0で7回コールド。

ある意味、成宮の強さと稲実の強さを再確認する戦いぶりに、打撃陣は無言で一年前の記憶を思い出しながら席を後にした。

「あの桜沢のエースは立派だった」

少し余韻を楽しむように残った智巳と、何となく残っていた御幸と、チーフが残るならと残っていた沢村のみが、まだスタンド席に居る。

ポツリとそう漏らした智巳に、沢村は少し首を傾げた。

「チーフなら、『よく戦ったが、敗けたら意味はない』とか言いそうですけど」

「意味はない。が、立派なエースだった。俺ならばあそこまで立て続けにエラーをされれば三振を取りにいったことだろう。だが、最後までバツクを信じ抜いた。あれは俺にはできないことだ」

それ以外に道がないとしても、自分の力を恃む。自分にはそのような驕りがある。

「あー……チーフならできますもんね」

智巳は、なんだかんだで最後は御幸を頼る。

おい、三振を取らせろよ。

そう思って視線を前にやるに違いないのだ。

「沢村。お前には参考になるピッチングだったろう？」

鋭い眼差しで成宮のピッチング——ではなく、打線を見ていた御幸は、スポーツサングラスを外して少し目の端をほぐしたあと、沢村にそう声をかけた。

ナツクルと言う唯一無二の武器を頼りに打たせて取る桜沢。

ムービングと言う独自の武器を頼りに打たせて取る沢村。

ピッチングスタイルは、似通っている。

「いや、参考にするのはあくまでチーフのピッチング——」

打者を圧倒する球威を。

打者を絶望させる決め球を。

そして、闘志で味方を鼓舞する存在感を。

エースと言う物をはじめて見た、あの時に感じた味方としての高揚を、味方としての敗けないだろうという確信を与えられる、投手になりたい。

目指す山は高く、遠い。

だからこそ憧れているが、沢村にとってそれが視野が狭まることに繋がるならば必ずしも良いことではなかった。

飲み終わったペットボトルで軽く沢村の頭を叩きながら、智巳はゆっくり立ち上がる。

「視野を狭めるなよ。お前は俺にはなれないし、俺はお前にはなれない。目指すエースは一席だが、なにも俺にならなきゃエースになれないわけじゃないんだ」

「ぬう……」

何事かを考え出す沢村を他所に、もうそろそろ時間的にバスに戻らなければならない二人は纏めにかかる。

悩むのはいつでも、どこでも出来るのだ。

「ま、細かく考えずにやれることをやれつてことだよ。馬鹿なんだから」

「コラ御幸イ！」

「そうだな。あまり考え過ぎても自分にメダパニをかけることになりかねない。できることをやれ」

「チーフう!？」

後輩に二人で熱い声援を送り、御幸も釣られて席を立つ。

沢村も席を立つが、ここで問題が発生した。

沢村がトイレに行きたくなったのである。

そしてついでに智巳もペットボトルを捨てに行き、引率の御幸はトイレの前で待機。他のメンバーはもうバスの前で待っている。

(どうやって抑えるかというより、どうやって点を取るか、何だよな)

あの強力打線はミスさえしなければ何とかなるとしても、成宮鳴から点を取らなければ試合には勝てない。

「ここらへんはもう哲さんたち三年を頼るしかないかな、と。」

頼りになる先輩たちに思いを馳せていると、御幸は自分の名を呼ぶ声を聴いて横を向いた。

「御幸じゃねーか!」

そう呼ぶのは、成宮が稲実に最強のチームを作ろうとして招集したメンバーの一人・矢部。

眼鏡はかけていないが、今年や去年はヤベンチ君であった。

「あれ……お前って試合に出てたっけ?」

「悪かったな!スタメンじゃなくて!」

確信犯的にいじりつつ、後に続くそうそうたるメンバーを見る。

城南シニアの神谷カルロス俊樹、高平シニアの山岡陸、丸亀シニアの白河勝之、そして、成宮鳴。

二年前までシニアで戦ってきた、難敵たちがズラリである。

「お前ら、まだ帰ってなかったのか」

「エースと守護神が好き勝手に勝手してたんだよ」

カルロスの言葉に返した返事を聴けば誠に遺憾である、と言い出しかねない二人だが、現に御幸がこの五人に絡まれたのはあの二人の所為なのであながち間違いでない。

「明後日は当然、あいつが先発だろ？」

「ま、そうだな」

カルロスが問い、御幸が答える。

その答えた内容に、稲実の5人の顔が引き締まった。

一度撃破したとはいえ、リトル・シニア時代に一回も負けなかった無敵の男の恐怖は、まだ刻み付いている。

「まだ借りを返したとはいえねえからな。覚悟しとけて言つといてくれ」

「本人に言えば？」

「本人つて、ここに居ないだろ」

そしてなるべく会いたくはない。

会えば会っただけ、あの時の絶望感と屈辱を思い出すから。

「後ろ」

振り向いた先には、東都の怪物。

成宮よりも背が高い白河よりも背が高く、ブラジル人とのハーフのカルロスよりも背

の高い山岡よりも背が高い男が、軽く見下ろして立っている。

「成宮軍団御一行様、お揃いで何をしてるんだ？」

対斉藤で結束が深まっている。パーティの前に、その最大の敵が姿を現した。

その前に御幸を相手に余裕ぶっこいていた5人が怯む姿は、完全にラスボスであったと、実は御幸が絡まれた辺りからトイレの壁から顔だけ出して見ていた沢村は後に語る。

稲実戦まで、あと2日。

《青道》 決戦の前に

「稲実戦のスタメンを発表する」

片岡鉄心は、相変わらぬ強面のままでそう告げた。

時は稲実対桜沢の試合観戦をした日の夜。

心を整えさせる為に、早めの発表である。

発表されたスターティングメンバーは以下の通り。

一番ピッチャー、斉藤智巳。

二番セカンド、小湊亮介。

三番センター、伊佐敷純。

四番ファースト、結城哲也。

五番キャッチャー、御幸一也。

六番サード、増子透。

七番レフト、坂井一郎。

八番ライト、白洲健二郎。

九番ショート、倉持洋一。

投手を全員使って勝ちにいかねばならない都合上、守備に慣れてきた降谷はベンチ。

降谷に繋ぐこと、攻撃力のことも考え、甲子園まで日にちがあることから全力を出し切っている智巳は初めてとなる一番・ピッチャーとしての出場。

後続には丹波・沢村・降谷が控え、継投体勢も万全。

監督のスターティングメンバー発表を終えて、クリスと渡辺を中心に、ベンチ入りメンバーたちは再び集まった。

再生されているビデオは、桜沢高校戦。

チェンジアップは4球、フォークは3球、スライダーは7球。

かなりストレート主体の組み立てで戦っていた。

「成宮は本来変化球を軸に投げる。この投球は本来のものでは無いだろうが、それでも学ぶところはある」

左投手特有の対角線に右バッターの胸元に刳りこむクロスファイヤー。

スライダー、カーブ、チェンジアップ、フォークなどの多彩な変化球と、140キロ後半のストレート。

嘗ては立ち上がりの悪さもムラもあったが、最近一年でそれは改善されつつある。

ビデオを見て、渡辺の解説を聞いて、この日は解散した。

そして一夜明け、明日が稲実戦だということもあり、相当なプレッシャーの中、智巳は次の日の練習に顔を出した。

完全に調整モードに入っているから、投げ込みなどは控えめ。

軽く走り込み、軽く立ち投げして、バットを振って配球と敵のデータを頭に入れる。その準備運動を終えて学校周りを走っている最中に、智巳は横目にデカイ車を見た。

青道に続く坂道を、一路走ってきている。

青道高校の周りは野球部のランニングコースであることもあってあまり車が闊歩している印象は無いのだが、この坂道は例外的に車道専用のような空気がある。

またOBかな、と思つて軽く一礼して先を急ごうと思つた彼を、聞き覚えのある声が呼び止めた。

「おう、智巳やないか!」

「あ。東さん」

「おう、せやで」

「今夏ですから、オフじゃないですよ。何故ここに?」

試合はどうしたんですか、と言いたくなる。

現在東清国が所属する横浜ベイスターズは最下位。

8月の時点でチームでホームランを二桁打っているのが東清国とアレックス・ラミレ

スだけと言うアレっぷりで、沈んでいる。

「……………まあ、色々あつてな」

「故障ですか？」

「ちやうわ！増量し過ぎたんで、痩せろ言われて二軍に居んねん」

打率は2割6分5厘、本塁打11、打点46。

新人として打率1割代の小池に代わって一塁を守り、学生時代のサードとは違うもの
のなんとかこなしていたのだ。

「新人王狙えたのに、残念ですね…………」

「まあ、新人王には広島の野村さんあたりがなるやろ。新人王の夢は結城とお前に託す
わ」

「え……………哲さんはともかく、俺はプロになれるかも定かではないんですが」

因みに結城は新人として3割1分2厘、15本、70打点の好成績を残すも、則本（1
6勝5敗）に敗れて新人王ならず。

ファンから現役17年目とか言われる智巳（18）は、ほぼ唯一の尊敬する人物が居
る福岡ソフトバンクホークスと、ファンである東北楽天イーグルスを希望するが楽天に
は指名してもらえず、第二候補のオリックスはくじで負けると言う経緯で10球団競合
の末高卒でプロ入り。

背番号はエースの後釜の66。

エースの摂津の不調の為、去年の楽天が期待の新人・則本に開幕投手を任せたことに倣って開幕投手を任せられ、無四球、1エラー、被安打2、15奪三振でデビュー。

そのまま勝ち続け、防御率0.96、22登板、20勝、222奪三振、10完封の成績で先発のタイトルを総ナメし、新人としては四人目の投手四冠と沢村賞のタイトルを取り、新人王になる。

ここまで化け物じみた新人は上原以来と言われ、ドラフトで獲りにいかなかった楽天が叩かれるのだが、それは後の話。

防御率、勝率的には研究されていない一年目がキャリアハイな男である。

それにしても、片岡鉄心の教育はすごい。

東清国、ドラフト三位。一年目最終成績は飛ばないボールで2割5分4厘、13本、62打点。

結城哲也、ドラフト一位。一年目最終成績は普通のボールで3割1分2厘、15本、70打点。

斉藤智巳、ドラフト一位。普通のボールで一年目最終成績は防御率0.96、20勝0敗、222奪三振。

御幸一也、ドラフト二位。普通のボールで2割7分5厘、8本、96打点。

上位指名を立て続けに四人出すのだから、六年間甲子園に行けない監督としての手腕が疑問視されても、教育者としては良いのではないか。そんな気もする。

だが、真価を発揮するのが来年の末からということを考えて、校長と教頭の判断も早いと言いはるのかもしれない。

「アホ抜かせ。ウチの中堅よりよっぽどええピッチングするって、スカウトさんがごぼしとったわ」

「相手が学生ですからね。プロはまた、桁が違いますよ」

そんな未来を、この二人は知らない。

東が車の窓から腕と顔を出しながら、智巳はこの人と甲子園に行けなかったのだ、という少しの罪悪感を抱えながら路上から見上げる。

「と。そう言えば東さんは何故ここに？」

「おう、答えてなかったか。ドリンクとかを色々届けに来たんや。今できることは、これくらいやからな」

厳つい外見、誤解されがちな言動から、この良い人発言。

ドリンクやクローラーボックスなど、様々な物が積み重ねられている後部座席を肘を軽く後ろに引きながら指す。

「乗ってくか？」

「走って付いていきますよ。そんなにスピード出さないでしょう?」
「まあな」

運転免許を取ったばかりだからというよりは、ランニングコースであるから遠慮気味に走るだけ。

学校にと言うより、寮の前に止めて後部座席のドリンクや何やらを二人で運び出す。

「お前、また背え伸びたんちゃうか?」

「ええ。194になりましたよ」

背丈が1センチの差しか無いと、はつきり言つて高い方はその差に気づかない。どちらかと言えば低い方が若干見下されていることに気づく。

「お前ホンマによう伸びるのお。恵体つてやつやな」

「父親譲りらしいですよ」

「ほお……こつちも父親はデカいけど、ここで打ち止めのような気がするわ」

「背なんか放つておいても伸びますよ。あんまり気にしてもどうにもなりませんし」

雑談しながら、元四番とエースが荷運び。

後輩にやらせろよとOBは思うが、元四番はそもそも練習している人間を扱き使う気はなく、智巳も自分でやれることは自分でやる主義。

マネージャーの助力も『こう言うのは男がやりますので』と断り、なんとなくその思

想に乗せられた東清国と斉藤智巳は黙々と運ぶ。

「次は稲実戦か」

「ええ。仇は討ちますよ」

「あのな、智巳。ようやくの雪辱の機会って思うより、ちゃんと試合を楽しめや」

出た長打は結城の二塁打のみ。他は散発7安打。

圧倒的な無援護で、1点すら取れなかった。それが、前回の稲実戦。

そう責任を感じることはない。

そう言い聞かし切れずに、東清国はこの学校を去ってしまった。

そのことが、心残りになっている。

このメンタル面が完璧なエースの、唯一の傷。それがあのサヨナラ負け。

「それはできませんね。これまでと、これからでは訳が違いますから」

「何でや?」

「エースって言うのは、ここその場面で勝つてこそなんですよ。俺はまだ、その点においてはエースではない。そしてここその場面こそ、次の一戦」

絶対に勝ちますよ、と。不敵に笑いながら、ドリンクをベンチに置いた後に智巳は右拳を突き出した。

「暫定エースを信じてください。抱えるだけ抱えて、それでも平然とするのがエースで

す

「ハツ、ホンマによく言うわ」

コツン、と。

軽く拳をぶつけ合つて、東清国は呵呵大笑する。

心が強い。そう言うのは簡単だが、そう表すに相応しい人間がどれだけいることか。

「ワシらの果たせなかつた夢も、抱えられるんか、おい？」

「もう抱えてますよ。重かつたですが、この通り身体は大きいので案外と抱えられれば持つていくのは楽でした」

「ホンマ、よう言うわ。なあ、哲！」

えッ、と。

思わず振り向くと、すぐ近くに結城哲也が居た。

「こんな後輩が居つて頼もしいやろ？」

「頼もしいですね。投げてなくともいい。智巳が居るだけで、皆どこか安心できる」
自分たちの後ろにはエースが居る。

エースに任せれば、点を取られることはない。

このエースが投げていれば、敗けることはない。

その絶対的な存在感。ここぞを任せられる安心感。

それが、打線の爆発に繋がっている。

後ろを気にすることは無い。自分たちが打てば勝てる。やれることはシンプルで、憂いがないのだから余計に強い。

「ですが、甘える気はありません。必ず成宮を打ち崩し、俺達が甲子園に行きます」
尊敬する先輩に声を掛け、結城哲也は改めてエースに向き直った。

一年前。ちょうど今頃。

このエースはマウンドに片膝をついて斃れ、自分はファーストでそれを見ることしかできなかった。

「前に俺たちは一点も取ってやれなかった。だが、約束しよう」

セカンド小湊亮介は、僅かに逸れた送球に悔いを顕わにし。

サードの増子はベンチであの圧倒的な強さを誇る後輩が敗けたことを信じられずに呆然とし。

センターの伊佐敷もベンチで無意識的に漠然と『アイツは敗けない』と思っていたことに気づいて尚更愕然として。

そして、現三年生は今に至る。

再び決勝へと進んだ、今へ。

泣いても笑っても、次の試合で全てが決まる。

「——必ず、お前を援護する。見殺しにはしない。だから、お前はお前のやるべきことをやれ。気負い過ぎるな。お前の荷の半分なら、主将の俺が背負ってやる」

この一言は、皆の総意。

「マウンドに立つのはお前しか居ないが、グラウンドにはあと八人居る」

頼れ、でも。

信じろ、でもない。

頼られているし、信じられてもいるから、それがわかるからそんなことは言わない。

「俺たちに任せろ。必ず点を取ってやる。必ず、お前を勝たせてやる。二度とお前を敗戦投手なんかさせやしない」

1日後。

先攻、青道高校。後攻、稲城実業。

夢の舞台へのただ一枚の切符を手に入れる為に、西東京の強豪同士が激突する。

熱い夏が終わるのか、それともはじまるのか。

むしつとする気温の中、青道ナインは来たるべき決戦に向けて最終調整に勤しんでいた。

「チーフ！そんなところで荷運びしてるならこの不肖沢村めのムービングの制御を——」

だが、そんなところにやってくる、馬鹿が一人。

沢村栄純。嘗て見学に来た時、東清国を三振に打ち取った男である。

「あつ」

「あつ」

「ああ……」

お互いに嫌あな記憶を蘇らせる沢村と東、何かを察する智巳。

そう言えばこの二人のいざこざを御幸が遠い昔に言っていた気もする。

「おいおい……お前あん時のクソガキやないかい」

「チーフ、実はこの沢村カットボールを——」

「無視すんなやガキイ！」

173センチと割りと身長はある方な沢村だが、ここに居る三人は194（エース）／193（元主砲）／180（キャプテン）の三人。

こう並べられると貫禄がある。

だがその中で一番面積が広いぶん威圧感がすごい東を華麗に無視するあたり、肝が太い。

「かつてこの沢村栄純が完膚なきまでに。」

完膚なきまでに！完膚なきまでに叩きのめしたメタボリック先輩！」

「メタツ……喧嘩売つとんのかクソガキヤー!？」

元気な二人が元気に喧嘩しているのを傍目に見て、智巳は取り敢えず蚊帳の外になつた尊敬する先輩に目をやる。

結城哲也は、暇そうではあつた。

「哲さん、今休憩中ですか？」

「ああ。指すか？」

「指しましょう、指しましょう」

《稲実》決戦の前に

稲城実業は高校野球に、そして勿論のことながら西東京に君臨する強豪である。

絶対的エース成宮鳴を筆頭に、彼が最強のチームを作る為、斉藤に勝つ為に集めてきたシニアの名選手たちを抱えるが故の層の厚さ。

そんな彼等が決勝で相手にするのは、青道高校。先発三本柱と鉄壁のリリーフ陣、強力打線を擁する西東京の大本命。

丹波が17回投げて被安打18、5四球、9奪三振、2失点。

川上が7回投げて被安打10、2四球、4奪三振、2失点。

斉藤が7回投げて被安打0、無四球、20奪三振、無失点。

先発三本柱はこんな感じ。割りと安定していると言える。

チーム打率は4割を超え、これまで総得点は弱小校から50点くらい稼いだとはいえない83点。

ホームランを5本以上打った奴が斉藤・結城の二人と、ホームランで点を取るよりはどちらかと言えばマシンガン打線のように長打と単打で攻めるチーム。

一番斉藤は何だかんだ（6併殺）あるが、4割8分打っており7本と長打もある、小

湊亮介もよく四球を選ぶおかげで安打こそ劣るものの4割打者。伊佐敷は犠打が多く3割だが、結城は6割7分、8本、5盗塁。自軍のエースと一打席勝負をし続けて磨かれた四番の鑑の如き成績を残している。

五番御幸は3割7分だが、得点圏打率は8割超。チャンスでしか打っていないと言われてもおかしくない。

目立たないが4割を打っている白洲が八番、3割打つ倉持が九番というあたりに、恐ろしさが垣間見える。

盗塁も倉持が6、小湊亮介が5、結城が5、白洲が3、智巳が2と、悪くはない。

そして何より、守備が若干ながら改善された智巳の穴が埋まって、無失策。

投手陣もチーム防御率1点代と素晴らしく、稲実戦に登板する予定の二人だけなら0.00。被安打も0。

絶対的エースこそ居るものの、極めて安定した守護神・鉄壁の守備・止まらない打線は港男の血がうづくようなチームだと言える。

弱点は、長距離砲が智巳と結城、増子しか居ないこと。次の代に残るのはたった一人。御幸は長距離砲だが、適性打順は五番であるというのが専らの噂。

片岡監督も、次の打線は一番シヨート倉持、二番ライト白洲、三番セカンド小湊春市、四番センター斉藤、五番キャッチャー御幸までは決めている。

何で守備クソをセンターに置くかと言えば、斉藤はフェンスに突っ込んででも取るタイプで（現にフェンスから身を乗り出して二回ほど打球を取っている）、脚もあるし肩も強いからである。

技術に関しては伊佐敷に継承してもらおう予定だった。

閑話休題。

一方、稲実も総得点は63点と、決して侮れないチーム。安打を集中して攻める青道ほど華がないが、バントや盗塁でランナーを進め、スクイズで返すなど堅実さがある。

チーム打率は3割後半。

一番センター・カルロスは俊足巧打好守備と、走攻守が極めて高い水準で纏まったプレイヤー。長打もある。

シニアでは当然の様に主軸を務めていたが、いつもの如く例の二人にしてやられていた。

二番ショート・白河は小湊亮介より若干低い守備と同等のバットコントロールを持つ、またも三拍子揃ったプレイヤー。

クリスと同じ丸亀シニアに所属していたが、いつもの如く例の二人にしてやられていた。

三番サード・吉沢は長打力と選球眼に優れたクリーンナップの切り込み役。

彼はシニア出身ではないが、かなり成長した大砲である。

四番キヤツチャー・原田は、怖い。結城哲也程では無いが、ここぞと言う場面に強いのだ。

チャンスに強いとか、サヨナラに強いのではない。

ここで打つてくれ、という場面に強い。

五番ピツチャー・成宮は、クリーンナップを務めるだけあつてその矮躯に似合わないパワーがある。

と言うよりは、金属バットを使うのがうまいのだ。巧く当てている。

シニア出身で、いつもの如く例の二人にしてやられていた。

六番ファースト・山岡には一発がある。

彼は矢部と同じシニア出身で、通算対戦成績は無安打。完全にあの二人にしてやられていた。

七番セカンド平井、八番レフト梵九番ライト富士川は、智己が苦手とする弱い打者だが、その代わり守備はいい。

そして、投手は二人。井口と成宮。

井口は丹波さんと川上を足しても足りないくらいの能力を持つ、普通にエースクラスの実力者。

そして、成宮鳴。関東ナンバーワン左腕。

スライダー、フォーク、カーブのどこかで見たような方向の三球種と、決め球のスクリー気味に落ちるチェンジアップこと、サークルチェンジ。

縦横斜めに緩急と、お手本のような投手である。

立ち上がりが完璧な智巳と比較して立ち上がりが不安定だが、智巳にはない尻上がりに良くなる傾向があった。

彼もシニア出身で、シニア時代は何回も投げあつて一度も勝てていなかった。対戦成績も無安打。完全にしてやられていたと言つていい。

しかしこれまで、25イニング投げて無失点。

井口も13イニング無失点。一回も点を取られたことがない投手陣で、青道打線を迎え撃つ。

打撃の青道、投手の稲実と言つていい。

シニアの時。

勇者・成宮、モンク・カルロス、シーフ・白河、戦士・山岡対魔王斉藤&参謀御幸の戦いは各個撃破で歯牙にもかけられなかったが、ここに壁役の原田と賢者・職業監督国友を加えて魔王（第一形態）は倒された。

しかし、今や第三形態。『前回勝てたから』とか言つて油断することは全くできない。

「まず、相手のエース斉藤の球種は豊富です。斜めに落ちるスライダー、カットボール、カーブ、スローカーブ、ドロップカーブ、高速フォーク、チェンジアップ。これが前回のデータです。」

「ですが、関東大会で2つ、薬師戦で2つの新球種を見せました」

「小さなシュート、小さなシンカー。」

「そして、高速スライダーと縦に曲がる遅いカーブ。」

「小さなシュートと小さなシンカーは関東大会以来未使用で、高速スライダーと縦に曲がる遅いカーブは薬師で初出。」

「まずは、スライダー。これは投げられなくなったのではと言われていますが、定かではないです。平均球速は130キロ代で、曲がり幅は大きいもののキレが他に比べてありませんでした。今年の春にぶつかった場合、突破口にしようとしていた球ですね」

「三年生ながらその観察眼を買われてスコアラを務めている元投手の丸瀬は、些か悔しげにスライダーを語った。」

「突破口扱いだが、並のピッチャーでは正直キレも精度も遠く及ばない。」

「あくまでも当社比のようなものだ。」

「次は、カットボールです。薬師の真田も投げていましたが、両者のカットボールは全く違います」

「空振りを取れるか、取れないかか」

何回も見ていたのだろう。

キャプテンで正捕手の原田が、間髪入れずにその違いを指摘した。

真田のカットボールは智巳のそれより小さく変化する。

智巳のカットボールは真田より若干深い場所で、大きく曲がる。

「ええ。これはスライダーが使えなくなつたと言われてからキレや変化量が増したのですが、球速は最速153から149キロ。ホームベースの前で曲がりはじめ、約18センチから約16センチほどほんの僅かに斜め気味に落ちながら横に変化する球で、空振り・ゴロなどを狙えます」

「俺だつたら、これを主軸に組み立てるな。なぜ頻繁に使わないのかがわからないほど、使い勝手のいい球だ」

だが、御幸はあまり使わない。

変化球軸な原田雅功とは違い、ストレート軸なのである。

単純に三振を取るのが好きだ、という事もあるが。

「雅さんはそうだろうけど、一也は軸はカットボールにしないし、智もあんまり使わないよ」

成宮鳴は、片肘突きながらビデオを見て、その合間に原田の疑問に答える。

「あいつ、カットボール投げるの苦手だもん」

「……苦手？」

「苦手って言うか、この動画だと打ち取って終わりでも投げないからわかんないけど、十数分単位で間を開けないとストレートの切り方が甘くなるんだって。ゼロコンマ何秒の世界から引き戻されるから、イヤなんだと」

「苦手であの変化なのかよ、と言いたげな原田の言葉に答えた彼は現在はラインでしか繋がっていないが腐れ縁に近い。」

「だから、知っている。」

「じゃあ、カットボールを投げたあとのストレートは狙いめってことかよ？」

「関東大会見たでしょ。カッター投げた後に、強打者相手にストレートなんか投げないよ」

「カルロスの言葉を、成宮はバツサリと切り落としながら答えた。」

「小さく変化するシュート&シンカー。」

「これとカーブで指の感覚をリセットしているのだと、成宮は言う。」

「一也はあれでも献身的なところあるから、あのツインポップみたいに多彩な持ち球の組み合わせを把握してるんだよ」

「よく知ってるな、お前」

「腐れ縁だし?」

と言うが、これは憶測に過ぎなかった。

御幸も智巳もそんなに脇は甘くない。キチンとピッチングを見て、その傾向から弾き出したのである、

そしてそれは合っていた。

「次!」

「そうですね。次はカーブですが、これは殆ど投げません。投げられるし、前回投げたと言っただけのシロモノです。縦のカーブを含め、カーブ系球種を斉藤は決め球にしません」

続いて彼はスローカーブに絡めて遅い球の解説に入った。

スローカーブは最速121キロ、最も遅くて108キロ。彼の最速は153キロのフオーク、同じく153キロ高速スライダー、153ストレート。最大45キロの差が生まれる。

これを挟み込んで、薬師の二巡目はストレートでの見逃し三振の山を築かれた。

同じような球に、チェンジアップ。

これは110キロから108キロをさまよう球で、負担の少なさからかなり要所要所でカウントを取りに使われる。

この2つの球は前後との組み立てが厄介なだけでそれ自体は大した球ではないので、狙ってみるのも手だ、と。

しかし、150をポンポン投げってくる奴の遅い球を狙い打つのはそうと決めても難しいのだ。

何故なら速い球を見てしまっているから。

「次に、ストレート系です。そもそもストレート系と言っても小さなシユート&シンカーが打たせて取る球、残り3つは全て真つ直ぐに分類されます。明言はできず、感覚的な表現になります。普通のホップするストレートと、球威に重きを置いたストレートと、空振りを取る為にキレに重きを置いた快速球。打者は球の下を振っている印象がありますから、気持ち上を叩けば当てやすいのではないでしょうか」

そして、最後。

謎のカーブ系と、決め球2つである。

「遅いカーブが、ドロンと橋のように縦にアーチをかいミットに収まっているのがわかると思いますが、これが新しい球です。スロードロップカーブとでも言うこの球は、112キロ。急に落ちるフォークやある程度すらりと落ちる縦のカーブとは違い、緩やかに、雨が滴り落ちるような形で落ちてきます」

一球しかない投げている場面を再生しながら、スコアラの彼は言う。

カーブ系は（比較的）大したことはないと言う事前情報を覆す球である。

何だ今の球、というのがその球を見た稲実メンバの感想だった。

凄いというのではなく、笑ってしまう程おかしな球。

「この球は何故か多投してきませんでした、投げられれば厄介な球であることは間違いないありません」

後は、2つの決め球。

高速フォークと、高速スライダー。

「高速フォークについては前回も研究したように、球数が三桁に載つてもすつぽ抜けることこそありませんが、落差はそれ程でもなくなります。如何に多投させるかが、勝利の肝です」

「結局打ててなかったけどね」

カルロス、山岡、白河などの打撃陣が、成宮の言葉にピクリと反応する。

あの時は打てなかったし今までも打てていないが、これからは打つ自信はあるのだ。

根拠は無いが、甲子園を経験して強くなった自負がある。

現にその自負は間違っていないのだが、相手も成長していないわけではない。

「最後に、高速スライダーです。これは真横に加速しながら曲がるスライダーで、ほぼ斜めに沈みません。ピンポン玉みたいな変化は、元ヤクルトの伊藤智仁氏の投げた物とほ

ぼ同一視されています」

そうやって開いたのは、動画サイト。

案外とこのような場に拾い物はあるもので、撮ってはいたものの画質があまりよろしくなかった稲実側としては嬉しい誤算だった。

「ここに、一部有志による比較動画が上がっています。違いは球速が8キロから10キロ速いことくらいで、曲がり方・曲がり幅は氏が故障する前、バルセロナ五輪時に投げていた球と同一と考えてしまっても問題はありませぬ」

知らない者も居たが、動画サイトに上げられた動画を見るにそのちよつと異常な変化はわかる。

「関節が柔らかい特異体質だからこそ投げられる球だそうで、これまたあまり投げては来ていませんでしたが、ウチとの戦いでは決め球の一つになるのではないのでしょうか」
めんどくさい程に完成度が高い割りにはそれほど使われないカットボールなどのサブが右脇を、緩急を取る為の三球種が左脇を、そしてストレートが土台となり、高速フォークと高速スライダーを決め球に。

速球派に見せて割りと変化球が多い男だけに、こう言った武器集めには余念がない。

全球種まとめの動画を食い入る様に見ながら、稲実ナインは沈黙していた。

一度は斃した男は、知らなかった敗けを知って更に強くなつて帰つてきた。そのことが、わかる。

「雅さん、あのスライダー打てる？」

「俺はあのスライダーを捕れないだろう。と言うよりも、あの球は天才でも初見では捕れん。つまりそれは打てないということだ。

キャッチャーが捕れない球を、打者は打てない」

だから、早いカウントから叩く。

そう原田雅功は言い切つた。

その言葉に、今まで沈黙を守つていた国友監督が口を開く。

「追い込まれればフォークとストリートに絞る。それ以前は狙つた球を打つ。これを一人一人が実践することだ。狙い球を各自決めておけ。攻撃は三巡目から。それまでは膠着状態に持ち込む」

化けの皮が剥がれていないとはいへ、後続はイニング限定の二人。延長に持ち込めば、必ず勝てる。

円陣

ゼロが続く、スコアボード。

二個灯った、紅いランプ。

塁上を賑わす二人の走者。

マウンドには自分が居て、ホームベースには御幸が居る。

ファーストには結城、セカンドには小湊、サードには東。

忘れもしない、あの時の記憶。

西東京大会の決勝と準決勝は、東京ヤクルトスワローズの本拠地・明治神宮球場で行われる。

奇しくもではない。必然的に同じ場所。

あの時と同じくレフト方向に、緩い風が吹いている。

球場は何故かスワローズファンが詰めかけ、いつものように福岡あたりからも来る者が後を絶たない。

既に高野連が気を利かせてはじまった異例の事前予約は満杯、球場も満員。現地売りのチケットも売り切れ。

チケツト会社を通す為に利益は減るが、高校野球の発展の為に利益を犠牲にしたチケツトの事前予約制は、既に量でその穴埋めをできていた。

青道高校対稲城実業。

西東京大会決勝戦、一年前の甲子園で名を馳せた無敵無敗を破った新星・成宮鳴。

中学時代から無敵を誇り、その投球フォームと高速フォーク、溢れ出る闘志で固定ファンを獲得した東都の怪物・斉藤智巳。

共に同年代で、エース。

95年世代と呼ばれる彼等は、既に大学の投手ビッグスリーと野手ビッグスリーと並んでドラフトの候補にも挙げられている。

スター同士の戦い。世代ナンバーワン右腕と、世代ナンバーワン左腕。

静かに待つ稲城ベンチとは

「俺たちは誰だ？」

青道のベンチの前で円陣を組んだ青道ナインをゆっくりと見回し、結城哲也は静かに声を発する。

今ままであまり行ってこなかったのは、この時の為。

前回阻まれた壁を破壊してこそ、成長を見せることができる。

「王者青道!!」

前回阻まれた壁を破壊して、今度こそ王者となる。

その気概が感じられる返事に、結城は思わず微笑んだ。

「誰よりも汗を流したのは！」

あの敗戦以来、夏終わり、冬、夏前と、地獄の合宿を3つ乗り越えてきた。

丹波は打たれ強さとピンチでの粘りを。

倉持は、悪球を見逃せる選球眼の良さを。

小湊亮介は、逸れた送球を悔いて鍛え抜いた更に鉄壁の守備を。

伊佐敷純は、パンチ力のある打力と決して逸れることのないストライク送球を。

御幸はどんな球をも逸らさない完璧な守備と、満塁時のみならず好機を逃さない勝負

強さを。

増子は一発だけではない、コンスタントに結果を出せる打撃の確実性を。

白洲は、全体的に極めてバランスのいい堅実さを。

降谷は、崩れがちだった中継ぎの再建を。

沢村は、終盤の安定感と明るいムードを。

結城は四番と主将と言う重責を担うに相応しい打撃と、精神的支柱としての絶対的な

貫禄を。

斉藤は、味方にはここぞと言う時を全幅の信頼と共に任せられる信頼感と、敵には心

を押し折る絶望感を。

「青道!!」

「誰よりも涙を流したのは!」

「青道!!」

「誰よりも野球を愛しているのは」

「青道!!」

「戦う準備はできているか!?!」

「おおお!」

「わが校の誇りを胸に狙うは全国制覇のみ——」

円陣のシメを、結城哲也がいつにない思い込めて、腹から声を吐き出した。

「いくぞお!!」

「おおおおおお!」

全力で声を出し、ナインが吼える。

『さあ、西東京大会決勝戦、青道高校対稲城実業高校。プレイボールです。』

青道高校の先発は、エースの斉藤智くん。稲城実業の先発は、エースの成宮くん

マウンドには、成宮鳴。一点も取れなかった嘗ての難敵。

『一回の表、青道高校の攻撃は一番ピッチャー、斉藤智くん』

ウグイス嬢がコールし、長身のエースが打席に立つ。

一番ピッチャーと言う、一番負担のかかるポジションに、この男は抜擢された。

片岡鉄心が示したのは、この試合で全てを出し切れという意味。

全てを使って勝ちに行くという、鋼の決意。

(まだ、去年から時は動いていないんだ)

ここで打って、ここで勝って、ゼロへと歩みを進めたい。

だがそれは、成宮鳴も同じこと。

スクイズを読んでいながら暴投してしまい、三年生の夏を自分が終わらせてしまった。

(夏が終わっていないのは、こっちも同じ——)

超えられなかった壁を超えて行った先の世界で、自分は簡単なミスで敗けてしまった。

(お前を打ち取って、この戦いを気持ちよくはじめさせてもらおうよ)

1球目は、ストリート。

アウトローギリギリに決まった球は、ストライク。

攻める気持ちだが、前に出ている。

いい球だと、初球を受けた原田は思った。

成宮の弱点である、立ち上がりの悪さ。それが確実に解消されている。

2 球目、カーブが外れてボール。

3 球目。スライダーをファールにし、ツーストライクワンボール。

4 球目は、ストレート。

高めに外れる球。

木製バットの弱点は、ミートポイントが狭いこと。才能と勘の鋭さ、弛まぬ努力で完全に使いこなしている。

ホームランも轟を超え、結城に次ぐ西東京大会ホームランダービー2位。

しかし、木製は木製。ボール球を打って、ヒットになる程のバットコントロールは持ち合わせていないはず。

(斉藤の怖さは、変化球であろうがゾーンに入ってきた球をほぼ打てる反応の良さ、当たれば飛ぶ身体能力に任せたパワー)

ボール気味の球を引っ掛けさせる。三振は少ない男だけに、三振を奪うのはかなり難しい。

(四球でもない、ヒットにさせるな。先頭打者としてこいつが出た場合、かなりの確率でビックイニングが起こる)

ここを切って、勢いに乗れ。

そう言っている原田の意図を汲み取って、成宮はここでプライドを捨てた。投手に使うなんて冗談じゃない。

その拘りを、あいつにだけは、負けたくない。

この思いが上回った。

(チェンジアップ——)

智巳がそう気づいた時には、遅い。彼は速球にも変化球にも対応できるが緩急に弱い。

大抵のことに対応できる下半身の強靱な粘りもこれは流石にカバーできず、完全に体勢は崩された。

『三振——！併殺こそ多いもののこの大会屈指の右打者から、あつさりと三振を奪いました！』

悔しさを顕にして打席を去る智巳は、ネクストバッタースークルから打席へ進む小湊亮介に声をかけた。

「チェンジアップって言うより、サークルチェンジみたいな感じですよ。スクリュー気味に沈んできます」

その言葉を受けて、小湊亮介は打席に立った。

1球目、ストリート。

(相手はこの打線の中でも屈指の厄介さを誇る打者だ。油断するなよ、鳴)
(わかっているよ、雅さん)

幸先よくファーストストライクをとったものの、油断は全くできない。

(勝つ為には、1点もやれないんだからさ)

カーブでカウントを稼ぎ、フォークを低めに外して、クロスファイヤーでファーストゴロに切つて取る。

続く伊佐敷もセカンドゴロに打ち取り、三者凡退。

『やはりこの左腕は別格と言つていいでしょう。青道打線を初回から三者凡退に仕留めたのは成宮くんが初めてとなります』

チームメイトのよくやったと言う賞賛の声に少し照れ気味になりながらも無然と返す成宮を他所に、青道ベンチでは。

「斉藤、この一戦は投手戦になるだろう」

「覚悟はしてますよ」

成宮が相手だから仕方ないと、ある意味智己は割り切っている。

現にあのサークルチェンジを、自分は打てなかつたのだ。あの球を低めに決められればまず打てない。

片岡鉄心の真剣な眼差しを受けて、ヘルメットから帽子へとかぶり直してから改めて

向き直る。

まだ話は終わっていないと、直感的にわかったからである。

「チームの為に、青道高校のエースとして、勝ってくれじゃない。勝ってこい」
勝ってくれじゃなく、勝ってこい。

そこに含まれるのは願いではなく、信頼からの指令。

それに応えずして、エースなど名乗れるものではないでしょうか。

『さあ、出てきました！打ってはホームランダービー2位の7本塁打、打率も残せる核弾頭にして絶対的エース！』

彼目当てに来た方も多いのではないのでしょうか』

エースらしい194センチの長身と、御幸とどっこいどっこのルックス。

広い背中に、背番号1が栄えている。

らしいフォームと、闘志。高速フォークでファンを惹きつけ、更に今は再び神宮である真横に滑る高速スライダーが見れるとあつてかなりの集客力を得たスターダム。

『未だ野球人生を通して去年の今頃、稲城実業に敗けた以外は敗北はない東都の怪物が、マウンドに上がります！』

その怪物はと言うと。

「今日はお客さん多いな」

「まあ、あの高速スライダーを神宮で見れるとあってはこないヤクルトファンは居ないってことじゃないか？」

俺なら行くし、と言わんばかりのこの男もセ界ではヤクルトファン。

その心理はわかり切っている。

「……お前、狙ったのか？」

「応援が多くなるだろうってのは狙ったよ。好きだろ、応援されんの」

「すごく好き。応援されると、期待されると応えたくなるんだよ。」

その薬師を利用した盤外戦略、ナイスと言わせていただこう」

「恐悦至極だ、相棒」

「いい仕事をしたぞ、相棒」

ニヤリと笑い合いながら、二人は誰よりも遅く守りにつく。

相手に情報を与えないよりも、与えて絶望感を煽ることとエースのコンディションを優先する。

「お前がいつも万全なら、敗けることなんかない。勝ちに行こうぜ」

「期待に伝えて見せよう」

監督、主将、相棒、後輩、ファン。

俺たちを甲子園に連れて行け、ではない。

甲子園に行こうと、言われている。
それに応えなければ、男ではない。

『一番センター、カルロスくん』

「よお、また倒しに来たぜ」

「二度同じ手は通用しないってのが、攻略の秘訣って言うけど？」

「お前たちが見てない景色を、俺達は見てきた」

甲子園という、成長の場を。

その自信がカルロスにはある。

「何か勘違いしてるようだけど」

初めての球は、ストレート。

ど真ん中のその球を空振りさせて、御幸はボールを投げ返して悠々と構えた。

「お前たちが見てない景色を、俺達はとっくに何回も見えてきてる」

国際大会、全国大会。

シニア時代の栄光は過去の物だが、経験値として残っている。

「そして、唯一知らなかった敗けという経験も、お前らがくれた」

2球目のストレートで、3球目。

投げられた球は、152キロ。

(同じコースに3球ストレートだと——！)

舐めるな、と思う。

しかし、落ちる可能性もある。曲がる可能性もある。

もちろんストレートならば手元でノビてくる。

その三択が、カルロスのスイングを鈍らせた。

『打ち上げたー！御幸くん、落地点に入ります』

キャッチャーフライを捕球し、ホームベースに戻る。

去り際のカルロスに、御幸一也はこう告げた。

「ありがとよ。負けさせてくれて。あいつは負けを糧に成長するどころか、本物に化けた」

天敵投手

稲城実業の二番打者・白河勝之は、丸亀シニアでのクリスの後輩である。

一年後に入った気難しい彼は、クリスを尊敬していた。

捕手として未熟な投手を導く力量と、度量の広さ、性格の良さ。責任感とリーダーシップに溢れた、頼れる先輩だと。

白河も遊撃手として、好守備と巧打でクリスを支えた。

程なくしてその実力は監督にも認められ、三番に抜擢された白河と四番クリスの三番四番コンビは東京一と呼ばれるようになった。

が、そんな日も長くは続かなかった。

シニア全国大会予選、東京大会。

弱く、やる気のない弱小として知られていた江戸川シニアが、破竹の勢いで勝ち進んでいると言うのだ。

三番斉藤、四番御幸と言う一年生コンビと、エース斉藤、正捕手御幸と言う黄金バツテリーで。

リトル大会では、実のところこの二人はあまり有名では無かった。

江戸川リトルに凄い二人がいるとのことだったが、江戸川リトル自体が『合宿・遠征がない代わりに年間費が一番安い』というところではなかったから、当然のように士気も低く、メンバーも弱かったからである。

結果、投手は父親が居らず母がパートで働いて暮らしているということから、捕手は母親が居ないし町工場自体が不景気と言うことから、この経済的に余裕がない二人は安いシニアに入らざるを得なかった。

丸亀シニアや城南シニアからも誘われていたが、当然強豪であればあるほど年間費も高い。それはキツイ。

江戸川シニアは、江戸川リトルと同系列。チーム統一準備品も同じ物を流用するから金が安く済んだし、合宿・遠征がないから年間費も安い。

誘われてるので丸亀シニアや城南シニアに行きたいんです、と言われれば恐らく親は何とかしてくれていただろう。

が、そうホイホイと頼める感じではないから、この二人は決めた。

取り敢えず一年間活躍して、自分たちの力で有望株を呼び込もうと。

二人で勝てるとは思っていないが、何とかしよう。

その結果が、シニア全国大会予選での無双である。

当たった敵が弱かったこともあり、その時既にスタミナがあつた斉藤がストレートを

適当に投げているだけで勝てたことも大きい。

そもそも連投できないのは負担のかかる球を決め球にする↓とれにくい疲れが貯まるのコンボの所為であつてスタミナ自体はあるのだ。完全に舐めてかかれれば変化球をあまり使わないシニアでは三連投までなら行ける。

故にこの時は平然と連投できた。そして二回連続完封にして、丸亀シニアと戦つた。

そして、丸亀シニアは敗けたのだ。黄金時代のはじまりだ！と意気果敢だつた彼等は、味方から熱いエラー攻撃（9失策）を喰らいまくつた智巳から1安打も打てずに2対0で敗れた。

そのまま江戸川シニアは全国大会一回戦を御幸が投げて智巳が受け、二回戦は智巳が投げて御幸が受け、このループで優勝した。

基本的に、この時のスコアは2対1や2対0、3対0などのロースコア。

点を取れるのが件の二人しか居なかつたが、それだけにその活躍は一際目立つた。

結果、覇権は移つた。

結果的に年間費が高くなり、遠征や合宿が行われると言う二人にとつての大誤算が起きたものの、二年目三年目は連投する必要すらない控えの充実っぷりで、更には智巳が二年・三年時にはフォークを習得したこともあり、江戸川シニアは覇権を握る。

監督もお飾りのようなものだったので、作戦立案は殆ど御幸がやっていたし投手への

指導は智巳がやっていたが、今は監督も変わってコーチも付いたようである。

まあ、その第一関門的に薙ぎ倒された（4打数4三振）白河勝之には悔しさと屈辱があった。

無言で打席に立った彼を、御幸一也も無言で出迎える。

「お前等には敗けない」

ファーストストライクをとったあたりで、白河が喋ったことを意外に思いながら、御幸は取り敢えず返事を返す。

「もう、俺達だけじゃないけどな」

二人でフルスイング理論で後続を育てて、二人で野球をやっていたあの頃とは違い、同学年こそ頼れないが倉持が居るし、頼れる先輩も後輩も居る。

（……俺の前に立ちはだかるのは、いつもお前たち二人だ）

そしてお前たちは、成宮と原田さんしか壁として見ていない。

それが、ムカつく。

それが、気に食わない。

3球目の決めに来たストレートをカットし、ファール。

このままストレートで攻めて来るなら、ヒットになるまで延々とカットできる技術を持っている。

「やっぱレベルが違うね、お前らは」

「思ってもいない事を言うなよ」

「いや、ホントに」

話が途中で切り上げられ、18.44メートル離れた距離からインハイ目一杯へ剛速球が投げられた。

「ホントに思ってるから、ストレートで打ち取るのが楽しいのよ」

見逃し三振した自分を笑ったわけではないのだろう。

しかし、心底楽しそうに笑いながら御幸一也は斉藤智巳に投げ返す。

その後、三番吉沢を空振り三振に仕留め、珍しく一回2奪三振。

『空振り三振ー！斉藤智くん、今日も完璧な立ち上がりです』

と、実況には言われているが、小湊亮介から見ると不十分なようである。

「珍しいね。どうしたの？」

「一筋縄ではいきませんからね。少し緊張してしまいました」

「ハハッ、冗談うまいね」

小湊亮介と軽く会話して、この回を全球ストレートで決めたエースはベンチに帰った。

次は、四番の結城哲也から。

『初球攻撃ー！』

センター前へ弾き返す。

マークされることはわかりきっているだけに、早打ちする。

どんなに無様でもいい。1点あれば勝てるのだ。

『センターの前に、落ちました！先頭バッター出塁！』

五番バッターは、御幸一也。

塁上から送られたサインに驚くも、頷く。

そのほうがいいことに変わりはない。

『御幸くん、送りバントの構えです』

『1点を争う投手戦ですからね。ここは手堅く送ってくるのでしよう』

原田も成宮も、そのことは承知している。だが、ただでは送らせない構え。

(ここはアウトをひとつもらう。だが、そう簡単にやらせるなよ、鳴)

(わかっているって)

送らせるにしても、すぐに送らせるのと苦労して送らせるのは訳が違う。

要求されたのは、カーブ。

セットポジションからモーションに入るや否や、結城哲也が動いた。

『結城くん、スタートトゥー！』

盗塁。もちろん御幸のバントの構えは解除され、空振りでアシスト。

阻止すべく原田が捕球してすぐさまセカンドに投げる。

『セーフ！成宮くんのモーションを完全に盗んでいました！』

『落合さんのような盗塁ですね。脚も速いんですが、どちらかと言えば技術で決めた形になります』

御幸は変わらず、送りバントの構え。

『得点圏ですし、御幸くんに打たせてもいいと思うんですが、どう思われますか？』

『ここはチャンスを拡大するわけでもなく、意地でも一点を取りたいんでしょうね。エースに自信がなければ、点を取られる可能性があるならできない采配ですよ』

前回は随分違うと、片岡采配を見た稲実監督の国友は思う。

前回は、攻めて攻めてチャンスを広げ、ワンチャンスをモノにするのではなく更に広げていく。

そんな采配が多かったが、ここにきて堅実さと執念深さが見えた。

二回の表。

御幸が送ってワンアウト三塁、バッターは増子。

犠牲フライを打つパワーは当然ながらある。

「タイムお願いします」

原田が何回も取れるバッテリー間のタイムを取り、マウンドに向かう。

「鳴、ここは三振が欲しい場面だ。狙っていくぞ」

「わかっている。チェンジアップを使っていくよ」

傍から見ればサークルチェンジだが、成宮鳴から見ればチェンジアップ。

智巳のフォークがSFFと言われるのと同じである。

「低めに決めれば魔球だ。きつちり投げ込め」

頷き、ホームベースへ戻る。

なりふり構っている暇はない。確実に失点を防ぎ、勝たなければならないのだ。

カーブで打ち気を逸し、外角低めにストレートで緩急をつけてサークルチェンジを低めに決めて空振り三振。

七番坂井を危なげなくゴロに打ち取り、得点ならず。

『成宮くん、ピンチを切り抜けました！』

『増子くんの三振はともかく、坂井くんの初球攻撃が少し淡白でしたかね。何にせよ、このチャンスをモノに出来なかったのは痛いですよ』

二回裏、智巳は再びマウンドに上がる。

迎える打者は、四番の原田。

『初球ストレート、ストライク！いきなり152キロ！』

カルロス、白河、吉沢に見せたものとは、格が違うノビあるストレート。

(こいつ……今までウチの上位打線相手に手を抜いて——)

2球目のストレートにすら掠りもせず、二個の空振り。

そして、3球目。

『空振り三振——決め球の高速フォークが冴え渡ります!』

神宮に咆哮が轟き、観戦客がより一層盛り上がる。

3球勝負で仕留め、続くは五番の成宮。

原田の打席を見ると、明らかに手を抜いたピッチング。

(俺を舐めんな!)

金属バットに当たった打球は二遊間を抜け、センターの前へ。

成宮鳴、シングルヒット。

ここで打者は山岡。一発のある強打者。ピンチの後にチャンスあり。ここで智巳を打ち崩せば勝ちも見えてくる。

初球セットポジションから、1球目。

(甘い——が)

山岡は、敢えて初球のストレートを見送った。

カルロスを打ち取った時も、白河を打ち取った時もストレートは甘めに決まってい

た。

どちらかと言えば球威で圧していくタイプだからおかしくはないが、今日は制球が甘い日なのかもしれない。

(次に甘い球がくれば打つ)

だが、2球目は縦のカーブが良い所に決まり、ツーストライク。

目を瞑り、大きく深呼吸をして再び打席に立つ。

ここで打てば、チャンスが広がる。

ホームランなら、初めて被本塁打を喰らわせることになる。

投げられた球は、真ん中高めの甘い球。

(やっぱり制球は定まっていけないのか)

貰った。高めに来た甘い球を打ち砕く為にバットを振り抜こうとすると、手元で真つ

直ぐ横に曲がる。

カットボール。

金属バットの先に当たり、セカンド方向にゴロが転がった。

「亮さん」

「任せなつて」

素早くとつて二塁へ転送、二塁へカバーしに入ってきた倉持が一塁へ送球、ゲッツー。

スリーアウト、チェンジ。

その後、成宮は白洲・倉持・智巳を三振・三振・セカンドゴロに抑えて三回表を終えるも、智巳も七番平井を三振、八番梵をセカンドゴロ、九番富士川をサードゴロ。

成宮も小湊亮介にヒットを許すも伊佐敷を併殺逃れのゴロに打ち取り、結城にツーベース打たれて二、三塁。

御幸四球で満塁策を取り、増子と坂井を打ち取ってチェンジ。

四回の裏。稲実は再び上位打線から攻撃がはじまる。

一球に生きる

「ギア上げていくぞ、智。スロカブチェンジ多用、決めは緩急で」

「やっとか」

今までは縦カーブを2球、高速フォークを2球。カットボールを1球。あとは基本的にストレート。

ここに、二巡目からはチェンジアップとスローカーブを混ぜる。

どうにも調子 yang 乗り切っていない智巳を勢いづかせる為に、そして切り替えを促す為に、御幸は敢えてそのような表現を用いた。

『四回の裏、稲城実業の攻撃。一番センター、カルロスくん』

ブラジル人とのハーフ。卓越した運動能力と、巧打を誇る一番打者。

起用法が打者智巳と似ているが、彼は金属バット持ち。ボール球で釣ってもヒットにされる可能性がある。

「カルロス、二巡目だしそろそろ打たないとな」

「この打席で打つさ」

「さあて、打てるか？」

どう考えても、集中力を乱しに来ている。

こいつがいなければただのラスボス戦なのに、こいつが居るからラスボス戦ではない。

勝てるかどうかの、保証がない。

「最初はストレート。外角低め」

三味線か、本当のことか。

それがわからない。と言うより、そんなことを考えさせる為にわざわざ話しかけているのだ。

来た球は、外角低めのストレート。

「言った通り投げたのに、振ってこなかったな」

返事はしないが、耳に入ってくる。

「次はチェンジアップ」

と言いつつ、ストレート。

完全に無視してストレートに備えていても、どこかにチェンジアップをちらつかされていた。

「この二巡目は、徹底的にやらせてもらう」

そう言えば、基本的に一巡目はストレート8割、後は縦のカーブとカットボール、高

速フオークのみ。

あのスライダーは、使ってきてはない。

速球狙い、一点張り。

後は捨てる。ここに来て、腹を括った。

何としても塁に出るのではなく、一回でもチャンスを作る。

勝負の3球目。投げられたのは、チェンジアップ。

完全に体勢を崩され、無様な空振り三振。

悔しさを露わにして、カルロスは打席を去った。

『106キロ、チェンジアップ。空振り三振です』

『前に投げられた成宮くんの対応されてもキレで勝負するサークルチェンジとは違い、完全に遅さで勝負に来ている球ですね。ただの棒球に近いんですけど、とにかく150キロの後に見せられるとどうしてもフオームが崩れてしまうんでしょう』

『つまり、リードが読まれれば打たれてしまう、ということでしょうか?』

『そうですね。多少のリカバリーが利く成宮くんとは違い、あくまでもリード頼りの球です。本来、彼のような決め球があったりするピッチャーはこう言う自分の力ではないところで勝負が決まる球は嫌いなんですけど、斉藤智くんはこの球を比較的よく投げます。』

ですがまあ、ハマった時は強いですよ』

次の打者は、白河勝之。

これまた、厄介な男である。

(智、初球からいくぞ)

(OK)

御幸のリードに従うときは首を縦に振り、御幸の考えを把握して認めた時は左肩に手をやる。

左肩に右手を置いて、智巳は答えた。

初球は、快速球。本来は決め球に使うレベルの、智巳が投げるストレートの究極型。

ストレート待ちの白河でも反応できず、見逃し。

2球目のチェンジアップ、空振り。

(本気で来い)

(了解)

息を整えて、外ギリギリ外れる形のストレート。

当然、白河は見逃す。ボール球だからである。

御幸としてはこのボール球を二個使って白河への警戒を上げたように見せかけ、三番

の吉沢に適当配球で挑む。

そうすることで吉沢に『上位打線で俺だけ舐められている』と言う認識を植え付け（事実智巳は舐めている）、その後一番カルロスと二番白河を出してしまつたとしてもこの三番の逸る打ち気を利用して引つ掛けさせ、ゲッツーを取れるようにする。

カルロスも白河も俊足だが、ウチの内野なら取れるだろう思っていたのだが。

「ストライク！バッターアウト！」

御幸の予想外が、はじめて起こつた。

白河も驚いた顔をしていたが、ギリギリだったから手を出さなかつたと言えればそれまで。

（いや確かに俺の構えたところより際どかつたけど、ボールじゃない？）

これの原因は、主に斉藤智巳。

彼は割りとコントロールがいいピッチャーだが、やはり楊舜臣や向井太陽と比べると見劣りする。

スリーストライク、つまり最後の『ここぞ』ではコマンドに決められるが、他は正直ボール一個分から半個分ずれることも珍しくはない。

それが、この時のストライクゾーンに僅かにズレた。

そして何よりも、斉藤智巳は3球勝負が多いと判断されていた。

それは間違いではないし正しいのだが、『このボールも決めに来た』と思われてしまつ

たのである。

かなり際どいコース。ストライクともボールとも取れる。

投手は四球0、ボール球が5個。それもわざと外したもののばかり。際どいものはひとつもない。決めるところは3球勝負が多い。

打者の白河は三振が一つ。しかもインコースギリギリの初球を見逃した。選球眼は、どうなのだろうか。

さあ、どう判断するか。こう言った様々な条件の元で、審判の彼は判定をストライクとした。

(すまん。球が散った)

(いや、どうしようもないだろ、これは)

(どうする?)

(普通に打ち取っていこう。この打者は安牌だ)

ストリート3球勝負でキツチリ仕留め、次の回は四番の原田からはじめる。

その作戦を相互理解の上に決定したものの、このバッテリーははじめてここに来て試合が管制下から外れたことに些か動揺していた。

だから、勝負を焦った。

『インハイ打ったー！シヨート後方、レフトの前！』

この打球は捕れるかどうかと言う、瀬戸際。

定位置で守っていた為、走って間に合うかどうかと言うところ。

「前で処理しろ、一か八かの無理はすんな！」

伊佐敷が叫ぶが、既に飛び込んでいる。

守備を買われてこの夏初めてのスタメンとして入っている。これまで二度のチャンスを潰している以上、挽回できるのは守備のみ。

ここに来て、焦りが青道ナインの内の三人の足を引つ張った。

ダイビングキャッチは失敗に終わり、打球はレフトを転々と転がっている。

『レフト坂井くん、後逸。記録はヒットです！』

すぐさま伊佐敷がカバーに入り、バックホーム。

俊足をとばしてホームへ進もうとする素振りを見せていた吉沢が、三塁で止まる。

スリーベースで、迎えるは原田雅功。

勝負どころに強い、稲実の主砲である。

「……ハッ」

ここで、智巳は笑った。

目の前の四番に打たれたサヨナラの記憶を思い出しながらも、笑った。

ここで来るか。ここでこう来たか。

まだ自分をエースとは認めてくれないのか。まだ、自分に試練を与えるのか。

東清国の夏を終わらせた不甲斐ない男に、マイナスからゼロへ進む男に、この試練を与えたのか。

いいだろう。やってやる。

打者から、エースは逃げる。エースは隠れる。エースは怯む。勝つ為には、真つ向勝負する必要なんかどこにもない。

だが。与えられた試練からは絶対に逃げないのが、エースだ。

だから、俺は逃げない。

ここから、逃げない。

(捻じ伏せるぞ、御幸)

(だろろうと思つてた)

味方のエラーは確かに頭に入れていなかった。だが、だから何だというのだ。そんな予想外はいくらでも起こる。

その予想外を乗り越えてこそ、勝ちは見える。

ランナーは三塁。ホームスチールはリスキーだから稲実はしない。

しかも打順は四番なのだから、勝負に来る。

ツーアウトだからスクイズはない。ランナーは三塁だからセットポジションから投

げる必要もない。

非常に動作が遅いワインドアップモーションから、斉藤智巳は1球目を振りかぶって投げた。

153キロ、ストレート。空振り。

(速い)

わかっていても、下を振ってしまっている。

そのことを自覚して、目を瞑る。

——相手投手の特徴も、成宮の相棒としてここがどういう場面かも充分頭に入っているな？

そう国友監督に訊かれて、自分は無言で頷いた。

ここで点を取らなければ、更に苦しくなる。

ピンチの後にチャンスあり。それを当てはめれば、ここを切り抜けたら更に大きな波が押し寄せる筈なのだから。

——ならば監督として一言だけ言おう。

この場面、キャプテンでもキャッチャーでもなく、四番打者として打席に入れ。

——四番打者として、あの怪物と勝負してこい！

鋭く、語気は強く。

国友広重にそう言われ、原田雅功は打席に入った。

いつになく研ぎ澄まされた勝負勘と、責任感を力に変えて。

(智、ノーボールでの真つ向勝負だ。本気でいくぞ)

(ああ)

タイムは取らない。取らなくても、意思疎通に齟齬はない。

目指すところはただひとつ。この試合の勝利。

3球勝負は球数の節約にもなる。だが何よりも、相手に余裕を与えないから好きなのだ。

一つのボールも投げない。それ自体が、プレッシャーになる。

次の球は、縦に曲がるスローカーブ。

一回上がって、ぼとんと落ちる。

これを初見ながら当てて、原田雅功はファールにした。

(緩急――)

次はストレートだ。そうわかっているも振り遅れる。

3球目のストレートを迎え打ち、後ろへ打球が飛んで、ファール。

今度はチェンジアップか、スローカーブか。

裏を搔いてのストレートか、高速フォークか。

それとも、高速スライダーか。

(エースの役割が勝つことなら、四番打者の役割は点を取ること——)

ここで打つ。

次に来た球は、チェンジアップ。

下半身がやはり、崩される。

その速度差は40キロあまり。ドラフト候補に挙げられる原田でも、この速度差は脅威だった。

しかし、ファール。粘っている。

『斉藤智くんはあくまでも強気のストライク先行のピッチングで攻め、原田くんは1球の球も見逃さないとばかりに気を張っています』

もはや5球目。決めてもいい頃。

誰もが感じていた。このエースと四番の対決の終わりを。

原田が、打席を外した。

速度差に騙された眼を慣らすための、少しの抵抗。

普通の投手ならば、ここで自分も姿勢を崩す。

相手がリラックスしたのだから、自分もと。

実際問題、緊張をほぐす為にもその選択は悪いものではない。

しかし智巳は投げる前の、腰を曲げて上半身を斜め前に突き出した姿勢のまま動かさない。

獲物を狩る前の鷹のような切れ長の眼から下を右手で隠し、右手をグローブで覆っている。

見据えるのは、原田雅功自身ではない。

打席に入っていた、原田雅功。自分が勝負をする、一人の相手。

この時の智巳には、鬼が憑いていた。

『この一戦で、一打席で。互いの全てを賭けて火花が散っています。

エースの誇りか、四番の意地か——』

構えたまま不動の姿勢が、強烈に打者を威圧する。

その圧に押されて、いつもより少し早めに打席に戻った原田が構え終えて、やつと智巳は動いた。

突き出した上半身を上げて、すらりと194センチの長身がマウンドで屹立する。

グローブが首元に構えられ、肘と共に上がった。

軸足が、片方の脚を上げるためにステップを踏む。

上がる方の脚が、上がった後に虚空を叩いてピクリと動く。

上がった腕の片方は、前に出された。

グローブは前に、右手は後ろに。

半身になって挑む様に、フォームがスライドしていく。

——来る

原田にはわかった。決め球が来ると。

フォームでわかったのではない。そんなわかりやすい弱点はない。

一種鬼気を感じさせる、エースとしてのオーラが何よりも雄弁に語っている。

右腕が撓り、空気が軋む。

パスボールのことなど一切頭がない。

唸りを上げて、白球が迫った。

(来るか、高速スライダー！)

インコース付近に、迫ってきている。

ここからどう動くのか。

腕を畳んで、真ん中あたりにミートポイントを合わせて振り抜く。

真つ直ぐに加速しながら曲がるスライダー。生で見たことはないが予想はできる。

少しくらい目算から外れても、当ててファールにする。

そう思った原田の視界からスッ、と。白球が消えた。

『エースが吼え、外角にズバツと突き刺さって空振り三振ッ！インコースから入ったスライダーが、その球を読んで打とうとした主砲のバットを遥かに上回って構えられたミットの中へ！

投げたスライダーは自身最速に並ぶ153キロ！

ここ神宮で19年前に誰もが初めて見たスライダーが再び現れました！』

結城の意地

吼えた後、智巳は心臓に右手を当てた。

怖かった。打たれるのではないかと、点を取られるのではないかと。

弱気はベンチに捨ててきた。マウンドに居る自分は、強い己。

憎たらしい程に晴れている大空を見上げて、額の汗を左腕で拭いてベンチに戻る。

「お疲れ様です、チーフ！」

「……ああ、ありがとよ」

膝に右肘を突き、右手の甲で額を支える。

疲れた。あの時にサヨナラを打ったのは原田雅功。

怖かった。後から振り返ってそう思う。

一点を取られれば、あの時のように敗けるのではないかと、そう思ってしまった自分が居る。

「どうだった、さっきの俺は？」

「かっこよかったです！臆さずに勝負する様は、正にエース！それでこそ我が目標！」

何も知らずに賑やかに褒めちぎる沢村の頭を軽くグシャッと撫でて、紙コップを返

す。

「美味かった。ありがとう」

「またお望みの時はご注文を！」

「わかったわかった」

1球に生きる。

帽子のツバに書かれた座右の銘を見て深呼吸し、智巳はやつと周りを見た。

結城哲也が、御幸一也が、小湊亮介が、伊佐敷純が。

ネクストバッターズサークルには倉持洋一が、打席には白洲が、後ろには騒がしいのが一人居る。

「智巳」

「はい、哲さん」

「そう心配するな。絶対に点は取ってやる」

その若干見られはじめた心の疲労を察して、結城哲也は静かに言った。
殊更に強く言うわけでもない。

だがその言葉は、心に沁みだ。

キャプテンとは、このような選手を言うらしい。

言葉ではなく、心で感じる。

「心配するな」

小さい深呼吸を一回して、二回息を吸って整えて、虚勢を張らずに智巳は答えた。「ありがとうございます」

まだ、終わりたくない。

ここで、終わりたくない。

まだ、このチームで野球がしたい。

ずっと、ずっと、このチームで野球をしていたい。

肌はひりつく。プレッシャーで試合前は潰れそうになる。

だけど、楽しい。投げることが、勝つことが、打つことが、

楽しい。

いつまでも、このチームでいたい。

ずっと、野球をしていたい。

「勝ちたいんです。マイナスから、ゼロに進む為にも」

勝者以外に明日は無いのが高校野球。

敗けましたではすまされない。

「その勝ちたいという気持ちは、わかっている」

少し口の端を釣り上げて、微笑みながら結城は言う。

「マイナスからゼロへと言うのはわからないが、俺は甲子園に行きたい。お前と、俺と、純と、亮たちで。このチームは、最強だ」

静かに、しかし熱く。

結城哲也は、ずっと目指してきた夢を語る。

「最強のチームの最強のエースと、最強のチームのキャプテンとして、甲子園に行きたい」

「俺も、行きたいです。哲さんと、皆と」

「これは俺の夢だ。だが、皆で努力しなければ叶わない夢だ。お前にも負担をかける我が儘だが、頼みたい」

頼むぞ、エース。

ポン、と背中を叩かれて、智巳は弱気を受け入れた。

弱気、嘗ての記憶、それを乗り越える。

何故なら最強のエースだから。

最強のエースと言えるのは何故か。

それは、尊敬する主将が認めてくれたから。

それ以上の証拠などない。必要もない。

打席に立つてあっさりセカンドゴロに倒れて成宮に三凡に打ち取られるも、その闘志

はまるで消えていない。

「15回でも、20回でも投げます。絶対に点はやりません。気長に一点取ってください」

「らしくなったな。だがまあ、残念ながらこの試合は9回で終わりだ」

この次に点を取るからな。

そう平然と口にして、結城哲也はファーストの守備位置につく。

「おい御幸、ガンガン攻めのサイン出していけよ」

「……お前つて、何というかこう、本質的には馬鹿だよな。乗せられやすいというか、なんというか」

「お前もだろ。俺に散々乗せられてきたじゃないか。馬鹿に乗せられる馬鹿、さしずめ大馬鹿といったところか」

「否定できない自分が憎い。けどまあその切れ味鋭い発言を見るに、復活したようであり。ガンガン行こう」

「だからそう言ってるんだろ」

本当に辛辣なんだからこの男は……と思いつつ、御幸は嬉しい。

この男は割りと鉄壁のメンタルを持っているが、若干稲実を意識し過ぎているところがあつた。

それをあつさり取り除いた今、死角はない。

五番成宮、六番山岡、七番平井。九球で三者連続三振に切つて取り、吼えるだけ吼えてベンチに帰る。

『五番六番七番の中軸からはじまる打線を、完璧に見下ろして切つて捨てたあ！』

斉藤智、ここに来て完全にエンジンがかかってきました！』

どこか挑む姿勢から、完全に見下ろして待ち構える姿勢に。

この余裕と闘志から来る、敵を完全に呑んでかかる制圧力の高いピッチングこそ、斉藤智巳の真骨頂。

「頼みます」

「任せなよ」

先頭打者は、小湊亮介。

他に言葉など必要ない。

(先ずは塁に出てあげるからさ)

これまで二打数の一安打。

ヒット一本、攻めきれていない理由はここぞの場面が訪れる前に出塁できなかつたから。

可愛い後輩の為に、さっさと点を取ってやりたい。

(細かいことは考えず、来た球を振る。そんなこと言ってる奴が二人程いるけど——
そんなことできるほど巧くはないんでね)

打席で完璧に抑えられた以上、負けん気の強い成宮は初球ストライクを取ってくる。
その球を狙い撃つ。

カーブを掬い上げ、ライト前へ。

『二番小湊くん、出塁！』

圧倒的な投球の片鱗を見せつつあるエースに、援護点を与えられるか、伊佐敷くん！』

三番センター、伊佐敷。

ここまでヒットはなし。

(俺の仕事は、繋ぐこと)

後ろには、逆立ちしてもかなわない男が居る。

四番でキャプテンのその男が、ネクストバッターズサークルに静かに鎮座していた。

(ぜってえ進ませるのが、俺の仕事だ！)

1球目のクロスファイヤーを空振りし、高めに浮いたサークルチェンジを叩く。

右打ち。ライトとセカンドの間に、ポトリと落ちるヒット。

これで、ノーアウトで一、二塁。

(頼むぞ、哲)

——四番、ファースト、結城くん

ウグイス嬢がその名をコールし、四番がチャンスで打席に立つ。

青道高校、不動の四番。

「タイムをお願いします」

威圧感と闘気が、陽炎のようにゆらめく。

原田は、ここでタイムを取った。

「鳴、最悪敬遠でもいい。甘い球を投げるな。打つてくるぞ」

「わかっているよ」

歯を食いしばり、力む。

ツーアウト三塁で追い込んでいたのに、今はノーアウトの一、二塁で追い込まれている。

「雅さんも、あんま気にしないで攻めて行きなよ。あんな敵の失策に頼ったようなチャンスなんか、物にしても勝ったとは言えないんだからさ」

状況こそ違えど、奇しくも再びエース対四番。

原田雅功対斉藤智巳。

結城哲也対成宮鳴。

前者はエースが勝った。

後者は、どうなるか。

『立場、状況は違えど同じ二年生のエースと三年生でキャプテンで四番の対決！』
結城哲也は、静かに待つ。

成宮鳴は、気迫を顕わに挑む。

1球目ストレート、空振り。

「球走ってるぞ、鳴！」

「哲さん、頼みますよ！」

原田の声とエースの声をバックに、結城哲也は構え直す。

2球目、スライダー。

インコースから決まって、ツーストライク。

結城哲也は、打席を外さなかった。

最後まで、成宮を見ていた。

成宮を通じて、去年の光景を見ていた。

そして今、現実が被る。

次の球は、チェンジアップ。

これで稲実バッテリーは決めに行く。

——超える。あの怪物を。勝負所で自分が全幅の信頼を置く主砲を打ち取ったあのエースを。

早打ちでここまで出塁してきた結城には、見せていない球。

(低めに決まれば魔球——ここで仕留めて、あの怪物を超えるピッチングを見せてみる！)

結城の下半身は、崩れなかった。

バットを下から出し、スクリーユ味のチェンジアップを完璧に捉える。

低めに決まった、成宮鳴のチェンジアップ——サークルチェンジ。

白球は飛び、弾丸のような鋭さを維持したままに斜めに上がる。

『いったかああああ!』

白球は神宮のバックスクリーンの、電光掲示板を直撃した。

『稲実戦で好投を続けていたエースを援護する、特大の一発！』

一年越しの援護は、主将結城のホームラン!』

ランナーの小湊亮介と、伊佐敷純とタッチする前に、結城哲也はベンチにゆつくりと歩いて寄った。

「随分と、遅くなったか」

「間に合ってますよ」

不敵に笑い合つて、結城と智巳は乾いた音を立ててタッチし合った。

四番ファースト、結城哲也。ヒットとツーベースの後、スリーランホームラン。

3対0。六回の表、青道高校、3点先制。

不敗神話は終わらない

援護をもらった智巳は、六回の裏の稲実打線・八番梵をカットボールで空振り三振。九番富士川をストリートで見逃し三振。一番カルロスを高速フォークで空振り三振と、完全に捻じ伏せて三者凡退。

七回の裏は白河にヒットを許すも盗塁を御幸が刺し、三番吉沢にヒット許したあとは、四番原田を高速スライダーで見逃し三振。五番成宮にもツーベースを打たれてピンチを作るが、六番山岡を歩かせて七番を三振させてピンチ脱出。

完全に稲城を叩きのめし、七回17奪三振の熱投で、七回8奪三振の成宮を圧倒している。

「チーフ、ヤバイですね」

「そうか？」

ドリンクを悠々と飲むその姿は、更に貫禄が増したように思える。

エースという言葉が様になっていたのに、更にその様になりっぷりが増している。

「もう一杯くれ」

「へいっ」

援護をやれば、この男はそうそう敗けない。

さらりと言えば、余裕が増せば増すほど強くなるのだ。

地味にあれから成宮も出塁を許していない。

ベストピッチとすら言えるあの決め球が痛恨の一投となって以来、そのピッチングは鬼気迫るものがある。

「あの白頭、キャップから打たれてから本当にすごいですよね。鬼気迫るって言うか」「鬼気迫るものがあったても敗けていたら意味はない」

超集中モード、ないしはハイパーモードに入った反動か、結城哲也がクロスファイヤーで空振り三振に打ち取られ、三年に入って二個目の三振となる。

「……………未熟」

「3の3だったんですから、別に一打席くらい凡退してもいいんじゃないですか。俺なんて4タコですし」

オーラを溢れさせる結城哲也の成績は、ヒットから盗塁↓ツーベース↓ホームラン↓三振と、ちよつとおかしいレベルですごい。

「いや、あと一点でも二点でも取ってやりたかった」「充分ですよ。敗ける気はありませんから」

帽子をかぶり直し、マウンドへ。

八回裏、打順は八番梵から。

荒れたマウンドの土をならしながら、白球を持つ。

『さあ、青道高校の六年ぶりの甲子園出場まで、あとアウト6個！ここは当然継投はせず、尻上がりに三振を量産しているエースの斉藤智くんがマウンドに上がります』

『彼にしてはボール球を多く使っていますが、八回に差し掛かって100球は充分完投を狙えるペースです』

『やはりここぞを任せられるエースが居るのは大きいですね。一昨年までは継投での失点で落とした試合が多く見られただけに、より青道側はそう感じていることでしょう』

『ですが成宮くんも結城くんの一発以外は完璧なピッチング。絶対的なエースと四番を擁するこの二校の戦いは、いよいよクライマックスを迎えます』

下位打線に弱いのが、智巳の特徴。

大きく振りかぶって、第一球。

144キロ、ストレート。

『比べるのはナンセンスですが、少し球威やノビは落ちてきています。フォークの落ちもキレもです。ここからは、今まで打ち崩せなかった稲実側にもチャンスが巡ってくるでしょうか？』

『そうですね。彼は全体的に下位打線に弱いですから、ここでヒットはできるかもしれ

ません』

そう解説が漏らした途端、打球がライト前に落ちる。

八番梵、ヒット。

迎える打者は、九番富士川。

(カッ)で打つ)

ここで打ちたい。自分の三年間を、無安打で終わらせたくはない。

富士川の、三年の意地とエースの誇りが火花を散らす。

球威は落ち、見極められるようにはなってきた。

そして智巳は、細かい制球が定まらなくなってきた。

自然と、大雑把なリードにならざるを得ない。

(しまった)

カーブの抜き方が、甘かった。

縦に落ちていかないドロップカーブを、富士川のバットが捉える。

打球は二遊間を鋭く転がっていく。

『痛烈——ッ!』

しかし、そこには頼れる先輩が居る。

「そッッ!」

深く守っていた小湊が追い付き、グラブを後ろ手に差し出して辛くも止めた。空中で身を翻す暇も、振り返る暇もない。

グラブからそのまま腕を後ろに振ってトスして、ショートへ。

ありえない体勢からのショートへの綺麗な送球を倉持が捕り、二塁を踏んで交錯を避ける為に跳んでファーストへ。

『ゲッツー！セカンド小湊、自分の守備範囲でのヒットは絶対に許さないと言わんばかりのファインプレー！これで一気にツーアウトオ！』

見事な守備を見せた小湊は立ち上がり、平然といつもの守備位置に立つ。

そして笑って、エースの背中に向けて発破を飛ばした。

「ガンガン三振取っちゃったらどうかな。こんなファインプレーを用意してくれなくてもいいんだけど？」

「すいません、亮さん。意外とこいつら相手にすると神経使うんですよ」

油断ならない強打者が、しっかりとバットを振り抜いてくる。

簡単に三振を取っているように見えても、その疲労は馬鹿にならない。

「ハハ、でも頑張りなよ。エースなんだから。俺はセカンドとしての義務を果たしてるよっ。」

「それを言われちゃあ何も言えませぬね」

軽く振り向いて笑い、正面の打者に向き直る。

バッターは、カルロス。

(智、決め球はスライダーで行くぞ。先ずはカットボールだ)

御幸のサインに無言で頷き、振りかぶる。

ストレート軸から、ここに来ての変化球軸へのシフト。

まだまだ引き出しはある。慎重に、しかし大胆に攻めていく。

初球カットボールを空振り、ワンストライク。

返球し、御幸はすぐさまミットを構えた。

相手に考える時間は与えない。テンポよく攻めていく。

スローカーブが低めギリギリ外れて、ワンボール。

やはり、細かい制球が利いていない。

それはカルロスもわかつている。

だから普段浮かべている余裕のある笑顔を消して、必死にボールを見ているのだ。

(ここで切って、勝つぞ)

(応)

小さなシュート。

今回の試合で投げる、はじめての球。

それをカルロスは引つ掛けた。

サード方向に、勢いの死んだ打球が転がっていく。

「増子さん、頼みますよ」

「ウガッ！」

智巳はマウンドから動かず。

増子透が素早いチャージで距離を詰めて、三塁手を守るに相応しい強肩でファーストに送球。

若干逸れた送球を危なげなく結城哲也が捕球して、アウト。

打つ方が目立つが、かなりファーストの守備はうまいのだ。

サードとセカンドは『やってやれないことはない』程度なものだが。

懸命に走ったカルロスよりも、増子の守備が勝っていた。

『スリーアウト、チェンジ！稲城実業のカルロスくん、懸命に走りましたが僅かに届かず！』

青道高校、六年ぶりの甲子園まであとアウト3つに迫っています！』

ふう、と息を吐きながら踏み荒らしたマウンドを脚でならして、ロジンバックを定位置に戻す。

敵エースに、敬意を。

薬師戦でもやっていたこれは、もはや癖になっている。

次にマウンドに立つ成宮に、自分が荒らしたマウンドに立つて欲しくはない。

少し屈んでマウンドの土に右手の指を当てて、智巳はマウンドから下りた。

攻撃は五番から。当然油断すれば成宮とて被弾するだろうが、ここに来て油断はしないだろうと智巳は思う。

現に、成宮は諦めていなかった。

結城に一発を喰らった自分を責めながらも、嘗てのようにマウンド上で気色ばむことなくベンチで発散するのは流石の成長と言える。

そしてこの回も、成宮は自分のピッチングを貫く。

相対するは、五番御幸。

得点圏にランナーが居ない彼は全く怖くないとはいえ、珍しく御幸は粘ってきた。

少しでも、少しでも有利にしたい。

二度と敗けさせたくはない。その思いが強いから、御幸は粘った。

左打者だから、左投手の成宮には当然ながら相性が悪い。

しかし、粘った。

(そりゃ、粘るよね)

九球目を投げ終えた成宮は、この御幸の勝っているのになお粘ろうとする気持ちかわ

かる。

どうしても勝ちたい時、何点でも欲しくなる。

だが、そうやすやすと点はやれない。

『御幸くん、三振！よく粘りましたが、ここは成宮くんの左腕が勝ちました！』

六番増子には、渾身の143キロクロスファイヤーから見せ球にサークルチェンジを使い、スライダーで空振り三振。

七番坂井も3球で仕留め、拍手と共に成宮鳴はマウンドを下りた。

この拍手は、敬意の拍手。よく一人で投げ抜いたという、敬意。

だから成宮は、振り返らない。

勝った時に受ける祝福の拍手の方が何倍も嬉しいことを、彼は知っているから。

スリーアウトを取られた、青道ベンチ。

「監督」

「どうした」

柔らかに笑って、鷹のように鋭い眼を人懐っこく丸めさせながら、智巳は片岡鉄心に頭を下げた。

「ありがとうございます。一度敗けた男を使ってくれて。こんな面倒くさい連投不可の男を、エースだと認めてくれて」

次に智巳は、チームメイトを見た。

「御幸、何だかんだ言って、今の俺があるのはお前のおかげだ。無茶な球を受けてくれて、俺を生かすリードをしてくれて、ありがとう」

「哲さん。去年のことを思い出してた時に声をかけてくれて、ありがとうございました。援護、絶対に無駄にはしません。勝って、夢を叶えましょう」

「亮さん。好守備と巧打には、何回も助けられました。あなたが後ろに居るだけで、凄く頼もしかった」

「純さん、外野陣の指揮と声掛け、いつも元気をもらいました。あなたがセンターに居るだけで、二塁ランナーは早々迂闊には動けない。

これは、本当に大きいことなんですよ」

「増子さん。あなたの守備は信頼してただけにエラーされた時にはビビりましたけど、最近の全く危なげないバント処理と、ゴロの処理。本当に助かってます。あと、ゲッツーに巻き込んでしまつてすみません」

「倉持。お前がショートに居るから、打たせても全く怖くない。正直、シニアとかでは怖かったから、心にゆとりが持てるよ。ありがとう」

大きく息を吸って、吐いて。

一つ一つ大事に言った言葉を反芻しながら、智巳はグラウンドに一步踏み出した。

「さあ、行こう」

エースとしてチームメイトに声をかけ、口元にほのかな笑みを浮かべて、誰よりも先に駆けていく。

その背にある『1』を追って、青道ナインは駆けていった。

マウンドの上つて、囲むように集まる。

「あと3つ。確実に行けよ」

結城哲也が、口元を笑わせて拳を突き出す。

「またこつちに世話かけてきてもいいよ」

小湊亮介がニコリと微笑む。

「シヨートはお前の言う通り鉄壁だから心配すんな！」

倉持洋一が、ニヤリと笑って気を吐いた。

「サードに打たせてきてもいいぞ！」

増子透が、ドン、と己の胸を叩いた。

「外野にボールあんま飛んできてねえぞ！少しはこつちにも見せ場よこせや！」

伊佐敷純が、笑いながら咆えた。

「智、最後はやっぱ三振で決めようぜ。ウイニングボールは俺が捕りてえ」

御幸がいたずらっぽく笑う口元をミットで隠しながら、言った。

「てめえ御幸！俺も欲しいんだよ！こちとら最後のチャンスなんだぞ！センターフライにしろや！」

「ファーストゴロでもいいぞ」

「セカンドゴロとかどう？」

「ショートゴロで決めようぜ！」

「もちろん、サードフライでも構わないからな」

口々に無茶を言つて、全員がバラバラの方向に駆けていく。

——最強のチームの最強のエースと、最強のチームのキャプテンとして、甲子園に行きたい。

そう。このチームは最強。

荒らされたマウンドをならして、ロジンバックを定位置に戻す。

初球は、ストリート。

敵の打者は、白河勝之。

野球が楽しい。

こんな楽しいスポーツを、他には知らない。

全体の中に、個人技がある。

個人の喜びや記録を分かち合える。勝つ為に、一つになれる。

2球目を投げて、追い込む。

最後は、高速フォーク。

152キロと、電光掲示板が告げている。

そんな物には意にも止めずに、智巳は吼えた。

紅いランプが1つ点って、黄色のランプが2つ消える。

三番、吉沢。スリーベースを放ち、得点の好機を作った打者。

智コールと、稲実の応援歌がマウンドを挟み込んで、夏の青空に響いている。

3つめの球に、バットが回った。

151キロ、高速スライダー。

黄色のランプが2つ消えて、紅いランプが2つになった。

結城哲也が笑っている。

伊佐敷純が笑っている。

小湊亮介も笑っている。

御幸一也も笑っている。

斉藤智巳も笑っている。

敗ける気がしない。このチームは、最強。

誰であろうと、誰が相手であろうと、どのチームが相手であろうと、敗ける筈がない。

迎える打者は、四番原田。

2球で追い込み、3球目。

決めに行つた高速フォークが打たれ、ライトの頭を超えた。

黄色のランプが2つ消えて、次の打者が来る。

成宮鳴。

打席に入るエースの眼差しが、マウンド上のエースを捉えた。

バットが回つて、黄色のランプが1つ点つた。

バットに当たつて打球が切れて、黄色のランプが2つになつた。

3球目を投げて、緑色のランプがこの回はじめて点つた。

4球目を投げた途端、金属が白球を捉える時の、独特の音が響く。

ボールは、センターへ。

白球を、伊佐敷純が追っている。

必死に追つて、止まつた。

落下していく打球はセンター伊佐敷のグラブの中へ。

赤いランプが2つ消えるが早いのか、キャッチャーマスクを脱ぎ捨てて、御幸がマウン

ドに駆け寄った。

智巳が腕を広げて、喜びを爆発させながら思い切り相棒を抱擁する。

内野陣が集まり、ベンチから控えメンバーが集まり、最後に外野陣がマウンドに集まる。

あのマウンドでの覇気は何処へやら。泣いているエースをもみくちやにして、褒め称えて、泣くなど騒いで、皆で泣いた。

さあ、並ぼう。泣いていないで。みんな——みんな、ちゃんと整列しよう。

泣きながらも、キャプテン結城の必死に涙を堪えた号令の元に整列して、対戦相手に頭を下げる。

校歌を大声で泣きながら歌って、ベンチで立ったまま泣いていた片岡鉄心を無理矢理連れ出して誰よりも天高く胸上げて、続いてキャプテンが、続いてエースが宙を舞う。

青道高校はこの日。

六年ぶりの甲子園出場を決めた。

去年の同じ日に敗けて泣いたエースは、勝っても泣いてしまうのだとこの時知った。

みんな、泣いていた。
夏のはじまりを感じさせる、
涙だった。

甲子園編

夏のはじまり

エース目当てのインタビュアーたちが何も聴けないほどに、智巳は泣いていた。

一年前、敗れた。尊敬する先輩達の夏を自分が終わらせた。

終わらせなくてよかった、終わらなくてよかったと、泣きながら言うだけで、精一杯だった。

勝ててよかったと、智巳は一度も言えなかった。

敗れなくてよかったと、終わらなくてよかったとしか、言えなかった。

ほぼ完璧なピッチングでチームを勝利に導いたエースに、話を聴きたくない、聴かなくていいと言えば嘘になる。

しかし、誰も詳しくは言わなかった。

この場面こそが本心だと、この場面こそが絵になるのだと、記者たちは鋭い嗅覚で悟っていたから。

その点結城は少し涙を拭いながらもキツチリとインタビュアーたちに答えて、様々なことを話した。

敗けてからのこと。春大会のこと。関東大会のこと。ベンチで言ったこと。敗けを乗り越えて、成長したエースのことを。

自分の手柄については、語らなかった。

だが、あいつは俺の誇りですと、あいつと野球をやれて嬉しいと。

そして、エースがあいつで良かったと、最後に言った。

「さあ、凱旋だぞ。そんなに泣くな」

「すいません……」

「お前は完封した勝利投手なんだ。胸を張れ。手柄を誇れ。笑え。俺はお前と甲子園に行けて、嬉しいんだぞ」

バスに乗る前に、OBや応援に来てくれた生徒達にお礼を言わなければならない。

智巳を何とか泣き止まさせて、結城哲也は、スタメンの中心に立って頭を下げた。

「応援、ありがとうございまして！これからもよろしくお願い致しますー！」

—— ナイスゲームだったぞ！

—— 甲子園でも勝ち抜けよ！

—— 智、泣くなー！

—— 純、泣くなー！

—— 亮介と哲を見習えー！

からかい混じりのヤジと、心からの賞賛。

「すいません……」

「泣きたいときくらい泣かせてくださると嬉しいッス！」

エースは泣き続け、ウイニングボールの捕球者が謝りながら正当化して、ドツと周囲が湧く。

立派だったぞ、と仲間たちが褒められる中、頑張つて泣き止んだ智巳は報道陣の前に引き返した。

ふとそれに気づいた御幸が後を追う。

「質問に答えられず、申し訳ありませんでした。泣いていたとは言え、同じことを繰り返して申し訳ないです」

予想外の謝罪に報道陣が面食らい、口々にその謝罪はする必要がないことを説く。

もう既に彼らは格好のネタを手に入れているし、もう色々と臨界点を突破していたことは見ていればわかる。

配慮が足りなかったよ、ごめんねと、口々に逆に謝られた智巳は少しの間ではあるがインタビュアーの質問に答えて、去り際にもう一回頭を下げてバスに乗った。

もう何も考えていないこの無意識の行動が、マスコミたちに好印象を与えたことを、御幸以外は知らない。

時々涙を袖で拭いながら、智巳はアイシングしながらバスに揺られていく。

「何かチーフって『無敵ツ無敗ツ最強ツ』ってイメージあったんだけど、違うんだな」

「……僕も意外だった。あの人は、ここで勝っても平然と不敵に笑ってると思ってたから」

「でも、責任感は一倍強い人だし、思うこともあつたんじやないかな」

クリスの隣の沢村、その後ろの席に隣で座っている降谷・小湊の一年生三羽鳥にその泣きっぷりを驚かれる程に、智巳は泣きまくっていた。

まあ、汚い泣き方ではなく、新聞に無加工で乗せられるほどに絵になる泣き方をするあたり真性のエースなのだが、それは置いておく。

「……失望したか？」

「いえいえいえいえ！何かこう、意外だなんて」

クリスの言葉に、沢村は慌てて首を振る。

智巳の号泣に釣られて泣いた観客も居たし、実際青道ナインの内の何人かの涙の長期化には確実に貫いた泣きの要素が含まれていた。

綺麗な涙だったと思うのだ。沢村も勝ったという実感がわかないまま、釣られて泣いていたわけだし。

「……まあ、あいつはマウンドでは無敵だが、他ではそうでもないんだろう。カツコつけ

るやつだから弱みはあまり見せない分、余計な」

「完璧つてわけじゃないんですね……」

「それはそうだ。心は誰しも穴だらけ。その穴を一つずつ埋めて、人は生きていくんだからな」

クリスの言葉に頷き、沢村は改めて試合を振り返る。

結局、自分の出る幕はなかった。9回を一人で投げて、エラーで作られたピンチに動じず、四番打者を相手にして不敵に振る舞い、ベンチでは常に余裕を見せて、味方の援護を待ち続けた。

そして援護を貰えば更に奮起して見せた、圧巻のピッチング。

最終回のピンチでも、大胆不敵に振る舞う豪胆さ。

目指す道は遙か遠く、背中が見えるだけで手は届かない。

「俺、チーフからもつと学びます。あの人から今まで学んだのは、教えられたことだけだった。でも、違うんですね。エースつて言うのは立ち振る舞いから『らしく』ならなきゃいけない」

「そうだな。『らしく』振る舞おうとする前に、らしくなっていなければならぬ。チーフムメイトの心を掴み、信頼される。極論になるし、あいつは絶対に認めないだろうが、俺たちはあいつが打たれて敗けても悔いはない」

「青道のエースだから、ですか」

「そうだ。そして、あいつなら俺たちの三年間を任せられる。あいつが俺たちの三年間を、背負ってくれているからだ」

その結果勝って泣いたあのエースに、誰も何も言えない。

良かったなど、ありがとうと、背を叩くくらいだろう。

「お前も、そう言われるエースになれ。沢村が打たれて敗けたなら悔いはないと、そう言われるようなエースにな」

「はい、師匠」

肩をアイシングして、目蓋を御幸が用意した熱い濡れタオルで温めているエースの座席からはみ出た髪を見て、沢村は思う。

これまで何となく、チーフとはいつも一緒に練習できると思っていた。

いつでも当たり前のようにマウンドに立っていて、敵打線を軽々捻じ伏せた後に自分を見てニヤリと笑う。

早く奪ってみろよ、と。

だが、そんなチーフも引退して、卒業する時が来る。

そしてそれは、そう遠くない。

あと一年。そう考えると、とても短く感じられる。

(正面向いて教えてもらおうんじゃない。あの背中から、学べることは沢山ある)

そしてこの時、降谷暁の心にも変化が起きていた。

彼は、中学から野球をはじめた。

天性の豪腕は簡単に豪速球を叩き出し、150キロを超える球と豪快な打撃を才能だけで身につけた。

しかしチームメイトに恵まれず、捕れる捕手も居らず、周りに捕ろうとする根性を持った人間もいなかった。

そして自分の球を捕れる捕手を見つけて入学した青道にて、その見つけられた捕手の御幸に言われて、すぐに使えるレベルの変化球を身につけられた。

彼は思っていた。エースになる為の課題はスタミナロール。スタミナとコントロールを付けることだと。

だが、違う。

一人ではできないことが、手に入れられない物が、エースになる為には必要なのだ。だが、それを持っているからこのエースは強いのだろうか。

それを持っているから、このエースはあんな変化球を投げられるのだろうか。わからない。

技術と身体と、メンタル。この3つが結びついてこそその本当の実力と言われている

が、あそこまで背負い込む必要があるのか。

あそこまで背負い込んで、本来の実力が出せなくなったらどうするつもりだったのか。

本来の実力であれば、敗けないのに。

あんな球を投げられれば、敗けないのに。

それが聴きたい。

(だけど流石に、今はダメかな……)

降谷、空気を読む。

主義が個人よりに傾いているだけで、本質的にはいい子なのである。

一方沢村。

彼はバスを降りて寮に付き、一年生たちや二軍の選手たちが帰ってきた先輩たちの荷物を運び込もうと駆け寄ったあたりから、ずっと智巳を見ていた。

「何だ、沢村?」

「いえ、見てるだけではありません!」

「いや、何で見てるかを訊いてるんだよ」

「チーフの一挙手一投足にエースになる為の要素を見出すためであります!」

「あ、そう」

「そうであります！」

「うるさい。母校に帰り、さあ再び涙腺が緩もうという時に涙も引つ込むこのうるささ、つて奴だ」

「恐縮であります！」

「……………」

この男、空気を読めない。

読んでないのかもしれないが、良いと思ったことをすぐに実行する。

そんな沢村を無視することを暫時決めて、智巳は自分の荷物を運び込もうとしてくれる東条に目を向けた。

「東条、自分の荷物くらいは自分で持つからいい。お前も練習してたんだろ？」

「いや、でも…………」

「いいって。自分のことくらい自分でやるから、そんな時間あるなら俺に追いつくために努力してるんだな」

努力していたことを認め、更にその火を煽る。

なるほど、と沢村は思った。

「はいッ！」

「ま、この後祝勝会だから。死ぬほど走って死ぬほどウエイトして、ガッツリ腹空かして

戻ってこい」

このやり取り、沢村としては活かしたい。

エースっぽいと、何となく感じたからである。

そこで沢村は、自分の荷物の近くにいた金丸信二に目をつけた。

「カネマール！俺の荷物は運ばなくても——」

「言われなくともやんねえから、お前は自分でやれ。今日は智さんが完封しただけで、お前は何もしてないだろうが」

クリスの荷物を持ちながら、金丸は言う。

先程の言葉は『智巳が先輩であること』、『ある程度の尊敬を勝ち得ていること』、『エースであり、目標であること』の3つが揃ってはじめて機能する言葉である。

守護神とは言え、沢村は沢村だから機能しない。

「いいよ、カネマール。自分のことくらい自分で——」

「やれつつつてんだろうが、馬鹿」

「馬鹿!?!」

「おーおー、馬鹿つつたんだよ、馬鹿。この馬鹿」

完全に馬鹿にされながら金丸信二に去られ、沢村は久しぶりにぐぬぬ状態になった。

「チーフ、何故ですか!?!」

「立場が違うからだろ」

「ぐぬぬぬぬ」

ぐうの音も出ない正論を叩き込み、沢村を後に置いて智巳は部屋に帰る。

バスの中でアイシングしたから一時間程外気に触れさせて肩を休ませるが、風呂にも入りたい。

ちんたらしてはいられないのである。

「お前があいつの真似しても滑るだけだぞ、沢村」

「何故!？」

「身長2ーセンチ差、丸基調。パーツでかわいげ童顔のお前と割りと鷹めいた鋭角のパーツが基調のあいつとの顔の差、これまでの実績、今出してきた結果。はい、この4つ」

「ぐぎぎぎぎぎ」

智巳ー御幸コンビの熱い袋叩きにあいながらも、めげない・しよげないが沢村の持ち味。

愛しきタイヤの元へと駆け出そうとして、小湊春市に止められる。

「駄目だよ栄純くん。僕達のお風呂の順番は帰って直ぐなんだから、そんなことしてる暇はないよ」

「何故!？」

「いや、お風呂の順番がもうすぐだからだけど。皆が綺麗になって祝勝会に出るのに、栄純くんだけそのままって言うのは……」

「ぐむむむ」

「ま、まあ、練習は祝勝会が終わってからでも出来るし、ね？」

決意に水を差された沢村は、おとなしく風呂に入る。

烏の行水を小湊春市に押し留められながら、きつちりと入った。

御幸と智巳は一時間の間、ビデオを使って今回のピッチングの見直しをしてノートに

書き、キツカリ一時間後に風呂に入り、パパッと着替えて見直しを再開。

終わらせた後に祝勝会が行われる場所であるところの食堂に向かった。

「あれ、監督は？」

「俺達の前で泣いちゃったからか、今部屋に引き籠ってるんだと」

泣いてしまったことが少し恥ずかしい。

敵つい外見に反して割りとシャイで恥ずかしがり屋なところがある。

片岡鉄心は、泣いてしまった。

自分が三年間見てきた生徒が決勝に進み、勝ったことに。

甲子園への切符を、自らの手で掴み取ったことに。

自分の首がセーフになったとか、そんなことを微塵も考えずに、ただただ嬉しくて泣

いてしまった。

いい歳した大人が、である。

「純さん」

「わーつてるよ、思ってることあ同じだ」

監督を、引きずり出してこよう。

引きずり出して、みんなで祝おう。

祝勝会の料理が続々と出来ていく中、青道ナインは片岡鉄心を引っ張り出しに、監督室へ押しかけた。

7日後に、球児たちの最も熱い夏がはじまる。

覚醒

昨日西東京都大会、決勝戦が行われました。甲子園への切符をかけた一戦を、ダイジェストでお届け致します。

この試合は西東京の強豪校同士の絶対的エースがぶつかり合い、不動の四番同士が火花を散らした戦いでした。

まず成宮くんは立ち上がり、5割8分3厘7本塁打と言うこの大会屈指の強打者でありながらエースの斉藤智くんを三振に切つてとる上々の立ち上がりを見せますが、斉藤智くんも圧巻のピッチングを披露。

一番カルロスくんをキャッチャーフライ、二番白河くん、三番吉沢くんを三振に切つて捨て、一回を終えます。

試合が動いたのは、四回の裏でした。この回もあっさり二人をアウトにした斉藤智くんですが、三番吉沢くんにヒットを打たれてしまいました。

これをレフトの坂井くんがダイビングキャッチで捕球しようとするも、後逸。記録はスリーベースとなり、ツーアウト三塁で稲城実業の四番で主将・原田くんと相対します。エースと四番の戦いに期待がかかる中、ここで斉藤智くんは伝家の宝刀高速スライ

ダーで空振り三振にしとめ、ピンチを脱しました。

再び動いたのは、五回の表です。

ノーアウトでランナーは一、二塁。ここで迎えるは青道高校の四番・結城くん。

ツーストライクにまで追い込まれるも、電光掲示板を破壊するライナー性のホームランで好投を続けるエースを援護。

斉藤智くんに、援護が三点もあれば充分。援護を受けてからは白河くん以外のすべての打者三振させ、最後の9回にピンチを招くも悠悠切り抜け、9回19奪三振118球の熱投で、完封勝利。

東都の怪物と都のプリンスの直接対決は東都の怪物が制し、これで青道高校は六年ぶりの甲子園出場となりました。

と言うように、スポーツニュースでも、取り上げられている。

で、取り上げられた当人はと言うと。

「いつまで言ってたんだ、このニュースは」

「おま……そりゃあ昨日のことだからニュースは取り上げるだろうよ」

まだ朝だが、この二人と結城哲也は4時半に起きてランニングを済ませ、素振りをして朝風呂を浴びて6時に食堂に来ている。

このニュースが映っているのは、食堂の馬鹿でかいテレビが点いているからだ。二軍とベンチ組は興奮冷めやらぬという様子だが、一軍のスタメンと、結城と智巳と御幸以外はどこか明るく飯を食べている。

「だが、もう終わったことだ。次は甲子園に向けて切り替え終わっていないければならぬ」

そこに、この男が水をさした。

もう喜ぶのはいい。もう、次の目標を定めて走り出さなければならぬ。

エースは既に過去になったあの喜びに見向きもせず、ただ厳しい前を見ている。

「お前、走り続けてんなあ」

「止まることはいつでも出来る。動ける限りは走る」

「動けなくなったら？」

「動かすんだよ。当たり前なことを訊くな」

メンタルが強く、求道的な人間特有の精神論に領きながら、御幸は智巳に合わせて飯をかっこんだ。

智巳の言葉に、少しまだ甲子園に行けたことへの喜びの余韻が残っていた面々は引き締める。

このストイックさは真似できないが、それでも見習うことができた。

「純さん、外野ノックお願いでできますか？」

「おうよ。お前もピッチャーの時以外は守備固め無しでレフト固定なんだから、まともな技術を身につけろ」

「わかりました。今日はどのみち投げられませんか、お願いします」

「おう。昼まで徹底的に扱いてやるよ」

夕方になれば、智巳は投手陣を鍛えなければならない。

エース兼投手陣のまとめ役なので、結構やることがあるのである。

主に打撃では頭を使わな過ぎ、守備では頭で考え過ぎ、投球ではちようどいい塩梅のこの男。

ワンテンポ遅れるのは一々『右足を前に出して捕球して』とか考えているかららしいのである。

感覚でやれるようになるまでやる時間はないから、伊佐敷純は『どちらの足を出してもグラブを蹴ってしまわないようにする』と言うことを身につけさせる気だった。

一方倉持と小湊亮介の二遊間コンビは守備強化のためのノックを受けに向かい、他のメンバーも動き出す。

そして、御幸はと言うと。

「哲さん、今日はティーバツティングはしますか？」

「ああ。一三振もしてしまったからな。喜びは昨日だけでいい」

「なら、俺の打撃を見てもらえますか？ 粘れたは粘れたんですけど、打てなかったんで」「お前も来年の四番打者候補。守備だけではなく、万遍ない打撃を身につける時が来たようだな」

オーラを放ちながら、結城哲也は立ち上がる。

彼は家が近い為に基本的には通いだが、祝勝会から甲子園に行くまでは四人部屋である智巳の部屋に泊まっていた。

よって、朝飯もここで取っている。

今日は、例によって例の如くOBによって呼び出されて片岡鉄心は不在なので、メンバーは自主的に必要なメニューを考えてそれを行う。

自分で考え、実行する。

放任気味のこの気質は、選手たちの練習に対する自主性と自分の足りないところを見つめ直す目を育んでいた。

「やってるか、リリーフ陣」

昼までみっちり外野ノックを受けてもまだまだ元気なこの男は、予定通りブルペンに顔を出す。

Aグラウンドブルペンは丹波・川上・智巳・川島の三年・二年の主力が。

Bグラウンドブルペンは沢村・降谷・金田・東条の控えが順繰りに利用している。今は大会期間中だから沢村、降谷が中心だった。

と言うことだったのだが、斉藤がBグラウンドブルペンに移籍してから立場が逆転しつつある。

そもそもこうなったのは、投手の数が倍加したから。

そしてその原因は、いつものクリスによるピッチャー適性選抜が本格的に行われなかったことによる。

これによって、投手として受かった一年生はかなり多い。1学年に四人など、今まで無かったことである。

まあ、使い物になりそうなのが三人居るから別にいいやつてなもんだが。

「チーフ、実はこの沢村、内外真ん中の投げ分けができるようになったのですよ!」
「すごいな。俺は内外高低の九分割で投げられるけど」

さらっと沢村のどうですかアピールの頭を叩いて慢心を防ぎつつ、智巳はブルペン横の椅子に座る。

ここで暫く見て、褒めるなりダメ出しするなりして時間を過ごすと言うのが、最近の休憩混じりの夕方練習だったのだが。

「……先輩、少しいいですか」

「どうした、降谷」

お前から話しかけてくるなんて珍しい。

ちよつとそう思つて、智巳は目の前に立つ降谷を見た。

降谷眺。一年時から150キロを超す球速を持つストリートを投げることができる、青道の不動のセットアッパー。

一年時の智巳は150いっていなかったから、これはかなり凄い。

しかしノーコン気味で、四球が多い。長いイニングを喰えるスタミナがないのが欠点。

「何故先輩は、あの試合であそこまで背負い込んだんですか？」

「背負い込むと言うと、どこから察した？」

「泣いていた時です。クリス先輩が言っていました」

なら良かったと、智巳は思う。

多分あの時、背負いすぎを勘付かれていたのは御幸と哲さんくらいなもので、他には気取らせていないと思つていたからである。

クリスさんならば、気づかれていてもおかしくはない。

事実、その三人以外は智巳の背負いをエースとしてのものとしか見ていないから、隠蔽成功と言うべきか。

「何故、何故か。それはまあ、前に一回敗けていたからだな」

「だけど、それで気負ってまた敗けたら意味は無いのではないかと思います。先輩は実力では成宮に勝っていたのですから、普通にやればよかったのではないですか」

「ふむ」

そう言われるとそうだな、と思う。

前に敗けたから気負う。これは自然な流れだが、効率はどうかと訊かれればうんってなもんである。

普通にやれば勝てたのではないか。そう訊かれればそうかな、と頷きかけるが、今となってもそうは思わない。

何故なのかと、智巳は自分を覗くことにした。

こう言う客観的に自分を見る能力を、この男は豊富に持ち合わせている。

少なくとも、野球に関しては。

「多分、前回普通にやって敗れたからだな。勝てると思つて臨んで、思いの外打てなくて、思いの外打たれて、敗けた。あの日の成宮は俺より強かつたつてことを、俺はどこかで感じたから、気負つたんだらう。」

つまり野球と言うスポーツはある程度まで実力があるなら、苦勞して積み重ねてきた実力の差を容易く、その日その日のコンディションで覆されることを知つたからだと思

う」

「あんな球があつてもですか」

高速スライダー、高速フォーク。

一年後の、と言うか今でも高卒即戦力ルーキーだと騒がれているこの男の決め球2つは確かにすごい。

並みの打者ではバットに当てることすらできないだろう。

しかし、智巳は別にその球種を特別視している訳ではなかった。

「ま、すつぽ抜ければ終わりだしな。変化球なんてそんなものだ」

「そんなもの……?」

降谷としては、あの圧倒的な決め球2つをポイントと地べたに投げ捨てるような発言が信じられない。

あの球は、そう簡単に得られるものではない。だから、もつと信頼してもいいはずだった。

「そう。その程度の球」

サラッと、智巳は言う。

どんな変化球も、すつぽ抜ければ終わりだから。

投げられるのはすごいが、使いこなせなければ意味がない。

「自分を恃むのはエースとしての、心の中の柱になる。だけどまあ、決め球はあくまでも武器だからな。要は俺の出来次第。ただ投げればいいってわけじゃあない」

「どんな球であつてもですか」

降谷はストレートに自信がある。

変化球やストレートは十人十色。降谷のストレートには降谷のストレートにしかない魅力があり、智巳のストレートには智巳のストレートにしかない魅力がある。

「使う人間が不調なら、どんな球も打たれるさ。それに、これだけは自信があるって思っていたら、それが打たれたらどうする？」

降谷は、答えられない。

自分の一番自信があるストレートを、弾き返されたことがないから。

「自分に自信を持つていけば、敗けない限りはそんなこと考えずに済む。まあ、こればかりは場数を踏まないと身についていけないことかもな」

そうめて、智巳はふと後ろを見た。

御幸一也が歩いてきている。

「どうした」

「少し投げたいんじゃないかな、と思つて」

本当によく気がつくやつだ、と思ひながら軽く至近距離で緩くキャッチボールをした

後、御幸が18・44メートル地点でミットを構えた。

「ん?」

「どうかしたか?」

「いや、消えた。戻って構えてくれ」

消えたって、何が消えたんだ。

そんなことを思いながら、御幸はおとなしくミットを構えた。

「……御幸、ちよつと横に外れてくれ」

ちよつと首を傾げて、御幸は横に外れる。

そうすると大きく頷いて、智巳は戻るようにジエスチャーした。

「……おかしい」

目を瞑った後に両目の際を抑えて、首を振る。

どうにも様子が普通ではないエースに、流星に沢村も投げのをやめてクリスと共に駆け寄った。

「どうしたんですか、チーフ!どこかお悪いのですか!」

「お前さ、ここに立ってみ」

妙に冷静な智巳に手を引つ張られ、沢村は御幸の18・44メートル先に立った。

マウンドでの、ピッチャーとキャッチャーの距離である。

「え？はい」

「何か見える？」

「御幸が見えますけど」

当然のように呼び捨てにする沢村を咎めもせず、智巳は大きく頷いた。

「だよな。その筈なんだよ。でも、ここに立つとそうは見えないんだな、これが」

「……斉藤。何が見える？」

「うまく説明できないんですけど、真正面に正方形のワクが見えます。自分の中に輪があるような感じですよ」

「………すまないが、よくわからんな」

「あつ、気にしないでいいですよ。俺にもよくわからないんで」

少し心配そうな顔をしている御幸を座らせて、投げ込む。

ストレート。

指先が、自分の内にできた輪からずれたところを振り抜いていく。

放たれた白球は、少し構えられたミットから結構ズレて収まった。

「いい球だ」

「ありがとうございます」

隣で見ているクリスの一言にお礼を言い、また腕を振りかぶる。

今度は、スライダー。

自分の中の、輪がぎゅつと狭くなった。

そして、指が掠らなかつた。

かなりミットから着弾点がズレたが、御幸は何とか止める。

「キレてはいるけど、やっぱ日を置かないと制球が駄目だな」

「ああ」

さしたる驚きはない。そうだろうね、と言うような感じである。

フォークを投げて終わろうとした時、輪が大きくなった。

変な輪め、と思う。変化球を投げている時は基本的に小さかったのに、フォークに関

してはストレートより大きい。

この日の投球は、これだけ。

殆ど全ての球種を試して、終わった。

甲子園にて

甲子園大会の抽選が終わった。

西東京代表の初戦の相手は、大阪桐生。

その次は恐らく、西邦。怪物スラッガー佐野修造を擁し、大阪桐生よりも強力な打線を誇る。

いきなり大阪代表とあたると言うのは、どうなのか。全力でぶち当たれるから得なのか、全力でぶち当たられるから損なのか。

相手は強打の大阪桐生。青道としては打撃戦にしなければならない。先発は丹波。斉藤はレフトに入り、三番。一番小湊、二番伊佐敷、三番斉藤、四番結城、五番御幸、六番増子、七番丹波、八番倉持、九番白洲。

暫定処置とはいえ、西東京大会での打撃成績を含めて考えられたはじめてのクリーンナップの役割。

「緊張するか」

試合の少し前。

そう四番打者に声をかけられ、智巳は少し笑って頭を掻いた。

「はい。でもまあ、正直打撃の時は何も考えないので気は楽です」

「そうか。まあ、監督も繋ぐバッティングなんか期待してはいない。好きなように振れ」
一番だから当然ではあるが、結構ソロアーチが多い智巳。

彼の適性打順というものがいまいわからないから、シニア時代三番を打っていたというのと、三番を打つ打撃力はあるということとでクリーンナップに。

一番にしなかつた理由は単純で、疲労軽減のためである。

『さあ、夏のドラマがはじまります。甲子園大会の開幕です。先攻は青道高校。六年ぶりの出場になります。後攻は大阪桐生。四年連続の出場になります。』

大阪桐生の先発は、館。青道高校の先発は、丹波』

—— 一番セカンド、小湊亮介くん。

そう呼ばれて、この夏の甲子園大会ではじめての打席に立つのは小湊亮介。

西東京大会の決勝でのファイナルプレーでその名を知られた守備の名人。

今回はリードオフマンとしての出場である。

(相手は、ファーストストライクを取りに来るかな)

そう思ってヤマを張って振ったが、投げられたのはボールゾーンに落ちるカーブ。

空振り。

うーん、と小湊亮介は思った。

どうにも、自分を含めて大舞台に慣れていないからか、身体が固い。こういう時にこそ、割りとエラーと貧打が許されるあのエースに先発して欲しかったが、片岡監督はそれをしなかった。

(それってつまり信じてくれるってことなんだろうけど)

あつさりと、2球目のストレートを弾いてセカンドゴロ。

「球走ってたか？」

「重かったよ」

その通り、伊佐敷も3球目を詰まらされてセンターフライ。

「俺も含めて皆、身体が固い」

「そうですねえ。そんなに緊張する必要もないと思うんですけど。皆さん、普通にやれば勝てますよ」

「……お前は、余裕だな」

「まあ、大舞台でクリーンナップを打つのはよく考えると初めてでもないし、さほど珍しいことでもないですよね」

尊敬するキャプテンとネクストバッターで寸前まで話して、智巳は木製バットを担いで打席に立った。

(ホンマ、嫌な自然体しとるわ)

前二人が緊張していたと言うか、身体が強張っていたというのにこの男は違う。

場慣れしている。甲子園の独特の雰囲気呑んでかかっている。

『さあ、二年生ながらエースで3番、斉藤智。高校球児には珍しい木製バット使いで、西東京大会では既に7本の本塁打を放っています』

『いい打者ですが、まだ全国の強豪と戦ったわけではありませんからね。現に決勝戦、成宮との試合では4タコ。使いこなせているとは言えないんじゃないでしょうか』

『ミート力が足りない、ということでしょうか？』

『そうですね。パワーもなくはないのですが、甲子園で打てるほどではないでしょう。いいバッターなだけに、高校時代は金属で量産して欲しいものですが』

そうこうしている内に、ヘルメットがズレる魂のフルスイングで、ツーストライク。

『館もいい角度のついた重い球を投げますから。この打席はタイミングもあっていませんし、館の勝ちでしょう』

『そうですか』

打席の智巳は、その時タイムを取ってヘルメットを直していた。

あのフルスイングはもう才能のレベル、と言う鷹陣営と、いや、コンパクトにいかせるべきだという巨陣営の熱いレスバトル。

その風を巻き起こすような一振りごとに甲子園がどよめいている。

傍から見ても、何も考えないで全力でフルスイングしているとわかるのだ。

(館、タイミング合ってねえけど、慎重にいくぞ。ボール球になる、お前のスライダーを振らせる)

ツーストライク、ノーボール。

追い込んではいるが、これだけ振り回されると怖い。

要求したところドンピシャに、キレのあるスライダーが投げ込まれた。

(よし、完璧や！)

甲子園に鳴り響く、M i n t j a m の歌。

この道なら誰にも敗けない。そして、誰も代わりになどなりはしない。

さもありなん。こいつは野球の天才である。

横顔さえ輝いて見える。さもありなん。こいつは顔立ちがいいから。

しかし、これは打てない。

そのスライダーを捕球しようとした、その時。

黒塗りの木製バットが白球を捉えた。

(あ、曲がった)

打ってからそう思って、智巳はバットを投げて一塁方向に歩き出す。

(まあ、反応できたからいいか……)

ぼんやりとそんなことを考えながらダイヤモンドを一周する。

白球は、思いつ切り引つ張られてバックスクリーンの一番奥深くに突き刺さっていた。

実況も、解説も。観客すらも黙っている。

一周し終えたあたりで、甲子園球場が沸いた。

『……外に逃げるスライダーを木製で引つ張つてホームランつて、どれだけパワーがあるんですかね』

『ちよつとこれは……ヤマを張つてたんでしよう。恐らくは。無茶苦茶な打ち方ですが、入れば得点に変わりはありません。これで青道が先制しました。1対0です』

帰ってきた智巳は、これから打席に入る結城とタッチし、ネクストバッターズサークルに居る御幸と少し話して戻ってきた。

「あれ、狙つてた?」

「え?」

「外角のスライダーを引つ張つて、つてやつ」

「ああ、スライダーだったんですね。曲がったこと以外わかりませんでしたよ」

自分の専スレがひっそりと落ちていることも知らず、智巳は沢村にドリンクを頼んで飲んだ。

相変わらずの核弾頭ぶりである。

「と言うか、亮さんも純さんもわかったでしょう?」

「何を?」

小湊亮介が訊き返すと、智巳は沢村に紙コップを返してバットを少し撫でた。

投げている割りには扱いが丁寧なあたり、雑なのかそうでないのかわからない。

「いや、甲子園って言っても、ホームランを打てば点は入るし、ヒットを打てばヒットになるんですよ。皆さん、固くなりすぎですよ」

「……お前、これを言う為にホームラン狙ってたんじゃないだろうな」

「哲さんは狙って打てるらしいですけど、俺はそこまでではないので打てませんよ。塁には出ようとしましたけど」

伊佐敷純の言葉に平然と答えると、バックスクリーンに白球がかつ飛んでいつてる。

「哲さん、いつもみたいに打てたでしょう?」

「なるほど、打てるものだ。なんてことはなく、ここでもやっていることは野球だな」

お前らの会話はおかしい。

皆がその思いを深めていると、金属バットの快音が鳴った。

観客の怒濤の如き声援にも動じずにダイヤモンドを一周してきた相棒とタッチして、

智巳は『いつも』を貫き通す。

「おっ、凡退か」

「ソロだよ」

「平然と嘘をつくなよ、お前」

「いや、マジだって。俺は劇的な場面で美味しい部分搔つ攫うのが好きだからさ」

智巳が打ったのは、レフトよりのバックスクリーン。

結城が打ったのは、ライトよりのバックスクリーン。

御幸が打ったのは、バックスクリーンど真ん中へのソロ。

ここまで来たら打とうと思つて振つた球がドンピシャに読みが当たつており、御幸は打てた。

バックスクリーン三連発。阪神ファンは大喜び、喜んだ阪神ファンが応援に来る、そのぶん士気が上がつて楽になる。

「これで地元のファンを盗れる。応援が大きくなる。そしてそのぶん楽になるぜ」
「お前、そこまで考えて打てるつてのは、ある意味才能だよ」

来た球を打つたらホームランでした、打てるなと思つて打つたらホームランでした、と供述する3番と4番と違い、いづらか理性的ではある。

六番の増子がヒットを打つも打てない投手の丹波がアウトになり、チェンジ。

「さあ丹波さん、相手は動揺してますよ。ここをピシヤツと抑えて完全に殺しときましょう」

「お、おう」

凄まじいストレートな表現に、甲子園で初めて投げる栄誉を授かった丹波は頷く。

実は昨夜、彼は智巳に『いいのか』と訊いていた。

才能の差とか、価値観の差とか、劣等感とか。

そんなものを抱えながらも、何だかんだ言つて丹波はこの年下のエースを尊重している。

おそらくこのエースが居なければ、甲子園には行けていない。

ならば甲子園初先発という栄誉はこのエースにこそ与えるべきではないかと思つたのだ。

自分もその栄誉は欲しかったが、尊重すべきはエースだろう。

しかし、エースは言つた。

そんなくだらないことはどうでもいいので、勝ってくださいと。

やはり価値観が合わないが、勝たなければならぬ。

奮起した丹波は、普通に強い。一発病こそあるものの、強豪校のエース格である。

彼は、完全に打ち砕かれた館広美を攻略してかかった打線の12点の援護を守りき

り、甲子園初先発を9回3失点で飾った。

片岡鉄心は、エースで四番の館広美こそが投打の要だと知っている。だから早めに攻略することこそ急務だと考えていた。

クリーンナップに対大阪桐生戦での打撃結果が良かった三人を配置したのは、その為である。

この三人は見事に期待に応えた。

齊藤智巳、『本塁打、二塁打、四球、四球、四球、併殺』。

結城哲也、『本塁打、二塁打、二塁打、四球、三振、四球』。

御幸一也、『本塁打、単打、四球、三振、三振、二塁打』。

クリーンナップで7打点。驚異的な打線の強さを、この時青道は証明した。

心攻

勝ち残れるのは。

一回も敗けずにこの夏を終えられるのは四十九のチームの中で、たった一つのチームだけ。

大阪桐生を破り、二回戦に駒を進めた青道高校。

一回戦、大阪桐生。

二回戦、西邦。

立て続けに強豪と当たる復活した名門、青道高校。

高校67本男、今大会では一戦目で140メートル弾も放った超高校級スラッガー、佐野修造。

極めて珍しい木製バットの使い手にして既にこの大会で本塁打を放っている。甲子園初先発初登板となる敗けないエース、斉藤智巳。

この大会での目玉の対決が、既にはじまろうとしていた。

「佐野とは前、練習試合で戦って勝った。恐れ過ぎずに、ガンガン攻めるぞ」
「当たり前だ。誰にも敗ける気はない」

まず一球目を投げる前にマウンドに上って言葉を交わし、プレイボールの声が上が
る。

『一番ショート、宇都宮』

いい景色だ、と思った。

打者が下に見える。マウンドが高い。

心なしか、御幸が近く見える。

ピンチの時には遠く見える、18.44メートルの距離が、手を伸ばせば届きそうな
ほどの距離にある。

『以心伝心と言っていていいでしょう。この世代最強バッテリーが選んだ最初の球は、スト
レート』

『いきなり150を出してきましたねえ』

返球を捕り、少し前屈みになってグラブを前に出す。

領いて、2球目。

チェンジアップ。108キロ。空振り。

『極上のチェンジアップです。その速度差は約40キロ!』

最初は、三振ではじめたい。

幸先良いスタートは、丹波さんが既に切ってくれた。

ならば、やることは一つ。

『空振り三振——152キロ高速フォークで三振を奪い、エースが吼えた！』

二人目、ストレートで見逃し三振。

三人目、ストレートで空振り三振。

三者凡退。素晴らしい安定感で立ち上がりを終えて、智巳はヘルメットを被って打席に立った。

三番から一番に、この時打順が元の適性位置に戻っている。

『一個目の三振で吼える程の闘志が、斉藤智の代名詞です。この三者連続は名刺代わりになりました！』

『こうも良いピッチングを見せられると、西邦側も気負うでしょうからね。この立ち上がりが、重要になってきます』

『青道の攻撃は斉藤智からですからね。彼の木製バットでの打撃はかなり注目されてますから、どうかああああと！』

内角の難しい球をコンパクトに腕を畳んで打った！これはフェンス直撃のツーバーズになりそうです！

しかし斉藤智は歩きはじめていますが——』

智巳の木製バットが力んだ1球目を捉えた。

白球は、ライナー性。

低い弾道を維持したまま、本当にそのまま、真つ直ぐバックスクリーンに突き刺さる。『入ったああああ！初回初球、先頭打者ホームラアアアアン！センター佐野の頭を、弾丸ライナーが唸って超えて消えていきました！』

斉藤智、これで甲子園通算二本目！二回戦で二本！』

『ミートしたというより、あのライナーの速さを生み出すパワーが凄まじいですね。敵チームからすれば当たれば飛ぶ、しかも結構当たるので怖い』

熱狂する実況と、ちよつと慣れてきた解説。

青道ベンチも、そんな感じであつた。

「やっぱ一番っていいですね。不思議としつくりとききます」

「そうか。だが、三番の時の打撃も悪くはなかつた。中軸を打った時の感覚は忘れないようにしろ」

「は、」

片岡鉄心の言葉に頷き、智巳は静かに前を見た。

明らかに、敵のエースは動揺してしまっている。

不甲斐ないな、と智巳は思った。

初回到被弾してもあと全部ゼロ封すればまだ巻き返しが効くのに、動揺が先に立つて

しまっている。

バッテリー間のタイムを取るも、二番小湊亮介、三番伊佐敷にヒットを打たれ、四番結城。

ここで西邦は守備のタイムをとった。

「速いな。二回しか使えないのに」

「誰のせいだと思ってるんですかね、智さん」

「向こうのエースのせいだろ」

ぐうの音も出ない正論とはこのことであろう。

言うなればこれは智巳が轟雷市に初回先頭打者ホームランを打たれましたというようなもので、彼は恐らく『やってしまった』と思いつながらも後続を切るだろう。

既にメンタルとフィジカルはプロ並みなのだ。

結城哲也の応援歌、ルパン三世のテーマを御幸・智巳・沢村が輪唱している内に、守備のタイムが終わる。

どうでもいいが、この三人は妙に器用なところがある。合唱ではなく輪唱するあたり、特に。

「あ、リーダーから逃げるとは卑怯なり！」

「敬遠も配球だ。逃げられて敗けたら、それはチームの敗北。野球がチームスポーツで

ある以上、それは敗けだろ」

タイムが終わった時点で御幸がネクストバッターズサークルに行き、伊佐敷も小湊亮介も塁上。

暇してのお話し相手は沢村くらいしか居ないわけで、自然と智巳は沢村に意識を向けていた。

だがまあ、マシンガン打線に例えられる青道打線は強い。

四番ローズを避けても、五番の駒田が居る。

四番結城を避けても、五番御幸が居る。

ニヤリと笑って、打席に立つ御幸からは陽炎のようなオーラが立ち昇っていた。

「どうして満塁で御幸に回しますかね」

「回した結果満塁だったってことだ。現実性のある哲さんの方が怖いしな」

打順の所為ということもあるが、プレイボールソロアーチスト智巳。

チャンスに強くスリーランホームランが多い結城。

恐怖の満塁本塁打男、チャンスに強い打点乞食、御幸。

打線が怖い。打線なら全国屈指である。

『これでボールスリー！御幸の前に、西邦のエース古河、ストライクが入りません！』
青いランプが3つしか灯っていない。

塁上は全て埋まっている。

「ピッチャーにとつては、堪らない状況だよな」

「流石のチーフもキツイですか！」

ピンチであればピンチである程、楽しいと思うのがこの男。

身震いする程に喜んで、彼はピンチに向かつていく。

でも流石にこの状況はキツイのかと、沢村は少しの共感と共にそう思った。

「いや、すつごく楽しそうじゃないか。あそこを無失点で切り抜けてみる。敵の勢いを殺せるぞ」

「あつ、はい……」

でもまあそんな共感は無意味だったわけである。

こいつは野球を全力で楽しむ。単純に、ピンチを切り抜けるときのヒヤリとした感覚が楽しいのだ。

一方、打席の御幸。

(ストライク入んなきゃ打ち様がないから、別に四球でもいいんだけど、どうなんだろうな)

見逃してもいい。甘く来れば叩く。

そして4球目は、スツと入ってくる甘いスライダー。

(あー、最悪なパターンだよな)

ボールがストライクにならず、カウントを悪くして甘い球を投げて痛打される。飛翔する球を完全に見送って、御幸はダイヤモンドを一周した。

5対0。

エース古河、アウトを一つも取れず5失点。そのままレフトに入り、マウンドには水戸。

「師匠、あの水戸さんとは？」

「スライダーとフォーク、140キロを超えるストレートを持つ二番手ピッチャー。コントロールが悪く四球が多い。しかし荒れ球で、被本塁打自体は少ない」

青道のデータベースに代わって智巳が答え、

「……よく覚えていたな、斉藤」

「いやまあ、エースですし、一番打者ですから」

実際この男は、実戦までは頭を結構使う。実戦になってからは打撃ではもう勘でしか打っていないが、ピッチングでは結構考えてたりもするし、御幸と話し合ったりもする。割りとインテリであった。野球馬鹿だけど。

一方打撃陣は増子のツーベースに続けず、見殺しのような形でチェンジ。

「行くぞ、御幸」

「は、い、よ」

ここで四番・佐野修造。

これは実にいい。敵にはこちらの猛攻の後で

も、佐野さえ打てばと言う雰囲気がある。佐野なら打てると言う雰囲気がある。

相手の中核を捻じ伏せて、ここで完全にこのゲームを支配下に置く。

『今大会注目の、シニアの時には国際大会で日本を世界一に導いた黄金バッテリー対、高校通算67本の超高校級スラッガー・怪物佐野修造！』

甲子園の雰囲気盛り上がる。

関東最強でしかなかった右腕が、全国に出る。

この勝負で、全国レベルかどうか証明される。

(大丈夫だな、こいつ)

完全に見下ろしている。どこか挑む姿勢が強かった稲実戦とは違い、泰然と玉座の上から肘掛けに肘を立てて見下ろしている。

(そうやってる内は、お前は負けねえよ)

勝とうぜ。

そう思って、ミットを構える。

ニヤリと笑った捕手の構えたその場所に、乱れもせずにストレートが入る。

お前らのエースとは格が違うと、端的に示した1球目。

ストレートで空振りを取り、佐野ならという気持ちで陰らせた2球目。

見逃しに追い込んで、完全に試合の支配を終えた3球目。

いずれも、ストレート。

吼えすらせず、斉藤智巳は打席から去る佐野を見下ろしていた。

『怪物佐野を全球ストレートで3球三振！怪物を倒すのは、やはり怪物しかいないというのか！』

斉藤智巳！東都の怪物が、怪物佐野を圧倒しています！』

五番前橋を見逃し三振、六番千葉を空振り三振。

いずれも、ストレート。

「ナイスピッチングだ」

「ありがとうございます、哲さん」

更に頼もしきが増している。

その不敵さに思わず笑い、ヘルメットを渡す。

次の打席は、智巳から。

「じゃ、トドメ刺してきます」

「こつちに回してもいいんだぞ」

「いやいや、佐野についてことです。相手の投手陣は御幸が殺しましたから、これくらいはしないと」

黒塗りの木製バットを担いで、打席で背を反らす。

強打者のモーシヨンに、敵のキャッチャーが警戒心を抱いたのがわかった。

初球、アウトロー厳しめ。

その球を、長い腕を伸ばして叩いた。

ボールが、消える。

『うわあああああ！またいったあああ！センター佐野の遙か上！』

打者としても自分の勝ちだと言わんばかりの特大のアーチが甲子園の最上段に吸い

込まれる！これで今大会第三号オー！』

驚愕と賞賛の視線を受けて、悠々と。

稲実という壁を乗り越え、覚醒した怪物が帰還した。

「監督、継投考えておいてください。俺はノーノーとかにこだわりはないので」

「……わかった」

さも当然のようにノーノーを狙えるピッチングをすと言ったエースの言葉を、誰も疑わない。

この男ならやる。その確信が共有できていた。

そして、5回の裏が終わって。

ノーノーどころか完全試合中。

「初登板でノーノー、あるいは完全試合は、誰もしたことがないだろう。本当にいいんだな？」

「野球は、チームスポーツです」

「わかった」

言葉通り5回までヒットどころか四球すらないエースに問い、帰ってきた言葉に頷く。

「降谷、マウンドに上がれ。レフトには斉藤」

「……はい」

静かに燃える、剛球投手。

その闘志は敵にも、味方のエースにも向けられていた。

「佐野と対戦して、色々学べ。牙は抜いておいたから」

「……今は」

「うん？」

「今は、牙を抜かれた敵を用意してくれたことを感謝します。ここを乗り越えて……僕が、あなたを超える」

エースナンバーをいただきます。

そう言った後輩の頭にポンと右手を乗せて、智巳はレフトへ走っていった。

背には、1。

まだ遠いよと言わんばかりに、その背は遠ざかっていく。

「御幸先輩、リードはお願ひします」

「はいはい。完封リレーで終戦と行こうぜ」

5回、47球、無四球、12奪三振。

途中から手を抜いて打たせてとっていたから、奪三振は少ないがそのことは観客もわかっている。

手を抜いているのだ、と。

高速スライダーを使っていないのだから。

完全に見下ろしたピッチングは、既に習熟すら覚えた。

だが、見たいものは見たい。

『最後まで投げさせてやれよ』と、観客が叫んでいた。

「あの人の後を投げるに、相応しいピッチングをしますから」

「言うようになったね、お前も」

「……目指す場所が、わかったので」

降谷暁は、レフトを見た。

そこには、エースナンバーが映える男が、隣の伊佐敷と快活に笑いながら守りに入っている。

トン、と右拳を軽く胸に触れさせて、レフトを見て闘志を燃やす降谷に活を入れた。

「さあ、前を見ろ。行くぞ」

「……ええ」

阿吽

降谷暁は、その後の四回を完全にシャットアウト。

前はスタミナに不安を見せていたが、余計なことを一切させず、リリーフとして起用している間に死ぬほど走り込まされたことと、智巳の地獄のスパルタ制球訓練でつけたそこそこの制球力で、降谷はその剛速球と縦スライダーで三振の山を築き、牙を抜かれた西邦打線を危なげなく（5四球）抑えきった。

四球は出してもいい。もうこれはしようがないから。
だが、しめるところをしめろ。

アドバイスに従った投球が実り、12対0の完封リレーで青道は二回戦を乗り切った。

三回戦は再び丹波が先発。

しかし、先頭バッターの智巳がサウスポーと緩急に弱いことが成宮戦で露呈していた為、徹底的なサークルチェンジ攻めにしてやられ、敵先発の前に3三振。

打線も10個の三振を奪われ、核弾頭が湿気って自慢の打線は不発。

智巳と結城・増子・御幸で9点しか取れず、5点取られるこの有り様。

最後の2イニングを沢村が締め、一試合奪三振記録と連続奪三振記録を更新した神奈川県代表を破り、準々決勝へ駒を進めた。

「……智巳。お前は、本当に遅い球に弱いんだな。少し意外だ」

ただの大型扇風機だった一番打者に向かって、結城は言った。

「まるでランナーが居ない時の俺のようなバツティングだったな、智」

フルスイング三振量産機だったエースに向けて、正捕手は言った。

「一人でチーム三振数の3分の1を稼ぐなんて、なかなかできるもんじゃないよ」

遅い球に合わせようとすらすらせずに自分のスイングを貫いた男に、俊足巧打鉄壁の二塁手が言った。

「守備の珍しいまともさに気が弛んでんじゃねえか、お前はよおー」

今回も1刺殺を記録し、投手陣の防御率の低さに一役買っている外野手は、結構守備がマシになってきたレフトの後輩に言った。

「ホームランはどうしたんですかチーフ！」

「……しっかりとってくださいよ、先輩。目標なんですから」

後輩二人は、目標としているエースが他校の選手に三振させられまくったことがお冠らしかった。

「本当に申し訳ないと思っています。特に丹波さん。すみません」

「いや、1試合目に援護はもらったからな。平均して見ればウチの野手陣でも屈指の打者なんじゃないか？」

何と言つても、既に3ホーマー打っている。先人に並ぶ記録を、それも木製バットで打ち立てたと世間では大フィーバーが起こっているのだ。

丹波の指摘は正しい。
が。

「屈指で終わってもらっては困るから言ってるんだよ、光一郎」

「そうだぞ、丹波。智巳はもつとやれるからここまで言っているんだ」

「こいつならまだまだやれんだろ、丹波ア！」

小湊亮介、結城哲也、伊佐敷純の三人が連続してその認識をたしなめる。

これには、丹波も少し同情した。

斉藤智巳は確かに才能があるが、あくまでもピッチャー。この夏は予選から通して無失点なんだから少しくらいの不調とか、苦手とかは見逃してやってもいいんじゃないか、と思うのだ。

ちなみに丹波が智巳に同情するなどはじめてのことである。

「その通りです。期待に応えられず申し訳ありません。なんの申し開きもできません」

「遅い球を打つコツは、身体で感じることだ。来た球を打つ。それが出来るなら、速度も

変化の一枠としてみてみたらどうだ」

「それか、追い込まれる前に早打ちを心掛けてみろよ。ボール球打つてもお前のパワーなら飛ばせんだろ」

「悪球打ちは無理にしようとするとならフォームを崩すよ。奥の手にでもしておいて、狙わないでおきな。」

敵の球に当てる技術を得たほうがいいんじゃないかな。フルスイングしながらも、ミートを心掛けて広く振ってみなよ」

否定するだけではなく、責めるだけではなく、代替案を用意して、期待してくれる。

この期待に応えたい。

バットで、ピッチングで。

応えたい。

「いや、亮。フルスイングに不純が交じっては意味がないぞ」

「その前に哲は感覚的過ぎるんだよ！」

「そう言う純も悪球はひよいひよい打てるのは自分くらいだっと思って思った方がいいんじゃない？」

……時々、本気になり過ぎて喧嘩していることもあるけれど。

それでも、本気で向き合ってくれることが嬉しい。

「俺もなれるなら、あんな先輩になりたいな」

「俺にとつてのチーフもあんなもんですよ。喧嘩してませんし、先輩と言うより目標ですけど」

きよとん、とした顔でそう言う沢村の頭をポンと叩いて、智巳は言った。

「俺なんか、まだまだだよ」

「そうですかね」

「そうさ」

お前は誰が一番正しいと思うんだ、と言う先輩三人衆からのキラーパスをスルーしながら、智巳は思う。

この夏が終われば、自分は最上級生。

自分たちはこの人たちのようになれるのかと。

心も実力もある、この人たちのように。

時は準々決勝の前。

強いだけではチームは纏められないと、わかっている。

それをわからされる度に哲さんは偉大だと、智巳は思うのだ。

後、三試合。そう考えると泣きそうになる。

「後、5日……」

「俺でも寂しいんですから、チーフはより寂しいでしょうね」

「寂しい」

背番号1がよく似合う背中が少し萎んで、ホテルの廊下に消えていく。

その背中を見て沢村は、なんとなく胸が苦しくなった。

これが甲子園なんだと、思った。

たった1試合で、たった一度の敗けで、夏が終わる。そして、勝ち続けても別れが来る。

その夏は二年半の集大成で、夏が終わると言うことは二年半が終わると言うこと。

自分もたぶん、こうなる。

このエースと同じチームで居たいと思って、寂しくなる。

「お前、ホントに智のこと慕ってるよな」

「……何か、本当にエースだなんて。本当に。この人みたいになれば、エースになれる。そうわかってるし、惜しみなく教えてくれるから、尊敬できる」

普通にタメ口ききながら、きかれながら会話できる御幸と沢村も大概仲が良い。

「隙あらば騙してくるあんたと違ってなあ!」

「いい加減、入部の時に騙したことくらい許してくれてもいいんじゃないの?」

「計7回!あれから更に6回!」

「あー、そうだったけ？」

「うがー！」

沢村をいなしつつ、ホテルの廊下に消えたエースを追っていく御幸は沢村を振り切り、智巳の背を叩いた。

「暗いな、エース」

「まだ百試合くらい一緒に試合がしたい」

「うん、無理だな」

後に144試合×15くらい一緒に野球をすることになるが、現時点ではあまりにも物凄い無茶ぶりに、逆に冷静になった御幸は、取り敢えずロビーに連れ出すことにした。適当にテレビをつけると、熱闘甲子園がやっている。

選手特集のようである。

『投げる！』

あつ、ピッチャー特集ですかとわかる実にわかりやすい編集である。

『青道、斉藤智巳！194センチの長身から繰り出される153キロの快速球と、ストリートと等速の高速フォークと高速スライダーで三振の山を築く！投げては8連続奪三振、打っては記録に並ぶ3ホームー！』

連続三振と、1試合最多奪三振、1大会の最多奪三振、1大会の最多本塁打記録など、

様々な記録の更新が期待されている!』

西邦・佐野修造を完全に叩き潰した試合の智巳のインタビュが入り、次の特集選手は巨摩大藤巻へ。

ちなみに3三振を喰らった松井裕樹が一試合22奪三振、10者連続奪三振と言う記録を打ち立てている。

つまり基本的に甲子園では連投の為に完投しないこの男が、最低八回まで投げなければならぬ22奪三振と最低30球は投げなければならない10者連続奪三振と言う記録を打ち立てるのは難しいのだが、マスコミは実力だけを見る。

性格は一切無視して、不可能ではないと見られていた。

『巨摩大藤巻の一年生エース、本郷正宗!』

150キロを超えるストリートと、140キロのスプリットで三振を築く本格派! 清正社を完封で下した、プロ注目の右腕!』

投球を見ると、誰かに似ている。

落差と落ち始め、球速で負けているものの素晴らしいスプリット・フィンガー・ファストボール。

ここその場面で三振を取ると吼える、闘志剥き出しのピッチング。

「へえ、似てるな」

「え、誰と？」

「……あ、うん。いい」

フォームは違うが、カーブ、スプリット、縦のスライダー、カットボールなど、豊富な戦力になる球種を持ち合わせている。

面倒な相手だなあ、と御幸は思った。当たるなら決勝戦なので、疲労も溜まっているだろう。

キツイ。それが正直な感想だった。

そうこうしている内に、インタビュウがはじまる。

『巨摩大藤巻の初優勝まであと三勝。どのようなピッチングを心掛けますか？』

『後一勝』

目付きが鋭く愛想が悪い。

インタビュウさんも大変だなーと思いつつも、後一勝とは何だ、とも思う。

「確かにこいつらが次に当たる白龍を意識してるのはわかる。だけど決勝であたる我が哲さん——もとい、青道を眼中に入れないってのはどうなんだ」

「黙って続き見ようぜ、智」

多分そうじゃないから……とかこぼす御幸。

お前は覚えてないかもしれないけど、こいつお前をめっちゃめっちゃ意識してたじゃん、

と。

『後一勝と言うことは、白龍戦が壁ということでしょうか?』

『壁にもならない。青道に勝つことしか、考えてない』

『青道と言えば、斉藤智巳選手でしょうか?』

なんで?と智巳は思った。

哲さん居るじゃん、と。哲さんこそが青道の魂みたいなもので、哲さんが居なきやここまで来れなかつたじゃん、と。

「おいおいおいおい、このインタビュアーなに哲さん無視してんの?」

「……投手にインタビュアーしてるからじゃないかな」

「だからこそ打者をだな」

哲さんのファンと言うか、人間的にも野球への姿勢の師匠として尊敬しているからというか、とにかくこいつは哲さんが無視されたりするとうるさい。

斉藤智巳と言う名前を聞いた本郷正宗がどこか怒りを孕んだ顔に変わっているが、こいつも笑って怒っている。

『……あいつには、借りがあるので』

睨みつけるようにカメラを見る本郷正宗の眼は、挑戦者のそれだった。

原田雅功が、成宮鳴が、神谷カルロスが、白河勝之が、山岡陸が、かつて見ていた視

線。

「本郷正宗か」

「あいつだけだよな。お前の絶好調時の本気で戦ったのは」

「そりゃ絶好調で決勝戦まで行けて、本気を出せること自体が珍しいからな」

戦力が揃ってきたシニア三年目に、やっと智巳は自分に負担をかけず他のピッチャーに任せて野手になっていられた。

決勝戦に登板した彼はそりゃあもう強かった。体力は満タン、絶好調。ノーノーしてホームラン打って終わり。味方打線が本郷に歯が立たなかつたから、結果的にそうなった。

「今大会も行けそうだろう?」

「ああ、そうだな。5回しか投げてないし」

準々決勝は、山守学院。

神足兄弟という双子バッテリーを中軸にした投手力のチームを相手にする。

先発丹波の疲れと打線の不調(9打点)も考えて、先発は斉藤智巳。

「阿吽のバッテリーって言うけど、どんなもんだと思う?」

「さあ……でも、キャッチャーが思うことをピッチャーが素直に履行できたら強いだろうよ。ピッチャーってのはエゴイストだから」

冷静な分析に、御幸は少し笑った。

確かに、こいつはエースにしては珍しくエゴイストではない。

エースと言うのは君臨するだけではないと知っている。勝つ為なら、記録とか意地とかを捨ててマウンドを降りる。

「そのエゴを刺激して、連携を壊せば勝てると思うよ。俺は」

「リードでは勝負しないで、心を攻めるってか」

エースだからこそわかる敵エースの心理と、その穴をつく戦術。

割りとは有効なそれに領いて、御幸はニヤリ悪そうに笑った。

「心を砕くんじゃなくて、押し潰していこう。智、これにはお前のピッチングが八割を占めるから、頼むぞ」

「言い出したのは俺だ。やるさ」

どちらが阿吽か。

熱闘甲子園もそう煽っているこの大会ベストバッテリーを決める戦いが、明日はじまる。

準々決勝、山守対青道。

史上最強打線

山守対青道。

この試合はどうなるんだろうと、甲子園ファンたちは興味を持っていた。

双子バッテリー対幼馴染バッテリー。

貧打対豪打。

山守が勝てるとすれば、投手戦。

しかし、青道は舘広美・古河義輝・神奈川のドクターKら好投手を燃やし尽くしてここに来ている。

神足弟も、危うい。

神足兄のリードの出来次第かと、言われていた。

「まず、一番の斉藤は打たせちゃダメだ。こいつが打つと、青道打線は勢いに乗る」

「うん、あんちゃん」

「だから、最悪歩かせてもいいから厳しく攻める。先頭バッターに四球は禁物だけど、こいつは例外だ」

初回先頭打者本塁打男。

館広美、古河義輝の心に直撃させたその本塁打を弟が喰らえば、また同じ目に合う。それには、後続を打ち取ることに。

御幸さんサイドがどうやって心を攻撃して確実に勝てる体勢に持っていかかということを考えている時に、この二人は如何に凌ぐかを考えていた。

「斉藤はすごい投手だけど、いつも途中で降板してる。今年に入って完投したのは稲実戦だけだ。粘って粘って、後続を打つ」

と言つて、粘れた相手がいけないことをこの二人は知らない。

甲子園大会準々決勝。

山守学院（山梨）対青道高校（西東京）。

先発は、山守学院が神足弟。青道高校が、斉藤智巳。

当然ながら、エース対決となる。

甲子園のマウンドに上がるのは、二度目。

いい景色だと、再び思った。

「いい気分だ」

「今回も無安打無失点記録は伸ばせそうか？」

「ああ」

悠々と、マウンドに立つ。

妙に調子がいい。御幸の構えたところに投げられている。勝ちたい。

チームの為に、応援してくれる皆の為に。

そして何よりも、先輩たちの為に。

まだ、このチームで戦いたい。

「今日は投げきろうかな」

「そうだな。丹波さんも疲れてるだろうし、準決勝は継投になる。投げきつてくれ」

「任せろ。せっかくだし、ノーノーでも狙おうか」

「いいね。やろう」

切れ長の眼を斜めに流して、智巳は平然と御幸の冗談を受け止めた。

「最後まで投げさせてやれよと、観客に言われた。なら、投げきる姿を見せたい」

「……なるほど、珍しく狙ったと思えばそれか」

「そ。それ以外にないだろ？」

一番穴山が打席に入り、御幸がホームベースの後ろに座る。

プレイボールと、球審が言った。

(智、狙うなら連続奪三振も狙ってみろ)

(それは決勝でやろうと思ってただけど?)

(じゃあ決勝では完全試合でもしてみろ。それなりに良い記録になる) それもそうか。

そう心で笑って、智巳は打者を睥睨した。

相手にならない。

遊び球なし、ストレートでの3球勝負。

二番一条、三番小幡と連続で三振を取り、吼える。

「智。お前、コントロール良くなったよな」

「お前が近くに見えるんだ。18.44メートルで投げたのが、キャッチボールみたいに投げられている」

夏男だからか、或いは稲実と言う壁を乗り越えたからか。

それはわからないが、この成長は素晴らしい。

巧緻なまでの制球を得て、使えるピッチングの幅が増えた。

恐らくこれは一過性の、所謂ゾーンに似た物であろうが、こちらとしてはそれがある内はその味を活かしきってやればいい。

もともと勝利の為ならば伶俐狡猾になれる。このコントロールで散らし、ヤバイと思えば逃げる。審判を騙す。

こういうような、好き勝手をしたい。

「打順、お前からだろ。行つてこいよ」
「ああ」

木製バットを担ぐようなフォームで打席に入り、投げられる寸前でクイツと神主気味に広げて打つ。

変なフォームだなと思うが、本人曰く『横目にバットが見えると気が散る』らしいから担ぎ、『反応できれば打てるし、反応できなければ打てない』から、これでいいらしい。だから、打てない時は打てないし打てる時は打てる。状況に合わせたバッティングができないこともあるし、とんでもない時に打てたりする。

—— 全力で振り切つてこい。自分のスイングを貫け。

そのとんでもないフルスイングと打撃が成立しているのは、そう言つて一番に据えた片岡鉄心の教えによる。

本当に、来た球しか打てない。

あそこまで振り回されると、怖い。

キャッチャーとしてはそう思う。しかもここまでで甲子園通算三本目。当たれば飛ぶことを、成績が物語っている。

外角に低く外れた球を捉え、低い弾道が、スタンド目掛けて伸びていく。

智巳がバットを投げていないと言うことは、いかない。

あの弾道でも行くことはあるが、投げないとホームランにはならないのだ。

感覚で変わるのかもしれないが、とにかく投げればどんなに低い弾道だろうがスタンドに行く。

バットを投げなければフライ、ファール、或いは二塁打。

今回は、ファールだった。

ツーストライクツーボールで、智巳はバットを短く持ち直す。

『ここでバットを短く持ち直しましたね。ヒッティングでしようか』

『どうせならフルスイングのままの方が面白かったんですけどね』

カメラに映し出された映像に、実況が気づく。

そして当然、神足兄弟バツテリーも気づいていた。

ヒッティングに切り替えた智巳は、正直あんまり怖くない。

フルスイングのいつでも一発のある打撃が恐怖だったのであって、コンパクトでは怖くない。

(厳しく攻めるの継続するけど、ストライク気味に。ここで打ち取って勢いに乗ろう)

そうエースである弟に伝えて、構え直す。

平成の怪物。

現在衰えに苦しむ、ボストンかそこらへんに居るであろう先代の異名を襲名して、こ

の男はそう言われている。

神足弟は、このリードに頷いた。

核弾頭を攻略すること。これが青道に勝つ最低条件。

(気合入れて投げ込めよ)

(うん)

気合を入れなければ、あつと言う間に呑み込まれる。

それが嘗ての大阪桐生の残したチーム打率記録を超えている青道打線の恐ろしさ。

力を抜ける、場所がない。

『内角打ったあー！しかしこれは三塁線鋭く切れましてファール！』

球足が速い。

気がつけば目の前にあるような打球のスピードを見た内野陣が、少し後ろに下がった。

神足兄は何も指示を下していない。だが、自主的に下がった。

もとより外野はかなり後ろに居る。抜けるかも、という恐怖が彼等を退かせた。

そして次の球も、ファール。今度は一塁線を鋭く切れる。

『斉藤智くん、追い込まれています、ファールで粘っています』

次の球は、ボール。

悠々とバットを構えたまま見逃し、フルカウント。

ここでわかると、御幸は思った。相手バッテリーの癖が、これでわかる。意識していたのかはわからないが、一打席目から癖を見抜けるのは大きい。

投じられたのは、外に大きく外れたボール球。

これで四球。

「亮さん」

「なに？」

智巳がバットを置いて右打席から一塁に歩いていつているのを見ながら、すぐさまネクストバッターズサークルに駆け寄り、御幸は耳打ちした。

「相手、序盤に攻めて最後に逃げます。この癖を考えると、1球目は変化球で見逃しを取りに来ますよ」

「ふーん、なら走らせてもいいかもね。そこらへんを監督に頼むよ」

「はい」

結果、片岡鉄心は決断を下した。

この試合は、長打力で攻めない。徹底して、脚で攻めると。

幸いにも、走れる人間は身体能力の斉藤智巳・俊足の小湊亮介・技術の結城哲也・才能の倉持洋一と豊富で、確実性も高い。

1球目から行け。

そのサインを塁上の智巳に出して、頷いたのを確認すると小湊亮介にもサインを出す。

この頃の青道は打ちまくるといふ印象が強いだけに、そして走りまくる担当は白龍と言う陸上部と偽つてもおかしくなくらいの俊足軍団(巧打ではない)がいるだけに、なおさら盗塁のイメージは薄い。

ここで切ろうと考えているバッテリーにとつて、盗塁は警戒する余裕がなかった。

これを手抜きかと思うかもしれないが、よく考えて欲しい。

塁上の男は典型的なパワーヒッター、三振が少なく、四球と本塁打と併殺が多いアダム・ダン。

しかも194センチとかなりの恵体で、投手。

194センチと言えば3センチ程の誤差があるが、鷹のペーニャ(191センチ)クラスである。もちろんと言おうか、ペーニャは盗塁などしない。

さあ、こいつは走るのか。

これは現在セ・リーグ最強捕手の阿部が盗塁するのか。それくらい簡単なことである。

常識的に考えれば、走らないんじゃない?と思われる。

阿部は遠い未来、具体的に言えば五年後の交流戦くらいに走っていたような気もするが。

長距離砲だし、狼と鷹の間の子のような精悍な風貌ながらあまりそういうイメージが湧かない。

なぜならフルスイングで身長が高いから。

誤解を恐れずに言えば、智巳はスイングが固定砲台っぽいのだ。

『おっと、一塁ランナースタート！』

当然実況もビビる。

神足兄もビビる。

そして当然、カバーに入るべき遊撃手もビビった。

咄嗟に送球するが、間に合わない。

座って走者をストライク送球で刺せるのは全盛期のクリスト、時たま威嚇代わりのお遊びであることがある今の御幸くらい（被害者は白河勝之）な為、当然セーフ。

送球が届く前に塁に着くと言う、いかにもスピーディーな盗塁に観客も湧いた。

（あいつは確かに都大会では走ってた。だけど、ここで走ってくるのか……）

ここは送ってくるだろう。そして三番伊佐敷の犠牲フライで1点。それが見える。

簡単には送らせたくない。

だが、小湊亮介に、もつと言えば片岡鉄心に送る気はなかった。アウトカウントを、攻められている相手にくれてやる必要は全くない。

『おっと、ここでバスター！』

前進守備のショートの頭を越えて、打球が飛んだ。

動揺からか、或いは不要と思つたのか、外野後退が解除されていない隙間の空間をコロコロと転がっている。

小湊亮介は二塁へ。

智巳はそこそこ走ってホームへ生還。

そして三番の伊佐敷が犠牲フライで、タッチアップから三塁へ。

ここで結城哲也だが、息をするように敬遠される。

そりやここまですっしか三振しておらず、打率八割超えのパワーがあり過ぎるアベレージヒッターを相手にする必要はない。

どんなに酷い結果に終わっても、犠牲フライにはなるだろうから、ここは正しい。

(まあ、想定内だ)

一塁上で、結城哲也は考える。

敬遠されるのは結構よくあることなので、別に今更愚痴を言う気はない。

五番は御幸。ならばやることは一つ。

一、三塁よりも二、三塁の方が打率がいいのだから、盗むしかない。

『結城、スタート!』

これはもう予想内。実況も驚かない。

阿部と坂本ではやるのが違うのは当たり前。前者は盗塁はしないけど、後者はする。

前者も盗塁してた気がするけど。具体的に言えば五年後くらいに。

それも連敗してる時に。

『これは悠々セーフ。盗塁成功です』

『彼は本当にモーシヨンを盗むのがうまいんですね。しかも脚も速い。斉藤智は脚が兎に角速いという感じでしたが、プロで通用するのはこう言った技巧の持ち主でしょう』

『まあそもそも、ピッチャーが盗塁っていうのはあまり聴きませんしね』

適当な雑談している実況は置いておいて、山守さんサイドはかなり追い詰められていた。

完全に、斉藤智の出塁からの流れが止まらない。ここで切りたいが、相手はチャンスお化け。

一塁を埋めたいが既に青道の化け物トリオの内の二人から逃げている。

逃げたくない、弟の目が言っていた。

そして、その目は兄に伝わっただけではない。

同じ捕手に、伝わっていた。伝わってしまった。

(ここで攻める、か。ここで俺が打ち取られたら、相手は勢いに乗るな)

だが、満塁で『ここを抑えたら相手の攻めつ気を潰せるぜ』としか考えない亭主の女房役は、敢えてその考えに倣った。

(ここで打ったら、相手の心を碎けるぞ)

ここで打たなきや、女房役とは言えない。

振り抜いたバットは、白球を捉えた。

新屋

左中間を鋭く抜け、スタートした小湊亮介、結城哲也がホームへ。

御幸はバックホームの間に二塁に進み、ストップ。

これで、3点目。九回どころか、一回も粘れなかつた。

真面目に話をする、攻略法は一年待つことなのだ。一年待てばファーストとサードが聖域になるし、青道の強さの根幹である『勝ちへの執念』が不純化するから。

勝利への執念が誰よりも強く、純粹な二人が下の人間の突き上げに遭って流されるその時を待った方がいい。

それでも勝てないなら二年待つといい。怪物は鷹の紋章の邪悪帝国の生え抜きとして暴れていて、甲子園には居ない。

かなりやばい変則サウスポーと結構やばい豪速球投手と戦うことになるが、それでもマシな方である。

それでも無理なら打撃戦を挑むこと。この打線を抑えきれないピッチャーは殆ど居ない（例外は斉藤智巳、本郷正宗、敬遠をする成宮鳴など）。

だから、耐え切るのではなく斉藤智巳を打ち崩して打撃戦を！と決心した方が建設的

だつたりする。

打って打って打って打って勝つ。そんなチームが青道に勝てる。

一番斉藤、二番轟、三番轟、四番結城、五番御幸、六番轟、七番轟、八番轟、九番轟で、投手陣が2失点以内に抑えることができるなら勝てるだろう。

さすがにこれだけ迫撃砲を並べられると、事故ムランの可能性もあるわけだし。

とにかく。この夏の智巳はそれ程に強い。しかも片岡鉄心によって完全に操作され、体力を温存されている為、ちよつと洒落にならないレベルで強い。

気温が上がれば上がるほど、調子を上げる夏男。

平然と抑えて帰る。打って塁に出る。誰かがホームに帰す。この繰り返し。

5回までに斉藤登板時特有の一方的な馬鹿試合で二桁安打、二桁得点。3人ほど投手をノックアウトし、四人目もボロボロにしている。

「相手、投手何人だっけ？」

「五人」

「あと二人か……」

「もう後一人みたいなもんだろ」

「言うね、御幸さん」

「いえいえ、智さんもおっしやることで」

死体を蹴って油を撒き、更にジェットエンジンを巻いてから火をつけてソリに乗せて引き摺り回している。

一年生の兄弟バッテリーがなんだ。投手の山守がなんだ。こちとら打撃の青道だとはかりに、打ちに打ったり25安打、12盗塁。

三塁コーチャーが手を回すのをやめる程度には熾烈な爆撃の援護を受けて、智巳は12者連続三振を含む1エラー24奪三振でノーヒットノーランを達成した。

統率された脳筋野球の真髄であろう。選手の能力に任せ、それを前提に攻め捲る。

戦力が揃っているからこんなことができる。

能力値と結束力の暴力である。

ちなみにエラーしたのは小湊亮介。

気を抜いた（そして口では言うがノーノーにあまり興味のない）智巳の投げた球がヒットになりそうになり、打球を追って追い付くもグラブを伸ばすが捕球がうまくいかずに、今大会チーム初のエラー判定。

まあ実質ヒットのようなもので、ノーヒットノーランの影の立役者はこの小湊亮介だと言っている。

来年には起こり得ない光景である。来年は打線の核がゴツソリ消えて、穴が開いたまま戦うことになるから。

そして、その傷は癒えることはない。無いものはないのだ。

「ごめんね、エース。あと少しだったんだけど」

「え……あれは完全にヒットだったんで別に謝られる筋がないんですけども」

普通に抜けて、ヒット。そう判断されてもおかしくない打球に追いついてしまうから、エラーが起こる。

当然監督もこのエラーには怒らない。彼が怒るのは守備の最中に他のことを考えてエラーをした場合である。

小湊亮介の場合、守備のことを考え過ぎ、そして身体が動きすぎたからのエラーだから、もうこれは仕方ない。

「いやあ、あれは捕れてた。悔しいな」

「そりゃあ亮さんの感覚からすればそうかもしれないけど、一般的なセカンドはたぶん前進してくるライトに任せる感じな打球ですよ」

「そう？」

「はい」

現にライト白洲はダイビングすることなく前進してきて確実に前で処理しようとしていた。

セカンド小湊亮介を避けて下がったが、それでもあれはライトが捕っているべき球だ

ろうと智巳は思う。

それに、エラーで出たランナーは自分の牽制で刺せた。

そして前の試合には、明らかに抜けた当たり、所謂センター返しを好捕し、グラブトスでショート倉持へ。倉持がセカンドを踏んでゲッツー、というファインプレーも生み出している。

お陰でまだ、斉藤智巳は甲子園での被安打は0。失点も0。14回投げて、この成績。そして地味にこの夏、薬師で7回、稲実で9回の予選も含めて30イニング無失点。

ノーノー未遂3回（自主降板三回）、ノーノー1回。

「でも、捕れてもおおかしくない感じではあったでしょ？」

「まあ、セカンド守備の素人目から見ても捕れそうでしたけどね」

「じゃあ捕れたってことなんだよ。悔しいね。重ね重ねになるけど」

華のある守備で人気が出てきた小湊亮介と、西日本の、具体的に言えば九州あたりで強烈な人気があるエース。

それにしても、どこかで聞いたことがある精神論である。

身体が動く限りはこの道を走り続ける。動かなくなったら動かす。

そんなことを言っていたエースが青道には居る。

勝利への根性は伝染するらしい。

「でも実際、かなり助けられました。ありがとうございます」

「ハハハ。面白いこと言うね。君が居なければこんなところには来れなかっただろうから、どれだけ助けても助けすぎじゃあないさ」

珍しく本心から笑って、小湊亮介はバットを持ってエースの元から去った。

守備でも、打撃でも、まだまだ改善の余地がある。

熱心だな、と思いつながらこの二時間に98球投げたエースは肩を休めていた。

練習できないのはキツイが、肩を休めるのもエースの仕事。決勝に向けて、体力を回復させておきたい。

貧打線相手だから高速フォークも高速スライダーも殆ど投げていない。

肩肘の疲労は、それ程でもなかった。

ならランニングでもするか、と立ち上がる。

ホテルを出たところで、ビクツと立ち止まった。

右に曲がるうとしていたところで、人影が2つほど見えた。このままではぶつかりかねないと言う勘が、智巳の脚を止めさせた。

「……………奇遇だな」

無言で両手をポケットに突っ込んでいるふてぶてしい男と、通訳代わりの白い御幸。

眼鏡、キャッチャー。でもどこことなくアクが無さそうではある。髪の色は人格に影響

するのか。

なら小湊家のピンクはなんなんだろう、と思いつながら、哲さんは髪は黒だから関係ないか、などと適当なことを、奇遇だと言われた智巳は思っていた。

「……ノーヒットノーラン」

本郷正宗。

巨摩大藤巻の一年生エースが奇遇だな、の後に物凄く黙って、言った言葉がそれだった。

「……流石だ」

「ああ、ノーノー。まあ相手は貧打だったから——」

「俺もします」

喰い気味にそれだけ言って、本郷正宗はプイッとどこかへ歩き出す。

あ、敬語使ったんだとわかる前の即行退散であった。

後に残されたのは、円城蓮司。

シニア時代からの本郷正宗の相棒で、無愛想な彼の通訳係りである。

「何か、正宗がいつもいつもすみません」

「いや、別に気にしないからいいよ。ああ言う奴も居るし、先輩つてのは無理に敬語を使われるべきじゃないからな」

敬語を使われるべきは、敬語を使いたいと思う人間にだけいい。

本当に敬われる人間は偉ぶらない。敬語を強制しない。

哲さんのように、自然と周りが敬うようになるのだ。

本物の先輩は背中で語ることを、彼は知っている。

「あいつはまあ、素直じゃないと言うか……ここにも本当は結構前に来てたり、ウロウロしてたりしてたんですけど」

明日の試合、本気出すらしいので観てくれると嬉しいっていうことを言いたかったんだと思います、と言う情報をスパー通訳から得て、智巳はうーんと唸った。

何故白御幸こと円城はコミュ力が高いのにホンモノの御幸は低いのか。

今やコミュ力をリードと守備力に、ということなのだろうか。

「智、お前立ち尽くして何やってんの？」

「お前の2Pカラーに会ってな」

「はっ。」

白御幸と御幸。御幸が御幸と言う意味なので御幸に白とか黒とか冠詞代わりの称号は必要ない。

「白御幸だった」

「清純派露出狂。これくらい意味が矛盾してるな、智」

「あ、自覚あるんだ」

「時々唐突に鎌首を擡げるタイプのお前と違って、俺は首尾一貫してるからな。捕手として、そりやあ立派なもんさ」

炎天下の中で立ち話もあれなので、取り敢えず二人は自室に帰る。

もう今更言うことでもないが、同じ部屋である。

「飲み物くれ。柑橘系がいい」

「フルーツミックス作っておいてよかったよ」

妙に手際がいいのはいつものことなので気にしない。

そして料理の腕——と言つていいのかは疑問だが——がいいのもいつものことなので、気にしない。

「で、本郷に会つたんだろ？」

「会つた会つた。相変わらず目つきが凄かつたよ」

「まあ、あんなピッチングと鬼みたいな牽制を見せられちゃあな」

9回、24奪三振、12者連続奪三振、1牽制死。

あまりランナーを出さないから目立たないが、智巳は牽制が鬼のように鋭い。

打者を睥睨し、投げげると思わせておいて、更に言えばやつと出せたランナーを無駄にしまいという心理を巧みについてランナーを刺す。

クイツクは下手な癖にそんなに走られないのは、御幸の肩とこの牽制が大きかった。以心伝心と言うか、結城もほぼノーサインの牽制球を難なく処理してランナーを殺せる。

本人曰く、気迫が仄かに一塁側に鋭く延びるからわかりやすい、らしい。

目の前で見ているこつちもわからないんですが、と思う御幸であった。

「同じピッチャーとして、燃えるだろ」

「そうかな」

準々決勝をノーノーで勝利し、ベスト4へいち早く駒を進めた青道高校。

11時30分からの午後の試合では徳島代表好永高校が打ち合いを制してベスト4へ進んだ。

明日、8月21日の11時30分から。

準々決勝最後の試合、白龍対巨摩大藤巻が行われる。

「下見がてら現地行つて、入る前に声かけてくる。たぶん決勝に来るのはあいつらだ。直で見て、雰囲気って言うのを知っておきたい」

「ああ、いいんじゃないか」

魔王の所以

8月21日。

準々決勝、白龍高校対巨摩大藤巻。

「本郷——！」

「正宗——！」

「蓮司——！」

「新田監督——！今年こそよろしくお願いします——！」

様々な歓声と応援と、ファンの黄色い声援を受けて、巨摩大藤巻はバスから甲子園へ歩いていった。

北海道に、まだ優勝旗は渡っていない。

2004年に届きかけ、2006年にも届きかけ、未だに掴めていなかった。

いずれも、彼等の前には絶対的なエースが立ちはだかり、北の海を超えさせることはなかった。

だが、2012年。再び届くところまで来ている。

その立役者が、一年生バッテリーの本郷正宗と円城蓮司。

投打の要のこのコンビは、巨摩大藤巻を引つ張ってきた。

今回の白龍戦でも、そして決勝に来るであろう青道戦でも。

その歓声に応えるナインとは違い、本郷正宗はその歓声を無視していた。

元々無愛想だし、応えている暇はない。応える気もない。

鬱陶しい喧騒の中で、本郷正宗は先のみを見つめて歩いている。

青道戦。相手にとって不足のない、初めてにして最古の相手。

超えるべき壁。追うべき背中。

その姿が、もう見えるところまで来ている。

(うるせえ……)

お前等にはわからない。こんなくだらな相手には時間を使わなければならない焦りも、相手もくだらない相手に時間を使っているとと言う悔しさも。

『威圧感威圧感と言うが、それだけだろう。球速でもコントロールでもスタミナでも、あいつに勝っているピッチャーは居る』

お前なら勝てると言われる度に、うるさいと怒鳴りたくなつた。

対峙してみなければわからない。あの化け物の異様さも、敵に回す恐怖も、打席に立った時の絶望も。

一点取られてもいないのに、投げ合う度に募る、勝てないと言う重圧も。

俯いたまま睨みながら、本郷正宗は歩いている。

未来の戦いに向けて、一心不乱に。

「本郷」

全ての音を鬱陶しいとすら感じる彼に、静かな言葉が突き刺さった。

聴こえた方向へと思わずハツとして振り向く。

「まずは白龍を見て、勝つて。こっちに上がってこい」

マウンドとは別人と思える程の、静かな佇まい。

狼と鷹の間の子の子の打撃と投球のセンスを持つに相応しい、精悍さの溢れる如何にも俊敏そうな顔立ち。

「……大将がここに来んな。俺が行くまで、首洗つて待つてろ」

「ははは。まあ、守りの大将としても最大の敵の確認くらいはしておきたかったわけよ」

「確認なんざ無駄だと思える程のピッチングをしてやる」

見てろ、とは言わない。

見せるのは、試合がはじまってからでいい。

見せるのは、投げ合いがはじまってからでいい。

「頑張れよ。どうせなら俺も、最後は歯応えのある奴と戦いたい」

「……応」

本郷正宗は、立ち止まっていた脚を進めた。
苛立ちもない。油断もない。

ただ真つ直ぐ、目標を見ている。

——頑張れよ。どうせなら俺も、最後は齒応えのある奴と戦いたい

「嬉しそうだな、正宗」

「天敵の顔を見て嬉しくなるわけねえだろ」

「ま、そういうことにしておくか。俺としては、お前がベストの状態になってくれて喜べばいいだけだからな」

勝とうぜ、と言う相棒を睨んで黙らせ、本郷正宗はただ一言だけ言った。

勝つのは当たり前。問題は内容だと。

「あいつに挑むにも、格つてもんがいる」

「ノーノーか」

「狩られるなら、どんな雑魚でも前に立つことが許される。挑むなら」

格と、実力と、実績と。

その3つを携えて、やつと挑める。

やつと、数々の敵を狩り尽くしてきた末に築いた玉座に座った天敵の姿を拝める。

玉座から引き摺り下ろせるか、それはその時の自分次第。

「向こうはそんなこと思っていないだろうけどな。気安かったし」

「気安いのが気に食わない。もっと尊大で、傲慢で居るのが性に合ってる」

「でもそしたら、お前はあの人のことを超えようとは思わないだろうけど?」

ギロリと睨みつける本郷正宗からサラツと逃げて、円城蓮司は少し笑った。
ベストの状態に戻してくれた天敵に感謝を。

そして、二試合の後に雪辱を。

「勝つぞ、正宗」

「誰に物言つてやがる」

まあ、そのお目当ての青道は先発丹波が二飛翔で6回までに2失点の好投。

好永の主砲・『阿波の弁慶』志波真に一発を食らった川上が動揺を納められずに1回保たずに5失点。何の為に出来たという空気の中、ロングリリーフが少し多めになっ
ている降谷が登板。

前任者から満塁の場面を受け継いだ降谷が三者連続三振で無失点で切り抜け、沢村が
2回を投げて6凡定理を炸裂させて無失点で13対7。

かなりの僅差で勝ち上がると言うヒヤヒヤ展開が起こる。

鉄壁リリーフ陣最高や!とOBたちに騒がれたのは言うまでもない。

そしてこの時智己が『一人だけ粗悪品の障子紙が居ますね』と思つたことも言うまで

もない。

更には、『あら、俺と同世代つて、もしかして不作?』と思つたことも言うまでもない。だが、まあそれは結果として勝つたことだし、未来のことだからどうでもいい。

確実に、『信頼できる奴しか頼らない。後は基本的にどうでもいいから優しく接して、邪魔をされても自分の責任』と思う主義の割りと戦力外に冷淡なエースと、これから信頼できる奴が極めて少なくなるチームとの関係に。

そして、その未来に不和を招く種蒔きになつたが、放つておく。

因みに彼が別格の信頼を置いているのは御幸一也と結城哲也。

全幅の信頼を置いているのは小湊亮介、伊佐敷純、滝川クリス優。

信頼を置いているのは、丹波光一郎と増子透と沢村栄純、最近加入の降谷暁。

信用しているのは、倉持洋一と白洲健二郎。

他は、ああはいはい俺が悪い俺が悪いってな感じである。

育成中の東条も特に何をしたわけでもない為、期待はしているが信頼はしていない。因みに期待すらしていない人間もちらほら居る。その期待の無さは表に出してないが、彼は勝利至上主義者な為、戦力への見極めは冷淡なのだ。

無理だと思えば見捨てるその冷淡さは、もう監督には伝えていたりする。

この男の優しさの皮を被つた冷淡さを誰よりも身近で知っているから、努力を全く怠

らない捕手も居るが、それも置いておく。

閑話休題。

白龍対巨摩大藤巻は、巨摩大藤巻先発本郷正宗が三者連続三振でスタートを切った。ナイスピッチ、正宗と言う仲間の言葉に無言で答え、『声出せや』と言われながらも、敵を圧倒するエースのピッチング。

強者である。

「ほー、三者連続三振。やっぱりこれって凄いですよね」

「キャッチャーのリードも素晴らしい。本郷の良い所を引き出してる」

「おい、熱い自画自賛やめろ」

お前らしよっちゅうやってんだろ、と言う伊佐敷純からのまっとうなツツコミに、ホテルに帰還したバッテリーはきよんとんとしてから少し訝しげにこのツツコミに答えた。

「えーと、智は十二者連続三振だからまた別ですよ、純さん」

「そうですね、純さん。あそこまで伸ばすと気持ち良さよりも、いつ切るかを考えるのに苦労するんです」

「いつ切るのか？いつ切れるのかじゃねーのかよ？」

凄まじく常識的な質問に、智巳は笑って答えた。

「何言ってるんですか。予め作ったゲームプランで試合を支配できてるからそこまで連

「续で三振を取れるんです。相手に選択権なんか与えるわけ無いでしょう。こつちが全てを選ばんですよ」

もう発言が圧政者か専制者のそれである。

まあ、これくらい容赦が無ければ野球で食っていけないのかもしれないが。

「与えたら心を折れないじゃないですか。やっぱ純さんは優しいですね」

そしてどこかトンチンカンな答えを返す正捕手。

やっぱりこれくらいいの根性が無いと大成は難しいのかもしれない。

「と言うかお前ら、執拗に心を折りにかかるけど、何でだよ。別にそこまでしなくても、

普通にぶつ潰せばいいんじゃないやねえか？」

それは伊佐敷純が常に抱いていた疑問である。

この二人は敵の打線を捻じ伏せ、敵のエースを打ち砕き、心を粉碎する。

それはもう完全に、完膚なきまでに叩きのめす。

何でだろう、思わなくもなかった。

「野球は相手に勝つ気がある限り、常に逆転の可能性が残されてますよね」

「ああ」

だから、魔物とか言われるのだ。

少しのミスや、少しの出来事で、試合の空気が変わってしまう。

それは何故かと言えば、敵が勝つ気でプレイしているから。

勝とうと思わなければ、それは起こらない。魔物も目覚めないし、1つのミスでも揺るがない。

「だから勝つ気を潰すんですよ。勝つ気を潰すには、勝てないと思わせること。勝てないと思わせるには、心を折って、粉微塵に砕くことです。粉微塵に砕かれた勝利の意思を持たない人間に、魔物は力を貸しはしない」

「……勝つ為か」

「勝つ為です。勝つ為に、相手の気骨を押し折るんです」

結城哲也が時折見せる、オーラ。打席に立ったり、他人の活躍を見たりと、様々な場面で彼の实力が高まっている時に見せる、白いオーラ。

なんか出てる、としか感じられない伊佐敷にも、このエースが纏っているオーラは見えるような気がした。

「魔物程度に、俺の邪魔などさせる気はない」

影のように黒いオーラ。もう完全にラスボスのそれ。

聖戦士と魔王、主人公とラスボス、四番とエース。

甲子園の魔物が、魔王に勝てると思いますか。反旗を翻せると思いますか。おかしいと思いませんか、あなた。

実力差を覆しうる魔物が今大会、全く蠢動しない——詰まるところは実力同士のぶつかり合いに終始しているのは、その所為なのかもしれない。

甲子園の魔物、魔王にビビる。こいつは一体何なのだろうか。どんなピッチャーでも、打たれる時は打たれる。

でもこいつは春夏に限ってその意外性を限りなく低くすることができる。魔物が寄ってこないから。

だから近い未来で防御率0点代とかができるのだろう。

「……お、おう」

伊佐敷は、少し怯みながら頷いた。

斉藤智巳から、暗黒的波動を感じる。

そして。

本郷正宗はこの日ノーヒットノーランを達成した。

2004年、ダルビッシュ有。

2012年、斉藤智巳。

2012年、本郷正宗。

1つの大会で、そして1つの試合の枠で二度のノーヒットノーランが達成されたのは、1933年以来であった。

終わりののはじまり

その後。

準決勝の青道は先発丹波が二飛翔で6回までに2失点の好投。

好永の主砲『阿波の弁慶』志波真に一発を食らった川上が動揺を納められずに1回保たずに5失点。何の為に出来たという空気の中、ロングリリーフが少し多めになっている降谷が登板。

前任者から満塁の場面を受け継いだ降谷が三者連続三振で無失点で切り抜け、沢村が2回を投げて無失点で13対7。

かなりの僅差で勝ち上がり、巨摩大藤巻も当たり前のように『東の横綱』帝東を下して勝ち上がる。

決勝戦は、巨摩大藤巻対青道。

本郷正宗対斉藤智巳。

誰もが、この大会のノーヒットノーラン達成者二人の、北の怪童と東都の怪物の投げ合いを望んでいた。

ノーヒットノーラン達成者同士が決勝戦で投げ合うなど、聴いたことがない。

甲子園は、否が応でも盛り上がっていた。

名門と呼ばれながら未だ甲子園を制覇したことはない青道が初優勝を決めるか、巨摩大藤巻が北の大地に初めて優勝旗を持ち帰るか。

「御幸、起きてるか」

「起きてるよ」

朝5時に、智巳は起きた。

もう少し寝たいと言う感情すら起きない程に、身体が活性化している。

「調子把握の為に、軽く投げる。受けてくれ」

「OK」

起きてると言うより、こう言った大舞台の前は智巳は早く起きる。

それに合わせて起きようとしていたのである。

身体をほぐした後、軽くホテルの周りを走って温め、立ち投げ。

誰もいない公園で立ち投げをはじめから数分経って、智巳はやっと御幸を座らせた。

「ストレートから行くぞ」

「おう」

いつもの、ゆったりとしたフォーム。腕を上げて、下ろして。脚を上げてから踏み込

むように前に下ろす。

ミットを叩く、乾いた音が鳴った。

糸を引くようなストレート。他のいつでももなく、今こそがもつとも調子がいいのだと。

何よりも雄弁に、その球が語っていた。

「過去最高に良さそうだな」

「ああ。いつもの曲線だ」

高速スライダーと高速フォークを投げて、終わり。

もうこれ以上、確かめる必要はない。

「最後だ。勝とう」

「ああ。完璧に勝つ」

「それでこそ」

別れを惜しむ心とは裏腹に、身体は最後を悟ったかのようにここで調子を上げてきた。

最後を惜しむなら、最高のピッチングを。

ホテルへ帰りながら、その決意を固めた。

「お前たちも起きていたか」

「哲さんもですか」

「ああ。もう、これで終わりだからな」

最後の山。夏の甲子園、決勝戦。2012青道高校、最後の試合。

勝つても敗けても、泣いても笑つても、このメンバーで野球をする最後の試合。結城哲也は、はやくも日が昇っている明け方の空を見つめて、ポツリと言った。

「お前が居なければ、ここまで来れなかった。もう、他に何も言うまい」

お前に全てを託す。

この三年間の集大成を。

この三年間の終わりを。

青道高校の夢と悲願を、

そして、新たなはじまりを。

頼んだとも言わない、任せたともしやらない。

ただ、託した。

「では、俺からも一言だけ」

「聴こう」

「あなたが居なければ、ここまで来れなかった。他には何も言いません」

必ずエースを勝たせてきた四番と、必ずチームを勝たせてきたエースと。

この二人が青道に揃う、最後の試合。

恐らくは、歴代でも最強のエースと四番。

片や努力で才能を開花させ、片や開花した才能を努力で育てた。

正反対の二人と言っている。

だが、互いに信じている。

この人が居れば勝てるのだと。

斉藤智巳がゼロに抑え、結城哲也が点を取る。

最後まで、それを貫くだけでいい。

夜は明け、明け方は過ぎ、そして朝が来て、昼に差し掛かろうというその時間。

熱闘の幕が開く。

『第94回全国高校野球選手権、決勝戦。いよいよこの夏最後のドラマの幕が開きます

！』

巨摩大藤巻（南北海道）VS青道（西東京）。

巨摩大藤巻の先発は、エースの本郷。

青道高校の先発は、エースの斉藤。

8月23日。夏最後の試合。

そのマウンドに最初に立ったのは、本郷正宗。

(やっつとだ)

瞑目して、そう思った。

シニアの時に感じた屈辱。負けず嫌いの己に、尊敬すら懐かせたあのピッチング。

それを捻じ伏せて、超えて。

そして勝つ為に、ここに来た。

(北海道に優勝旗を?)

外野がゴチャゴチャ抜かすな。投げているのはこの俺だ。

俺が、俺の為に投げることに文句を言われる筋合いなどありはしない。

あいつに勝つ。あいつを超える。

そこで初めて、進めるのだ。

斉藤智巳は九番に下がっている。自分も九番に下がっている。

互いに、ピッチングに集中する為。互いに、敵の打線を捻じ伏せることに専念する為。

だが、これは違った。

両監督の頭には延長戦が入っている。お互いに打てるピッチャーは今投じている

エースしか居ないので、そう言った場合中軸に打てない投手が入ることになる。

継投。

これを考えた打順だった。

斉藤智巳はこれを知っている。本郷正宗は、これを知らない。

一番は、倉持洋一。

(正宗。この男、塁に出すと厄介だぞ)

(出さねえよ)

出るわけ無い。出られる筈もない。

全く持って、ナンセンス。

初球、ストレート。

どこかで見た配球だと知りながら、倉持洋一は空振りした。

エースつてのは、こうなるのだろうか。ストレートで圧してくる。打ってみれるなら

打ってみると、打てない球を投げってくる。

2球目も、ストレート。

これも空振り。ストレートが、明らかに今までよりも走っていた。

3球目は、SFF。スプリット・フィンガード・ファストボール。

端的に言うならば、浅く握って速さを追加した速いフォーク。落差が小さいが、本郷正宗のスプリットは通常の物よりも落ちはじめが遅い。

空振り三振に仕留め、憮然としたまま返球を受けとった。

二番は小湊亮介。この打線の中でも一番厄介な打者。

だが。

『空振り三振ー！二者連続！フルカウントからボール球のスプリットを振らせました！』

心臓が強い。敵を呑んでかかっている、とも言う。

フルカウントから、ボール球になるスプリット。塁上でうるさい打者に目掛けてこれができるピッチャーは、そうは居ない。

三番伊佐敷も三振で仕留め、スリーアウトチェンジ。

計13球で三者連続三振での極上の立ち上がり。

『未だ甲子園では無失点！巨摩大藤巻の一年生エースがその実力を強力青道打線に見せつけます！』

そして。

「くぐぐ」

「ああ」

言葉少なく、闘志は満ち。

斉藤智巳が、マウンドに上がった。

一番佐々木。

二番清水。

三番大塚。

迎えるは、この出塁率4割トリオ。

『さあマウンドに上がるは東都の怪物。未だ甲子園での被安打は0、四球も0、失点も0、準々決勝ではノーヒットノーラン！』

この無敵のエースから一点を奪えるか、それが巨摩大藤巻の課題となってきました！』

一番佐々木、ど真ん中ストレートを見逃し三振。

二番清水、アウトローいっぱいストレートを見逃し三振。

三番大塚、インハイ直球を避けて見逃し三振。

『ちよつとレベルが違いますね、この男……』

『全球ストレート、九球で三者連続の見逃し三振。まさに指にかかったストレートと言うべきでしょうか』

特にインハイギリギリなのに打者が避けたストレート。

鬼が憑いたかのような気迫と、当たれば死ぬんじゃないかと思う程の球が、三番大塚の上体を逸らさせた。

「相変わらずやべーな、あの人」

「今更なこと言ってるなよ」

円城蓮司の笑みは固い。

五番は自分。正直、あのストレートを前に打てる気がしない。

四番の福地さんも打てるのかと、疑問を抱いてしまうほどの圧倒ぶり。

「俺がゼロに抑えていけば、あいつは勝てない」

「次は結城さんだ。気をつけていけよ」

結城哲也。青道不動の四番打者。

三年になってからは智巳が登板する時はどんなエースが相手でも、確実に一打点一得点はする四番打者。

怖いと言うのが、円城蓮司の率直な感想であつた。

「よろしく願います」

ヘルメットを取って頭を下げ、礼儀正しく打席に入る。

最初の球は、スプリット。

低めに外れるこの球を、結城哲也は微動だにせずに見逃した。

(あっさり見切ってくるか)

次の球は、内に切れ込むシユート。これもボール球。

当たらない程度の球とは言え、またも不動。

白いオーラが、立ち昇っていた。

(外そう)

明らかに不満顔の本郷に何とか2球外させて、歩かせる。

次の打者は、御幸一也。

恐らく結城哲也は走ってくる。

何度か牽制を入れさせ、2球目をウエストさせたが、結城哲也は走らない。

これでツーボール、ノーストライク。そろそろストライクを入れておきたい。

ここで、結城は走った。

完全にモーシオンを盗んでいる。

『巧いですねー』

『モーシオンを見切るのが早いし、正確なんです。脚も悪くないですし、将来が楽しみですな

選手ですねえ』

ノーアウト二塁。

ここで打席には依然として得点圏に強い男、御幸一也が立っている。

フン、と鼻を笑って、本郷正宗は御幸を見た。

打たれてもいい。点をやらなければ負けはしない。

内に切れ込むスライダーで三振に取り、六番増子をキャッチャーフライ、七番降谷を

セカンドゴロ。

(やっぱ、今までとは違う)

前に飛ばしてくる。結果としてはアウトだが、敵のエースがウチの打線相手に築いたアウトが示す事実とは、その内情は大きく異なる。

(やっぱり……)

四番福地が見逃し三振に打ち取られ、電光掲示板を見る。

141キロ。そんなに球速は出てない。

(延長に向けて、視野に入れた上でここで流して、立ち上がりを完璧に終わらせようとしてる)

五番は、円城蓮司。

名前をコールされて、打席に立つ。

(全球全力でも何でもないストレートでいくのは、疲労軽減の為か)

ふうーと息を吐いて、バットを構える。

絶望的な威圧感が、両肩にのしかかってきた。

だが、ストレート自体に力はある。

前を見る。

するとそこには、軽い前屈体勢からこちらを見下ろす男が居た。

あそこで会った時とは、まるで別人。

自分を奮い立たせるように、笑う。

(来い)

人間が投^なげている以上、人間が打^うてないわけではない。
そうバツトを構^{かま}えた彼^{かれ}に、ストレートが迫^{せま}っていた。

怪物覚醒

咄嗟に、避けた。

当たったら死ぬのではないかと言う球威。それを眼で一目見て感じ取る。

だが、避け方こそ大袈裟だったが、これはボール一個分高い。

そう判断した彼を、審判のコールが覆した。

「ストライク！」

驚くも、判定は覆らない。

何故だ、と考える間もなく、次の球が来ていた。

アウトローに決まって、ストライク。

(何故だ?)

この二人には、審判は甘い。今までもそうだった。しかし、甲子園に来てから特にひどい。

3球目は、それを見る。

打てなくても仕方がない。何よりも、これを解明せずして勝利はない。

ドスン、と。ストレートが、ミットが構えられた外角高めギリギリいっぱい決まっ

た。

一ミリの、ブレもなく。

「ストライク、バッターアウト！」

去る円城の姿を、御幸は見た。

気づいたかな、と。

(まあいい。まだまだ、仕掛けはあるし——わかったからといって、どうにかできるものでもないからな)

お前が見逃し三振とは珍しいな、と。

巨摩大藤巻の監督・新田幸造は声をかけた。

円城蓮司は選球眼に優れ、甘い球を見逃さない打撃力を持っている。

それがむぎむぎバットを振らずに帰ってきた。

その辺りになにかあると、新田監督は察している。

「ストライクゾーンが彼等に有利な一因を、突き止めました」

「ほう？」

「構えられたところに、投げ込んでるんです。寸分のズレもなく。しかも、御幸さんのキャッチングが巧いから全くミットが揺れない。

恐らく、際どいところに投げ続けているのは審判からの信頼を得るためでしょう。そ

してそれは、こちらの打者の信頼を下げることに繋がりません」
避けて、ストライクが入る。

これを何回かやってしまった。

スライダーでも何でも無い、ストレート相手に。

普通、打者が自信たっぷりに見逃せば、審判は迷う。

しかし、ストライクゾーンに入っている球を避ける打者の見極めを、審判は信じることはない。

六番打者の無理に打ちに行つた末の空振り三振を見て、円城蓮司は奥歯を噛み締めた。

「今の三振で、更に彼等の支配領域は広がります。そして、俺たちバッテリーの支配領域は減っていく」

どうしても、あちらに比べてブレるから。

どうしても、あちらに比べて構えられたところに行かないから。

性能そのものがズバ抜けていた機体に、精密機械のCPUが積まれてしまった。

こうなってみると、結城哲也にギリギリを見逃され続けたのも痛かつたのだ。あれでこちらの守りのストライクゾーンの主導権はあちらに行つた。

今は実力では勝っている。

しかし、相手はまだまだストレートのみの速球投手でしかない。

更に言えば、マウンド上の制圧力に雲泥の差がある。

(こうして、ストライクゾーンを上げてくるのか)

思いつきもしなかった。如何に巧く捕るか、如何にいい球を投げさせるか。それが捕手の仕事だと思っていたから。

だが、向こうは捕手と投手の他に、バッテリーと言う枠組みで仕事をする。

スリーアウト、チェンジ。

心が収まらないまま、円城蓮司はホームベースの後ろで構えた。

こういう駆け引きをしてくる相手が居なかった。こういう駆け引きを知らなかった。

そんなことは言い訳にならない。向こうは思いついたのだ。

その有利さを得る為の道筋と、得る為のか細い道を走破して、こちらの領土を制圧した。

怪物。

平然と打席から去り行く智巳を見て、その思いを深くする。

白洲が三振、智巳がセンターフライ、倉持サードゴロの三者凡退で、三回表は凌いだ。

だが、凌いでも。

『三振！また三振です！これで九者連続三振！』

巨摩大藤卷、まだボールにバットが当たりません!」

チェンジのコール一つで帰ってくる。この絶望。

同じことをしているのに向こうには笑顔があり、こちらは固くなってきた。

『四回表。青道高校の攻撃は、二番セカンド小湊亮介くん』

ウグイス嬢が、打者を告げる。

この打者も、平然とボール気味の球を見送った。打線が一丸となって徹底してきていた。

大きいのは狙っていない。粘って粘って一点取る。

一点取れば、勝てる。

その信頼を与えた絶対的エースと、豪打の打線を形成する打者たちのプライドを踏まえてもお徹底させた監督の手腕と不満を抱かせない人望。

絶対に、一点を。

その執念がある。

これで7球目。

ストライクか、ボールか。どう判断されてもおかしくない球。

「ボール、フォア!」

喜びもせず、バットを脇において肅々と歩いていく。

だろうね、とでも言うように。

『選んだ、フォアボール!』

役者だ。

覚悟の見逃しを、確信の見逃しに変えた。

一か八かの博打に勝ったのに、それが当然であるかの様に振る舞っている。

『三番センター、伊佐敷くん』

1球目は、スプリット。3回を終えたここに来て更に切れ味を増したこの球を空振り、ワンストライク。

牽制を入れさせて、2球目。

「スチール!」

セカンドの西が叫んだ。

本郷正宗のクイックは遅い。智巳よりはマシだが、速くはない。

投げた球は、シュート。

これを大きく空振りした伊佐敷のアシストもあつて、小湊亮介は二塁へ。

ノーアウト、二塁。ツーストライクで打者は三番。

ここで伊佐敷純は、無理矢理バットに当てた。

ただ後続の為に。

後続の打者が打ちやすいように、後続の打者が選びやすいように。

打線とはこうなのだ。打者が並んでいるから打線ではない。打者が1つの目的に向けて連なるから打線と呼ぶ。

右打ちでランナーは三塁へ。

そして、四番。結城哲也。

敬遠しても、一、三塁と言う好配置でチャンスお化けの勝負師御幸。

勝負しなければ、敗ける。

そこまで、いつの間にか追い詰められている。

自然体の、大きい構え。

先程の絶対に打つと言うオーラの代わりに、絶対に決めると言うオーラになっていった。

(点はやらない)

どこでも守れるらしい(実際はショート以外の内野だけ)、堅守・強肩・俊足・巧打四拍子揃った青道の絶対的な四番。ここまでの打率は7割を越え、得点圏打率は8割超。

この打者はどちらかと言えばアベレージヒッター。パワーもあるが、アベレージヒッター。

最強と呼ばれた男、ロバート・ローズ。

彼の如く、左中間を破る、ツーベースが多く見られた。

内野後退、外野前進。深めのバックホーム体勢で、本塁で阻止する構え。

静かに構えるその姿からは、何の緊張も見られない。

ボール球から入り、そして当然のように見逃される。

四番を打つに相応しい選球眼。

2球目、アウトローのストレート。

ストライクゾーンにギリギリの球が来たと、円城蓮司は思った。

それに対して、結城哲也が取った行動に、観客を含め、青道ベンチ以外の全員が度肝を抜かれた。

コツン、と一塁線上にボールが転がる。

『ここでスクイズ！打率7割、得点圏打率8割の男が、スクイズを狙ってきました！』

勢いの死んだ打球が転がり、三塁ランナー小湊亮介はホームへ。

『一塁はアウト！しかし、三塁ランナーはホームイン！』

これでゲームが動き始めました！1対0。四回表、青道高校先制！』

五番御幸がランナーがいない時に打つ筈がなく、スリーアウト。

しかし、先制された。この事実は大い。

この試合、被安打は0。

攻略とか、そう言ったことではない。

点を筆取り取られた。その表現が相応しい。

本郷正宗は、悔しさを顕わにはしていない。まだ四回だと、まだ被安打は0だと思っ
ている。

しかし、この一点は重かった。

『見逃し三振、10個目ツ……！』

ズドンと低めにストレートが決まって、佐々木が打ち取られる。

十一人目、清水。

『高速フォーク、空振り三振！』

3球目で追い込まれ、ボール球になる高速フォークを振らされてアウト。

『外角高め！見逃し三振！』

三番大塚は、高めのストレートで見逃し三振。

これでスリーアウト。たった11球で、攻撃終了。

「正宗、気持ち切るなよ」

「切れるわけねえだろ」

こんな投げ合いを望んでいた。

望んだものを突きつけられて、怯むバカはいない。投げ出すバカも居ない。味方が打てなくとも、関係ない。

そんなものは自分の知ったことではない。

自分にできることは、投げることに。

六番増子・七番降谷・八番白洲を18球で打ち取り、スリーアウトチェンジ。

エースは、味方の反撃を待つて自分にできることをやる。

だが相手は、ルーキーイヤーの8登板目で初失点して8連続完封を逃し、7対1でマウンドを下りた時、『8回1失点(自責点0)でノックアウトしてやったぞ!』と敵チームファンに喜ばれた男。

そしてその次の試合に、ノーヒットノーランをやったのけた男。

「反撃、か」

ポツリと、智巳が四番を打席に迎えて呟いた。

四番福地、スライダーで空振り三振。

五番円城、ストレートで見逃し三振。

六番藤井、首を振ってから球種を指定し、ストレートで空振り三振。

四球・ヒット・エラーはもちろん、ファールすら挟まず十五者連続三振。

「こないよ。そんな時は」

最強と呼ばれた男

『自身の記録を塗り替え、十五人から連続奪三振。青道のエース斉藤智巳、チーム出塁率4割を誇る強力巨摩大打線に、全く隙を与えません！』

『これでまだ二年生なのですから、来年のドラフトが楽しみになってくる投手ですよ』
実況と解説の興奮を他所に、吼えるエースは氣勢を上げてベンチへ帰った。

「ナイスピッチング」

チラリと御幸を見て、智巳は無言で頷く。

汗をかきはじめている本郷正宗とは違って、まるで汗をかいてないこのエース。
無言での頷きは、緊張の証。

力配分が出来ていない。いつもの手抜きにキレがない。

完全に敵の打力にちょうどいい塩梅で手を抜く力が失われている。

(延長に向けて体力温存。これが目的だつて監督から聴いていた筈なのに、序盤はともかく今に来て一々マジになって投げている)

とんでもない怪物が、脱皮してきた。

だが、まだ脆い。まだ殻が柔らかく、成熟し切っていない。

(でも、本気出してもまだこの余裕は……)

キャッチャーミットが近くに見えたと、言っていた。

ストライクゾーンが見えると言っていた。

(今日になってまた成長するのか、お前)

引退の迫った先輩の為でもない。

引退が決まった先輩の最後の試合。

尊敬する人で行える、最後の試合。

(こんな試合、はじめてだもんな)

先輩を心から尊敬すると言うことがなかった智巳に、はじめて生まれた尊敬の念。

栄冠を共に掴みたいと言う、勝利を得ること以外に初めて湧いた我欲。

(緊張するのも、わかるぜ。敗けるのが怖いよな。この人たちとの最後の思い出が敗北

だなんて、お前は絶対に認めない)

マウンドでは弱みを見せない。傍から見ればただひたすらに強大な敵。

だが、正面から見れば案外他のことが見える。

だが、それを伝える必要はない。

自分の投球に、勝利以外の欲を乗せたことがなかったエースが、ここに来て強烈な欲

望を乗せてきた。

勝ちたい。あの人達との夏を、最後の思い出を、負けなんかで終わらせたくない。できれば、最高のピッチングで飾りたい。

勝つ為だけではない。より美しい勝利の為に。

その欲が、殻を無理矢理に引き剥がしている。

御幸は何も言わない。言えばこの状態が終わるのではないかと、懸念していた。

(お前はもつと、自分のことを考えて投げていいんだぜ……)

より優れたピッチングを。

より美しいピッチングを。

より満足のいくピッチングを。

そんなことを、考えたことがない。

勝てればそれでいい。その考えに、欲望が乗った。

より、尊敬する先輩たちを送るに相応しいピッチングを。

投球の道への求道へ、一歩近づく。

(マウンドでは、投手は王なんだ)

鳴にお前が敗けてるのは内容への拘りの強さであり、お前が鳴に勝っているのは内容への拘りのなさ。

ピッチャーとしては成宮鳴が上。

エースとしては斉藤智巳が上。

(まあ、これは俺の所為だから結構気に病んでたんだけど)

やっと、投手としての自我が出てきた。

それが少し、嬉しい。

「何笑ってんだ」

「いや、まあね」

一瞬の確変だろうが、それでもいい。

存在しなかった自我は、一旦生まれれば死ぬことはない。

扱いが面倒くさくなるが、投手としてはより高みへ行ける。

「頑張ろうぜ」

「お前に言われなくても、俺はこれでも必死で投げてんだ」

「あー、まあそうだな。挨拶みたいなもんだよ」

おお面倒くさい男なこと。でも面倒くささを差し引いてもなおあまりあるこの魅力。

投手としての自我の萌芽。投手としての目覚めで生まれた、身体の使い方。

「少し、智巳は変わったな。本人には言わない方がいいか？」

「言わないでくれると嬉しいです。みんなにも言っておいてください」

「わかった」

投手には首を振る権利がある。捕手の仕事に、捕手のリードが気に食わない時、拒否する術がある。

智巳はそれを久しく使ってこなかった。ずっと頷いて、投げてきた。

だが、この試合、一回だけ首を振った。

そのことに、本人は気づいているのかいないのか。

(成功する野球選手なんてのは、ナルシストかストイックな求道者くらい。才能があつても他の誘惑に流されてたら、一流にはなれない)

ストイックな求道者ではあるが、ナルシストではない。

だが、今の彼は三振を取りたいと思っている。

投手が最も打者に勝ちつける方法、それが三振。

ナルシステイックな投手は、最後に三振で締めたがる。何故ならばそれがカツコイイから。最後に映されるのは自分になるから。

こいつは稲実戦をセンターフライで締めたように、そういうところがないのだが。

(最高の投手としての自分を見せようとしてるって、ことか)

客ではなく、尊敬する先輩に。

見てくれ。最後なんだからと。多分そういうことで間違いはない。

いよいよ、確変じみてきている。

六七八番が打ち取られ、チェンジ。

再び、智巳はマウンドに上がる。

打席は七番から。

「御幸」

「うん？」

「ヒットを打たれたくない。リードを頼む」

「わかったよ。二人でやっていこうぜ」

任せろとは言わない。

一緒に打たれないピッチングを探求する。それがバッテリー。

領いて、斉藤智巳はマウンドに行った。

初球は、スローカーブ。

完全に意表を突かれ、見逃し。

次の球のストリート、空振り。

最後は高速フォークで、空振り三振。

そして八番を見逃し三振。

九番は、本郷正宗。

勝ち気の強い、闘気が刺さる。

(どうする)

(スライダー軸。決め球は外いっぱいストレート)

(わかった)

地鳴りのような応援にも、応えようとしない。見すらしない。その素振りに、余裕の無さが見て取れる。

切羽詰まっていると言うのか。敵には気づかれていないが、焦りがある。

欲望は歓迎するが、焦りはいらぬ。欲望に精神が慣れていないのだろう。

ワンストライクは取ったが、フォームの開きが早かった。

「タイムお願いします」

マウンドに駆け寄って、軽く頬を叩く。

「何をする」

「フォームの開きが早い。催促が多い。焦り過ぎ。お前は今絶好調なんだから、打たれないよ。敵は誰だ？」

「己」

「そう。目の前に居るのは？」

「俺の獲物だ」

「よく言った。それを忘れずにいけよ」

ドン、と胸を小突いてホームベースに戻る。
眼から、焦りが消えている。

『空振りいー！18人を相手にして18個目！まだファールすら打たせません、斉藤智巳！』

空振りを取って、半回転。外野席の横断幕に向けて吼える。

誇りと、意地と、情けなさで達成感と。そして感謝。

それが漏れ出して、咆哮となる。

スタンドが沸いて、エースの背中を押しした。

「ありがとう」

「いつもこれくらいやらせろよ。こう言うのが、キャッチャーの仕事なんだから」

拳をぶつけ合ってベンチに戻り、智巳はすぐさまヘルメットをつけて打席に立つ。

本郷正宗。未だこの試合被安打は0。

この強敵に切り込むのは、一番の仕事。

今は九番だが。

もう多分、一番を打つことはない。現に今も打っていないし。

ならば、この打席を最後とする。

『スプリット打ったあー！ランナーは一塁でストップ！』

『先頭バッター出塁ですね。今のが青道初ヒットです』

七回表、初ヒット。

続く打者は、一番倉持。

送りバントを決めて、二塁へ。

(そろそろ、最後だね)

有効打を与える、最後。

自分たちのエースを援護できる、最後。

『選んだ、フォアボール！小湊亮介くん、二個めのフォアボールを選びました！』

(まあ、俺らしいのはやっぱり、これでしょ)

四球で選び、チャンス拡大。それが二番打者の仕事。

次は、伊佐敷純。

三番打者の仕事を、今まで必死にボールに喰らいついてこなしてきた男。

(俺の役目は哲に繋ぐこと)

逆立ちしても敵わない、四番に繋ぐ。

決して目立つわけではない。だが、チャンスを拡大してバトンを渡す。それが彼の仕

事だった。

高く上がったフライは、ライトへ。

『犠牲フライには充分です。さあ、斉藤智くん、少し遅れてタッチアップ!』
刺せる。

そう思つて三塁に送球している間に、小湊亮介は二塁へ。
無論、智巳がタッチアップを遅らせたのはわざとである。

基本的には脳筋野球のチームだが、結構頭がいいのだ。

(スクイズの一打点だけでは、エースと四番と言われる資格がない)

これまで18奪三振のエースと並び称されるには、もう一打。
スプリット。本郷正宗の決め球を、結城は捉えた。

白球は、左中間を破る。

『四番結城、値千金のタイムリーツーベース!これでヒット2本で3点を取ったことになりませす!』

『打ち崩せてはいませんが、堅実に攻めていますからね。少しの突破口も逃さない。豪打のチームかと思えば走れて、走れるチームかと思えば送ってくる。選手たちが考えて、最善を尽くしていますね』

まだ、ヒットは2本。しかし3点。

これが、2012青道打線。打ち出し、ランナーが貯まると止まらない打線。

まあ、後続は本郷正宗にキツチリ抑えられたものの、差は3点。

七回の裏。

(気を引き締めていくぞ)

(応)

一番、二番。

勝ちたいと言う思いと、先輩たちへの餞として。

これで連続して、20個目。

「ちつとはこつちに飛ばしてこいや！」

「牽制もなしだと、腕が鈍ってしまうぞ」

「フラインプレーはもういらないうってことかな？」

まったく、生意気だねえ」

まあ、頼りになるが。

それが野次を飛ばした三人の偽らざる気持ち。だから平然と野次れるとも言える。

「後ろに飛ばす気はないですよ」

「ほう……」

歓声で、内野までしか聴こえないような声で放たれた宣告に、結城哲也が何かを察して不敵に笑む。

「この試合、全部三振で勝ちますから」

「まあやれるさ、お前なら」

「大きいこと言ったね。やれなかったら……そうだな。剃り上げようか。髪」
「何話してんだ、オラー！」

純には後で教えてあげようかと言いながら、小湊亮介はにこやかに笑う。

迎えるは、三番大塚。

（さあ、宣言通りにやってみよう）

（ああ。剃り上げるのは御免被りたい）

三年のムードが、エースに活気を与えている。

2012青道のエースは、斉藤智巳。

（さあ、いこうぜ）

まだ見ぬ景色に。

日本一と言う、景色を見る。

1球目、ストレート。

2球目、チェンジアップ。

3球目で、決めに行く。

高速スライダーで、完全に振らせて空振り三振。

グラブを前に突き出して、再び吼える。

あと、アウト6個。

日本一まで、2イニング。

それは2012青道の終わりへの、カウントダウンでもある。

(楽しい)

こんな楽しいチームの終わりは、笑顔で。

笑って、さよならと、告げたい。

八回の表に移り、裏へ。

そこも抑え切って、九回へ。

『八回の裏が終わって、3対0。斉藤智巳、未だ一塁を踏ませません!』

さようなら。

初めて湧いた、尊敬と。

初めて湧いた、信頼と。

初めて湧いた、畏敬から。

八回の代打攻勢を抑えて、マウンドを下りながら智巳はそう思っていた。

24連続三振など、考えてすらいらない。自分がどれほどのことをしているかすら、わ

かっていない。

九回表の攻撃が終わり、マウンドに行かなければならない。

あと、アウト3つ。

あと、アウト3つで終わり。

あと、アウト3つでさよなら。

「あとアウト3つで、日本一だな」

「え？」

結城哲也の言葉を意外に思っ、智巳は振り向いた。

「え、じゃないよ。考えてなかったの？」

振り向いた先に居る小湊亮介が、少し笑う。

「日本一のチームってことになるんだよ。あと君がアウト3つ取ればさ」

「世界12回、日本13回のお前からしたらあれだろうけど、俺達にとっちゃあはじめのことだからよ！頼むぜ、マジで！氣い張っていけよな！」

はい、と答えた。

この人たちと日本一になれば、日本一のチームとして刻まれるのだ。

2012年の青道ナインは、負けなかったと。最強だったと。

「絶対に、勝ちますよ」

「完璧な形で、か？」

「はい」

結城と拳を合わせて、マウンドへ。

足をならして、ロジンバックを右手で触れる。

あとアウト3つ。

『ここは当然、斉藤智くんをあまり投げさせたがらない片岡監督も続投を選択します』

『まあ、前代未聞の24連続奪三振での完全試合中ですからね。あくまで代えていたのは肩を休ませるためですから、ここは代える意味もないでしょう』

七番を153キロ高速スライダーで空振り三振させ、ワンアウト。

八番を152キロストレートで見逃し三振、ツーアウト。

最後の打者は、本郷正宗。

『予選で、完全試合をやるならば後先を考える必要のない夏の甲子園の決勝だと、この怪物は言っておりました！』

今まで青道の屋台骨を支えてきたエースが、前人未踏の記録を打ち立てることになるか！』

初球大きく外れて、ボール。

『あと1つで、夏の甲子園はじめての完全試合です。流石の斉藤智くんも緊張しているのでしょうか。初球ボールから入りました』

返された球を受け取り、再びロジンバックに手をやる。

この時間をもつと味わっていたい。

そんな子供じみた遅延行為がいつまでも続けられるわけもなく、ストレートがアウトローに浮き上がるようにして決まる。

全くお辞儀という表現から程遠いそのストレートは、流石に齊藤智巳と言うべきか。滅多にお辞儀をしない男だからストレートも、そうなのか。

高速スライダーでツーストライク。

フアースト、結城哲也。

セカンド、小湊亮介。

サード、増子透。

シヨート、倉持洋一。

センター、伊佐敷純。

ライト、白洲健二郎。

レフト、降谷暁。

齊藤智巳は、バックを見た。

もう、二度と見ることでできないバックを見た。

前を見ると、相棒が居る。

(決めるぞ)

頷いて、投げた。

構えられた場所にズバリと決まり、急激に落ちる伝家の宝刀・高速フオーク。

示された数字は、155 Km/h。

高速で迫り、目の前で消える球。

それを空振り、赤いランプが消えた。

『155キロだああああ!!155キロを落としました!』

今年の夏、ストレートで160キロが出た。

なのに、5キロ遅くてこの盛り上がり。

そんなことを考える暇もなく斉藤智巳は呆然と一塁方向を見た。

笑って、主将が駆けてくる。

『最後は高速フオーク、最後は決め球で三振を奪う!』

勝者と敗者、この瞬間に明暗がくつきりと別れました!』

スタンドが狂ったように沸いて、暑い夏の終わりだと言うのに更に熱を帯びる。

『東都の怪物斉藤智巳、27個目の連続三振、夏の甲子園はじまって以来の完全試合とこの大会通じて被安打0と言う完璧なピッチングで、大会を締めくくりました!』

文字通りの完全な強さを巨摩大藤巻に叩きつけ、青道高校、初めての全国制覇!』
マウンドに、最強のチームが集まっている。

夏の甲子園。第94回全国高校野球選手権の制覇者は、青道高校。

鉄壁の守備、繋がる打線、安定した投手陣。

最強の四番と、敗けないエースがいたチームが、全国制覇の栄冠を掴んだ。
楽しかった。

このチームで、この先輩たちと過ごした時間が、楽しかった。

このチームに涙は似合わない。

どうせなら、最後は笑顔で。

エースも主将も、泣かなかった。

苗の世代

『東都の怪物斉藤智巳、27個目の連続三振、夏の甲子園はじまって以来の完全試合と、この大会通じて被安打0と言う完璧なピッチングで大会を締めくくりました！』

文字通りの完全な強さを巨摩大藤巻に叩きつけ、青道高校、初めての全国制覇ー！』
青道ナインがマウンドに集まる。

エースの連投なし、リリースでも三連投はなし、故障者0。

四番結城は夏の甲子園最高打率更新、最多安打更新、最多打点更新。本塁打は5本と届かなかつたが、『どちらかと言えばアブレイジヒッター』と言う彼の自己申告があつて、いることを、この成績が物語っていた。

斉藤智巳。

夏の甲子園初の、完全試合を達成。

夏の甲子園決勝史上最多の27奪三振、夏の甲子園決勝史上最速の、155キロをフォークで達成。

夏の甲子園の九回までの一試合における最多奪三振、自己の記録である24個を更新して、27個まで伸ばす。

延長戦を含めてもこの記録は一位であることから彼のドクターKぶりが伺える。

そして、夏の甲子園の一試合における連続奪三振記録となる、27連続奪三振。

夏の甲子園通じて被安打0、四死球0、失点0、自責点0。

防御率は3登板、23イニング投げて0.00。63奪三振。9.0を超えれば三振を取るタイプのピッチャーと言える奪三振率は24.65と言う化け物ぶり。自責のランナーを出していないからwhipも0。

今タレントやっているゆでたまごさんの残した85奪三振には届かなかったが、1試合の単位では勝つことが出来た。

たぶん全試合登板完投させていても更新できないだろう。62回で85奪三振は。だって肩が保たない訳だし。

そう考えるとハンカチーフガイはすごい。近代とは思えない記録で、69回で72奪三振。

たった23回しか投げてない男、智巳。丹波の方が投げている。
そして、結城哲也。

夏の甲子園最多となる一大会通算22安打、最多となる17打点、最多タイとなる5本塁打を叩き出した。

六人目にして七人目、一大会2回のサイクル安打。複数回の達成者としては最初らし

い。

かたや、リトルからシニアへ、シニア国際大会でも日本のエースとして活躍し、高校野球でも一年生からエースとして君臨していた野球エリート。

かたや、赤堂中学と言う弱小から一般入試で入ってきて、一年時は全く期待されず、二年時から青道高校でその才能を開花させた下からの叩き上げ。

この二人が互いを尊敬し合い、極めて仲が良いのは皆が意外に思い、そして微笑ましく思うところだった。

「27奪三振での完全試合達成！おめでとうございます！今のお気持ちはどうでしょうか？」

「ありがとうございます。狙っていたので、達成できてホッとしているって言うのが、本音ですかね」

「これは史上初の快挙ですが、狙っていたということはやはり史上初のことをしてやろうと言う思いで、最初からマウンドに上がられたのですか？」

後にも先にも恐らく、こんなことは聴いたことがない。

アマチュアの大会であるが、この試合は恐らく今後語り継がれていくであろう永劫不滅の記録である。

バットに最後まで当てさせずに勝った、ということも含めて。

「いえ。哲さんたちと野球ができるのはもうこれで最後なので、どうせなら最後、派手な終わり方がいいかな、と。思いついたのは途中からです。

エースの役割は、チームを勝たせること。それ以外は必要ないってことはわかってるんですけど、雑念が混じってしまいました」

「雑念とは？」

滅多に使われない言葉、雑念。

ピッチングに雑念が混ざってしまったなど、勝った投手は中々言わないものだった。

「勝ち方にこだわった、ということ。エースと言うのは究極的なことを言うと、チームを勝たせられるなら何失点してもいいし、何安打打たれてもいい。逆に、何個三振をとっても負ければ価値なんかありません」

「勝利至上主義ですね」

「個人の考えですが、敗けていいピッチャーなんてのは居ないと思うし、居てもなりたくはない。ノーヒットノーランしようが、完全試合をしようが、白星は2個換算になりませんよね」

———どのような過程を辿ってもチームを勝たせることができるのがエース。

斉藤智巳はそう言い切った。内容なんてものは、監督が見るべきもので、ピッチャーはその評価を聴いて自省するだけでいいと。

「この白星は私にとって特別なものですが、傍から見れば一勝でしか無い。ここで綺麗に勝ったから、次は敗けてもいいとは、ならない。それは絶対に認められない。だから投手自身が自分の内容の特別さに酔っているようでは、話にならない」

「完全試合も、記録も、一勝でしか無いと言うことですか？」

あまりにも学生離れしているコメントに、少しインタビュアーが驚く。

もつと喜ぶか、泣くか。そうだろうと思っていたのに、予想を裏切られた感じだった。史上初なのだから、もつと喜んで、と思わなくもない。

「投げた側から見ると、そうです。外す必要のない無駄なボール球を7個も投げてしまいましたし、微妙にコントロール出来なかった球も二桁あった。それでも勝てたのは、運が味方してくれたと思います。」

勝てた時こそ反省と研究をして、また次の勝利に繋げたいですね」

でもまあ、と。斉藤智巳は派手に喜ぶことを期待されている自分を客観視して、一拍置いてから笑った。

「やっぱり、嬉しいです。総合的に見るとまだまだですが、ベストピッチを先輩たちと過ごした夏の終わりに出せて。」

最後は笑って、終わりたかったので」

実に爽やかに笑う智巳だが、これはまあもちろん演技である。

何でこんなに騒ぐかな、と思っているのが事実。

だがこの爽やかな笑みで、彼は一定の支持者を得た——つまり、荒木大輔からはじまる甲子園のスター選手の仲間入りを果たすのを決定的とした。

何故ならイケメンで爽やかで、少しストイック気味だけど好青年だから。

実物は求道者ぎみの演技派な、関心のない他人に優しく（冷淡とも言う）、関心のある他人に厳しく、自分にはもつと厳しい勝利至上主義者である。

（あいつ珍しく本音しか話してないな）

御幸一也はそう思った。

反省があるとか、その内容とか、価値観とか。

今まで求められるようなコメントを見極めて取捨選択して言っていたのに、今回はそれを無視している。

（ま、感情が高ぶってるんだろ。これでもう終わりだし）

周りも口々にインタビュアーの投げた質問に対し答えたりと忙しい。

が、カメラが多く回っているのはやはり智巳と結城。あと自分。

求められていることで、自分の首を絞めないであろうことを選択してペラペラと話し、笑う簡単なお仕事である。

好きな球団とかはあるのですか、と言うモラルのない質問を敢えて無視して、御幸は

答えられるものにだけ答えている。

好きな球団は鷹か燕だが、それを公言すると『他球団を牽制した』とか、『メディアを利用した事実上の逆指名』とか『入団拒否をチラつかせた出来レース』とか言われかねない。

バカ正直に『大阪近鉄バファローズです』と答えているエースも居るが、あれは嘘をついていないしはぐらかされてもいないが質問の意図と違う、と言う高度なアレなので真似できない。

そんな球団はもう無い。何故なら合併して消えたから。

イーグルスに乗り遅れた、ないしはその継承を認められなかった近鉄残党がまだそこらを行く宛もなくフラフラしているのは野球ファンなら周知の事実。

そしてこいつも消去法的にオリックスと楽天のファンだが、本質的には残党のそれに近い。

志望球団を一足先にリークしようとしたのに、もう（球団自体が）ないじゃん。そんな感じになっている。

一方、結城哲也は当たり障りのない本心からの『特に最良はありません』と言う発言をしていた。

因みにこれは本当のことである。彼は沢村タイプ——つまり見るよりやる方が好

き、だからあまり見ないと言う型の人間だった。

ふと監督に目を向けてみると、いよいよインタビューがはじまろうとしていた。

「全国制覇、おめでとうございませう」

「ありがとうございます」

片岡鉄心の采配には、甲子園ファンからも結構文句が言われていた。

連投させない采配の為には有限のベンチ入りメンバーの中に投手の枠を多く取らなければならぬ。

彼は動かない監督である。そう言う風潮が、この甲子園を見た観客から生まれていった。

相手の監督・新田幸造は決勝戦で見せた代打三連続、準決勝で見せたこまめな継投などを成功させたりと、動く名将として名高い。

代打は、小湊春市くらい。

スタメンは全員守備固めが不必要なほどに守備が巧いから動かさない。

継投は基本的に降谷一沢村。

新田幸造のように、手を変え品を変えとはしない。

勝利の方程式を守り、スタメンを鍛える。

本質的には教育者タイプなのだ。だから割りと結果を求めないと言うわけではない。

が、過程を普通の監督よりも重く見た情のある采配をする。

甲子園でエースが連投しないというのはまあ、数々の記録から見えてくるように、ちよつとありえないわけ。

「監督として、はじめての全国制覇。それが決まった時、どんなお気持ちでしたか？」
「結城たちの世代は、不作の世代と呼ばれていました」

近頃の青道には最初からずば抜けた存在が一人か二人プラス中堅何人か、と言うことが多い。

二年時から四番を打つほどにずば抜けていた東清国と、河内や木野。

一年からエースだった斉藤智巳と一年から正捕手だった御幸一也、倉持洋一に白洲健次郎。

一年から守護神・沢村栄純と、一年からセツトアツパー・降谷暁に、小湊春市と東条秀明。

最初から、ある程度核とそれを取り巻く星が存在していた。

だが、現三年生はクリスのみ。

続く者も現れず、守備も打撃も駄目な野手陣に加えて、投手も駄目。

不作の世代と、彼らは呼ばれた。

「ですが、どの世代よりも努力した。結果が出るまで自主的に、自分で考えて、行動を起

こした。努力を報われるまで行う、意志の強さがありました」

「彼等ならば、できるだろう。彼等ならば、やるだろう。そう思っていたので、監督としては特に驚きはありません。」

しかし、誰よりも練習し、誰よりも育ったこの世代が全国制覇と言う栄冠に輝いたことを、教育者として誇りに思います」

その努力を見ていた。無論全てを見ることができていたわけではないが、それでも見ていた。

不作の世代。

OBたちにそう言われて、その言葉を跳ね返した『素材』の世代。

その素材を、その苗を、自分は育てられたのか。

余すところなく伸ばし切れたというような、偉そうなことは言えない。

「彼等と全国制覇できて、監督として、教育者として、これ程冥利につくことはありません」

片岡鉄心は、万感の思いを込めて言った。

入学から三年間。成長を見てきた一人の教育者としての言葉だった。